2022年3月号(第431号) 昭和61年7月8日　第三種郵便物認可　令和4年2月19日発行　毎月1回19日発行

住宅特集

新建築

431
2022
SHINKENCHIKU
JUTAKUTOKUSHU
3

特集／木造の魅力
木をめぐる建築家たちの挑戦

特集作品／十五題
畝森泰行
木村吉成＋松本尚子
長岡勉＋加藤直樹
飯田善彦＋武田尚久
武井誠＋鍋島千恵
山中祐一郎
彦根アンドレア
安齋好太郎
安藤邦廣＋居島真紀
井端菜美
宇野友明
高塚章夫
石川素樹
吉村理
森屋隆洋

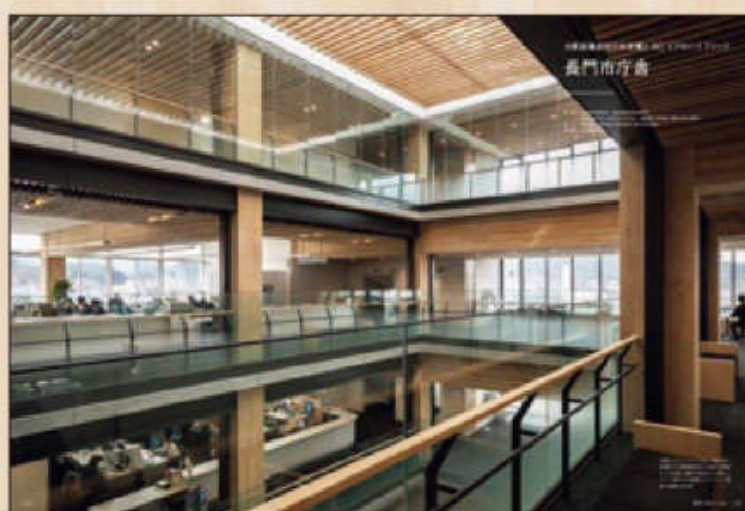
記事
新しい結
茅普請によるコモンズの再構築

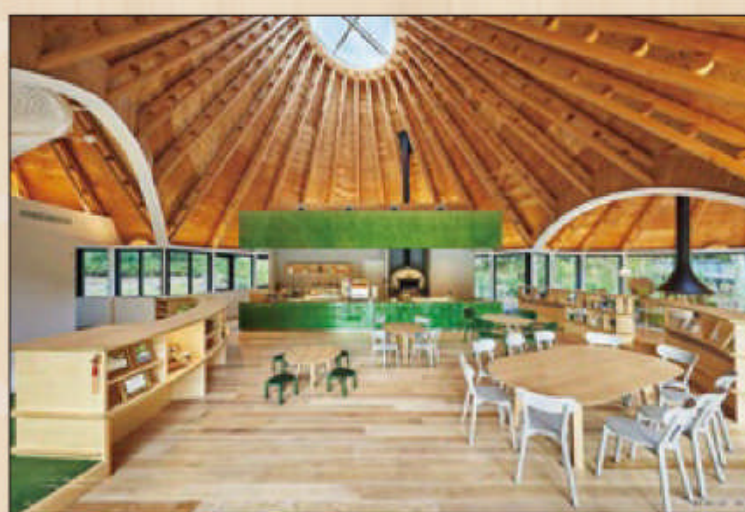
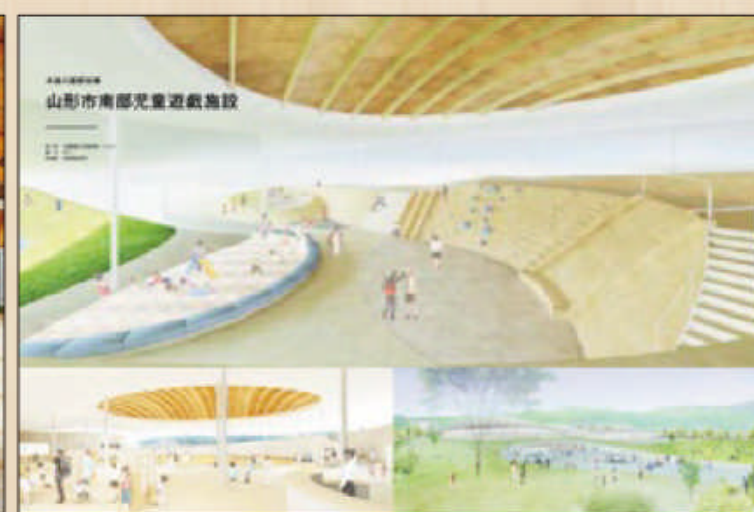
新建築
2022年2月別冊

CREATING A FOREST IN THE CITY

都市(まち)に森をつくるIII

木造都市を目指して

本号は『都市に森をつくる KES構法の大規模木造建築』（新建築2011年12月別冊）、『都市に森をつくるII 木造建築の新しいかたち』（新建築2016年3月別冊）に続き、3冊目にあたる株式会社シェルターの特集号です。
同社が携わった建築作品を以下の4つのテーマに分類して紹介します。
1章「木造都市」では近年増加する高層建築への木造利用の実践や技術について、2章「デジタル技術で変わる木デザイン」ではデジタル技術の活用で広がった木造のデザインについて、3章「木架構による空間デザイン」では小径木の組み合わせやエンジニアリングウッドの利用等により木の構造がそのまま空間デザインとなっている事例を、4章「木を中心としたまちづくり」では木を使うことでみんなの居場所をつくり地域へ貢献する事例を、それぞれ紹介します。アプローチはそれぞれのプロジェクトで異なりますが、いずれも木を活用して新しい構造形式やデザイン、施工方法等さまざまなことにチャレンジしています。
また、巻頭対談には伊東豊雄さん、大西麻貴さんに登場いただき、その他、建築家や構造家に多角的にお話を伺いました。
木材の利用がどんどん進む中で、木の美しさや木を利用することの意義を通して、これからの建築・都市を考えるきっかけとなる1冊です。

1章「長門市庁舎」。大断面集成材の木架構と鉄筋コンクリート造のコアによるハイブリッド構造の5階建て市庁舎。その他、純木造での高層建築への取り組みも紹介します。章頭の座談会では、西沢大良さん、大林組の堀池隆弥さん、シェルターの安達広幸さんにお話しいただきました。

2章「八代市民俗伝統芸能伝承館（お祭りでんでん館）」。地元の流通材を組み合わせてつくられた曲面の屋根が市民の居場所やお祭りの鉾の組み立て場所となります。章頭の対談では、平田晃久さんと藤本壮介さんにお話しいただきました。

3章「リゾナーレ那須 POKO POKO」。3つ連なる円錐形の屋根が架かるホテルのアクティビティの拠点施設で、丸太状の登り梁が特徴。章頭の座談会では、若手の構造家5名(森部康司さん、坪井宏嗣さん、鈴木芳典さん、平岩良之さん、金田泰裕さん)にお話しいただきました。

4章「山形市南部児童遊戯施設」。山形市のPFI方式事業で、2022年4月オープン予定のいろんな子どもたちのための遊び場。章頭の座談会では、①百田有希さんら本プロジェクトチームに、②米沢市で街づくりに関わる長谷川豪さん、増田信吾さん、大坪克亘さんにお話しいただきました。

定価 2,750 円
[本体価格　2,500 円]

A4 変型判／216 頁

2月26 日発売予定

発行　株式会社新建築社
東京都千代田区霞が関3丁目2番5号
霞が関ビルディング17階　〒100-6017
TEL：03-6205-4380　FAX：03-6205-4386

© 新建築住宅特集2022年3月号／第431号
2022年2月19日発行　毎月1回19日発行
定価2,420円　本体2,200円
振替：00150-6-30658

［編集発行人］吉田信之
［編集長］西牧厚子

［表紙・誌面フォーマットデザイン監修］　K2
［発行所］株式会社新建築社
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
霞が関ビルディング17階　〒100-6017
tel. (03)6205-4380（代表／総務・出版）
(03)6205-4381（編集部直通）
(03)6205-4382（広告部）
(03)6205-4392（写真部）
fax.(03)6205-4386（代表／総務・出版）
(03)6205-4387（編集部・広告部・写真部）
青山ハウス
東京都港区南青山二丁目19番14号　〒107-0062
tel. (03)6455-5596
fax.(03)6455-5583
e-mail　jt@japan-architect.co.jp
URL　https://japan-architect.co.jp
［印刷所］大日本印刷株式会社
［取次店］トーハン　日販　楽天ブックスネットワーク
鍬谷　西村

表紙の写真　Houses
畝森泰行建築設計事務所

新建築 住宅特集

431 2022 03

CONTENTS

木造の魅力——木をめぐる建築家たちの挑戦

特集作品15題

010　Houses　畝森泰行建築設計事務所
022　特集論考1：私たちの家　畝森泰行
024　house / studio H　木村松本建築設計事務所
034　小屋裏と色　長岡勉／POINT　加藤直樹／建築設計 加藤住吉
044　函館の家　飯田善彦建築工房
052　特集論考2：半居から北の栖へ　飯田善彦
054　屋の家　武井誠＋鍋島千恵／TNA
064　DLTHUT　山中祐一郎
072　光のテント　彦根アンドレア
078　SANU 2nd Home 八ヶ岳 1st　ADX
088　特集対談：木と住宅の循環　本間貴裕×安齋好太郎
090　木立の1枚屋根　里山建築研究所
098　川と家　井端菜美／goboc設計事務所
108　よもぎ台の家　宇野友明
116　二心柱の家　高塚章夫／Aaat
124　中町の家　石川素樹建築設計事務所
132　杉の家　吉村理建築設計事務所
140　NIKAIDO　MORIYA AND PARTNERS

新建築 住宅特集

431 2022 03

CONTENTS

記事

148　新しい結
茅普請によるコモンズの再構築　レポート：**平尾しえな**

155　論考：普請の勧め　**塚本由晴**

MONTHLY REVIEW

156　座談月評　**貝島桃代**×**中山英之**×**藤村龍至**

NEWS

158　塚本由晴氏と貝島桃代氏が2022年ウルフ賞に／第25回くまもとアートポリス推進賞発表／第53回中部建築賞受賞作品発表／第34回福岡県美しいまちづくり建築賞発表／令和3年新設住宅着工戸数を公表

EXHIBITION

159　開館40周年記念展　扉は開いているか──美術館とコレクション 1982-2022／オルタナティブ！ 小池一子展　アートとデザインのやわらかな運動／LOOS AND PILSEN アドルフ・ロース展 プルゼニュ市のインテリア

BOOKS

160　アラップ＋日経アーキテクチュア 著『ARUPの仕事論　世界の建築エンジニアリング集団』／山口隆 著『アイゼンマンの建築論＋QUANTUMETRIC』／伊藤俊治 著『BAUHAUS HUNDRED 1919–2019　バウハウス百年百図譜』／八束はじめ 編著『八束はじめインタビュー　建築的思想の遍歴』

CONSTRUCTION

161

PROFILE・編集後記

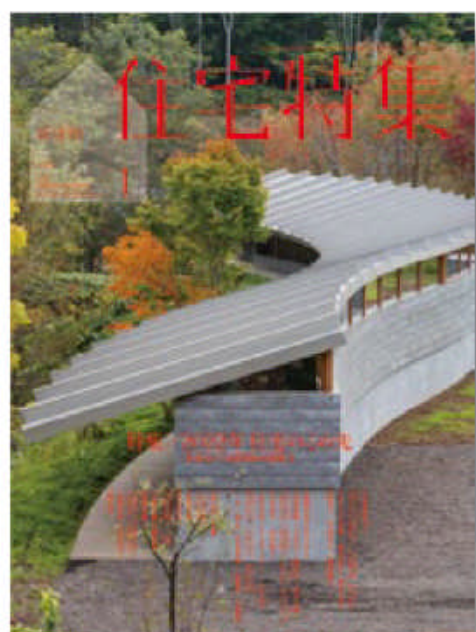
162

TOPICS

166

バックナンバー・年間定期購読のご案内

年間定期購読料

新建築
毎月1日発売
12冊（1年間）
送料無料
29,040円
消費税込

新建築
住宅特集
毎月19日発売
12冊（1年間）
送料無料
29,040円
消費税込

バックナンバーのお取り寄せは最寄りの書店へお申し込みください。
また，下記ウェブサイトからもご注文いただけます。

https://japan-architect.co.jp

お問い合せ
〒100-6017　東京都千代田区霞が関3丁目2番5号　霞が関ビルディング17階　株式会社 新建築社　年間定期購読係
tel. 03-6205-4380　fax. 03-6205-4386（平日9:30〜17:30）
e-mail: business@japan-architect.co.jp

2021年3月号
閾
── 環境と暮らしを繋げる土間

2021年4月号
最新住宅15題

2021年5月号
リノベーションの意味
── 新しい価値を創造する18のアイデア

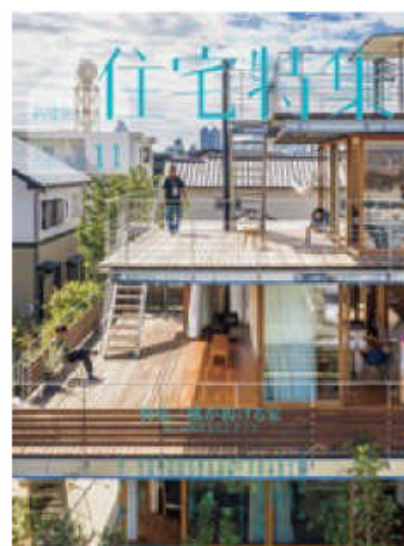
2021年6月号
木造その先へ
── 木をめぐる建築家たちの挑戦

2021年7月号
現場の力
── 家をつくり上げること

2021年8月号
庭
── 建築と自然を繋ぐもの

2021年9月号
母の家・父の家
── 建築家による親のための住まい

2021年10月号
山の家・海の家
── どこでどう生きるか

2021年11月号
風が抜ける家
── 外に居場所を生むテラス

2021年12月号
かたちの決め方
── 骨格とディテールを繋ぐアイデア

2022年1月号
2022年 住宅のこの先
── 家をめぐる建築家の想像力

2022年2月号
大地と繋がる家
── 環境と連続する平屋の思考

バックナンバーをご希望の方は、新建築ショップもしくはお電話にてご注文ください。

特集

木造の魅力

木をめぐる建築家たちの挑戦

今月号は木造住宅を特集します。
日本には木造建築の長い歴史があります。豊かな森林資源を背景に、風土と文化に裏付けられた住宅形式が生まれ、木造建築は規模や用途もさまざまに多彩な進化を見せてきました。そして、国産材普及を目指す政府や自治体の動きを背景に、木材の流通や加工、構造や施工技術の向上に支えられ、日本に建てられる新築の戸建て住宅は今約85%が木造です。一方、森林の維持や伝統の継承の難しさ、世界中を襲ったウッドショックは、いちばん身近な木という素材を資源そのものから遡って考えなければならない時代を示しています。しかし、多発する災害や環境問題、未だ続くパンデミックなど世の中が不安定になるほど、暮らしが生きた素材と共にあることの魅力に人びとが今一度気づきつつある機運を感じざるを得ません。
信じられるものとそうではないものを敏感に感じ取る今の社会に、日本の建築家たちは協働者と共に果敢に木という素材に現代的なしなやかさを見出し、さまざまな挑戦を続けています。今号で紹介する木造住宅は、軽やかな木架構で開放的な骨格をつくり出すもの、小屋の可能性を広げて住まいの自由を獲得するもの、山から始まる木の流通と解体し資源として生かされるまでをデザインする活動など、その幅がまだまだ広がっていることが分かります。
今、日本の住宅を木でつくることに建築家がどのような可能性を見ているか、この先を拓く多彩な試みを見ていただきます。（編）

特集作品15題

ふたつの住宅と路地を同時につくる
特集論考1：私たちの家　畝森泰行

Houses
畝森泰行建築設計事務所

経験の同時性

house / studio H
木村松本建築設計事務所

韻を踏みながら関係を繋ぐ

小屋裏と色
長岡勉／ POINT　加藤直樹／建築設計 加藤住吉

外気と接続する住宅のあり方
特集論考2：半居から北の栖へ　飯田善彦

函館の家
飯田善彦建築工房

輪の家のおく

屋の家
武井誠＋鍋島千恵

DLTで建築の地産地消を目指す

DLTHUT
山中祐一郎

自然を享受し自立する地域の拠点

光のテント
彦根アンドレア

資源を繋ぐことを踏まえた住宅の探求
特集対談：木と住宅の循環　本間貴裕×安齋好太郎

SANU 2nd Home 八ヶ岳1st
ADX

森と繋がる平屋土間暮らし

木立の1枚屋根
里山建築研究所

等価な空間が繋ぐ外との関係

川と家
井端菜美／ goboc設計事務所

インサイト

よもぎ台の家
宇野友明

ふたつの中心に展開する多層空間

二心柱の家
高塚章夫／ Aaat

街に奥行きをつくる佇まい

中町の家
石川素樹建築設計事務所

山に捨てられたスギ大径木を活かす

杉の家
吉村理建築設計事務所

空間に広がりを生むズレとムラ

NIKAIDO
MORIYA AND PARTNERS

Houses
東京都

畝森泰行建築設計事務所
UNEMORI ARCHITECTS

東側外観。設計者とその義妹の家で、2棟に大人4人と子供3人が暮らす。細長い敷地を長手方向に分筆し、各棟は大きなワンルームのようなひと繋がりの空間とした。左側がHouse A（設計者自邸）、右側がHouse B（義妹の家）。外壁はアピトン合板 t=12mmにシリコン系木材保護塗料を塗布している。

敷地の南側から路地を見通す。幅約1,800mmの路地を挟んで2棟が建つ。左手のHouse Bのテラスは地面から1,000mm上がっており、House Aと視線の高さをずらしている。

敷地の北側から路地を見通す。左手のHouse Aは地下に水回りを、その上に地面から1,000mm上がったテラスを設けている。植栽は季節によって表情の変わるさまざまな樹種をプランター植栽と組み合わせて配置。路地は開閉式テントを設置。テントを開くと両サイドに小さな穴が複数開いており、樹木に水が落ちる。

House Bのキッチンから House Aのテラス方向を見る。House Bでもっとも高さのあるダイニングルームの天井高は、梁下で6,130mm。開口が多く開放的な空間とした。

House Aのサンルームから地下の洗面、その上にテラスを見る。

House Aのルームから南側を見る。ルームの床は大梁からφ=34mmの鋼管で吊っている。

▽R3FL=GL+5,580
▽R2FL=GL+4,600
▽R1FL=GL+2,435
△2FL=GL+2,400
▽1FL=GL+200
▽GL±0

300
980
300
2,880
1,865
85
300
2,115
1,935
200

屋根:
シート防水 t=1.5mm
下地合板 t=12mm
垂木 30〜60×45mm @455mm
硬質ウレタンフォーム t=30mm

天井:
構造用合板 t=24mm 素地

内壁:
ラワン合板 t=5.5mm ツキツケ 自然塗料
(一部フレキシブルボード t=6mm ツキツケ UC)
下地合板 t=5.5mm(一部PB t=12.5mm)
縦胴縁 スギ t=30mm
高性能グラスウール14k t=90mm 防湿フィルム付き

ルーム

床:
コルクタイル t=5mm 自然塗料
下地合板 t=12mm

天井:
構造用合板 t=24mm 素地
根太 ベイマツ 45×90mm @303mm 素地

ダイニングルーム

床:
磁器質タイル t=9mm
下地合板 t=12mm
電気式床暖房 t=0.7mm
下地合板 t=12mm
押出法ポリスチレンフォーム t=30mm

外壁:
アピトン合板 t=12mm 真鍮釘留め
シリコン系木材保護塗料
通気胴縁 アカマツ t=30mm
透湿防水紙
耐水PB t=9.5mm
構造用合板 t=12mm

屋根:
FRP折半 t=2mm
垂木 角鋼管 □ 50×50×12mm @1,213mm 溶融亜鉛メッキ

紐引き開閉式テント:
農業用遮光ネット

内壁:
ラワン合板 t=5.5mm ツキツケ 自然塗料
(一部鉄筋コンクリート打放し)
縦胴縁 スギ t=15mm
高性能グラスウール14k t=90mm
防湿フィルム付き

テラス

サンルーム

床:
せっ器質タイル t=15mm
樹脂モルタル t=3mm
FRP防水 t=3mm
下地合板 t=12mm
垂木 30〜75×45mm @455mm
硬質ウレタンフォーム t=30mm

天井:
構造用合板 t=24mm 素地

洗面

床:
鉄筋コンクリート打放し 防塵塗料

House A長手断面詳細図　縮尺1：80

1,365　1,820　4,777.5　1,137.5
9,100　3,640　3,185
15,925

House Aのダイニングルーム。前面道路側には床から約700mmの高さまで開口を設けた。家具は制作。

▽R4FL=GL+3,430

庇:
ガルバリウム鋼板小波板
t=0.4mm 素地
下地 Stパイプ φ=27.2×2.3mm
溶融亜鉛メッキ
ブラケット StPL t=9mm
溶融亜鉛メッキ

▽テラスFL=GL+1,000

▽GL±0

△1FL=GL−150

▽B1FL=GL−1,180

140
3,440
260
1,920
1,030

House B

天井:
PB t=12.5mm 寒冷紗
パテしごき AEP

天井:
構造用合板 t=24mm 素地

ダイニングルーム

内壁:
ラワン合板 t=5.5mm ツキツケ 自然塗料
(一部フレキシブルボード t=6mm ツキツケ UC)
下地合板 t=5.5mm(一部PB t=12.5mm)
縦胴縁 スギ t=30mm
高性能グラスウール14k t=90mm 防湿フィルム付き

床:
磁器質タイル t=8.5mm
(一部積層フローリング t=15mm)
下地合板 t=12mm
電気式床暖房 t=0.7mm
下地合板 t=12mm
押出法ポリスチレンフォーム t=30mm

300
720
270
3,100
2,110
200

外壁:
アピトン合板 t=12mm 真鍮釘留め
シリコン系木材保護塗料
通気胴縁 アカマツ t=30mm
透湿防水紙
耐水PB t=9.5mm
構造用合板 t=12mm

紐引き開閉式テント:
ポリエステルキャンバス アナアケ加工

路地

House A

屋根:
シート防水 t=1.5mm
下地合板 t=12mm
垂木 30~60×45mm @455mm
硬質ウレタンフォーム t=30mm

天井:
構造用合板 t=24mm 素地

内壁:
ラワン合板 t=5.5mm ツキツケ 自然塗料
(一部フレキシブルボード t=6mm ツキツケ UC)
下地合板 t=5.5mm(一部PB t=12.5mm)
縦胴縁 スギ t=30mm
高性能グラスウール14k t=90mm 防湿フィルム付き

ルーム

床:
コルクタイル t=5mm 自然塗料
下地合板 t=12mm

天井:
構造用合板 t=24mm 素地
根太 ベイマツ 45×90mm @303mm 素地

ダイニングルーム

床:
磁器質タイル t=9mm
下地合板 t=12mm
電気式床暖房 t=0.7mm
下地合板 t=12mm
押出法ポリスチレンフォーム t=30mm

330
650
360
2,850
1,840
85
2,115
200

AA'断面詳細図　縮尺1：80

2,047.5
2,047.5
4,095
1,900
1,635
2,005
3,640

House Bのベッドルーム前からダイニングルームと路地を見下ろす。現しの木造トラスなどの構造材と窓枠やデスクなどの造作材が一体となって空間を構成する。

House Bのダイニングルームから南側を見る。

長く、大きく、架ける、開ける

敷地を敢えて細長く分けることで2棟の関係をより密にするという意匠の計画に対し、構造計画においても、その意図を最大化できるように建物の長手方向を強く意識したシステムを採用している。建物長手方向に設けられた木造トラスは、開口や建物ヴォリュームに応じてかたちを変え、2棟の巨大なワンルーム空間、また向かい合う隣棟を経て敷地外へと連続する建物の開放性を実現している。（平岩良之）

House B長手断面詳細図　縮尺1：80

House Bのダイニングルーム。各棟共に木造トラスを長手に架け、大きな開口をもつ。

▽R4FL=GL+6,600
270
1,150
▽R3FL=GL+5,180
330
2,170
▽R2FL=GL+3,600
6,130
▽2FL=GL+2,680
280
2,200
▽1FL=GL+200
200
▽GL±0

庇:
ガルバリウム鋼板小波板
t=0.4mm 素地
下地 St パイプ
ϕ=27.2×2.3mm
溶融亜鉛メッキ
ブラケット St PL t=9mm
溶融亜鉛メッキ

内壁:
PB t=12.5mm 寒冷紗
パテしごき AEP
縦胴縁 スギ t=30mm
高性能グラスウール14k
t=90mm 防湿フィルム付き

屋根:
シート防水 t=1.5mm
下地合板 t=12mm
垂木 30~60×45mm @455mm
硬質ウレタンフォーム t=30mm

天井:
構造用合板 t=24mm 素地

外壁:
アピトン合板 t=12mm 真鍮釘留め シリコン系木材保護塗料
通気胴縁 アカマツ t=30mm
透湿防水紙
耐水PB t=9.5mm
構造用合板 t=12mm

House B

House A

紐引き開閉式テント:
ポリエステルキャンバス アナアケ加工

天井:
PB t=12.5mm 寒冷紗
パテしごき AEP

物干し:
St パイプ ϕ=34.0×2.3mm
マゲ 溶融亜鉛メッキ

ダイニングルーム

路地

テラス

内壁:
ラワン合板 t=5.5mm ツキツケ 自然塗料
(一部フレキシブルボード t=6mm ツキツケ UC)
下地合板 t=5.5mm(一部PB t=12.5mm)
縦胴縁 スギ t=30mm
高性能グラスウール14k t=90mm 防湿フィルム付き

床:
せっ器質タイル t=15mm
樹脂モルタル t=3mm
FRP防水 t=3mm
下地合板 t=12mm
垂木 30~75×45mm @455mm
硬質ウレタンフォーム t=30mm

天井:
構造用合板 t=24mm 素地

天井:
FRP防水 t=3mm トップコート
珪酸カルシウム板 t=6+6mm

洗面

内壁:
ラワン合板 t=12mm
ツキツケ UC

内壁:
FRP防水 t=3mm トップコート
耐水合板 t=12mm

内壁:
鉄筋コンクリート打放し

280
1,000
1,900
1,180

床:
磁器質タイル t=8.5mm
(一部積層フローリング t=15mm)
下地合板 t=12mm
電気式床暖房 t=0.7mm
下地合板 t=12mm
押出法ポリスチレンフォーム t=30mm

床:
鉄筋コンクリート打放し 防塵塗料

床:
磁器質タイル t=5.5mm
モルタル t=20mm
FRP防水

BB'断面詳細図　縮尺1：80

2,047.5 | 2,047.5 | 1,635 | 2,005
4,095 | 1,900 | 3,640

House Aのテラスから北側を見る。サンルームの天井はFRP折半で、日除け用の開閉式テントを設けている。

北側の路地入口から見る。

Houses
所在地／東京都
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人　夫婦＋子供1人

設計
畝森泰行建築設計事務所　担当／畝森泰行　山口陽平　松浪崇斗　中尾壮宏*　藤田正輝*（*元所員）
構造　平岩構造計画　担当／平岩良之　國江悠介
環境　DE.lab
ランドスケープ　稲田ランドスケープデザイン事務所　担当／稲田多喜夫
ファブリック　オンデルデリンデ　担当／久米希実
照明コンサルタント　大光電機　担当／有馬郁恵

施工
山菱工務店　担当／深草洋三
設備　オースミ電気工業　担当／千葉義孝
電気　島田工業　担当／島田秀幸
植栽　soil　担当／鈴木圭介
家具　スティーユ　担当／星浩朗
ファブリック　オンデルデリンデ　担当／久米希実

構造・構法
主体構造・構法／木造　一部RC造
基礎／ベタ基礎

規模（House A）
階数　地下1階　地上2階
軒高 5,460mm　最高高さ 5,580mm
敷地面積 110.63m²
建築面積　44.71m²
（建蔽率40.41％　許容50％）
延床面積　73.05m²
（容積率66.03％　許容80％）
地階　13.24m²　1階　44.71m²　2階　15.10m²

規模（House B）
階数　地下1階　地上2階
軒高 6,480mm　最高高さ 6,600mm
敷地面積　122.30m²
建築面積　48.44m²
（建蔽率39.60％　許容40％）
延床面積　83.13m²
（容積率67.97％　許容80％）
地階　16.77m²　1階　48.44m²　2階　17.92m²

工程
設計期間　2019年8月～2020年12月
工事期間　2020年12月～2021年9月

敷地条件
地域地区　第1種低層住居専用地域　防火指定法22条区域　高度地区　第1種高度地区
道路幅員　北4.0m東4.0m　駐車台数　2台

外部仕上げ
屋根／シート防水 t=1.5mm（アーキヤマデ）
外壁／アピトン合板 t=12mm シリコン系木材保護塗料（共栄木材）
開口部／木製サッシ（キマド）　アルミサッシ（LIXIL）　スチールサッシ スチールドア（SUSPRO）
外構／コンクリート平板 t=60mm
テント／紐引き開閉式テント（メリープランニング）
テラス／せっ器質タイル t=15mm（国代耐火工業所）　セランガンバツ t=20mm

内部仕上げ（House A）
ダイニングルーム
床／磁器質タイル t=9mm（サンワカンパニー）　コンクリート打放し 防塵塗料
壁／ラワン合板 t=5.5mm 自然塗料　フレキシブルボード t=6mm UC
天井／構造用合板現し 素地
キッチンカウンター／モールテックス　ラワン合板フラッシュ t=20mm 自然塗料

浴室　トイレ
床／磁器質タイル t=5.5mm（TNコーポレーション）
壁／ FRP防水 トップコート　コンクリート打放し
天井／珪酸カルシウム板 t=6+6mm トップコート
便器／ LIXIL

洗面
床／コンクリート打放し 防塵塗料
壁／コンクリート打放し ラワン合板 t=12mm UC
天井／構造用合板現し 素地

ルーム
床／コルクタイル t=5mm（東亜コルク）自然塗料
壁／ラワン合板 t=5.5mm 自然塗料　FRP平板 t=5mm
天井／構造用合板現し 素地

サンルーム
床／コンクリート打放し 防塵塗料
壁／ラワン合板 t=5.5mm 自然塗料
天井／ FRP折半 t=2mm（タキロンシーアイ）
テント／紐引き開閉式テント（メリープランニング）

内部仕上げ（House B）
ダイニングルーム　洗面　トイレ
床／磁器質タイル t=8.5mm（アドヴァン）　複層フローリング t=15mm（アトムカンパニー）
壁／ラワン合板 t=5.5mm 自然塗料　フレキシブルボード t=6mm UC　PB t=12.5mm AEP
天井／構造用合板現し 素地　PB t=9.5mm AEP
キッチンカウンター／ SUS PL t=1.0mm バイブレーション　オーク突板練付合板 t=20mm
便器／パナソニック

浴室
床／磁器質タイル t=10mm（ニッタイ）
壁／ FRP防水 トップコート
天井／バスパネル

スタディルーム　ベッドルーム
床／複層フローリング t=15mm（アトムカンパニー）
壁／コンクリート打放し　ラワン合板 t=5.5mm 自然塗料（スタディルーム）　ラワン合板 t=5.5mm 自然塗料（ベッドルーム）
天井／構造用合板現し 素地

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
換気方式／第3種換気
その他／電気式床暖房　熱循環居住域空調(カウンターアローファン)
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯

撮影／新建築社写真部

配置図　縮尺1：2,000

特集論考1

私たちの家

畝森泰行（建築家）

共に生きること

漠然と自分の家について考えていた時、本誌の「建築家自邸からの家学び」の取材で松田直則さんの自邸「ハウスM」に伺った（本誌1904）。都心の敷地に縦に積まれたその重層長屋は、自邸といっても松田さんの家族に加えてその友人夫妻も上階に入居し、更に下階はアトリエとして貸し出されていた。建物の中央には吹抜け状の中庭があり、そこを介して信頼する友人同士が僅かな距離の中で生活を共にする姿は大変印象的であり、孤独を感じず、声をかけずとも緩やかに繋がるその生き方に素直に共感した。このことを家族に話し、同じ都内に暮らしていた義妹家族に一緒に住宅をつくることを提案したのである。皆故郷を離れ、東京で同じくらいの歳の子供をもち、日々の生活に充実しつつもどこかで将来への不安を抱えていたのかもしれない。隣に住み、助け合いながら共に暮らすことに彼らも賛同してこの計画が始まった。

その後、私たちはふたつの家族による緩やかな共同体をイメージしていった。かたちの上ではふたつの家であるけれど、それは決して切り分けられるものではなく、むしろ7人の大人と子供が共に暮らすような家である。そのため、それぞれの性格や考えを尊重し、子供たちの成長や自分たちの将来に想いを巡らせ、この共同体の当事者でありながらも、ひとりの建築家としてどのような家をつくることができるか考えた。それは、いわゆる建主のいる設計や自邸という枠組みを超えて現代に生きること自体を問うような、いわば「純粋な家づくり」と呼べるプロセスだった。

小さな集落

隣に住むとはいえ、資金面などの理由から、長屋や2世帯住宅のようにひとつの建物にふたつの家族が住むのではなく、それぞれの敷地に独立した住宅を建てることになった。その条件のもとに土地を探し、都心から離れた緑の多い場所に私たちは住むことを決めたのである。近くに古い寺社が残り、周囲にゆったりとした建物や庭も残るその一方で、角地にあたる敷地をふたつに分割することは、この穏やかな環境を切り裂くようで随分悩んだ。だから、ふたつでありつつも一体的な建築であり環境をつくることがひとつの目標になっていく。2棟の間の境界線を長手方向に引いたのは、そのための最初の決断だった。当然それぞれの建物も細長いヴォリュームになるが、その間には共有の路地が生まれ、どの部屋もそれに面し、また外部に近いことで明るい室内になる。更に路地が南北に抜けることで、背骨のように敷地全体のまとまりをつくると考えた。

南イタリアにチステルニーノという小さな街がある。周囲を城壁で囲まれたこの街は、どの建物も石灰によって白く塗られ、迷路のように細い路地が巡る。バルコニーが張り出し、玄関を繋ぐ階段が延び、思わぬ所にブリッジが横切る。そこかしこに植物が置かれ、風に揺れる洗濯物が見え、人の姿も時折現れた。もはやここは外部なのか内部なのか、あるいは街なのか建築なのかも分からなくなる複雑さであり、そして連続的だった。すべてが序列なく存在しているようであり、そのことに人間が住む豊かさと街や建築への愛情を感じた。

20年も前のこの体験は、私たちの家をつくる上で少なからず影響している。たとえばこの家は、家というよりも7人の小さな村や集落のイメージに近い。7人には当然個性があり、生活する時間帯や仕事、趣味も異なり、好きな本や遊び方、好む場所もそれぞれにある。その異なる7人が路地を行き交い、自分の居場所を見つけ、それでいて一緒にいられる空間とは何かを考えた。また背骨となる路地も、それ自体を単独につくるのではなく、建物との関係によって生まれることを意識した。路地の幅はせいぜい1.8m程度で

あり、また配置上の図式性も強い。その窮屈さを脱するように、建物の断面方向の変化や開口部の位置によって路地を空間化しようと考えた。つまりふたつの住宅と路地を、また内部と外部を同時につくることを目指したのである。
どちらの建物も長さ約16mのほぼワンルームの空間である。幅は一方が約3.6m、もう一方が約4mでありいずれにしても小さい。けれどその小ささは、外部に接する外壁や屋根の位置、高さによってダイレクトに空間を変えられる可能性だと思った。そこで屋根を上下させ、さらに建蔽率の制限を回避するように一部を半地下とし、その上に屋上テラスをつくる。この僅かに上がるテラス(半地下)、屋根の高さ、外壁のセットバック、そして開口部の位置を、プライバシーや眺望、室内や路地への採光などを考慮しながら決めていった。それは何かひとつのルールや合理性だけではつくり得ない、互いの関係や内外の押し引きによって生まれる空間であり、そこでは地面を間近に感じ、低い屋根の向こうから陽が差し、斜めに抜ける視線の先に互いの暮らしが垣間見える。それらひとつひとつの場が繋がる有機的連鎖のなかを7人が交差し、思い思いに佇み、動き回る姿をイメージした。

家の時間

岡山県の山間の小さな町、大工である父がつくった木造の家に、私は両親と妹ふたり、祖父母と一緒に暮らしていた。辺りは見渡す限りに自然が広がり、緩やかな稜線を描く山々が取り囲む。当時は牛や鶏、犬などを飼っており、今では想像もつかないが、背後の山から炊事のための水を引き、祖母は薪を割って風呂を沸かし、また祖父は猟をする専ら、釜戸や炬燵に使う炭をつくっていた。そういう自然と結びつく暮らしの中に父がつくった家は建っていて、むしろ私たちにとっての「家」とは、それらかたちに見えないものまで含めた総体的な環境を指していたように思う。
哲学者の内山節は、山村地域に流れる時間を「横軸の時間」といった。時計のように戻ることなく過ぎ去っていく「縦軸の時間」に対して、春が帰ってくる、というように季節が円を描きながら巡る「横軸の時間」をその暮らしに見たのである。確かに私たち家族もその円環する時間世界に生きていた。動植物や家族とともに、自然に沿い、四季の移ろいを感じながら暮らすそのひとつひとつが自然も含めた他者と生きることであり、そのゆっくりと時間が流れる家を私もつくろうと考えた。それはこれまでの自律的で固定的な建築と異なる、さまざまな事柄との関係から生まれる無形の建築像ともいえ、それ故にその時どきの情景が鮮やかに浮かび上がる。
ふたつの家族であり、また7人が暮らすこの家は、そういう数や所有の形式で表せられない大小異なる場所が集まる群になった。そこでは、どの場所にいても傍に地面や緑、空が見え、その間に人の気配や街の断片を感じる。私たちの周りに存在するそれらのものは、この不確かな時代に信じられる確かな他者であり、またいつの時代も変わらない普遍的な事実である。そのことが、今も家をつくる動機と共に現代に生きるリアリティとなって、広く「家」という朧げな輪郭をかたちづくっていくと思う。

東側夕景。

house / studio H

京都府京都市

木村松本建築設計事務所
KimuraMatsumoto Architects

前面道路側の庭から建物内部を見通す。山間の住宅地に建つ、ワークスペースを備えた住宅。まちから山々へ変化していく階層や環境密度を踏まえ、身体スケールからは少し大きい2,000mmを基本モジュールとした。軒高7,150mmの層と2,750mmの層が隣り合いL字に折れ曲がった骨格をもつ。2階のセットバックや屋根形状、勾配など、景観条件より導き出された形状でもあり、遠くに見える山のような構えでもある。外壁は焼スギ板張り。

エントランスよりホールを見る。等間隔に連続する120mm角の柱や筋交、鉄骨階段、奥の木々、それらの影、遠くの山々が重なり合う。梁天端までの高さは3,000mm（掘り込部は3,450mm）。微地形と連動するように外周に沿って掘下げた場所には、光や影のほかに動物の鳴き声や葉揺れなど多様な音も入り込む。住まい手は時間によって変化する居心地に応じて移動する。

キッチンより長手方向を見る。木々越しに開口部から入り変化する光や影を、
木、コンクリート、ポリカーボネート、ステンレスなど質感の異なるマテリアル
をもつ面が受け止める。柱間にはキャンプ用のロープやフックが取り付けられる。

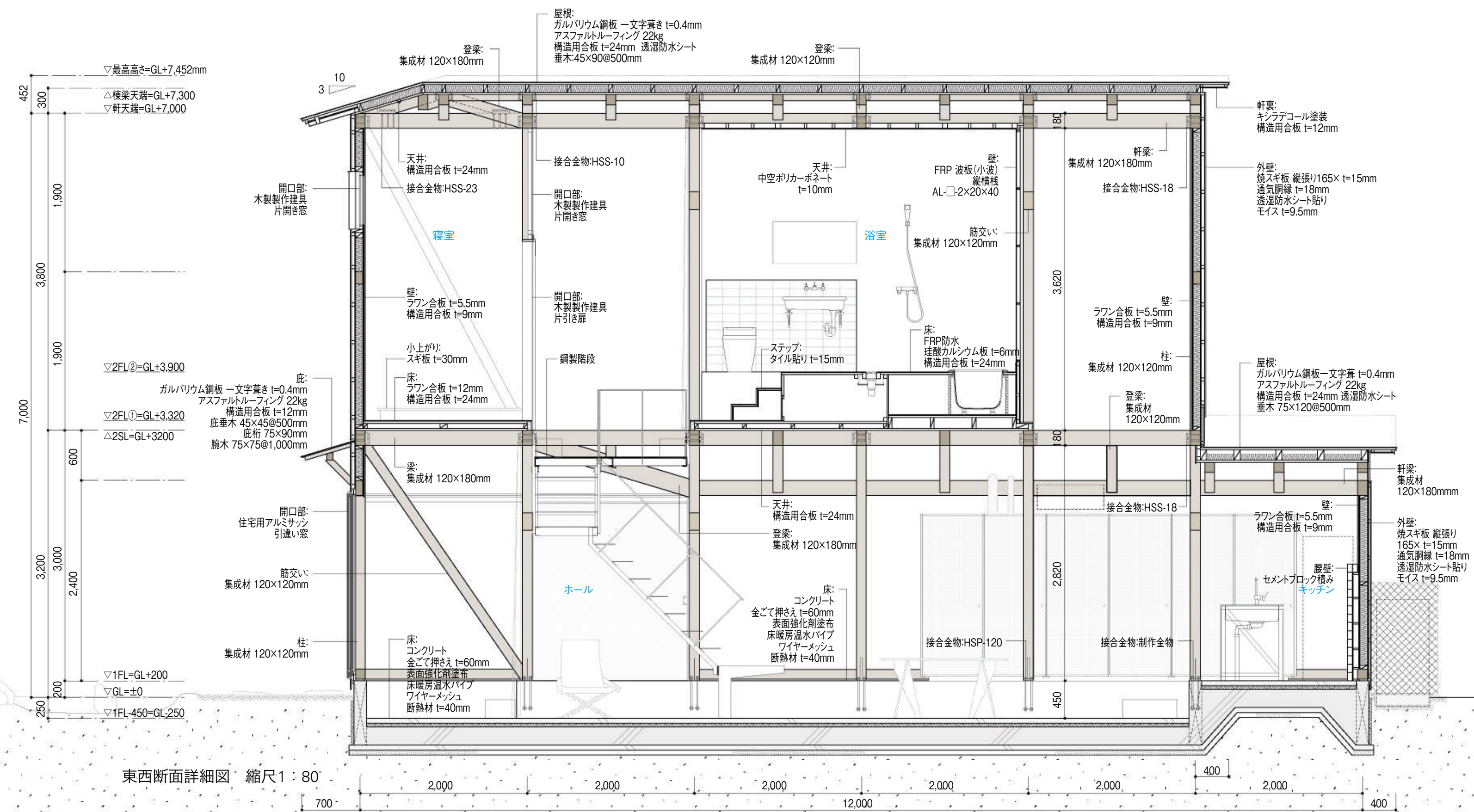
エントランスよりワークスペースを見る。エントランス建具は鋼製枠＋FRP平板。
ワークスペースの一部の壁面はリフモ練付け。

キッチンに配置した、16mmのポリカーボネート板による建具が並んだ収納。光や景色を反射させながら中のものをぼんやりと浮かび上がらせる。建具金物は制作。

経験の同時性

京都というまちは、その中心部にいても建築群の遠く向こうに山々を見ることができる。年に1度の五山の送り火にそれはより強く実感する。身の回りと遠くが同時に視界にある、その異なる情報が重なり合う状態は、自分がいる場所や時間をいきいきと立ち上がらせる。そういった経験は、近さや遠さ、新しさと古さ、自然と人工などといった対比的な二項の違いを軽く飛び越える。こうして人の内面に形成されていく立体的な認識の網は、生活における実体験が育む経験知であり、まちの豊かさそのものである。

まちなかから少し離れた山間の古い住宅地、建物を建てるには充分な平地があり、竹や紅葉が生い茂る急斜面へと繋がった敷地に、グラフィックデザイナーのための住宅兼スタジオを計画した。建物の形状は遠くに見える山のような構えで人を迎え（道路側に90度）、すぐそばの風景から遠くの景色までに向き合う（斜面側に270度）角度をもつL型をしている。都市部とは異なる周辺環境のおおらかさに対応させるように、ここで使うモジュールは身体スケールからはやや冗長である2,000mmとしている。1階の短辺は4,000mmであるが、その半分を敷地に元からあった微地形をなぞるように掘り下げる（450mmの段差。コンクリート土間にそのまま現れた基礎形状はとても長いベンチのようである）、また2階も半分を下屋とすることで、歩幅で3歩にも満たない2,000mmという数字が、規則性のある骨格配置により立ち上がる。それは駅のプラットホームのような浅さとして、教会の側廊のような深さとして、身近な見えて触れられるものから大いなる環境までスケールを横断して関係付きながら繰り返し経験される。

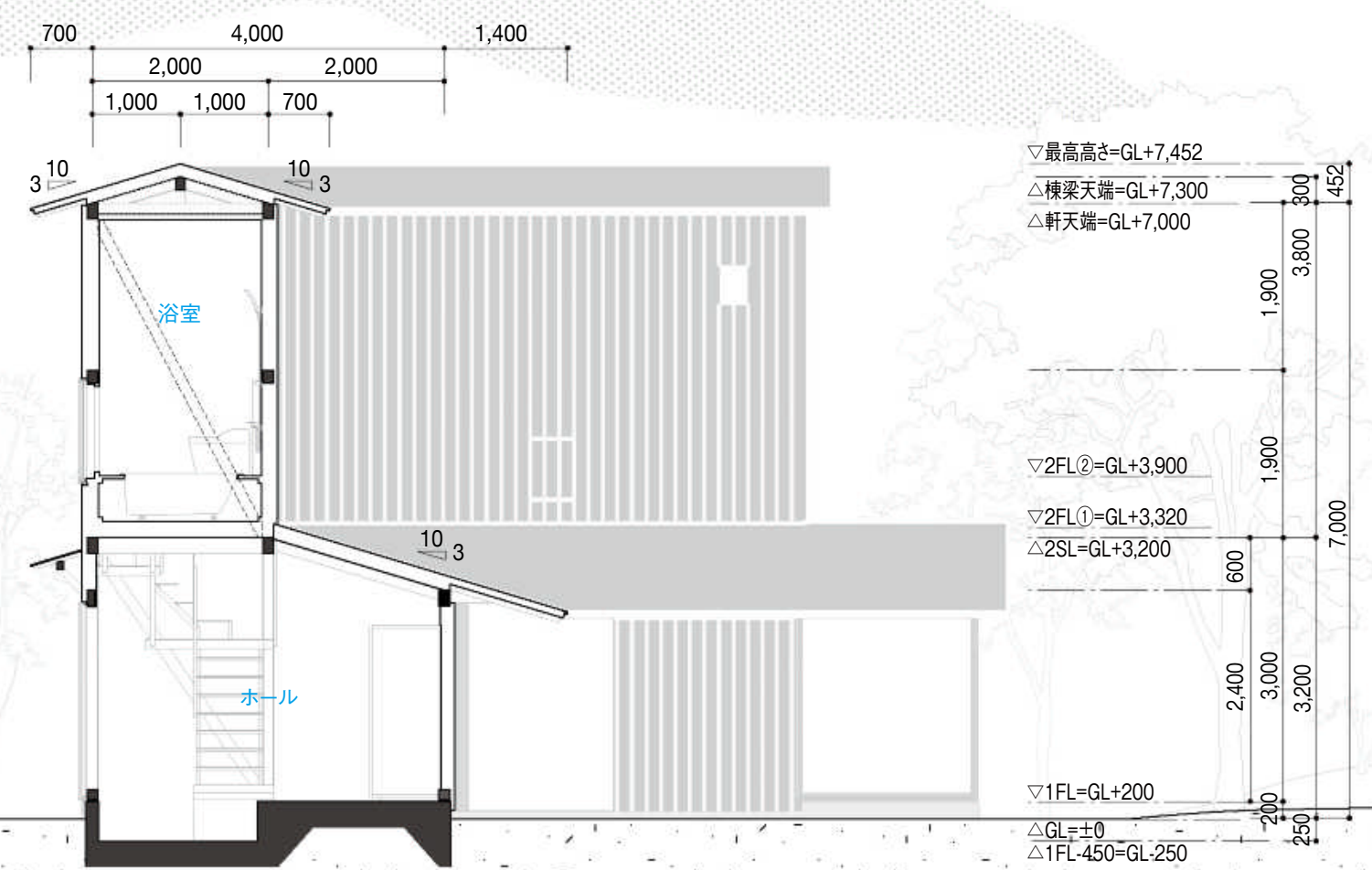
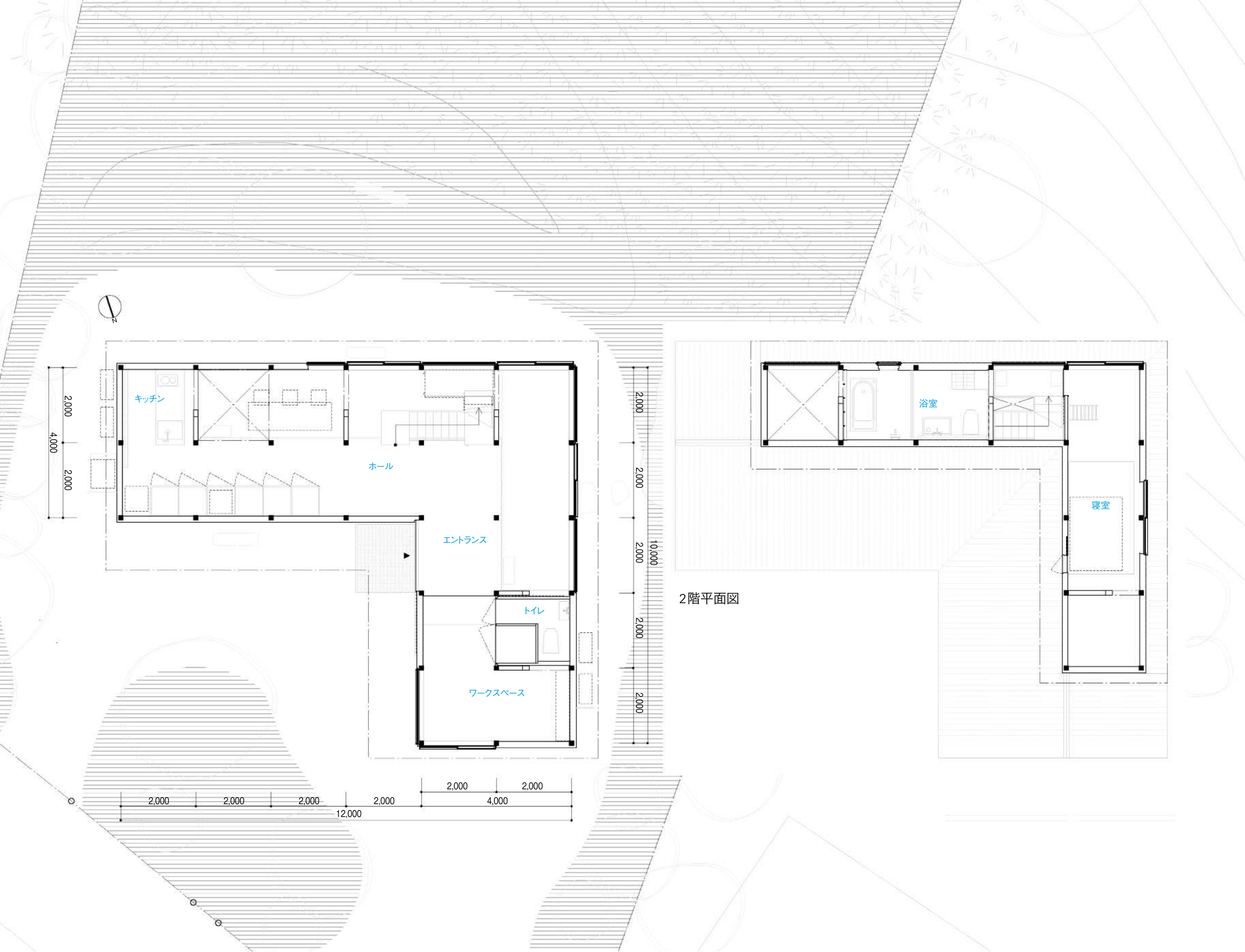
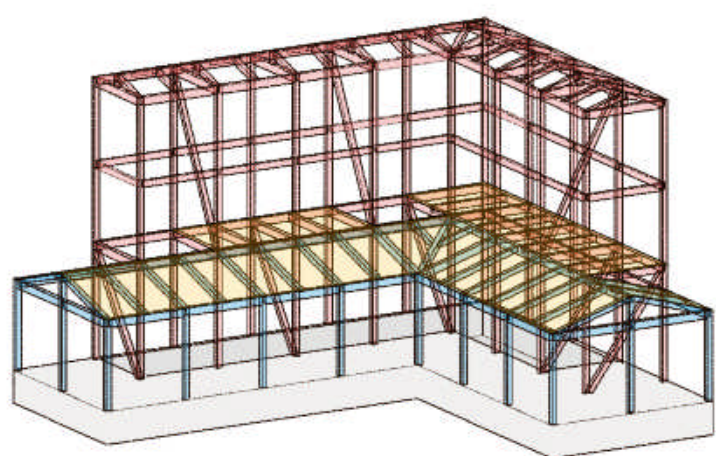
まちの中心部からは遠く向こうに緑の面として見えていた山々が、近づくにつれ木々の連なりとして表れ枝葉や樹皮の肌理までが感じられ、その連続性の先にこの骨格を立ち上げた。そして、この経験がこの骨格の中にも宿って、まちから山々の風景を望むことの中に位置づけられるような、そういった建築でありたいと考えた。（木村吉成＋松本尚子）

ホールからキッチンまで見通す。500mmピッチで配された垂木は外部に1,400mm延長され、軒下を含めた下屋の領域を拡張する。1階柱の柱頭柱脚と筋交は角度に合わせた制作金物とドリフトピンで接合している。

南北断面図　縮尺1：150

キッチン
ホール
エントランス
トイレ
ワークスペース

1階配置平面図　縮尺1：150

浴室
寝室

2階平面図

母屋（ピンク）、下屋（ブルー）、それらを繋ぐ2階床+下屋屋根（オレンジ）

構造ダイアグラム

吹抜けのある細長いL字型平面への構造的配慮
建築家特有の細長く背の高い2階空間を有する建物も、直線的な平面であれば短辺と長辺それぞれに明確な構造計画を定めることができるが、L字型平面となると短長が混在し勝手が異なる。特に2階床に現れる1グリッド分の吹抜けによる構造的分断は避ける必要がある。ここでは2階床梁と屋根梁双方の金物をボルトで緊結し、下屋と2階床を一体化させると共に、耐力壁までの軸力伝達経路を明確にした。突出した2階については、壁量計算的には外周耐力壁で取り切れる量を確保しつつも、筋交いを壁面線間距離4m以内となるよう配置し、荷重重心の異なる地震・風双方に対応させている。　　　　　（満田衛資+江畑和弘）

2階寝室。外部に近接する2,000mmの浅さと、8,000mmの奥行き、棟梁天端4,000mmの深さをもつ。西側の開口部からは谷筋と対面の山々を、東側下部の隠し扉からはまちの方角に朝日を望む。

階段を上がり左右に分かれた一端が浴室となっている。両側を120mm角の筋交いと吹抜けに挟まれた、架構の上に置かれたような場所。ステップのタイルは特注品。

house / studio H

所在地／京都府京都市
主要用途／住居兼スタジオ
家族構成／1人

設計

木村松本建築設計事務所　担当／木村吉成
　松本尚子　芦田晴香
構造　満田衛資構造計画研究所
　担当／満田衛資　江畑和弘
キッチンアドバイス　LADER　担当／橋本司

施工

いまむら工務店　担当／今村大介
基礎　粟津組　担当／粟津大喜
大工　いまむら工務店　担当／広瀬忠男
　野呂昌宏　谷口勇也
板金　丹保板金工業所　担当／丹保喜博
材木　中利木材店　担当／長谷川弘太
鉄工　工房一創　担当／小西康信
木製建具　KURA WOOD WORKS
　担当／辻蔵人
電気設備　佐野電気商店　担当／佐野浩
給排水設備　尾下設備　担当／尾下将司
外構・造園　造園 竹　担当／竹園憲二
温水式床暖房　M.Life　担当／松本勇夫
カーテン　fabricscape　担当／山本紀代彦

構造・構法

主体構造・構法　木造軸組工法
基礎　べた基礎

規模

階数　地上2階
軒高 7,000mm　最高高さ 7,452mm
敷地面積　1,098.61m²
（建築有効面積 459.26m²）
建築面積　77.44m²
（建蔽率16.73％　許容30％）
延床面積　99.51m²
（容積率21.67％　許容80％）
1階　72.00m²　2階　27.51m²

工程

設計期間　2019年5月～2020年12月
工事期間　2021年3月～2021年11月

敷地条件

第1種低層住居専用地域　法第22条区域
　10m高度地区
道路幅員　北東4.0m　駐車台数　2台

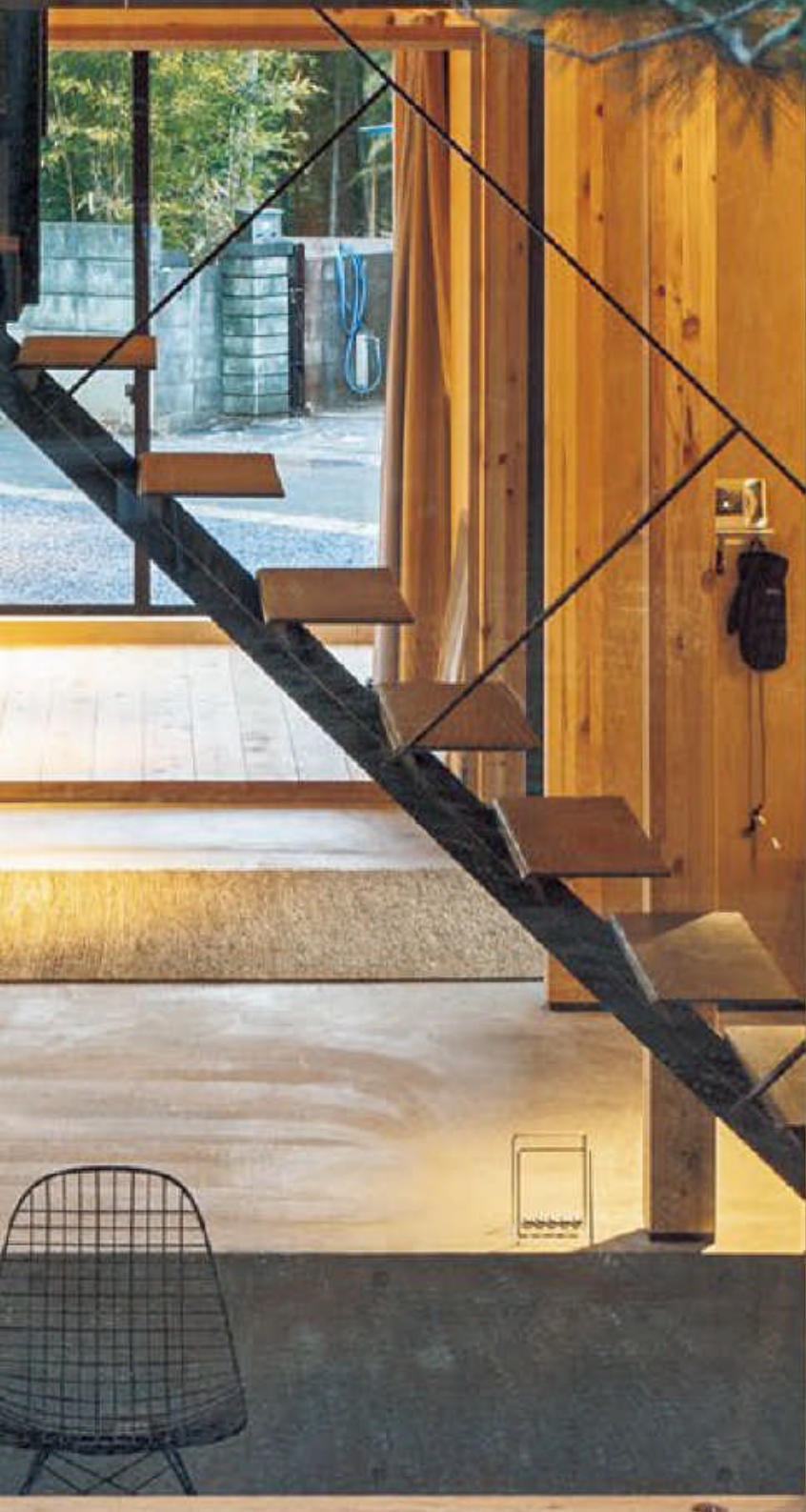
外部仕上げ

屋根／ガルバリウム鋼板 一文字葺き t=0.4mm
外壁／焼きスギ板 縦貼り t=15mm
開口部／住宅用アルミサッシ 外付型・半外付型
　制作鋼製　木製建具
外構／コンクリートブロック　砕石

内部仕上げ

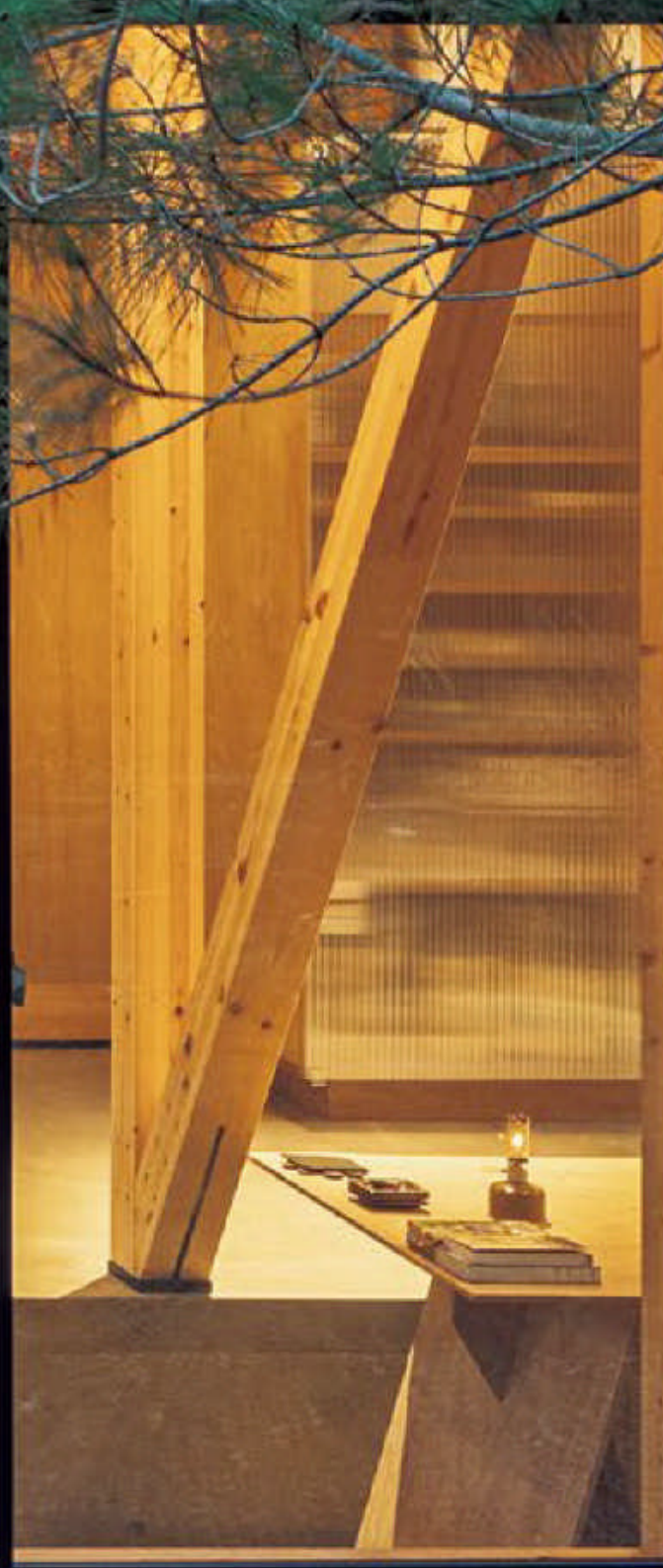
キッチン

床／コンクリート金ごて仕上げ 表面強化剤塗布
壁／ラワン合板 t=5.5mm 一部バッカー t=1mm
腰壁／セメントブロック
天井／構造用合板 t=24mm 梁現し
厨房機器／
　シンク／製作ステンレス製シンク
　IHヒーター／ AEG
　換気扇／三菱電機
　家具／制作木製収納

南西面夕景。手前は25mほど続く斜面地。建主の手で季節に応じた密度に手入れされている竹を中心とした木々には、夏の日射を遮る効果も期待されている。

照明／協和電工・遠藤照明
建築金物／シンク水栓金物 GROHE

ホール　エントランス
床／コンクリート金ごて仕上げ 表面強化剤塗布
壁／ラワン合板 t=5.5mm
天井／構造用合板 t=24mm 梁現し
照明／遠藤照明・青山電陶
建築金物／収納つまみ　BOLTS HARDWARE STORE
制作テーブル／家具屋 木印

トイレ
床／コンクリート金ごて仕上げ 表面強化剤塗布
壁／ラワン合板 t=5.5mm
天井／中空ポリカーボネート t=6mm
照明／青山電陶
建築金物／引き手 制作　ステンレス製引き手
便器／パナソニック
手洗い器／エフキャスト
手洗い器水栓金物／ LIXIL

ワークスペース
床／ヒノキ板 t=30mm
壁／ラワン合板 t=5.5mm　リフモ t=1mm
天井／構造用合板 t=24mm 梁現し
照明／遠藤照明
建築金物／引き手 制作ステンレス製引き手

浴室
床・壁／ FRP防水 トップコート仕上げ
一部FRP波板 小波
腰壁／セメントブロック
天井／中空ポリカーボネート t=10mm
ステップ／タイル t=15mm 水野製陶園
照明／ BOLTS HARDWARE STORE
バスタブ／大和重工
シャワー水栓金物・洗面器／ TOTO
洗面器水洗／ LIXIL
便器／パナソニック

寝室
床／ラワン合板 t=12mm　スギ板 t=35mm
壁／ラワン合板 t=5.5mm
天井／構造用合板 t=24mm 梁現し
照明・建築金物／ BOLTS HARDWARE STORE

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
換気方式／第3種換気方式
床暖房／温水式床暖房
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／エコキュート

撮影／新建築社写真部

小屋裏と色

Attic ／ Color

愛知県西尾市

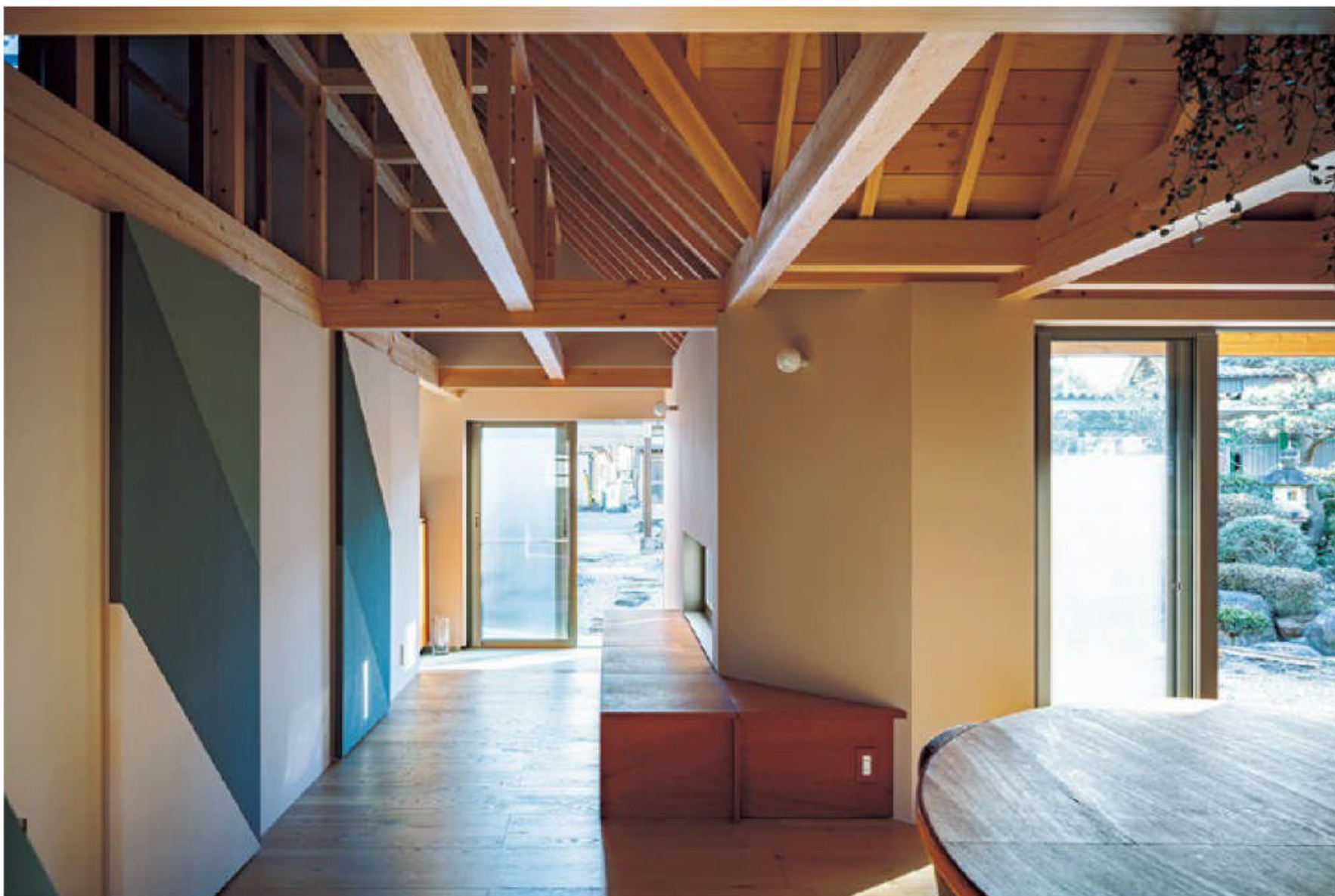
長岡勉／ POINT
加藤直樹／建築設計 加藤住吉
Ben Nagaoka ／ POINT
Naoki Kato ／ KatoSumiyoshi architects

南側全景。折れ曲がった敷地の角に建っていた母屋の建て替えで、前面道路に正対して配置。左手の祖母が暮らす住宅と繋がっている。屋根のガルバリウム鋼板の色はモスグリーン、外壁はペールゴールド。

ダイニングキッチンから正面にリビングを、上に小屋裏を見る。1階の床から約2,100mmの高さに梁があり、それより上は小屋裏が広がっている。また、ヒノキやスギの白さと赤みに馴染むように壁を薄桃色で塗装し、それに合わせて制作家具の塗装には赤みの強い染色を使用。さらに、それらの赤味を際立たせる緑色を階段や建具などに施している。

1階の梁の上から見る。格子は75mm角材で構成。
薄桃色の壁が空間全体を馴染ませる。

1階から3,000mm上がったところから見通す。スノコや棚板を格子に架けることで、モノや人のための場所になる。屋根は910mmの構造グリッドに合せて45度勾配とし、三角トラスをつくっている。

リビングからダイニングキッチンを、その上に小屋裏を見る。1階の床から棟木の下端までの高さは5,580mm

リビングから玄関方向を見る。

韻を踏みながら関係を繋ぐ

住まいは人の暮らしの中で長い年月を過ごす場所である。だからこそ暮らしの変化に耐え得る強い骨格が重要になる。同時に、暮らしとは日常の小さな時間の集積でもある。だからこそ些細な瞬間瞬間を常に支える心地よい空気感が大切になる。

建主は暮らしを楽しむために集まる〈さまざまなモノ〉と共に暮らしていた。住まいに大切なのは心地のよい居場所を設けること。それは人のためだけでなく、同時にモノのためにもある。人とモノが共存するための居場所として、暮らしを受け止める大きな余白のある小屋裏空間を構想した。人の場所としては多少窮屈ではあるが、モノの場所としては十分大きな半間ピッチの格子が小屋裏全体を支える。そこを手がかりに、スノコや棚板などを足してモノの居場所をつくる。一方で場所に合わせて格子を間引くことで人の居場所を確保していく。格子は2.5寸角にすることで、家を支える構造材というより大きな家具のフレームのような印象を与える。張り巡らされた格子によって疎密が生まれ、どこにいても互いを遠くて近くに感じる、大らかでありながら密度のあるワンルームができ上がる。

小屋裏を構成している格子のヒノキ材と天井のスギ板は、赤みと白みが混ざる材。源平と呼ばれるだけあって主張の強い材である。この材を心地よく空間に馴染ませるために赤と白の中間となる薄桃色で壁面を塗装し、空間全体の空気感を整える。次に桃色の背景に際立つ緑色系で階段ササラを塗装する。さらにはササラの斜めと韻を踏むように建具を緑の明暗で斜めに塗り分ける。最後に少し暗めの緑系とバランスを取るために、柿渋系の赤茶で家具を染める。こうしてつぎつぎと韻を踏む色合いが、異なる個性を生かしながら、空気を彩る媒体になる。

建物の骨格＝小屋裏と空気感＝韻を踏む色合い。そこを人とモノの居場所にするのが家具である。家具は人の身体に近い存在である一方で強い建物にも拮抗する存在になることを目指した。家の中心にある丸柱と家族が集まるダイニングテーブル。その丸柱を飲み込むように胃のかたちをしたダイニングテーブルを配置し、家の中心と暮らしの中心を重ね合わせた。強いルールだけを空間に与えすぎると暮らしの中で建築が浮き上がる。そうではなく、それぞれの要素が韻を踏みながら互いの関係を繋いでいくこと。このことが住み手が積極的に暮らしを豊かにするきっかけに繋がっていくと考えている。

（長岡勉＋加藤直樹）

小屋裏の格子はヒノキ材、天井はスギ材を使用。

水回りの上から見通す。

小屋梁によって上下の架構形式が分かれる日本の木造空間では、複雑な屋根形状と奥の深い屋根裏をつくり出してきた。この計画ではそんな小屋梁の上に生じる屋根裏空間を積極的に利用することが意図されており、屋根を支える小屋組がその空間を設える手がかりになるように計画されている。在来軸組み構法では小屋束は90×90mm、母屋は105×105mmで構成しそこに垂木をスパンに応じて架けていくが、ここでは、人の手に触れることを意識して75mm角材で構成することとした。触れ止めとなる小屋貫も75mm角とし、垂木は75mm角の側面にちょうど納まる梁せい50mmの材を用いている。垂木と小屋貫で構成される三角形をトラスと見立てることで雲筋違いをなくし、極力すっきりとした屋根裏としている。

（大野博史）

▽建物高さ=GL+6,532
棟木:
75×150mm
▽棟高=GL+6,194
屋根:
ガルバリウム鋼板小波板葺き
横胴縁18×30mm
アスファルトルーフィング
合板 t=12mm
屋根垂木 h=120mm（GW t=100mm）
スギ縁甲板 t=12mm
▽GL+5,284
開口部:
アルミサッシ
梁
□=75mm
▽GL+4,374
壁:
PB t=12.5mm EP
防湿フィルム
合板 t=12mm
断熱材
柱 □=105mm
柱
□=75mm
▽GL+3,464
スノコ床:
ヒバ30×60mm
▽GL+2,554
制作キッチン
外壁:
ガルバリウム鋼板小波板葺
通気胴縁 t=18mm
透湿防水シート
防水PB t=12.5mm
構造用合板 t=12mm
ダイニングキッチン
制作テーブル
制作収納
▽1FL=GL+464
338
910
910
910
910
2,090
464
6,532
砕石柱状
地盤改良
床:
フローリング t=12mm
構造用合板張り t=24mm
大引90mm□（断熱材 t=50mm）
基礎:
基礎スラブ t=180mm
捨てコンクリート t=50mm
砕石 t=50mm

断面詳細パース　縮尺1：40

小屋裏と色

所在地／愛知県西尾市
主要用途／専用住宅
家族構成／母＋子供2人

設計

POINT　担当／長岡勉
建築設計 加藤住吉　担当／加藤直樹
　諸橋克哉
構造　オーノJAPAN　担当／大野博史
　海老澤考秀（元所員）

施工

三矢建築　担当／三矢昌行　廣部翔一
木工事　　三矢建築　担当／廣部翔一
塗装工事　三矢建築　担当／野田信也
板金工事　愛忠板金　担当／鈴木宏幸
基礎工事　高尾土建　担当／高須真宏
左官工事　川合業務店　担当／川合力
材木　鈴木林業　担当／鈴木規男
建材　ベリーウッド　担当／渡辺慶至
設備工事　栄住設　担当／磯貝高広
電気工事　双葉電機　担当／鈴木雅喜

構造・構法

主体構造・構法　木造
基礎　べた基礎

規模

階数　地上2階
軒高6,530mm　最高高さ6,190mm
敷地面積　459.27m^2
建築面積　84.55m^2
（建蔽率18.4%　許容60%）
延床面積　122.16m^2
（容積率26.5%　許容200%）
　1階　75.76m^2　2階　46.40m^2

工程

設計期間　2018年12月～ 2020年8月
工事期間　2020年8月～ 2021年3月

敷地条件

市街化調整区域
道路幅員　11m（南側）　駐車台数　3台

外部仕上げ

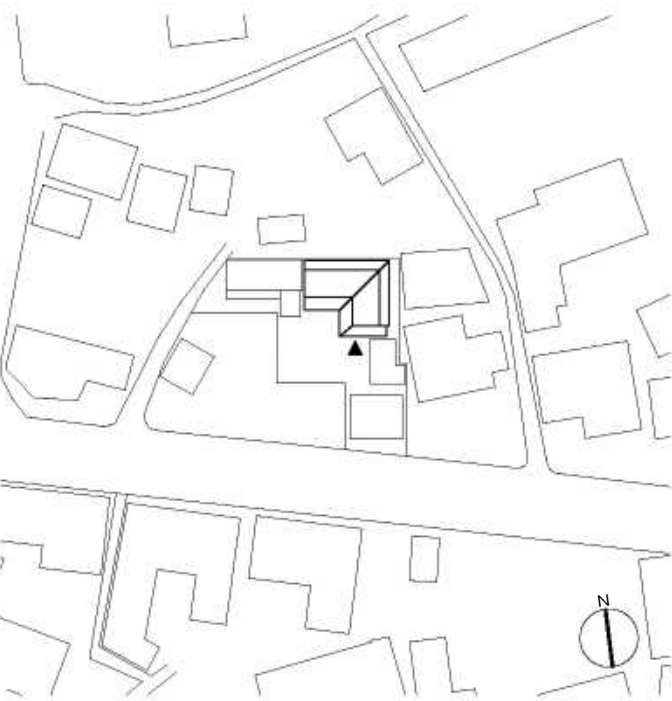
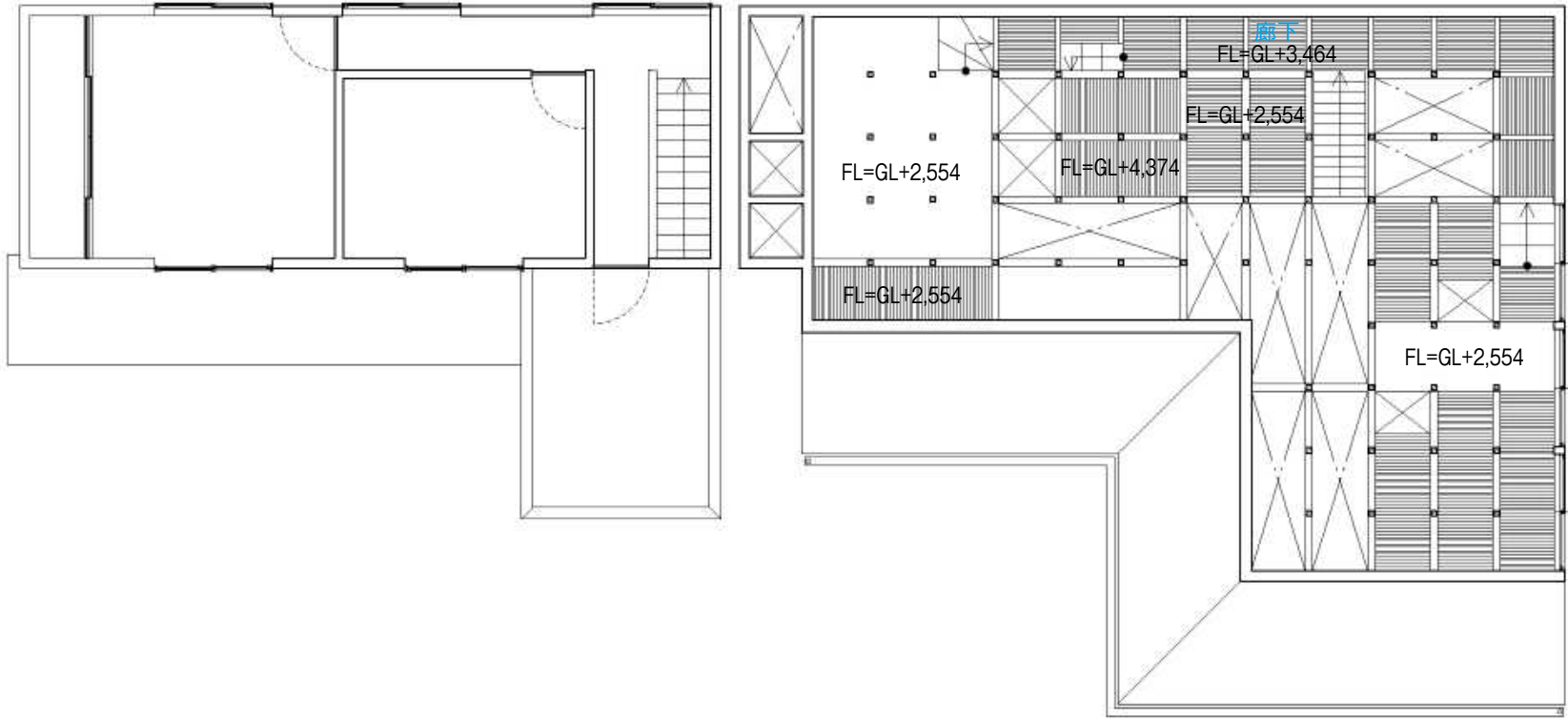
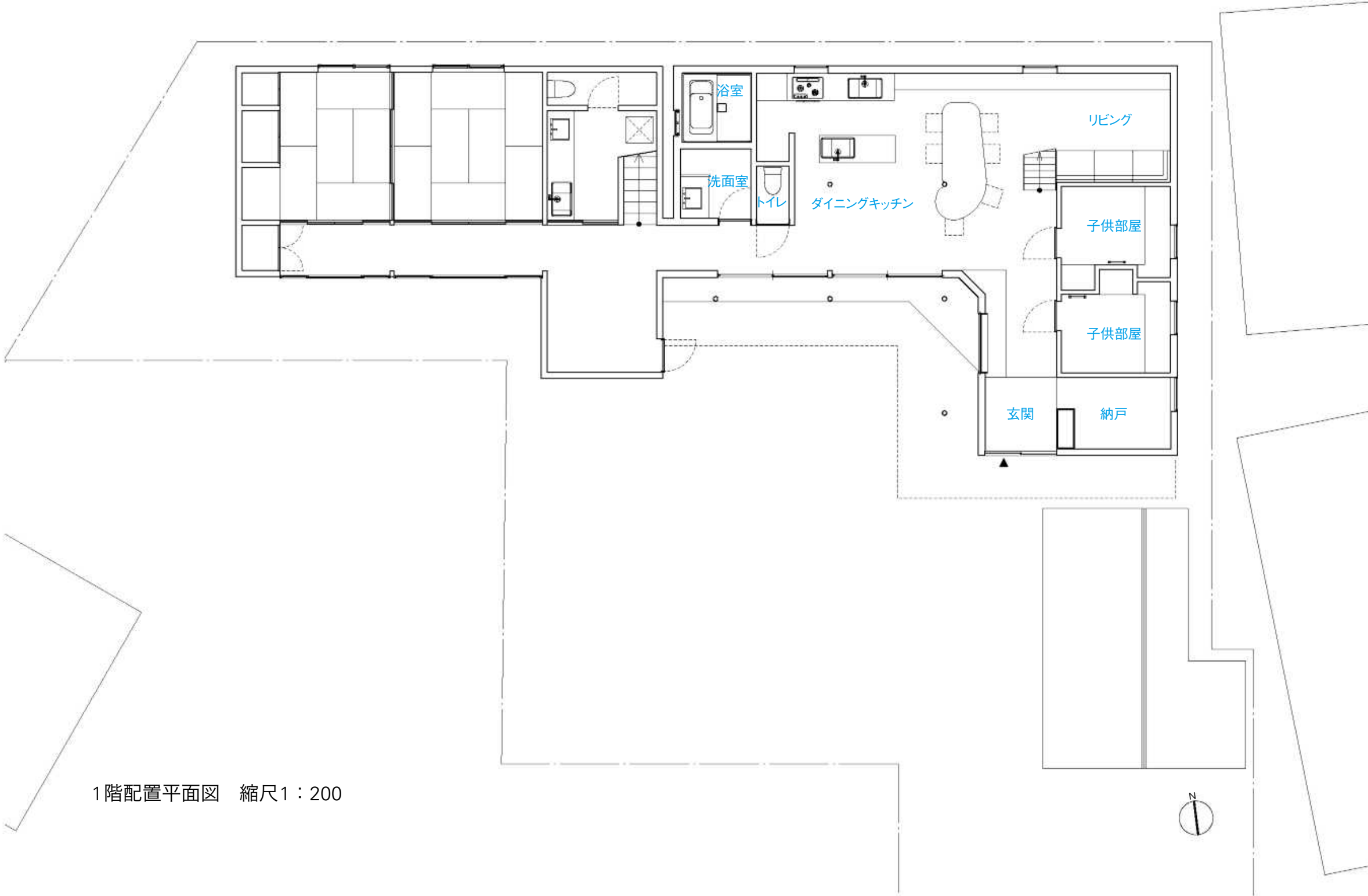
屋根・外壁／ガルバリウム鋼板 小波板葺き
　GHG04（モスグリーン）ニスクカラー（屋根）
　GCM36（ペールゴールド）ニスクカラー（外壁） 日鉄鋼板
開口部／エピソードNEO（YKKAP）

内部仕上げ

リビング　ダイニングキッチン

床／積層フローリング サンワカンパニー アスペラ
壁／ PB t=12.5mm EP（15-80D）　キッチンパネル DICデコール D-010
天井／スギ縁甲板
家具／制作（ラワン材）
照明／ペンダント照明（LEDクリア電球）

トイレ　洗面所

床／積層フローリング サンワカンパニー アスペラ
壁／ PB t=12.5mm EP（15-80D）
天井／構造用合板
家具／制作
照明／ダウンライト コイズミ AD7002W27

配置図　縮尺1：2,000

小屋裏平面図

1階配置平面図　縮尺1：200

子供部屋の建具は絵画のような存在感を目指し、また階段のササラの斜めのラインに合せて韻を踏んだ色合いを使用している。

西側の軒下から見る。外装はガルバリウム鋼板小波板葺きとし、既存の倉庫と連続させた。庭の踏み石は既存のものを用いている。

便器／パナソニック CH3010WS
洗面カウンター／スクエア洗面器ハイライズ toolbox
洗面用水栓金物／シングルレバー混合栓 toolbox SK-6
空調機器／壁掛けエアコン（ダイキン）

子供部屋

床／積層フローリング サンワカンパニー アスペラ
壁／ PB t=12.5mm EP（15-80D）
天井／スノコ（ヒノキ材）
家具／制作（ラワン材）
照明／シームレスライン コイズミ AH50563

設備システム

空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／第3種換気
　その他／床暖房
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／浄化槽
給湯　給湯方式／自然冷媒ヒートポンプ給湯機

撮影／新建築社写真部

玄関から階段方向を見る。

ダイニングキッチンから西側を見る。キッチン台には子供部屋の建具などと同じ緑色を使用。
隣の既存家屋には扉を新設して繋げた。小屋裏の格子に対し、1階部分には円柱が落ちる。

南側全景。市街地から少し離れた住宅街の旗竿敷地に建つ。緩い屋根勾配をもつボックスヴォリューム内は、南北を3層に隔てた平面構成。前面道路と繋がる南側のアプローチに面する屋根付きのテラス、エントランスを兼ねロフトを備えた土間、高気密高断熱の壁に包まれた生活空間が連続する。

特集：木造の魅力

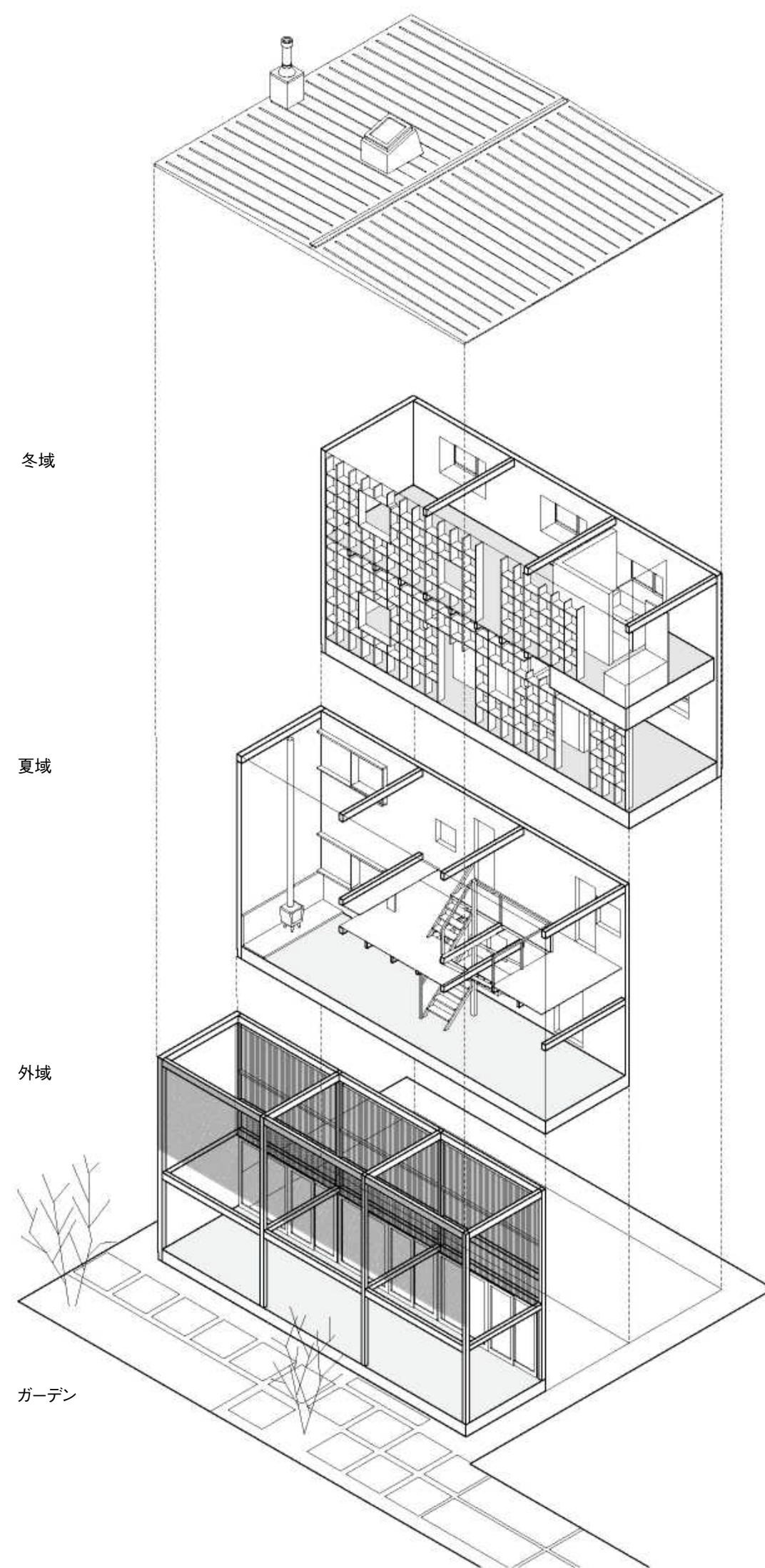
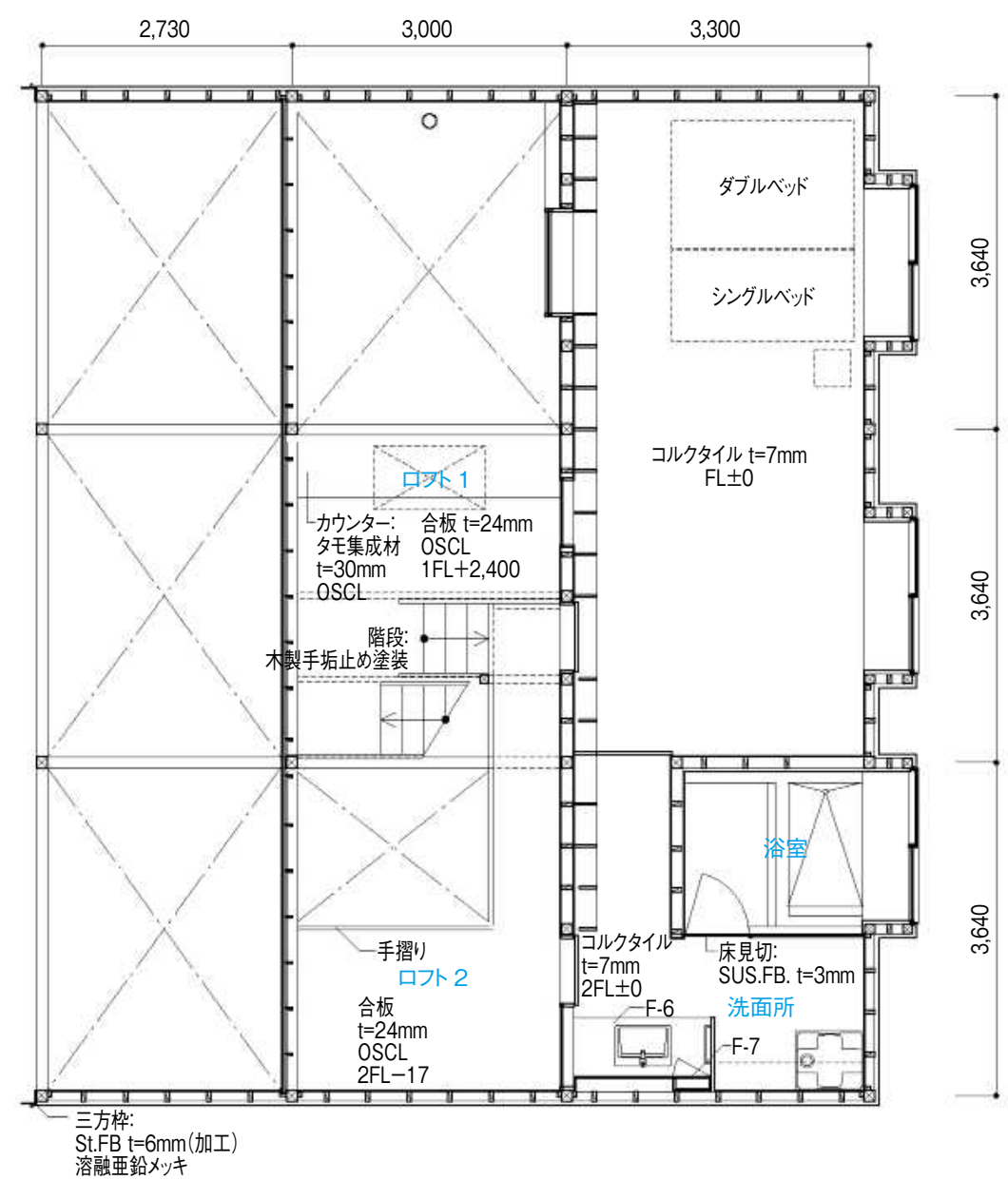
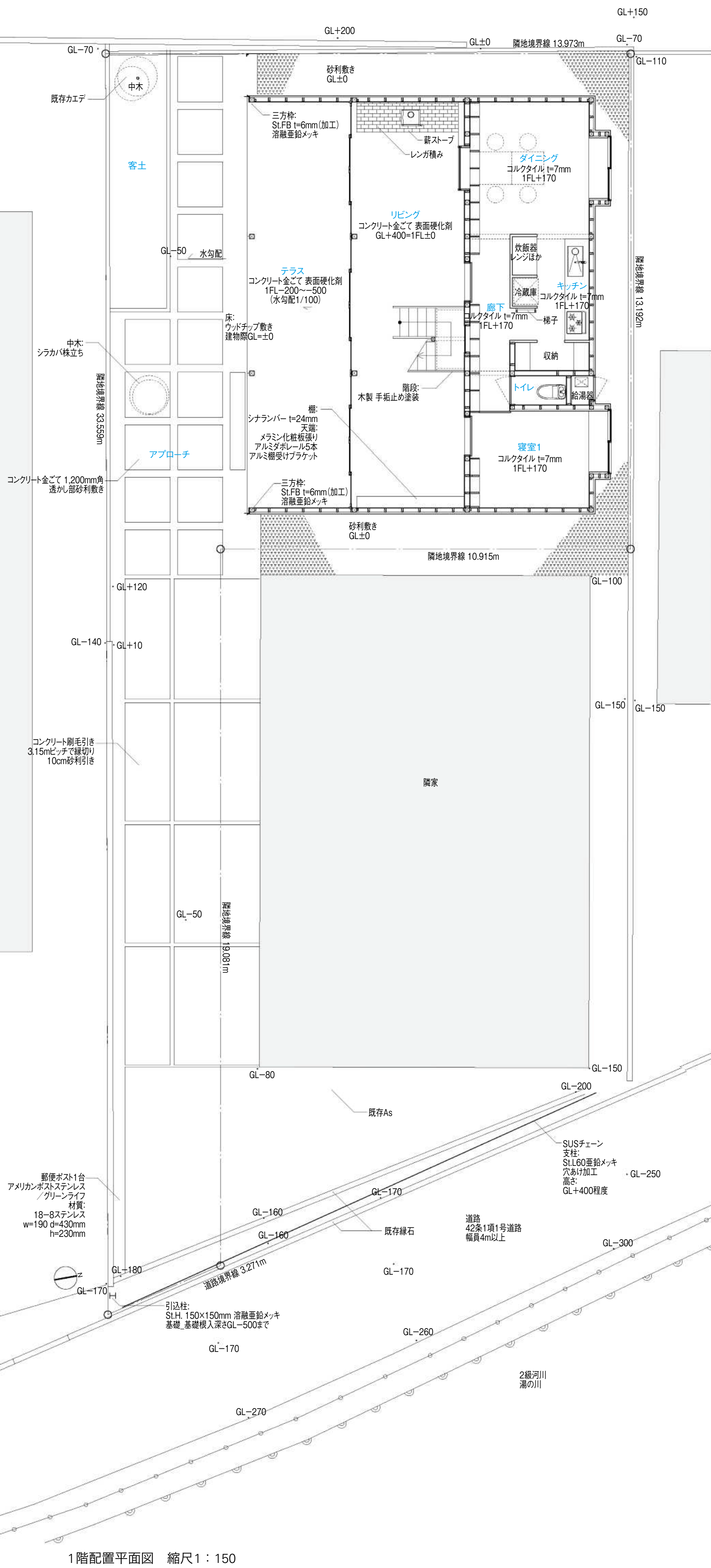
函館の家

House in Hakodate
北海道函館市

飯田善彦建築工房
IIDA ARCHISHIP STUDIO

テラス。木架構とブレースにより緩やかに領域を分けたアプローチからは400mm床レベルを上げた小上がりのような空間で、同じくコンクリート金ごて仕上げのリビングとフラットに連続する。建物内部は、北側の敷地奥に向かうほど気密性が高くなる。冬には冷え込みが強く降雪も多くなる気候において、高気密高断熱の生活空間を部分的に確保することでコストを抑えつつ快適な住環境を実現。

リビング上部のロフト。テラス側の複層ポリカーボネート板を介して淡い光が空間全体を覆う。一部天窓が設けられている。

リビング。夏は南側の全面開口を開けることでテラスと一体の開放的な土間空間となり、冬は外気に対して空気層となるバッファーとしても機能する。必要最小限の金具と部材で構成した木製階段は架構やロフト床と一体的なつくりとした。

函館の家

所在地／北海道函館市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計
飯田善彦建築工房　担当／飯田善彦　武田尚久
構造　金箱構造設計事務所　担当／金箱温春
望月泰宏

施工
山建中川組　担当／中川健
設備　光洋設備　担当／二瓶光洋
電気　松橋電機　担当／松橋芳一
外構・造園　高瀬環境緑化　担当／高瀬勝彦

構造・構法
主体構造・構法　木造軸組み
基礎　直接基礎（地盤改良）

規模
階数　地上2階
軒高 6,300mm　最高高さ 7,580mm
敷地面積　243.70m²
建築面積　98.61m²
（建蔽率40.47％　許容80.00％）
延床面積　152.78m²
（容積率62.70％　許容268.80％）
1階　98.61m²　2階　54.17m²

工程
設計期間　2019年10月〜2020年3月
工事期間　2020年6月〜2021年3月

敷地条件
商業地域　準防火地域　観光地区
道路幅員　東4.48m　駐車台数　2台

外部仕上げ
屋根・外壁／ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 竪はぜ葺き
開口部／住宅用アルミサッシ　アルミフロントサッシ
外構／コンクリート刷毛引き　砂利敷き

内部仕上げ
ダイニング　キッチン　寝室1・2　洗面所　トイレ　廊下
床／コルクタイル t=7mm（ADワールド）
壁／メジロカバ合板 t=5.5mm（空知単板工業）
天井／メジロカバ合板 t=4mm（空知単板工業）
厨房機器／Grad45（サンワカンパニー）

浴室
床／磁器質タイル t=9mm（LIXIL）
壁／FRP防水
天井／ヒバ羽目板 t=9mm
バスタブ／FRP防水

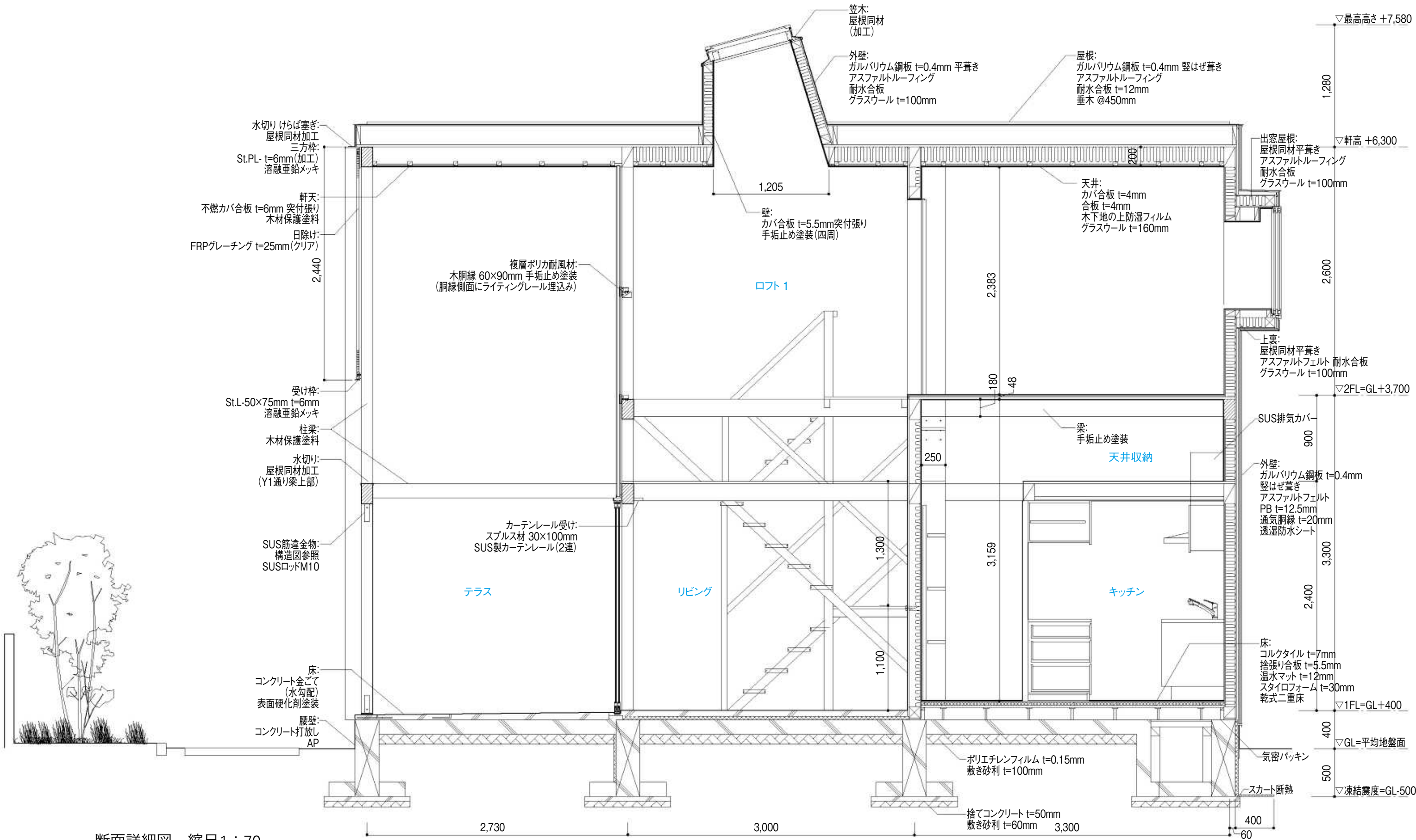
設備システム
空調　暖房方式／温泉利用床暖房
薪ストーブ
換気方式／第3種換気
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／佐々木育弥

寝室からダイニングを見通す。リビングと面する南側壁面は、全面が構造壁を兼ねた収納棚になっている。

北側近景。

断面詳細図　縮尺1：70

特集論考2

半居から北の栖へ

飯田善彦（建築家）

10年前に「半居」（『新建築』1004）を建てた時、それまで溜まっていた何かもやもやしたものを吐き出せた感じがあった。1スパン2.25m田の字平面の木造立体格子を2層重ね、合板とアクリル板とポリカーボネートで包んだ小さな塔状の小屋である。北琵琶湖の厳しい気候やとんでもなく強い植物や昆虫に翻弄されダメージを受けながらもなんとか生き続け、この小さな空間は今や身体に同化するほど馴染んでいるといってもいいだろう。ただ意外にも周りの風景に繋がるように大きく壁を取り払いアクリル板に置き換えたにも関わらず意識は中心に、しかも上にいつも向かっているように感じる。それは骨格のプロポーションやそれを構成する太めの角材、床壁天井を覆うOSB合板の面材、その中に交差するように挟んだ層状の床や上部に巡らせた半透明ポリカーボネートからの柔らかい光、トップライトなどそこに集められた物質のすべてが仕向ける空間の意志によって、向かわせられているという方が正しいのかもしれない。木造で塔をつくろう、しかもできるだけ安く、という始まりとその結果としての建築が過不足なく重なる感覚、集められた物質がつくる関係が空間を生み出すという感覚がここにいると確かに感じることができる。ずっと溜まっていたもやもやしたものは、たぶんこの、建築はモノであるという認識、すべての材料が重さ、手触り、も含め物質として確かな存在であって、それらをただ自分の意識や感覚に共鳴する空間に組み立てればいい、自分がつくりたいものをただつくる、そこにほかの何も介在しないという自由にほかならない。今や建築は観念、機能、環境性能、社会的関係性などさまざまな言説や規範に絡め取られ肥大化し過ぎている。本来僕たちの仕事は物質を操作して空間を生み出すという単純な構造の中にあることを確認したかった、ように思う。

「函館の家」を依頼されいろいろ可能性を組み立てる中で、住み手の生活にとって半居の転用がいいのではないか、と考え始めた。10年経って1度解体し新しい仕組みの中に住居として再生してみたい。できるだけ率直に彼らの生活に寄り添うことからまた異なる風景を生み出せるかもしれない。

住み手はホテル業を継ぐために東京から戻った若いファミリーである。縁あって耐震改修やリニューアルの相談に通い、一段落したところで住宅を依頼された。その間函館のいろいろを案内され小さな領域に実に多くの魅力的なアイテムがあってその一角に住宅が計画できることが単純に嬉しかった。函館全体の印象はどこかミステリアスである。そもそもその地形がおかしい。函館山に繋がる砂州に市街地ができているため東西に海がある。その中に港があり駅があり五稜郭があり競馬場があり温泉地があり背骨のように市電が走っている。その間をたくさんの新旧どこか歴史を感じさせる建築が粒子の如く建ち並んでいる。山に向かう坂道に残る和洋折衷の住宅など実に個性的で美しい。函館出身の小説家佐藤泰志の代表作『海炭市叙景』（1991年、集英社）の中に「（反対側の山から見ると）両側を海に縁どられて街は輪郭が鮮明すぎるほどだ、まぎれもない四月。海は光を反射させ波頭だけが白い。街は箱庭のように海上に浮かび、その先端に四百メートル足らずの山が見える。」という一節がある。まさしく箱庭のような街。もちろんそこには佐藤が描いたような寂れゆく街という一面や市井の人びとの必死の生活が隠れているはずなのだがなぜか漂白されたような穏やかで柔らかな空気に満たされているように感じられる。

敷地は温泉エリアの境界付近、住宅街の一画に位置している。通りから南西に引き込まれるいわゆる旗竿形状である。周囲を住宅やアパート、大学寮に囲まれていて些か閉塞感はあるものの南側の平屋が途切れ意外にも明るい光に満ちていた。あの函館特有の漂白されたような柔らか

ダイニング。出窓からテラスを見通す。

な光である。函館は寒いけどさほど雪は多くない。住み手のアウトドア嗜好もあって、四季を通して若い家族がいつでも外気に触れられる、柔らかな光がつくる陽だまりを楽しめるような家にしたいと考えた。

たまたま北海道建築賞の審査を頼まれ数年に1度北海道に点在する住宅を訪ねている。どの住宅も冬への備えはとてもよくできていて高気密高断熱の外壁に包まれて快適である。この頃はその外壁線をいろいろ工夫して複雑なデザインも多くなっているがやはり厳しい地域ほど内外がくっきりと分かれた窓の小さな家が多くなる。その点函館のある道南は、当然冬対策は必須であるにせよ、夏の快適な外気を享受することは十分可能に思われた。そこで、東南からの引き込みをそのまま延長してガーデンとし、そこに面する屋根付きの大きなテラス、その北側に接してエントランスとなる大きな土間空間、さらに北側最奥部に高気密高断熱の壁に包まれた生活空間を順次並べるというプランを考えた。分かりやすくガーデン、外域、夏域、冬域と名づけた4つの領域が並列する。奥に向かうほど外気の影響が薄れ気密性が高くなる。敷地に温泉が引き込まれていたことから、夏域、冬域にそれを利用した床暖房を施しているだけで空調はない。夏域に階段、ストーブ、学習スペースや作業テラスを設け、冬域は厨房、浴室、寝室に留めた。

半居は立体格子を積層し断面の中に屋上に至る棚状のスペースを上下に組み立てている。地面から上昇し最後は屋上で解放されるタテの図式である。函館の家はこれを横転してヨコに並べる図式に変換した。ここでは熱的にも機能上も空間としても特徴づけられた異なるスペースに、日々の生活の中でもっとも快適な場を捜しつつ自分で移動する。身体に合わせて空間の質を変えるのではなく、空間に合わせて身体を動かせばよい。家族それぞれ異なる身体が、同じところに集まったりそれぞれが快適と思う場所に分散したり、そんな状況が生まれるような仕組みでもある。これを大きな身振りではなく無理なくつくる。半居で試みたことのひとつである。この家が竣工してちょうど1年が経つ。つまり四季を一巡したことになる。その間家族はそれぞれどのような軌跡を描いたのか？　好きな場所はどこなのか？　今度訪れる時それを聞いてみたいと思う。

建築にまつわるもろもろは、とても複雑に厚く重くなっている。特に公共施設などデザインのすべてに関して理由を求められる。あるいは環境性能に関して日本中高気密高断熱を基準とする評価を求められる。四季があり湿気の多い日本でこの基準はおかしい、といっても状況は変わらない。たとえば、今手がけている学校施設は町の方針としてZEB（Net Zero Energy Building）を求められているが、この基準ではパッシブ的な装備は評価

撮影：新建築社写真部

「半居」外観。

の対象にならない。同じようにコロナ後、換気が重要視されているが、高気密とビル管法による換気量の両立は矛盾がありその克服は実に高コストである。住宅においても同様、コストにおける環境対応比率はどんどん膨れている。北海道で当たり前のことは沖縄では非常識なのに建築家としての判断が削られていく。CO_2削減も省エネも重要である。しかしながら本来そこに多くの知恵が注がれ多様な評価があるべきではないか。人が安息する場所としての住居は本来自由なのだ。どんなに寒くてもどんなに暑くてもそれを軽々とやり過ごしながら外気に接続したい、半居も函館の家もそのように考えつくられている。

この家が家族にとってそれぞれの生活の中でこれから起きるであろう多くの理不尽を受容しつつも、明日に向かうための心寛げる基盤としていつまでも生き続けてほしいと心から思う。栖とした所以である。

南側の外観夕景。テラス南側上部には、日除けにFRPグレーチングを設けている。

屋の家

Roof House
長野県北佐久郡軽井沢町

武井誠＋鍋島千恵／TNA
Makoto Takei＋Chie Nabeshima／TNA

北から見る全景。「輪の家」（本誌0707）の建つ敷地内にグランピングでの使用を想定した建築を建てる計画。寝室の機能に特化した母屋（左手前）と浴室を納めた離れ（母屋の上）のほか、外を居場所とするための外リビング（母屋手前）を基礎と一体となったコンクリートで設えている。

母屋。窓辺にベッドとソファ、テーブルをつくり付けている。架構は四隅に60mm角の鉄骨柱を立て、屋根は対角線上に25mmと6mm厚のフラットバーを組合せV字梁をつくり、そこに150×90mm（一部150×60mm）の無垢のスギ材の梁を架け渡す仕上げとしている。

敷地断面図　縮尺1：200

輪の家のおく

今や世界的な流行になっているグランピングという室内空間とキャンプを掛け合わせた宿泊のかたちは、遡ればアフリカなどのサファリにおいて富裕層向けに設えられたサファリロッジと同じ流れである。設備も何もない荒野の真ん中で、一夜を明かすことができるという非日常性が原点にある。

今から15年前、アウトドアキャンプのような直截的な自然との関わり合いが、まだそこまで流行していなかった頃、新しい別荘のかたちを提案するべく「輪の家」(本誌0707)を設計した。勾配屋根にデッキの張り出したいわゆる「別荘」という記号的な建築形態ではない、建物の骨格だけが森の中に浮遊し、建物の中に居ながらも森の中に居るかのように、人工物と自然物が渾然一体に見えるような透明感のある空間をつくった。

別荘のあり方も徐々に変わりつつある。仕事をする場所は都心からの距離とは無関係になり、空間を所有する意識の変化も手伝って、個人所有の建築が徐々に開かれ始めている。実際、輪の家もバケーションレンタルで、誰もが借りることのできる簡易宿所へ生まれ変わった。

そのような中、輪の家のオーナーから隣の敷地にもうひとつ建物を建てられないかという話をいただいた。360度の開放感ある視界を謳って建てた家の隣に、新たな建築が立ち上がるわけで、輪の家にとっての見慣れた風景を自分自身で描き変えなければならない難題を突きつけられた。一方で、時を経て、個別につくられた森の中の居場所が、建築を通して緩やかな関係性をもち、新たな風景をつくり出すことができるとても素晴らしい機会だとも思った。

地形と対話し寝床をつくる

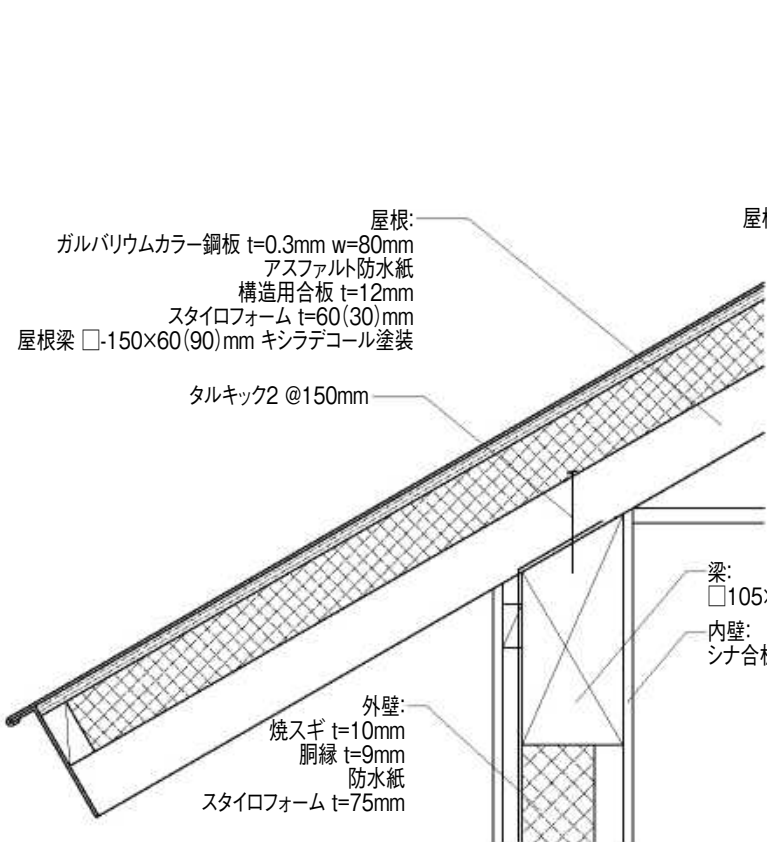
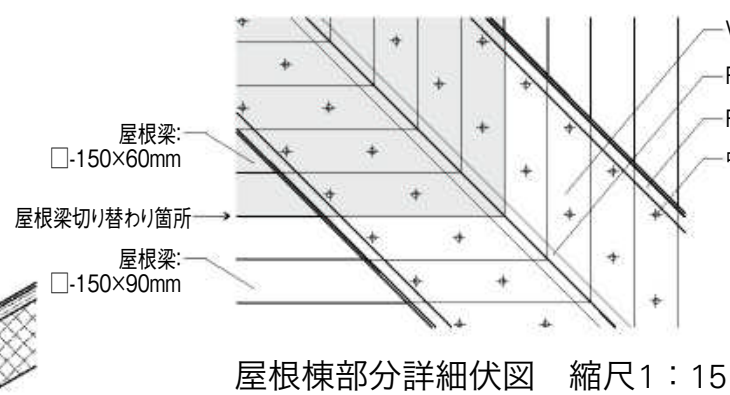
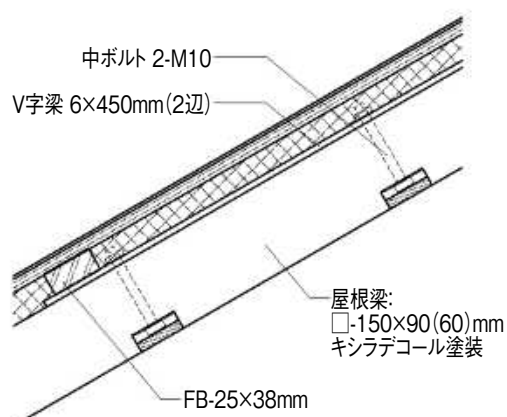
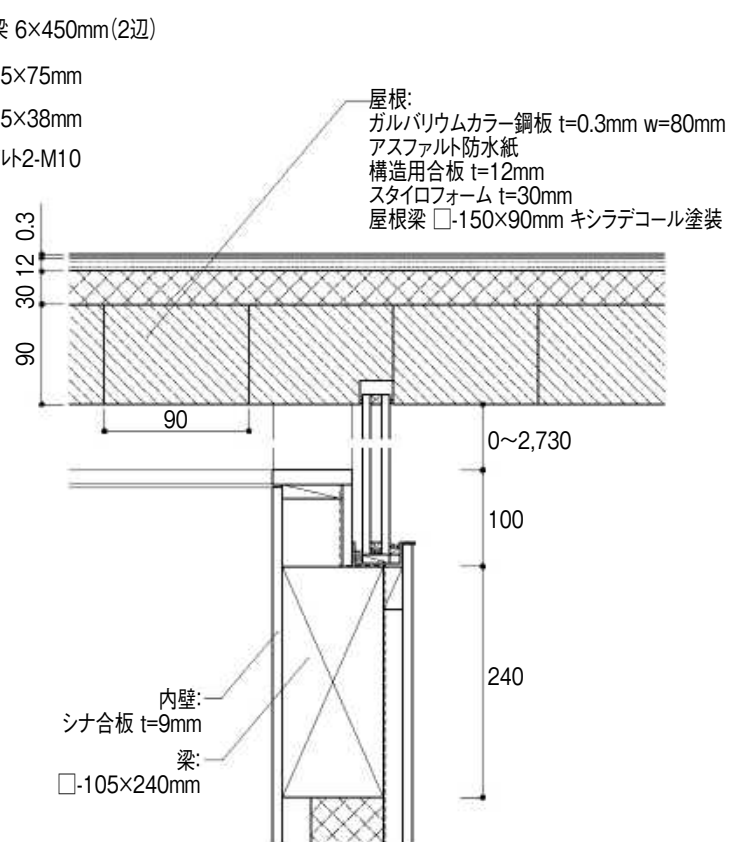
輪の家の配置は木々をかわすように計画され、建設時にはたった3本の木の伐採で済んだのは幸いであった。自分自身の家からの景色のための緑であることは当然であるが、近隣住民にとっての自然も同時に残すことになる。それが輪の家の隣に建築を考える時にも重要になってくる。隣地境界や道路境界からセットバックが決まる中で、キャンプにおいてテントの位置を決めるように、谷の傾斜や木々の配置を考慮し、建物の向きや位置を決めていった。

ところで、キャンプでのもっとも興味深く重要な体験は、寝床を探すことではないだろうか。自身の寝床、すなわちテントを張る場所を探す行為は、キャンプならではである。ひとつとして同じ地形や風景のない自然環境と対話しながら、もっとも自分に相応しい場所を見つけ出すという体験が面白いのだ。地面の高低差、水捌け、太陽の向き、周囲の木々の樹形、あらゆる自然のかたちを読み込みながら、テントの方向や入口を決めていく。それは人間が生活するうえでのとてもプリミティブな行為であり、建築行為の本質に繋がっている。

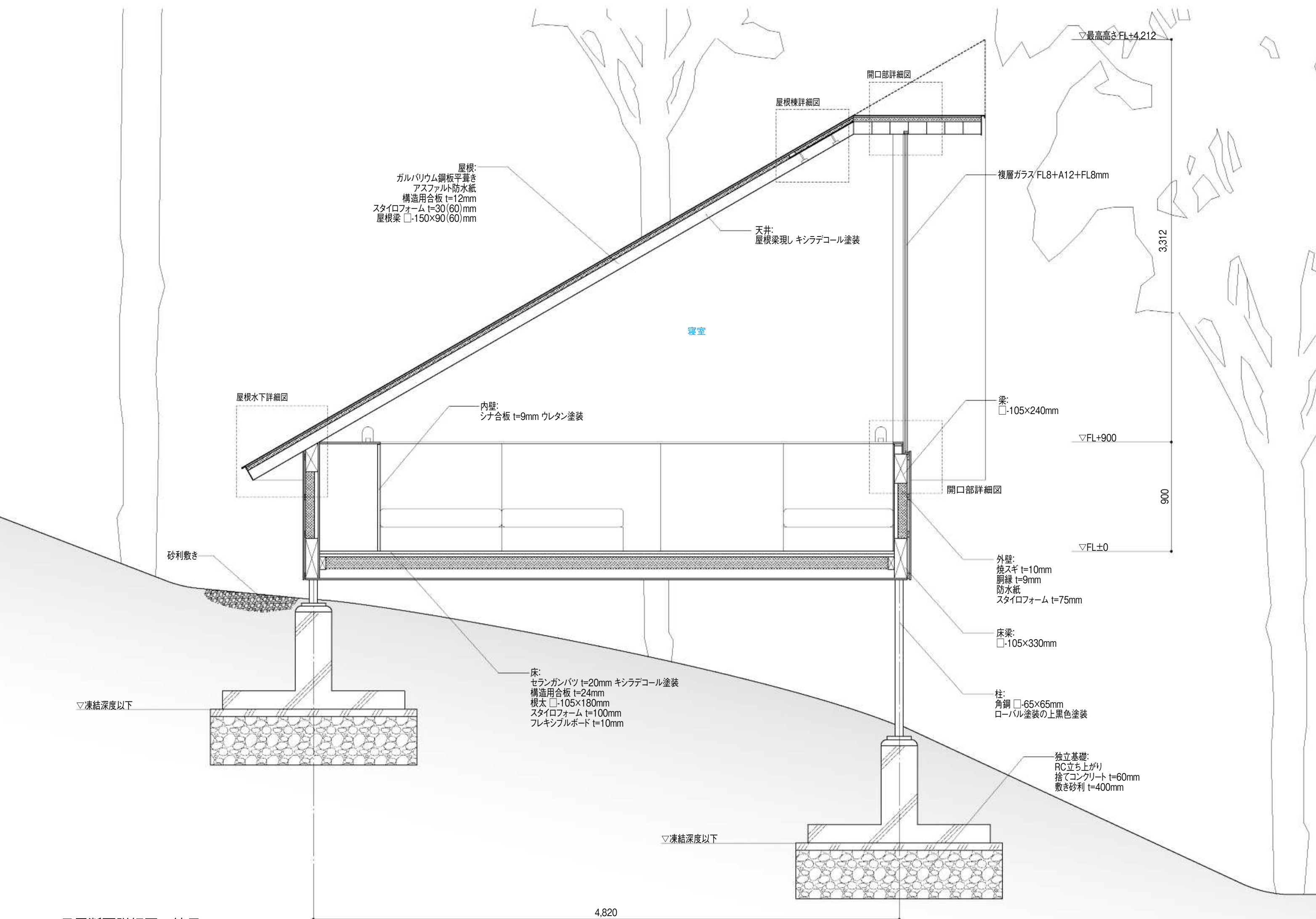
そして、改めてグランピングの過ごし方を整理する。「寝る」「風呂に入る」。このふたつの行為は軽井沢という自然環境では、外部から守られるべきだと感じた。それを最小限の大きさで室内化し、寝床を探すように点在させる。食事をしたり寛いだりする場所は、木々に囲われた外部のダイニング・リビングとして、日差しの強い時や雨天時にテントで覆うこともできるようにした。もっとも滞在時間の長い空間は寝る場所であり、母屋と呼んでいるが、できるだけキャンプの体験に近づけるべく、屋根はテントのように薄い存在としたい。折り曲がった板が頭上に軽く架かっている状況をイメージして無垢材を並べて木版状にし、鉄骨フレームに載せただけである。屋根の水下はテントが地面に水を落とす距離の如く低くして、内外の距離が視覚的にも体感的にも近くなるようにした。

「屋の家」の外観は輪の家との繋がりを考慮して決められたが、それぞれが自立した建築としての強度をもつことを意識した。そして隣り合う建築のかたちが互いの背景になりつつも、自然と対峙する人間が住処に求める建築の内部性と、その住処の内外の境界を広げる建築の外部性が共存する、新しい風景を生み出すことを意図した。敷地が建築であり、建築が敷地なのである。

（武井誠）

外リビングから母屋を見る。左手のコンクリートの跳ね出しがエントランス。

水下側部分断面詳細図　縮尺1：15

屋根棟部分詳細伏図　縮尺1：15

屋根棟部分断面詳細図　縮尺1：15

開口部部分断面詳細図　縮尺1：15

建て方風景。

提供：TNA

母屋断面詳細図　縮尺1：50

輪の家から東斜面を見る。敷地と一体となった母屋と離れがフレーミングされる。

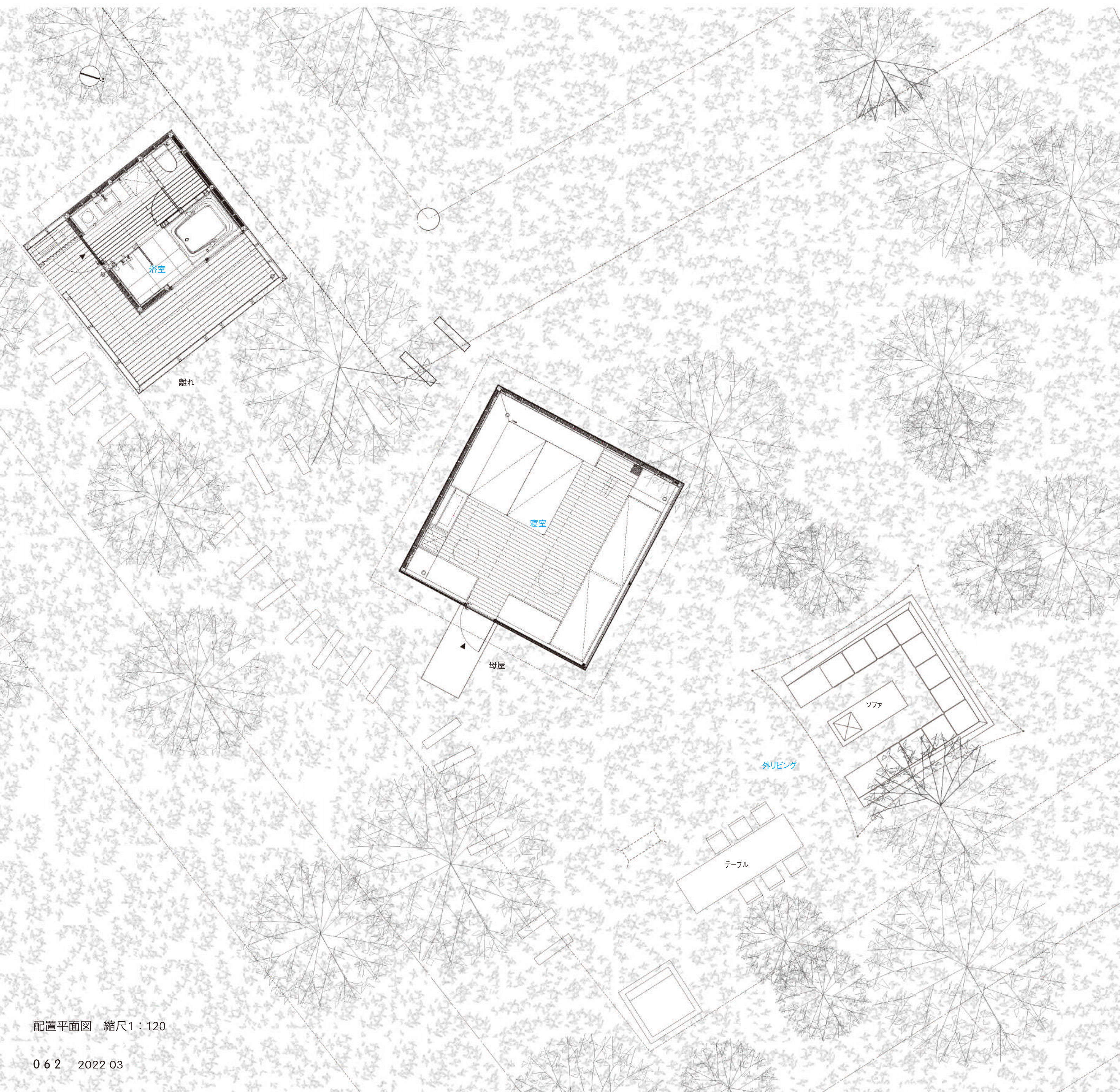
配置図　縮尺1：800

外リビング。右手のソファ部分には、制作のテントを張ると内部化も可能となる。
左手のコンクリートの箱は水場。

母屋。開口のペアガラスは溝を切って差し込むシンプルな仕上げとすることで、
純粋に屋根に切り取られる視界を確保する。

離れ。浴室と外部からの視線をかわすテラスが繋がっている。

南東から見る離れ。右下に母屋、左上に輪の家が見える。

配置平面図　縮尺1：120

屋の家

所在地／長野県北佐久郡軽井沢町
主要用途／週末住宅

設計
武井誠＋鍋島千恵／TNA
　担当／武井誠　鍋島千恵　丹羽達也
構造　佐藤淳構造設計事務所
　担当／佐藤淳　都筑碧　張耕嘉

施工
テズカ工務店　担当／松田英一郎
日昇ホーム　担当／角田佳彦
設備　第一公害プラント　担当／藤森哲志
電気　中澤電気工事　担当／中澤忠夫
外構・造園　日昇ホーム　担当／角田佳彦

構造・構法
主体構造・構法　木造一部鉄骨造
基礎　鉄筋コンクリート独立基礎

規模
階数　地上1階
軒高 4,713mm　最高高さ 5,225mm
敷地面積　1270.48m^2
建築面積　31.94m^2
　（建蔽率2.51% 許容20%）
延床面積　31.94m^2
　（容積率2.51% 許容20%）
　1階　31.94m^2

工程
設計期間　2021年1月〜8月
工事期間　2021年9月〜12月

敷地条件
法第22条地域
道路幅員　南西・北西6m　駐車台数　2台

外部仕上げ
屋根／ガルバリウム鋼板平葺き
外壁／焼スギ張り
開口部／複層ガラス

内部仕上げ
寝室
床／セランガンバツ t=20mm　キシラデコール
　黒色塗装
壁／シナ合板 t=9mm　ウレタン黒色塗装
天井／スギ材　キシラデコール黒色塗装
浴室
床・壁／タイル600mm角
天井／珪酸カルシウム板 t=9mm 黒色塗装
トイレ　洗面所
床／セランガンバツ t=20mm ウレタン黒色塗装
壁／シナ合板 t=6mm 2枚張り ウレタン黒色塗装
天井／珪酸カルシウム板 t=9mm 黒色塗装
照明／笠松電機　青山電機　山田照明
便器／LIXIL
水栓金物／TOTO　サンワカンパニー
浴槽／ウェルランド
空調機器／パナソニック

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／床下換気扇
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／浄化槽＋敷地内浸透
給湯　給湯方式／石油給湯器

撮影／新建築社写真部

北から見る夜景。

DLTHUT

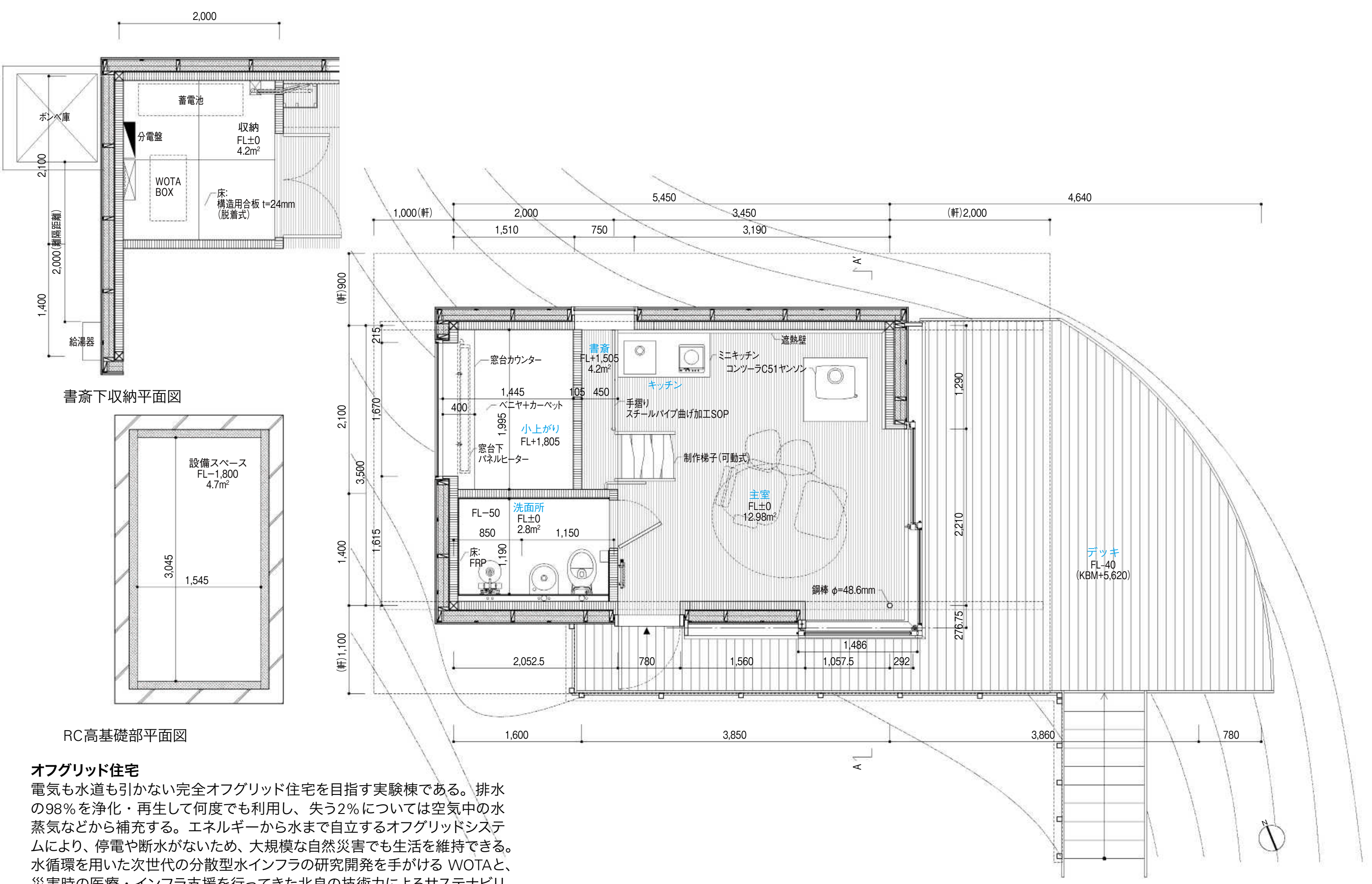
長野県北佐久郡軽井沢町

山中祐一郎
Yuichi-ro Yamanaka

東側遠景。木ダボで製材可能な積層材であるスギDLTを構造材兼仕上げ材として使用した小屋。電気も水道も引かない完全オフグリッドを目指す実験棟で、屋根にはソーラーパネルが設置され、RC高基礎部にはオフグリッドを支える特殊な設備機器の納まる地下ピットがある。

主室。キッチン回りの壁以外の仕上げはすべてDLTを使用。左手の開口部付近に木ダボが見える。ふたりが滞在できるようになっており、電気は1日約11.8kWhを発電。水道は約300Lの水が循環している。

書斎下収納平面図

RC高基礎部平面図

平面図　縮尺1：80

オフグリッド住宅

電気も水道も引かない完全オフグリッド住宅を目指す実験棟である。排水の98％を浄化・再生して何度でも利用し、失う2％については空気中の水蒸気などから補充する。エネルギーから水まで自立するオフグリッドシステムにより、停電や断水がないため、大規模な自然災害でも生活を維持できる。水循環を用いた次世代の分散型水インフラの研究開発を手がけるWOTAと、災害時の医療・インフラ支援を行ってきた北良の技術力によるサステナビリティへの挑戦であり、そのために必要な設備スペースをRC高基礎部分に設けている。（山中）

デッキから軒下を見通す。

DLTで建築の地産地消を目指す

設計や施工の合理性追求から生まれた集成材やプレカット技術は、生物である木材の本質を工業製品的安定性に向けて矯正する志向と、それをCADCAMで精密に加工し金物でセットしていく工法を推し進めてきた。しかもその材料の大半は、安価な輸入材に依存したものだ。つまり外材を、集成材工場、プレカット工場と引き回しながら遠く離れた建築現場でも納入するということが、日本の木造建築の進化の姿だった。

このプロジェクトは、地方自治体の経済・インフラ・エネルギーの自立を支援する事業家である建主が、電気も水道も引かない完全オフグリッドを目指した実験住宅であり、地域のサステナビリティのために踏み出す具体的な1歩となるもの。その挑戦を支える建築としてどんなものが相応しいかを思考していた折、施工会社である長谷萬から紹介されたのが、グループ会社長谷川萬治商店の「DLT」だった。DLT（Dowel Laminated Timber）は木ダボで接合するだけの素朴な積層材。丸身などの低質材や端材を有効利用でき、かつ、ダボ継ぎというローテクでパネルを構成するので特別な機械にも頼らず、当地の製材所でつくることができる。これまで床パネルや壁パネルとしての採用事例はあったが、スラブとしての耐力よりも、木端が連続するその豊かな表情や木のカタマリならではの存在感、調湿・蓄熱・放射・芳香などが居住空間を構成する要素になることの方が魅力的だった。それゆえ構造兼仕上げ材として、全面的なDLT採用を提案した。

太陽光発電のために屋根は南面片流れとし、その下の空間の有効利用を考えた。オフグリッドを支える特殊な設備機器の納まる地下ピット（RC高基礎部）を始め、そこと最短で直結する水回りと、分電盤やコントローラも納める1階の収納部、さらに、高くなる天井の下にロフトを設けて書斎兼寝床とした。西側の大きなピクチャーウィンドウは風景を切り取る。そして反対に軒の低くなる方向には、広い開口とデッキを設けて外部への拡がりを得ている。

DLTの建築全体への本格採用は日本初の試み。前例もなくノウハウからつくる必要があり、建物として成立させるために大変な労力が注がれた。木構造を担当頂いた法政大学の宮田雄二郎氏や、施工技術開発の長谷萬、現場の方がたの創意工夫なしではあり得なかった小さなビッグプロジェクト。超ハイテクを納める「汎ローテク」な器だ。今回生まれたのは小さな小屋だが、開発したノウハウが今後共有されることが、日本における「建築の地産地消」を進める新たな選択肢となることを願っている。　　（山中祐一郎）

小上がりから主室を見下ろす。

屋根のDLTがそのまま天井の仕上げになっている。

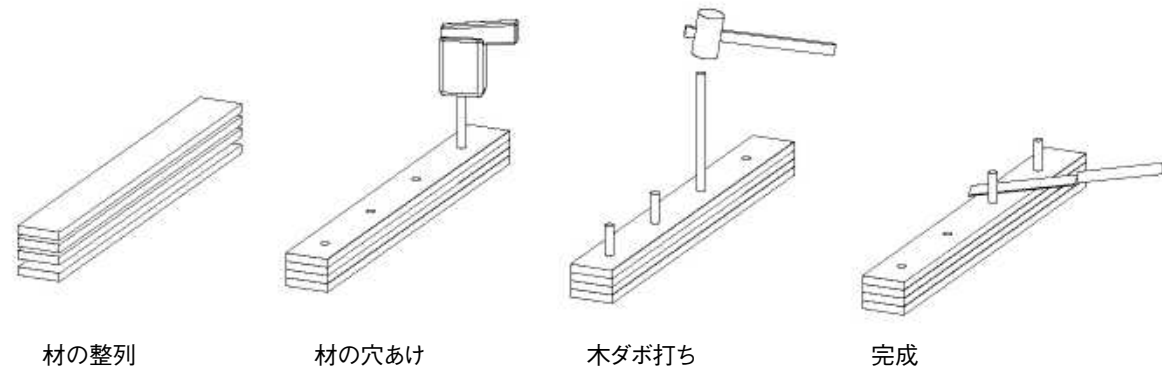
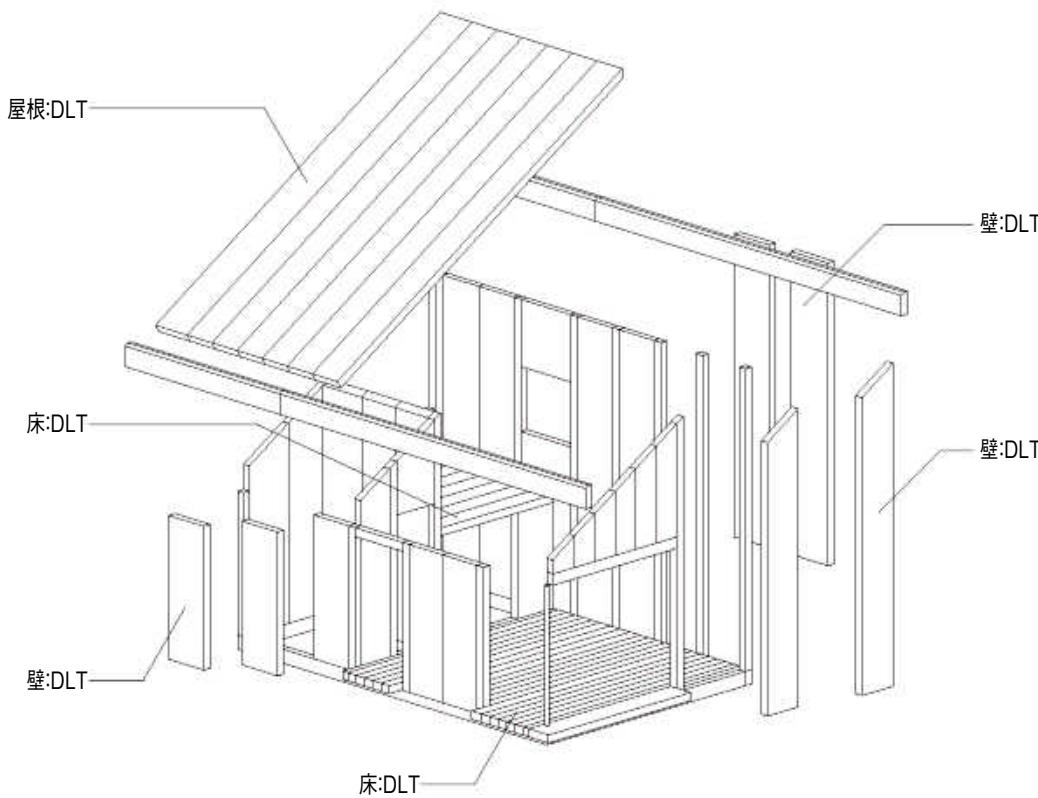
2点提供：長谷萬

木ダボを打ち込みDLTを製材している様子。

施工中の様子。桁の角を取り、そこにつくった突起に噛ませることで屋根を架けている。

材の整列　材の穴あけ　木ダボ打ち　完成

DLTの製材工程

屋根:DLT
壁:DLT
床:DLT
壁:DLT
壁:DLT
床:DLT

アイソメトリック

木ダボで接合する積層材DLT

DLT（Dowel Laminated Timber）は木ダボで接合した積層材で、ログハウスやCLT建築のように木のカタマリ（マスティンバー）で構成する木質構造のひとつ。丸身などの低質材や端材を有効利用できることに加え、接着剤もプレス機も使わず、ダボ継ぎというローテクでパネルを構成するので各生産地にある製材所でつくることができる。伐採期を迎えたスギの活用が期待されるが、スギ以外の木材でも製材が可能である。（山中）

吹上防止用　シネジックP6-185
屋根DLTパネル1枚に対して2本打ち
桁梁105×300mm
構造用合板 t=12mm
帯金物
出隅柱 105×105mm

屋根部分断面詳細図　縮尺1：20

▽FL+5,201
▽FL+4,250
▽書斎FL =FL+1,505
▽1FL=GL+2,160
▽設計GL±0
913
2,745
1,505
2,160
1,400
2,100
1,000
1,750
1,750
10
6

板金2
板金1（ケラバ包み）
板金1（棟包み）
板金2

福杉ベベル
縦胴縁 t=18mm
透湿防水シート
受け桟（横）t=65mm/断熱材カネライトフォーム t=65mm
受け算（縦）t=65mm/断熱材カネライトフォーム t=65mm
防水シート
構造用合板 t=12mm
スギDLT t=105mm

ガルバリウム鋼板 AT2段式（横葺き）
アスファルトルーフィング t=1.0mm
構造用合板 t=12mm
通気層 t=25mm
垂木（縦） t=90mm/断熱材 カネライトフォーム t=65mm
垂木（横） t=65mm/断熱材 カネライトフォーム t=65mm
防水シート
構造用合板 t=12mm
スギDLT t=105mm

玄関ドア
書斎
主室

スギDLT t=105mm
構造用合板 t=9mm
防水シート
根太 t=60mm/断熱材カネライトフォーム t=60mm
根太 t=75mm/断熱材カネライトフォーム t=60mm
通気層 t=15mm
アルミスパンドレル

H鋼125×125mm
下部鉛直ブレース

土間コンクリート

AA'断面詳細図　縮尺1：50

DLTHUT

所在地／長野県北佐久郡軽井沢町
主要用途／住宅（実験棟）

設計
S.O.Y.建築環境研究所
担当／山中祐一郎　菊地ゆかり
構造　木構造：宮田構造設計事務所
担当／宮田雄二郎　高橋志元
基礎：レン構造設計事務所
担当／二連木清
設備　北良　担当／笠井健
小田島雄貴＋WOTA
電気　北良　担当／笠井健　小田島雄貴

施工
長谷萬　担当／小林辰美
設備　北良　担当／菊池誠　菊池孝樹
佐々木里奈＋WOTA
電気　北良　担当／四戸啓仁

構造・構法
主体構造・構法　木造軸組工法
基礎　独立基礎　一部べた基礎

規模
階数　地上1階
軒高 5,719mm　最高高さ 6,670mm
敷地面積　1,074.87m²
建築面積　23.27m²
延床面積　19.98m²
（容積率1.86%　許容20%軽井沢町自然保護対策要綱による）
1階　19.98m²

工程
設計期間　2021年1月〜9月
工事期間　2021年9月〜12月

敷地条件
地域地区　法第22条区域　浅間山麗景観育

デッキから南側を見る。軒の出は2,000mm。

成重点地域　絶対高さ10m以下（55条）
道路幅員　南6.74m　　駐車台数　1台

外部仕上げ

屋根／ガルバリウム鋼板横葺き　一部太陽光パネル（パナソニック）
外壁／福杉ベベルサイディング張り（プレイリーホームズ）
開口部／木製サッシ（TRANS）
その他／サイプレスデッキ材（プレイリーホームズ）

内部仕上げ

キッチン

床・天井／スギDLT（長谷川萬治商店）塗装仕上げ（オスモカラー）
壁／珪酸カルシウム板塗装仕上げ　一部DLT塗装仕上げ（オスモカラー）
厨房機器／
IHコンロ／サンワカンパニー KK08081
換気扇（シェード）レンジフード／ TOOLBOX KB-KC017-02-G141
キッチンカウンターシンク排水器具一式／サンワカンパニー モルタナ

洗面所

床・壁／ FRP　一部スギDLT塗装仕上げ（オスモカラー）
天井／スギDLT（長谷川萬治商店）　塗装仕上げ（オスモカラー）
便器／ SFA C11LVSE-100
洗面カウンター／ Tform FAA70-0101
洗面用水栓金物／ Tform FHT73-2201-F01
空調機器／三菱電機 V-12PFL7　Chrester HEAT-B-101B

主室

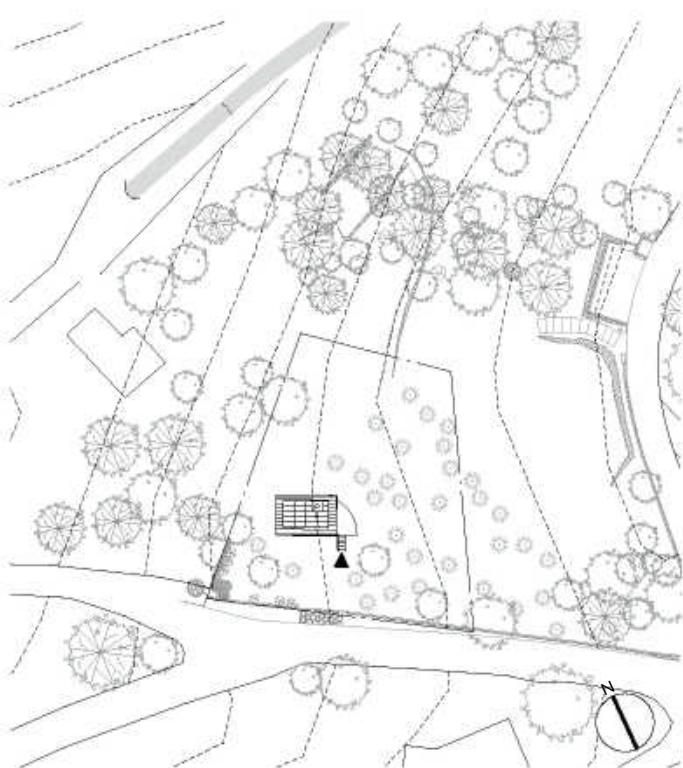
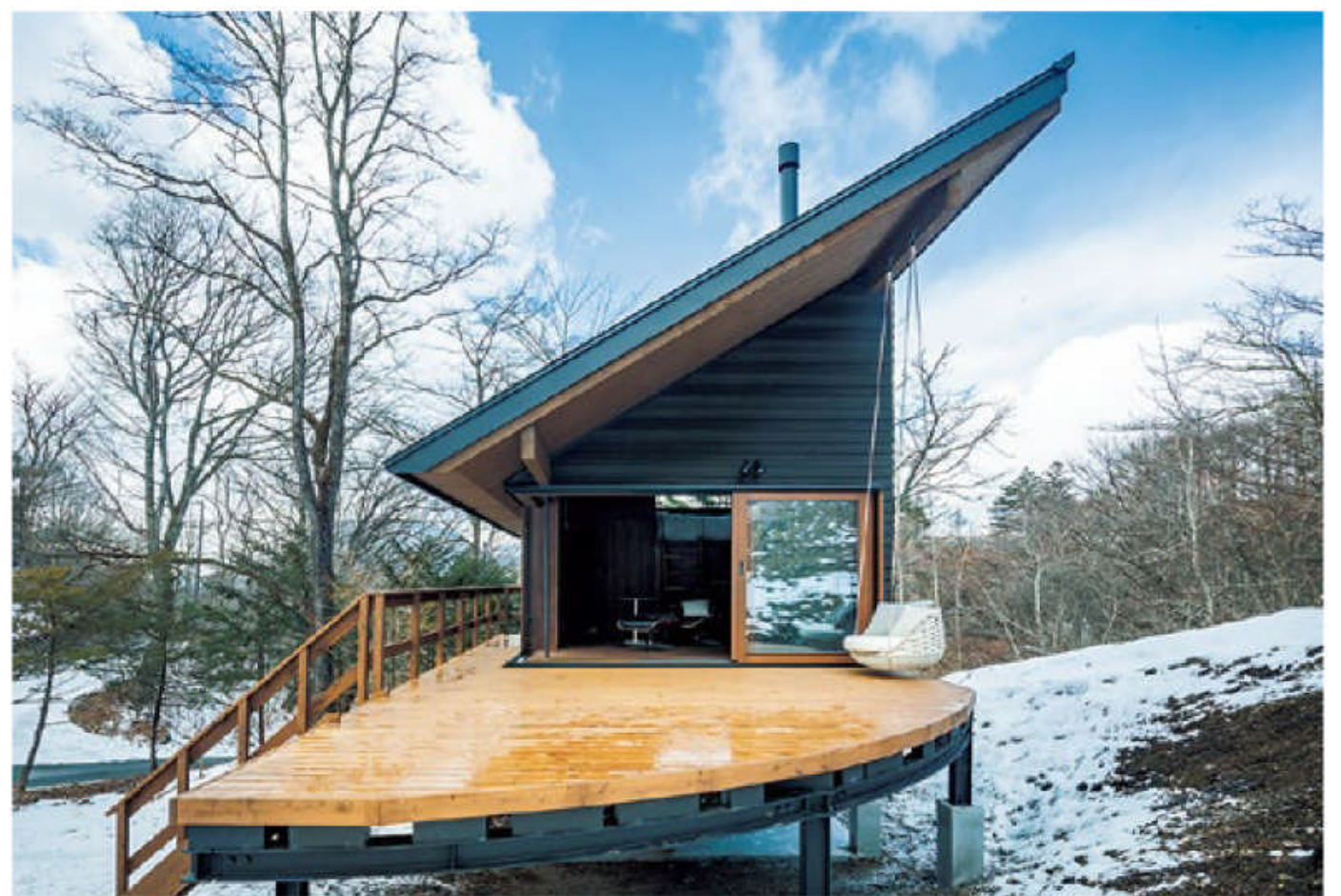
床・天井／スギDLT（長谷川萬治商店）　塗装仕上げ（オスモカラー）
壁／スギDLT（長谷川萬治商店）　塗装仕上げ（オスモカラー）　一部珪酸カルシウム板塗装仕上げ
家具／イームズラウンジチェア&オットマン+ミクシット・セラミック・サイドテーブル（ザ・コンランショップ）

書斎

床／スギDLT塗装仕上げ（オスモカラー）
一部カーペット（サンゲツ）
壁・天井／スギDLT塗装仕上げ（オスモカラー）

設備システム

空調　暖房方式／輻射式
冷房方式／なし
換気方式／第3種換気
その他／薪ストーブ（メトス）　パネルヒータ（リンナイ）　赤外線ヒーター（Chrester）
給排水　給排水方式／オフグリッド設備
WOTA BOX（WOTA）
給湯方式／瞬間式

撮影／新建築社写真部

配置図　縮尺1：2,000

東側全景。6寸勾配の片流れ屋根は、105×300mmのふたつの桁に架けている。

南側全景。高床は地面から2,160mm上がっている。

光のテント

Tent of Light
長野県諏訪郡

彦根アンドレア
Andrea Hikone

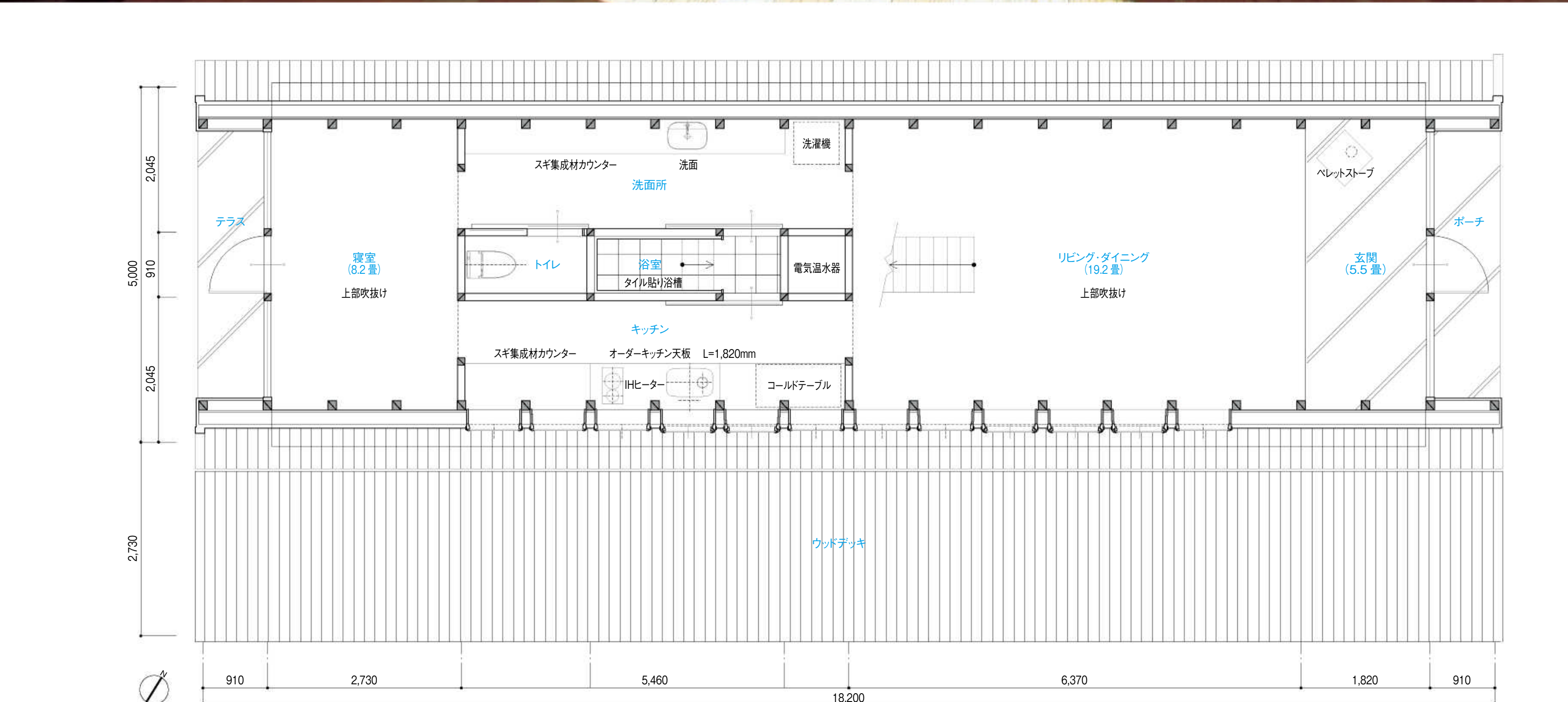
セカンドハウス兼グランピング施設のメイン棟。断熱性能を上げ、太陽光パネルでも電力を賄えるようにすることで、オフグリッドに近づけている。将来的にはメイン棟をモデルに、小型のAフレームの小屋を数棟建てていく予定。

リビング・ダイニングから室内を見通す。910mmピッチで120mm角の梁が連続する。左の開口上部に太陽光パネルが設置される。天井高は頂部で約6m。

テラス
寝室
(8.2畳)
上部吹抜け
スギ集成材カウンター
洗面
洗濯機
洗面所
トイレ
浴室
タイル貼り浴槽
電気温水器
キッチン
スギ集成材カウンター
オーダーキッチン天板　L=1,820mm
IHヒーター
コールドテーブル
リビング・ダイニング
(19.2畳)
上部吹抜け
ペレットストーブ
玄関
(5.5畳)
ポーチ
ウッドデッキ

2,045
910
2,045
5,000
2,730

910　2,730　5,460　6,370　1,820　910
18,200

平面図　縮尺1：100

キッチン。

玄関方向を見る。土間に設置したペレットストーブで暖房を賄う。

自然を享受し自立する地域の拠点

最寄り駅から車で8分、山を上がっていくと突然テントのような建物が目に入る。

自転車の山下りをする途中で、この土地を見つけた建主は、最初にここに太陽光発電所をつくろうとしたが、近隣のことも考え、グランピングサイトをつくることにした。美しい山の風景を多くの人が楽しめ、地域の人も集まる場所になるよう計画した。

「できるだけオフグリッドに近い建物で、面白いかたちを」と要望され、単純に木のテントをつくり三角のガラス面から山を望み、大きなデッキで屋根に寄り掛かり日向で寛ぐことを考えた。

Aフレームは経済的で、南向きの屋根＝壁面は光を受ける面となる。ソーラーパネルを設置し、必要なエネルギーをつくり、南窓からの太陽熱で建物を温めることにした。テラスでは休みながら、ぽかぽかと体に太陽の光を浴びることもできる。東側の三角窓から、夕日に照らされてオレンジ色に染まった八ヶ岳が、西側の窓から朝日で染められた山が目に入る。ロフトの北の窓からは夜、寝ながら星空が見える。

200mmのネオマフォーム断熱の性能により熱は建物に残り、厳しい冬の寒さでも、ペレットストーブだけで快適に過ごすことができる。電気は太陽光パネルで発電し、オール電化としているため、室外機、ガスボンベなどの設備は不要となる。よってメンテナンスの必要もなく、管理もしやすい。近くに素晴らしい温泉がたくさんあるため浴室はコンパクトに設え、3段降りたところに設置したシャワーを主に、水を溜めると浴槽にもなる。十和田石とヒバ材で仕上げている。

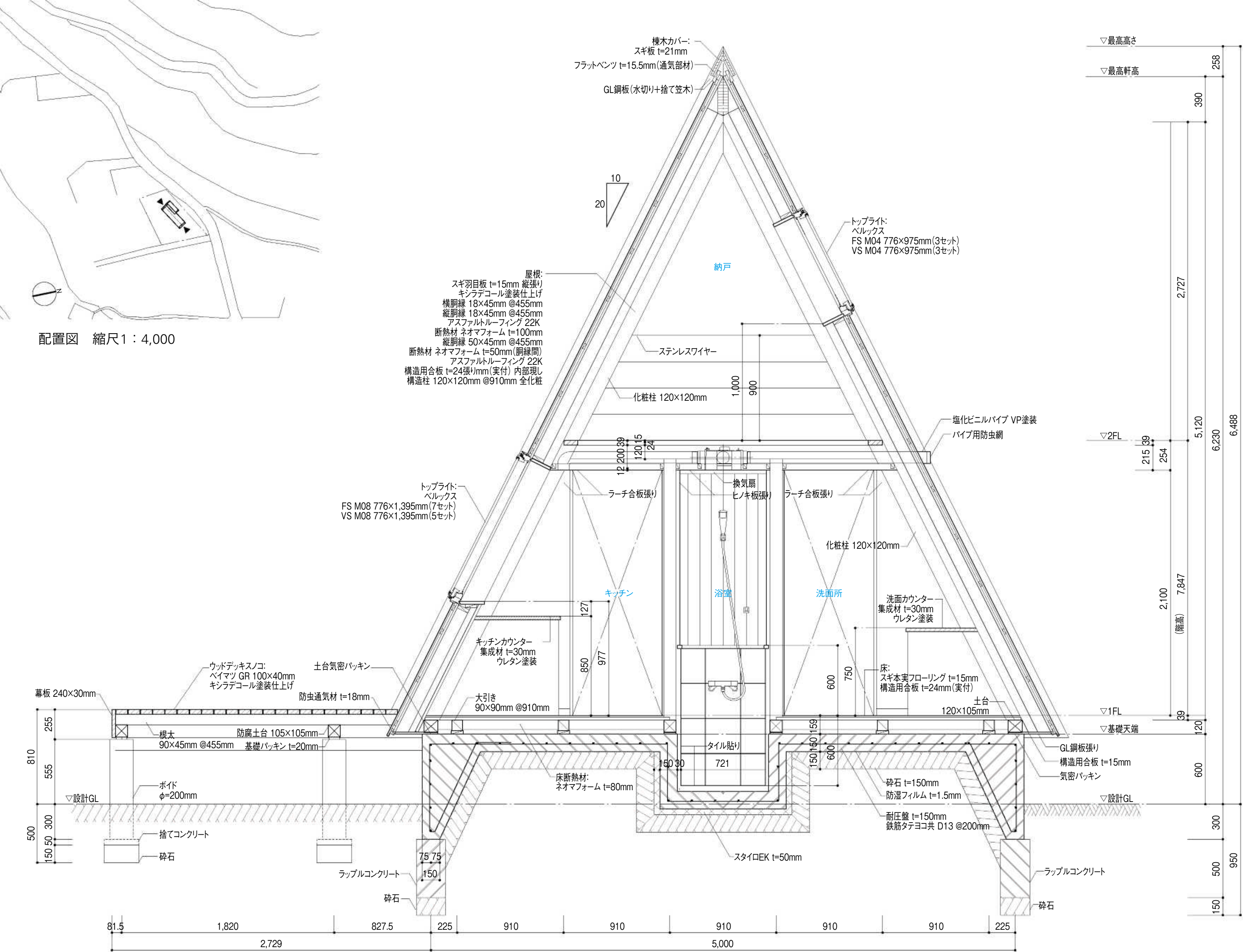
またキッチンに立つと、斜めの窓の前に森が広がり、デッキの人と会話も楽しめる。シンプルなスギ板張りの屋根／外壁がタープのように建物をくるんで、デッキまでひと続きに繋がる。

自然に優しく、経年変化を楽しむことができ、肌触りのよい木材でできたこの建物は、グランピングの中心になる光のテントのようである。

（彦根アンドレア）

配置図　縮尺1：4,000

断面詳細図　縮尺1：50

南西から見る。屋根と連続するデッキの奥行きは約2.5m。

光のテント
所在地／長野県諏訪郡
主要用途／セカンドハウス兼グランピング施設
家族構成／夫婦＋子供2人

設計
彦根建築設計事務所　担当／彦根アンドレア
構造　スワテック建設
設備・電気・外構・造園　彦根建築設計事務所　担当／彦根アンドレア
施工
設備　有賀水道　担当／佐々木聖一
電気　都電設　担当／堀内治
構造・構法
主体構造・構法　木造
基礎　べた基礎
規模
階数　地上1階＋ロフト
軒高 6,230mm　最高高さ 6,488mm
敷地面積　927.35m²
建築面積　91.00m²
（建蔽率9.81％ 許容60%）
延床面積　97.00m²
（容積率10.35% 許容200%）
1階　81m²　2階　15m²
工程
設計期間　2019年3月～7月
工事期間　2021年4月～10月
敷地条件
道路幅員　東6～7m　駐車台数　7台
外部仕上げ
屋根・外壁／スギ羽目板 t=15mm キシラデコール塗装仕上げ（カネサダ横尾木工所）
開口部／トリプルグラス（制作）　トップライト（ベルックス）
外構／デッキ
内部仕上げ
リビング　キッチン
床／スギ板張り（カネサダ横尾木工所）
壁・天井／構造用合板
厨房機器／IHコンロ
換気扇（シェード）／制作
家具／天板　集成材
照明／ライティングダクト
建築金物／
シンク水栓金物／SUSシンク（制作）　シングルレバーキッチン混合栓（GROHE JP300001）
浴室
床／十和田石
壁・天井／ヒノキ板
照明／ダウンライト
建築金物／施錠金物かんぬき
バスタブ／制作
シャワー水栓金物／GROHE
トイレ　洗面所
床／スギ板張り（カネサダ横尾木工所）
壁・天井／構造用合板
照明／ダウンライト
建築金物／施錠金物かんぬき
便器／TOTO ネオレストDH1 CES9565HW
洗面カウンター／制作　集成剤
洗面用水栓金物／FLAMINA Mono AAA70-1104
設備システム
空調　キッチン・洗面所廊下のみ床暖房

撮影／彦根藍矢

東から見る夜景。

SANU 2nd Home 八ヶ岳1st

SANU 2nd Home Yatsugatake1st
山梨県北杜市

ADX

南西側から見る。セカンドホームのサブスクリプションサービスを行うSANUが運営するキャビン。解体・移動が可能で、解体後には再利用できる。同じデザインのキャビンが今後各地に展開していく。

ダイニングから見る。天井高は約4,000mm。木材はすべて岩手県釜石地方森林組合から調達。部材の多くをユニット化・データ管理しており、約2カ月で施工している。

スタディから見る。曲面は上下に溝をつくり倹飩式で建具を嵌めている。 上部の材は耐震振れ止め。

資源を繋ぐことを踏まえた住宅の探求

建物は一般的に数十年、それ以上の耐久性をもつが、その寿命を全うできずに終わることの方が多いだろう。建築が短命に終わる理由は、社会背景や、個人の生活、ビジネスの環境変化による用途の盛衰などさまざまだ。建築とは時代を象徴する物差しであるともいえる。われわれ建築に携わる者はそんなことに目をつむって、ひとつひとつの要件とこれからの建築のあり方に向けて、相当なエネルギーと知恵をかけて、もっとも適した建築を生み出す。

このSANU 2nd Homeでは、同じ設計のものをつくり続けている。もちろん1棟をつくるごとに発見や学びがあり、設計・施工の細やかなアップデートは付きものだが、利用者にとって見える範囲では基本的に「同じかたちのキャビン」だ。いつも同じ場所にある電気のスイッチや食器は、サブスクリプション会員としてキャビンに通う人びとにとって通い慣れた安心感と居心地のよさをもたらす。そして、建築が主役にならないからこそ、窓の先の自然の景色の変化に敏感になる。キャビンの特徴でもある曲面壁は、幅はぎ材を両面からスリットを入れ「ひねる」ことによって3次曲面をつくり、その滑らかな曲線に導かれて、窓の外の自然へ目を向ける時間を意図的に増やしている。また、キャビンには釘やビスを極力使用せず、ほとんどのパーツがふすまや障子のように簡単に取り外し可能だ。そうすることで50年後の未来にキャビンが解体された時、資源としてまた新たな使い方を考えることができる。建築は重たいものであるからこそ、われわれの世代が何を未来に託すかが重要だ。

このキャビンは現在長野県白樺湖と山梨県八ヶ岳に完成しているが、これから日本中の山や海、湖などの自然豊かな立地に積極的に展開していく計画で、今年の春頃までに新たに5拠点45棟の完成を予定している。

この同じものをつくること、そして建築が主役にならないことは、調達、設計・施工、運用、そして移設や解体という建築のライフサイクル全体を通して、必ず訪れる建築物の終焉を自然の時間軸に合わせて計画することに繋がる。今日でき上がった建築をどのようなかたちで未来の世代に渡すのか、どう資源として残せるのかを探求することが、今必要なのではないかと考えている。　　　　　　　　　　（安齋好太郎）

ダイニング、キッチンを見る。家具もすべて国産の木材を使用。キッチンにはレンジやトースター、コーヒードリッパーなどが揃っており、地域の食材を自分たちで楽しむことができる。

ベッドルームから玄関側を見る。キャビンの内部は完全には仕切られず、曲面の間仕切りによって緩やかに繋がっている。

外壁(斜め壁):スギ無垢板 t=45mm 無塗装
上下引掛け金物付き
(Zクリップ)ソリテックス QUATTRO
スギ合板 910×1,820mm t=15mm 横張り @910mm
柱(溝加工)150×150mm @1,820mm
横架材 120×45mm @1,820mm
断熱材 ネオマフォーム t=100mm

屋根:テント
スギ合板 t=12mm
垂木 □=120×120×5,468mm

曲面壁:幅はぎ材(スリッド加工) t=30mm

軒天井:スギ合板 t=9mm

天井:スギ合板 910×1,820mm t=12mm 保護塗料塗装
化粧梁(溝加工) 90×90mm @910mm
梁:多雪地域仕様 240mm
※一般地仕様は180mm+60mm パッキン
ネオマフォーム t=100mm

外壁(妻壁):スギ無垢板 t=45mm 無塗装
上下引掛け金物付き
(イナズマプレートPS)
ソリテックス QUATTRO
スギ合板 910×1,820 t=9mm
横張り @1,820mm ビス止め
柱(溝加工)150×150mm @1,820mm
横架材 150×150mm
ネオマフォーム t=100mm

ウッドデッキ:105×105mm
目透かし 15mm
L=1,820mm
土台:ヒノキ 105×105mm @750mm

斜め壁:パーティクルボード 910×1,682mm カット
t=12mm 雇実加工 @910mm 横張り

床:パーティクルボード
t=10mm 突付け 保護塗装
スギ合板 t=24mm
上土台 H150×W120mm @1,820mm
ネオマフォーム t=100mm
(多雪地域は寸法変更の可能性あり)
スギ合板 t=9mm
下土台 90×90mm or 下土台 90×120mm
パッキン t=35mm

垂直壁:パーティクルボード
910×1,820mm t=12mm
雇実加工
@910mm 横張り 保護塗料塗装

長手断面詳細パース

地方の森林組合と環境保全を支える国産木材の活用

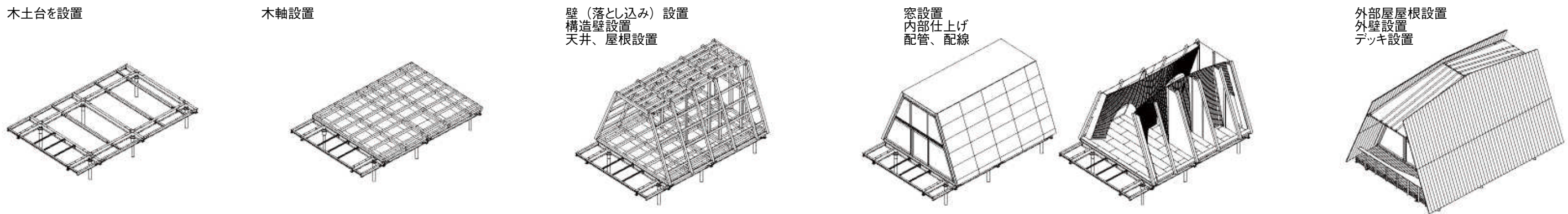
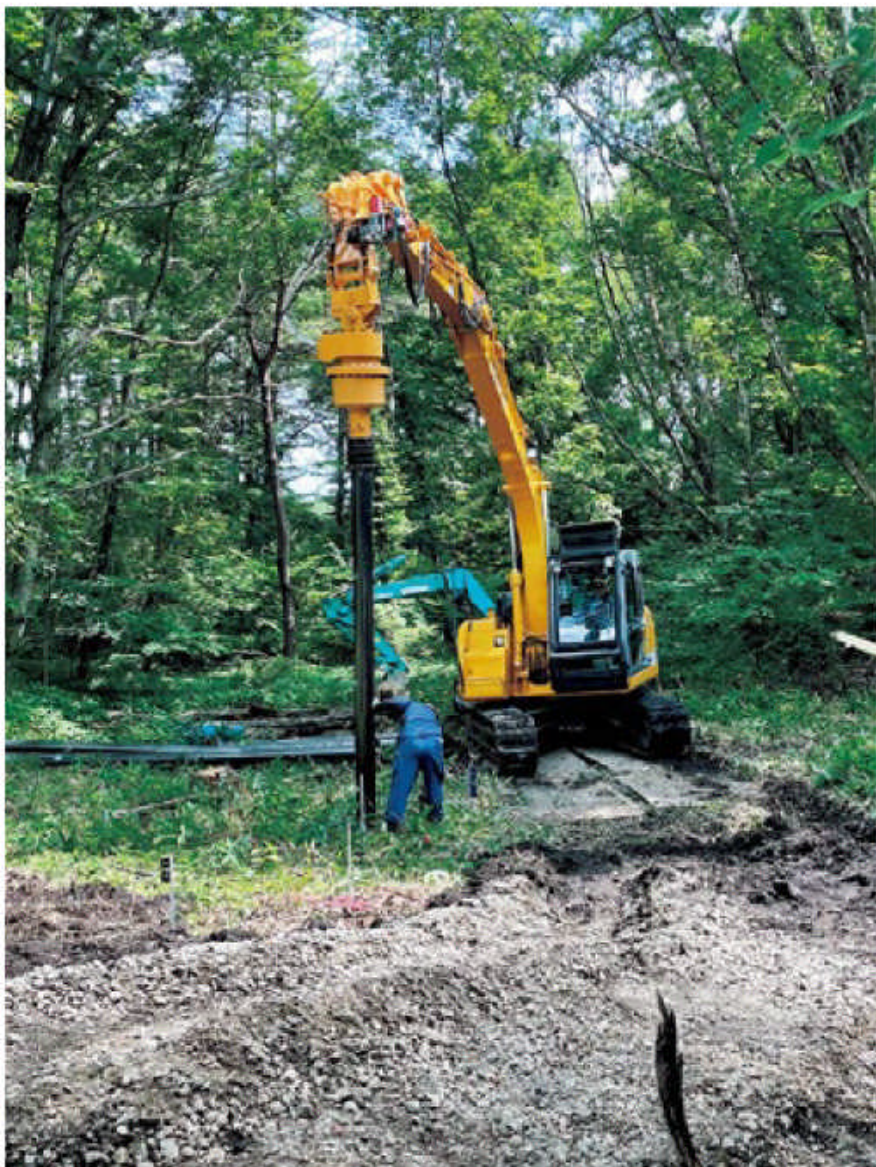
岩手県釜石地方は、東日本大震災津波被害の復旧に伴うインフラ整備終了後、急激な人口減少・高齢化と経済の停滞が予想され、経済の立て直しが喫緊の課題であった。一方、集中豪雨などの被害は拡大傾向にあり、森林の多面的機能への期待がSDGsの普及と共に高くなってきた。そのような中、森林所有者と共に森林だけでなく、重要な地域産業である漁業・住民生活の安全を目指し広葉樹の植林を含む保全活動を行ってきたが、地場産業として成り立たせるためには成熟期に達する植栽木の活用・販売が欠かせない。SANU 2nd Homeでの国産材の使用と植林への支援が地方の森林組合の活性化と環境保全のロールモデルとなることを期待している。　　　　　　　　（高橋幸男／釜石地方森林組合）

木土台を設置

木軸設置

壁（落とし込み）設置
構造壁設置
天井、屋根設置

窓設置
内部仕上げ
配管、配線

外部屋屋根設置
外壁設置
デッキ設置

キャビンの施工手順

3点提供：ADX

独自に開発した杭打ち機で杭を打ち込む。

パーツ化したフレームを組み立てていく。

高さ4m、横幅最大約5mの開口部建具は特注で制作。2重ガラスと木製サッシによる断熱性能も備えているため、厳しい自然の中でも快適に過ごせる。

平面図　縮尺1：100

外壁は木製カーテンウォール工法により工場で1次加工を施し、ファスナー金物を用いて現場で緊結している。1枚ずつ簡単に脱着できメンテナンスや解体が容易。

さまざまな条件に適応する構造とディテール

それぞれの自然環境と敷地への適応、低コストや安全性、施工性などの設計要件を実現させるため、設計施工の一気通貫型体制を活かして構造計画を決定した。基礎構造には、鉄骨の杭と梁を用いて、剛性と耐久性に優れ、斜面にも対応できる高床式構造を採用。上部構造は国産材のスギによる軸組壁構法とし、プレカットコストを抑えるため一般加工機で加工可能なディテールと接合金物を追求し、制作、組立にかかる工期を短縮した。　（田村尚土／ディックス）

短手断面詳細図　縮尺1：50

SANU 2nd Home 八ヶ岳1st

所在地／山梨県北杜市
主要用途／サブスプリクション型セカンドホーム

設計
ADX　担当／安齋好太郎　二瓶洋幸
プロジェクト・マネジメント　ADX
担当／樫英二郎
構造　ディックス　担当／田村尚土
測量・造成設計・許認可
二葉測量設計事務所　担当／泉地進吾
照明計画　ニューライトポタリー
担当／永富裕幸
インテリアデザイン　STUDIO DIG.
担当／米谷匡志

施工
ADX　担当／野地啓太　関坂阜希
現場施工
tukuru　担当／古関秀章
カネトモ（八ヶ岳・白樺湖）　担当／伊藤 寛朗
丸栄建設（北軽井沢）　担当／丸山博文
協栄住建（山中湖・河口湖）　担当／小林大輔
杭工事　東部　担当／相馬智丈
鉄骨土台製作　星野製作所　園部製作所
木材供給　釜石地方森林組合　担当／高橋幸男
木材加工　ポラテック・オノツカ・ワタザイ
福島県郡山地区木材木工工業団地協同組合

構造・工法
主体構造・構法　木造・在来軸組構法
基礎　杭基礎

規模
階数　地上1階
軒高 5,440mm　＊棟ごとの平均地盤高さによる
最高高さ 6,924mm　＊棟ごとの平均地盤高さによる
敷地面積　833.09m^2
建築面積　61.56m^2
（建蔽率14.78%　許容40%）

工程
設計期間　2020年7月～2021年7月
工事期間　2021年7月～2021年11月

敷地条件
都市計画区域外　森林共生区域
道路幅員　10.772m（西側接道）
駐車台数　6台

外部仕上げ
屋根／不燃シート（ヒロシ幌内張製作所・帝人フロンティア）　防水シート（エコ・トランスファー・ジャパン）下地スギ合板張り
垂木／スギ材（釜石地方森林組合）
外壁／ OSB下地防水シート スギ材張り
開口部／特注木製サッシ（日本の窓）水性ウレタン塗装　複層Low-Eガラス
バルコニー／デッキ・スギ板張り

内部仕上げ
床・小上り／ OSB下地パーティクルボード張り保護塗装
壁／ R壁：スギ材張り　斜め壁・間仕切り壁：パーティクルボード張り
天井／スギ合板張り 保護塗装
家具・什器
収納・デスク（太齋木工所）
ヘッドボード・ソファ（太齋木工所、ヤマナカ家具）
内装建具（蓼科木工所）
カーテン（川島織物セルコン）
ダイニングテーブル・イス（インターオフィス）

設備システム
空調　暖房方式／ペレットストーブ（東京ストーブ）・マルチエアコン
冷房方式／マルチエアコン
換気方式／第3種換気　自然給気
給排水　給水方式／受水槽方式
排水方式／浸透式浄化槽
給湯　給湯方式／ガス給湯器

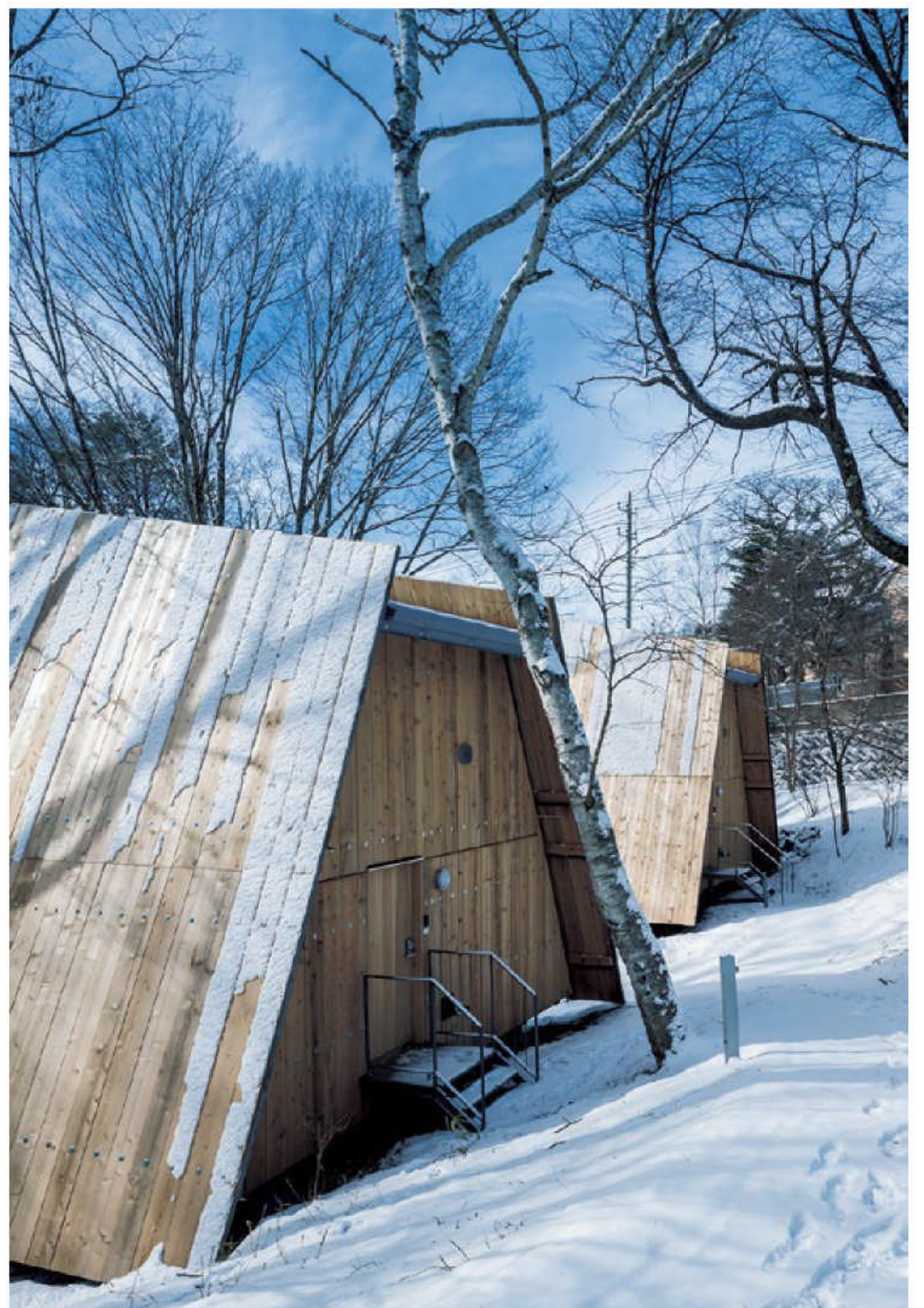
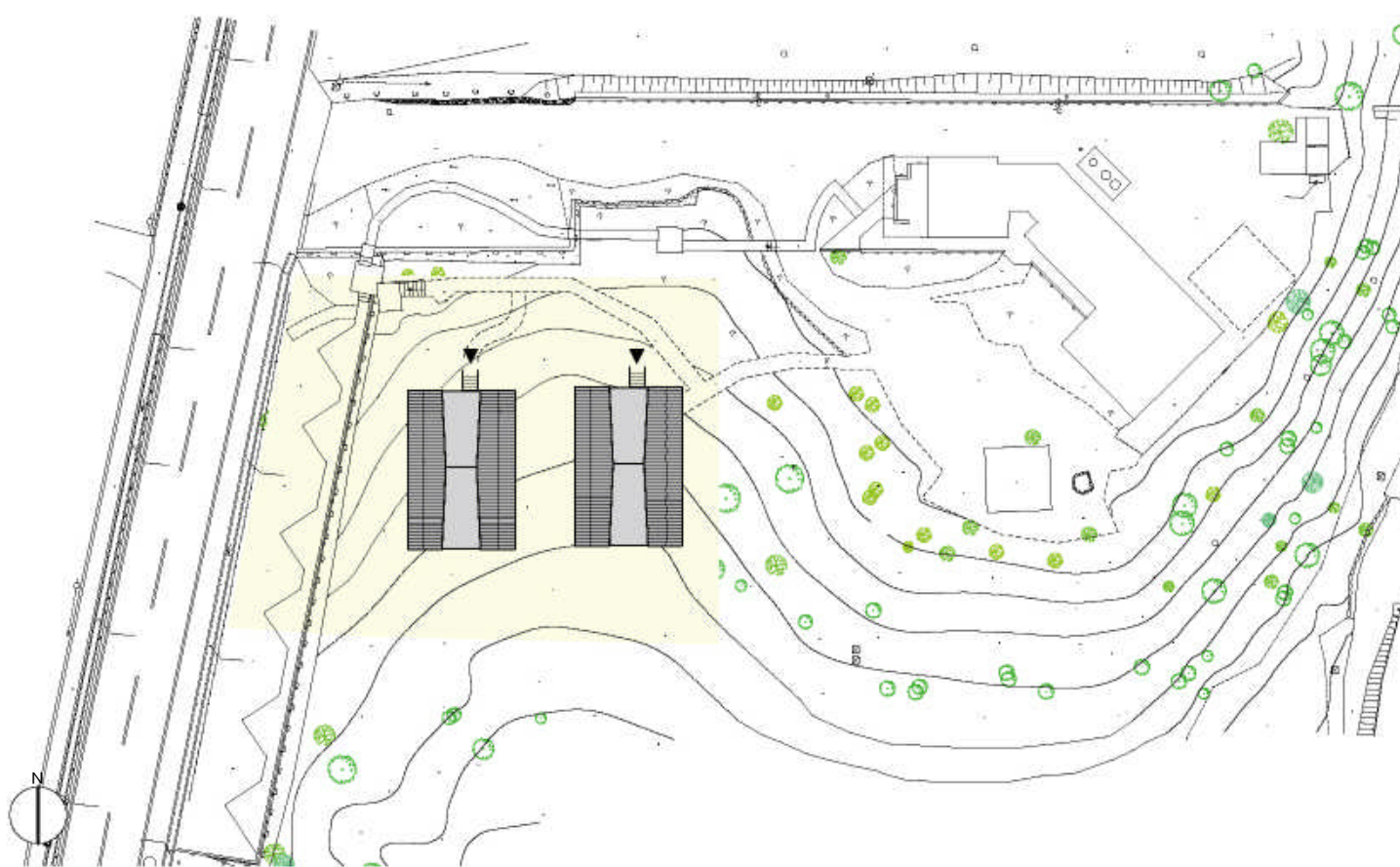
撮影／新建築社写真部

南東側から見る。土壌への負荷が小さく、風や水の流れを止めることがない基礎杭工法を採用している。

配置図　縮尺1：1,000

テラス。13m²のテラスには、大きなテーブルとベンチを備えている。

北側の玄関を見る。

特集対談

木と住宅の循環

本間貴裕(SANUファウンダー)×**安齋好太郎**(建築家)

住宅を共有する

本間　「SANU」は2019年に「Live with nature. ／自然と共に生きる。」を掲げてライフスタイルブランドとして設立しました。自然の美しさ、楽しさを広く伝えていくことで自然との共生を考えることを身近にするという思いでやっています。私たちが提供しているSANU 2nd Homeというサブスクリプションサービスは、海や山、川の近くにあるもうひとつの家に、チェックインなどの手間もなくスマートフォンひとつで気軽に行き自然の中で過ごすことができます。現在は白樺湖、八ヶ岳でオープンして、どこでも泊まることができます。環境問題の解決は現代の大きな課題ですが、まずは自らが自然と関わり、愛着をもつことで初めて環境問題を自分事としてとらえて取り組めるのではないかと思います。好きだからずっと自然を楽しみたいというシンプルな動機さえあれば、責務でなくても環境を守ろうと思えるはずです。

安齋　環境問題へのポジティブな関わり方と、もともと個人が所有するものが前提であった住宅を共有することは、コロナ禍を契機に進んだ居住地の選択肢の広がりや、会社にいなくても仕事ができるこれからの生活には必要です。持ち家や賃貸住宅とも異なるあり方は、僕たちの暮らし方や建築のあり様に自由をもたらすと思います。

本間　SANU 2nd Homeはもうひとつの家なので、非日常的ではなく家に帰るという感覚を大事にしたいと思いました。そこで、同じ住宅(キャビン)を増殖するようにいろいろな場所に建てていくことで、自分の家がいろいろなところに存在する状況をつくれると考えました。一方でキャビンの外にある自然は地域や季節によって変わるので、SANU 2nd Homeの体験は多様になる。そして、増殖していく建築は建てる過程からその先までずっと自然と調和するあり方を目指しています。

木と建築のサイクルを見直す

安齋　このプロジェクトの企画当初、僕らも建築を建てる際の環境負荷や、建築の寿命が木材が育った年月よりも短いことに対して疑問をもっていました。僕は福島県の工務店の3代目ですが、祖父や父が時間とエネルギーをかけてつくったものが、今家を継ぐ人がいないために空き家や廃墟となるケースが増えています。これまでの活動で得た木の知見を活かして設計したいけれど、建てた建築が空き家や廃墟になるかもしれないという課題を解決していない中で新しい建築をつくることに矛盾を感じていました。建築は重くて強いものだからこそ、いずれ来る解体という終わりを迎える時、建築を資源にするためにつくり方や材料についてもっと研究する余地がある。SANU 2nd Homeではひとつのプロダクトを増殖させていくので、つくり方や材料、その調達の流れなどを含めて研究し実践できます。それに、キャビンをさまざまな地域に展開するので、まだ見ぬ土地にも建つものを設計することになります。だから、空間を設計するというよりは、建てる過程や材料などから建築を立ち上げていきました。実際に、このキャビンでは部材をプレカットやCNCルーターでパーツ化し、釘やビスを極力使わないことで解体・移動やその後の活用が簡単になりました。また、斜面地に杭を打てる杭打ち機を開発し、杭工法の基礎によって地形や風の流れに与える影響を最小化しました。曲面壁が大きな特徴ですが、上下に溝をつくり、倹飩式で建具を嵌めているので取り外しが可能です。ふすまや障子といった日本の建具を参考にした、木でつくる空間の幅を増やす試みでもあります。結果、全体の施工期間が通常の約半分に抑えられ、施工中のCO_2の排出量も削減でき、建築の品質も担保できました。

本間　実際にキャビンを建てる場所は、行くまでの気軽さとアクティビティが重要です。自然を味わいに行くといっても、手つかずの山奥に行くのはハードルが高い。都心から車で1.5～3時間で、かつ運転スキルなどを問わない道のりで行ける地域を選んでいます。

安齋　場所の選定は、現在の不動産屋という一般の市場と僕らではよいと思う感覚にずれがあります。そこにもともとあるものを美しいと思い、生かしたいのに、地域性を無理に改変していることも多い。その地域にいる人たちが地域の魅力に気づいていないこともあります。

本間　気づけていなかった魅力を引き出せると、SANUがキャビンを建てることで地域に貢献できるという視点もある。場所を決めるのも苦労しましたが、ウッドショックの問題にも直面しましたね。

安齋　はい。日本は森に囲まれているのに、その身近な木すら手に入らない。もっと近い場所で木材を生産する方法を考えていかなければならない。キャビンの骨格や内装の仕上げなどはすべて国内生産の材ですが、そのために、今まで分断されていた生産者とつくり手を繋ぐこともしました。たとえば木材は岩手県釜石地方森林組合と直接取引をしていますが、「FORESTS FOR FUTURE」といってキャビンに使った分だけ苗木を植樹する活動を行います。キャビンをつくるほどに森が豊かになるというリジェネラティブな流れをつくろうとしています。

社会を見つめ行動する

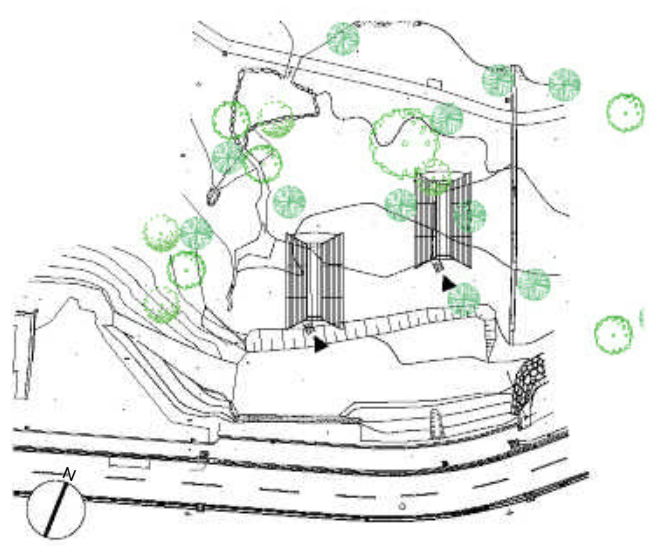
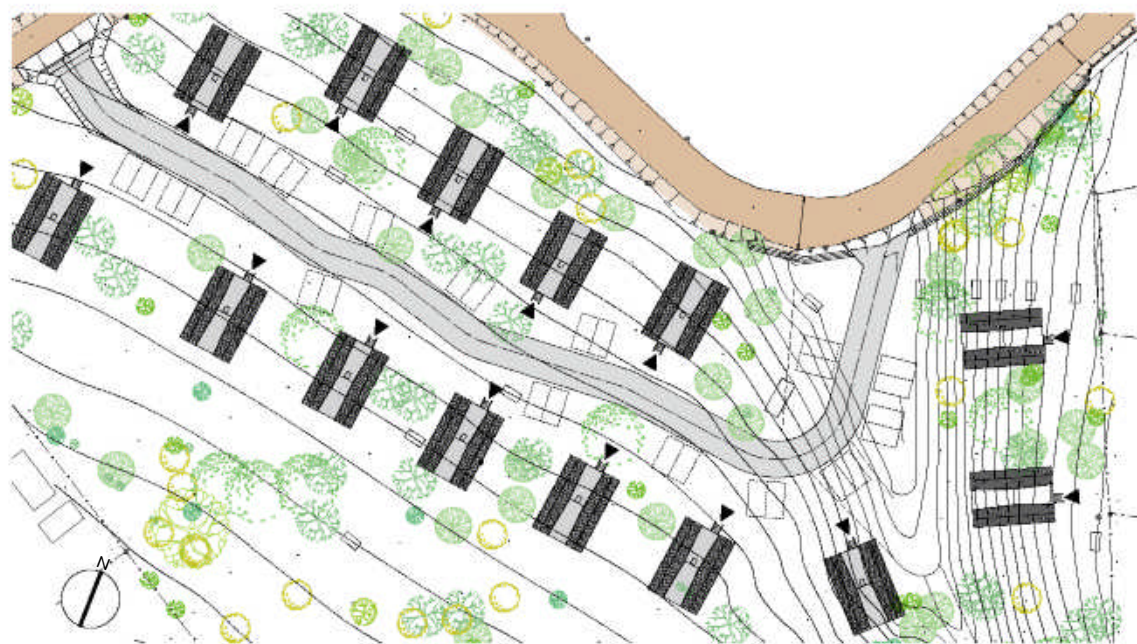
本間　今後は、日本だけでなく世界中に「Live with nature. / 自然と共に生きる。」という価値観やライフスタイルを広げていきたいです。また、自動運転や通信の技術などが進歩すれば、住宅のかたちや暮らし方ももっと変わっていくはず。そうすると僕たちの提案も前に進む。たとえば住宅やホテルなど、都市部でできる提案も考えています。自分で何かできることがあるという意識で社会を見つめていきたいです。

安齋　設計は、デジタルファブリケーションでつくるパーツの割合をもっと上げたいと思っています。既に使用する金物を通常の建築の約半分にしていますが、もっと減らしたい。建築が生まれて役目を終えるまでの時間軸の中で、これまで建築家が携わってきたのは本当に少しだけです。そこで欠けてしまいがちな建築を未来に託すという視点を大切にしたいです。僕は工務店から設計を始めたからか、建築を見る時に自然とつくり方や材料に意識が向きます。だからこそ生まれた問題意識があり、それによって自分たちが目指すべき建築が定まったといえます。そうすると、依頼を受けて建てるだけではなく、同じ問題意識をもつ人と手を組んで事業から設計して建築をつくることができると感じます。活動の場は広げていける。建築家ができることはまだたくさんあるのではないかと思います。

(2022年1月14日、SOIL Nihonbashiにて。文責:本誌編集部)

安齋好太郎(左)と本間貴裕(右)。

建設中の山中湖1st。今年の3月に14棟が完成する。

現在建設中・計画中のキャビン
配置図　縮尺1：2,000

白樺湖1st
八ヶ岳連峰の最北端の蓼科山のふもと、白樺湖のほとりに2棟が建つ。八ヶ岳1stと同時期にサブスクリプションをスタートした。キャビンからは湖が一望できる。

山中湖1st
山中湖からほど近い豊かな森の中に14棟を建設中。徒歩約5分で富士五湖の中で最も富士山に近い山中湖へ行ける。付近ではサップやワカサギ釣り、サイクリングなど多様なアクティビティが楽しめる。

白樺湖2nd
白樺湖のほとりに5棟を建設する計画。近くでカヌーやボートが楽しめる。天気のよい日に少し足を伸ばして車山へ行けば、日本百名山の大半が見えるといわれる美しい景色を味わえる。

八ヶ岳2nd
雄大な山々に囲まれる山梨県北杜市に13棟を建てる計画。北杜市は日本一日照時間が長いといわれ、その気候が育てる農作物や山からの清流を用いてつくるお酒など食文化の豊かさを楽しめる。

北軽井沢1st
浅間山の豊富な伏流水が湧き出る壮大な森に6棟を建設する計画。樹齢100年のハルニレ、カツラ、ミズナラといった天然林と共に、多様な動植物が生息する。

河口湖1st
富士山の北側の麓、自然豊かな鳴沢村に7棟建設する計画。富士五湖地方の中心で、青木ヶ原樹海、鳴沢氷穴・富岳風穴など富士山の山麓の自然が楽しめる。

木立の1枚屋根

One Seat Roof in Forest
福井県坂井市

里山建築研究所
Satoyama Architecture Laboratry

南側から見る。越前海岸の森の中に建つ、移住した夫婦が暮らす板倉構法の平屋。台所、食堂、居間が一体的になった土間と、10畳ほどの板間に3.5寸勾配の片流れ屋根が架かる。右手の開口が玄関。

食堂、居間。現わされた柱や梁、板材はすべて越前のスギとマツ。タイコ落としした地マツの梁に150mmの根太を架けもち出し、上部をロフトとして利用。軒は105mm角の垂木を606mmごとに配し、深く差し架けた。

森と繋がる平屋土間暮らし

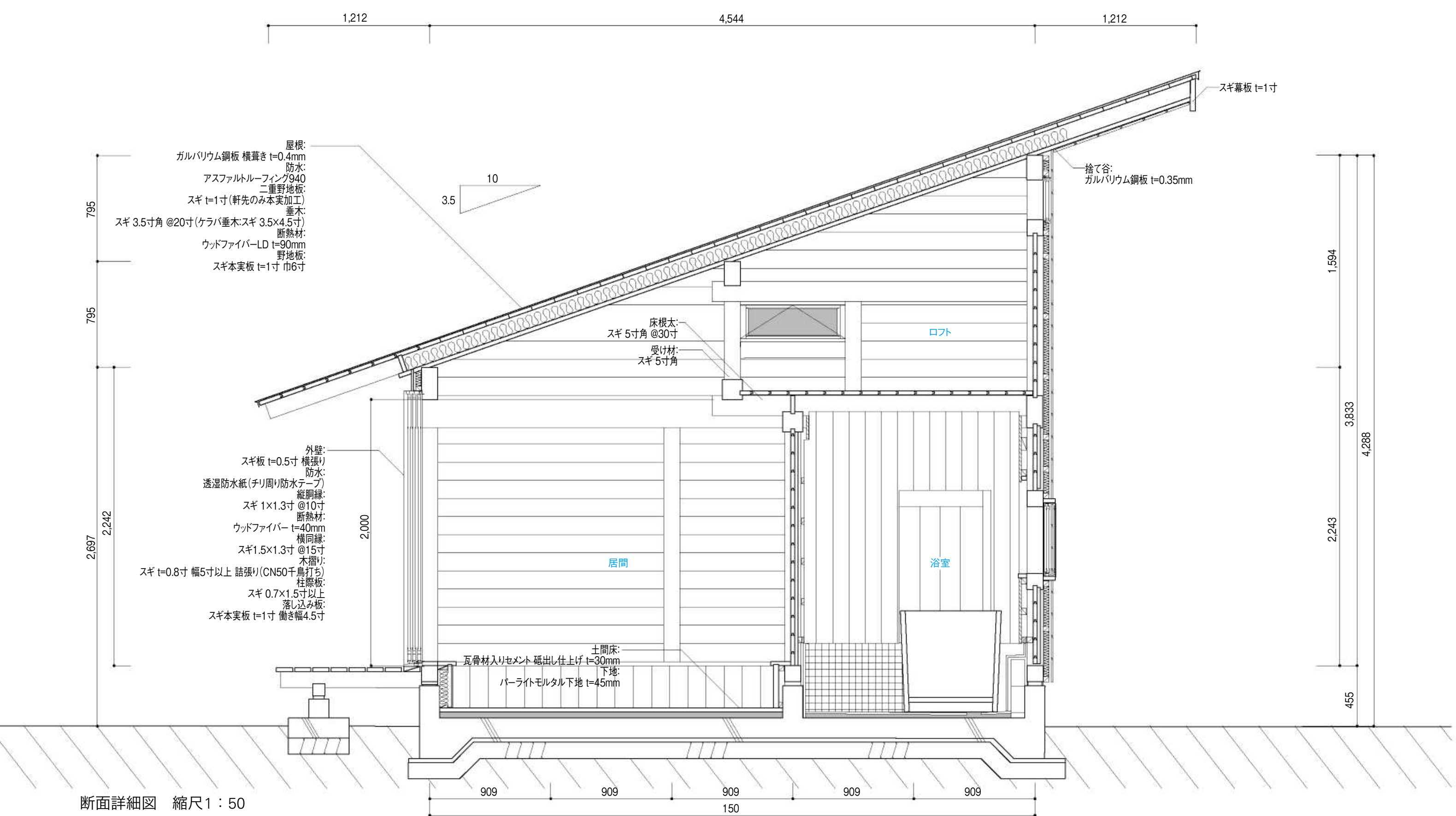
夫婦は福井県出身。故郷を離れ関東に住んでいたが、生まれ育った地にほど近い越前への移住を決めた。自ら住む建築の構造や材料など細部まで知りたい、自ら建築したいと望む探求心旺盛なふたり。故郷での土地探しと並行して、家づくりの知見を少しずつ集めた。そして辿り着いたのは、構造がそのまま仕上げとなる板倉構法。現わされた柱や梁、板材のすべてを地元越前のスギとマツ材で賄った。

間取りは、2.5×8間の細長い土間床の長方形。南面の開口を大きくとり、屋根を深く差し架けた。土間は木立に開かれ、森と繋がる大きなリビングになる。片流れの1枚屋根の下、浴室と便所の上部にロフトを設けた。水回りを除き間仕切りをつくらない一体空間の土間の端には、10畳ほどの板間を設け古建具で仕切った。

持ち込んだ家財は最小限。家電は、冷蔵庫と洗濯機、エアコン1台で事足りた。そして、建主夫婦のセルフビルドするという夢は、隣接する6畳の小屋の建設に結実させた。シンプルな作業で建設可能な板倉構法であれば、これからも自分たちの手で家を拡張していくことも可能である。

故郷の森に帰った夫婦は、まるで木立の中に1枚のラグを広げてキャンプするかのように、軽やかに暮らす。　（里山建築研究所／居島真紀）

西側のデッキから長手方向を見る。

断面詳細図　縮尺1：50

床から347mm上がった板間。寝室や仕事部屋として使っている。

ロフト。建主が暮らしながら自主施工で拡張中。

14,544

1,818 1,818 1,818 1,818 1,818 1,818 1,818 1,818

909 909 909 909 909 909 909 909 909 909 909 909 909 909 909 909

冷

内玄関(勝手口)

ステンレスワークトップ

木桶

洗

棚

棚

台所

作業台／建築工事

[800]

[1,550]

[800]

浴室

床:
タイル仕上げ

洗面脱衣室

便所

909 909 909 909 909 909

5,454

板間

薪ストーブ

食堂・居間

目地:
真鍮埋込 幅5mm

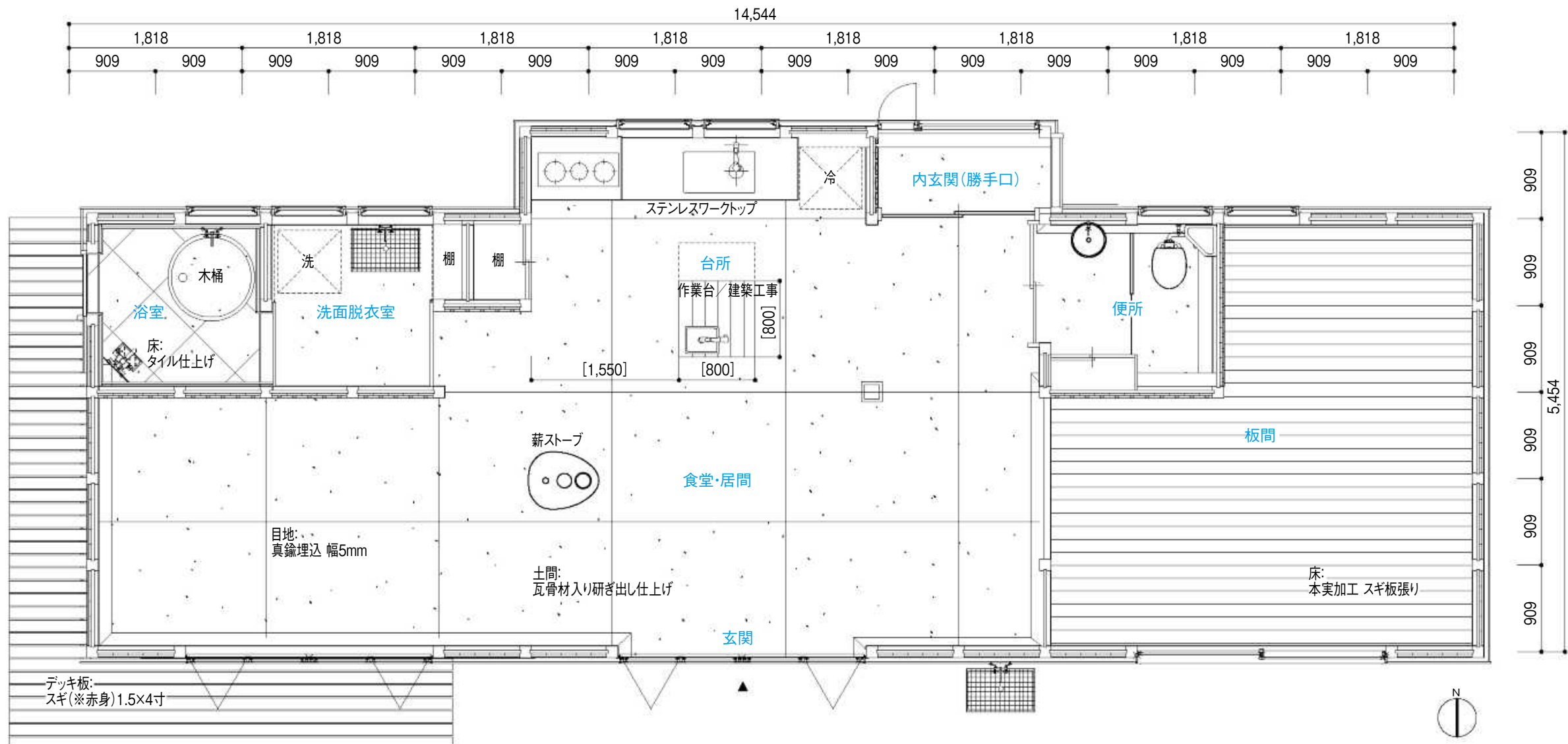
土間:
瓦骨材入り研ぎ出し仕上げ

床:
本実加工 スギ板張り

玄関

デッキ板:
スギ(※赤身)1.5×4寸

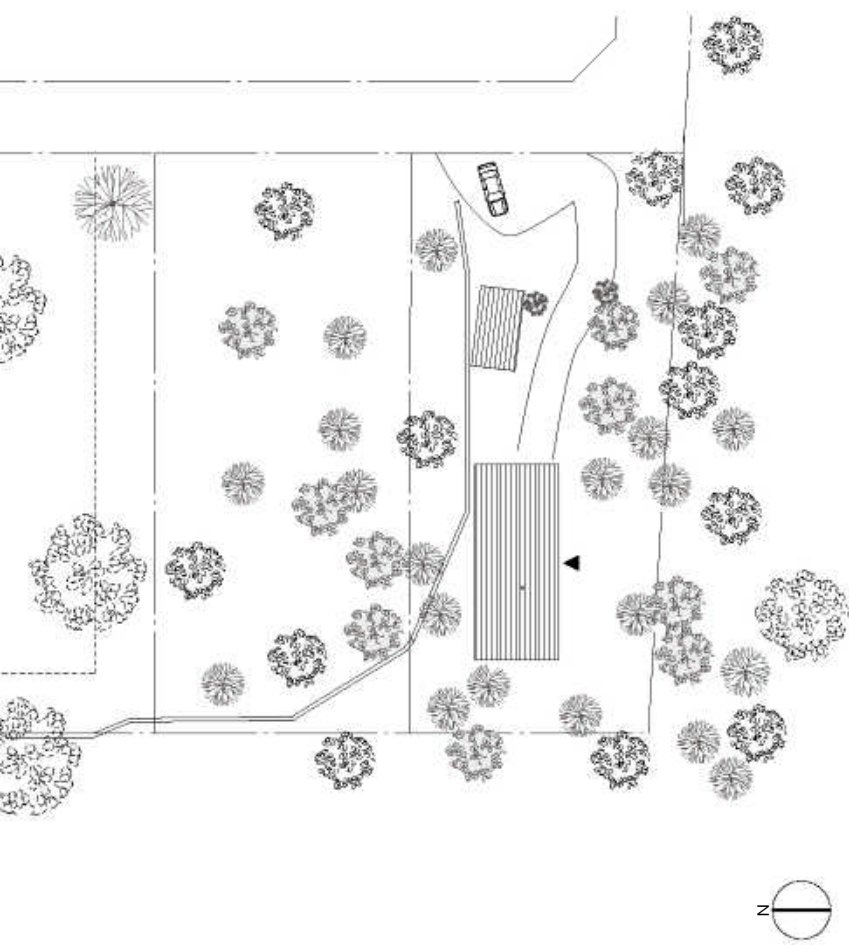
N

平面図　縮尺1：100

食堂から南側を見る。

木立の1枚屋根
所在地／福井県坂井市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦

設計
里山建築研究所　担当／安藤邦廣　居島真紀
施工
北越建設　担当／北出政憲
基礎　北越建設　担当／大久保翼
製材　北越建設　担当／見澤和則
大工　澤村建築　担当／澤村清一
屋根　津田建築板金工業所　担当／津田静
鋼製建具　シンセイアルミ工芸
担当／田中慎一
木製建具　墨谷木工所　担当／墨谷正幸
左官　佐孝左官　担当／佐孝滋
電気設備　新修電機　担当／小坂修一
設備　牧野設備　担当／牧野正敏
構造・構法
主体構造・構法　木造（板倉構法）
基礎　べた基礎
規模
階数　地上1階
軒高 4,607mm　最高高さ 4,927mm
敷地面積　1,023.69m²
建築面積　85.98m²
（建蔽率8.40%　許容30%）
延床面積　80.97m²
（容積率7.91%　許容50%）
1階　80.97m²
工程
設計期間　2016年10月～2017年7月
工事期間　20017年8月～2018年3月
敷地条件
地域地区　国定公園第2種
道路幅員　東6m　駐車台数2台
外部仕上げ
屋根／ガスバリウム鋼板葺き
外壁／スギ板鎧張り 15mm
開口部／ LIXIL サーモス-L
内部仕上げ
土間（台所・食堂・居間・洗面脱衣室・便所）
床／瓦骨材入りセメント研ぎ出し仕上げ
壁・天井／スギ本実板 t=30mm現し
厨房機器／ステンレスワークトップ（シゲル工業）
ガスコンロ／ 3口コンロ（ガスクッカー）
換気扇（シェード）／有圧換気扇（パナソニック）
照明／ Atelier Key-men
便器／ TOTO
薪ストーブ／イエルカ・ワイン
洗面器／作善堂
水栓金物／カクダイ
浴室
床／ Hirata 磁器質タイル貼り
壁・天井／ヒノキ本実板 t=12mm張り
建具取手／蝦夷鹿の角
バスタブ／コウヤマキ丸型桶　ヨシダ屋
シャワー水栓金物／カクダイ
板間
床／スギ本実板張り t=30mm
壁・天井／スギ本実板 t=30mm 現し
設備システム
空調　暖房方式／薪ストーブ
冷房方式／空調
給排水　給水方式／水道直結
排水方式／下水道
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

南西側夕景。

配置図　縮尺1：1,200

提供：里山建築研究所

左：隣接する小屋は建主とその友人たちが自主施工し、2日かけて完成した。
右：小屋は現在リフレクソロジストである建主の仕事場として使用している。

川と家

River and House

岐阜県各務原市

井端菜美／goboc設計事務所
Nami Ibata ／ goboc architects

断面詳細図　縮尺　1：75

配置図　縮尺　1：2,000

東立面。西側の土手の向こうには川が流れる。1階は土手と平行に機能を並べた奥行き1間の細長いヴォリュームを1mのレベル差をもたせてふたつ配置。東西面をガラス張りにして、道路側にも川の向こう側の景色を提供する。

1階ホール。左右の景色が繋がり、上方に広がる空間が2階床の根太越しに透けて見える。天井高は梁下で約1.8m。大きな階段が川と家と大地を繋ぐ。

室1（右）は収納の東側を寝場所としている。床は面剛性のとれるサネ付きのはぎ板の一発仕上げとし、表面からビスで固定している。

等価な空間が繋ぐ外との関係

川に面した細長い三角形の敷地で計画をした、家族4人のための自邸である。道路に沿って敷地に向うと小さな堤防と川が目に入り、道路も小さな堤防も川も、この場所を訪れる人しか使わない半私的な場所になっている。

川や道路といった不変なコンテクストを拠り所にして、川に寄り添うようにリニアな空間を置くと、訪れる人の視線の先に東面のファサードが立ち上がる。奥の川が透けて見えるように開口部を並べて、建物の向こう側を意識させた。断面的な構成は、自分たちの暮らしをひたすら想像して、等価に並べて積み上げていった。その結果、空間はすべてが近くなっていき、nLDKの概念は崩れて、水回りも寝室もダイニングも階段も、すべてが等価な居場所となって、仕切りのない小さな空間の積み上げに統合されていった。

各層の高さは私たちの身体がぎりぎり納まる寸法まで抑えることで、積み上げた空間同士の層の重なりがある部分では意識され、またある部分では水平方向が強調される。身体に近いスケールは空間に奥行きと広がりを与えている。

空間を横断する内外の斜材は、連続性を強調することでどこまでも続いていくような伸びやかさを生んでいる。

朝、東の高窓から差し込む光、陽光を受けてきらきらとする川、澄んだ空気感をまとって内外の境が揺らいでいくような感覚に包まれる。そして家族は銘々が自由に過ごしながらも、互いの存在を感じている。

それはこの家の場合、どこにいても一緒なのだ。内外の境が薄れてすべての空間が等価になったことで場所のヒエラルキーがなくなり、部屋同士、屋内屋外の繋がりに新しい関係性を感じている。

（井端菜美）

土間。奥には剥き出しのまま浴槽が置かれる。基礎は道路面より下がっていた地盤の上に掘削なしで据え、できてから埋め戻しを行ったため、基礎を仕上げとした土間は前面道路と同じレベルに連続する。

南東から見る夕景。2階は東側に1間張り出し、骨組みを現しとしている。基礎面積を削減しコストを抑えると共に、深い軒下は陰影をつくりガラス張りの内と外を繋ぐバッファーとなる。

ホールから室1、上部にスギ板を並べたルーバー床を見る。

配置図　縮尺1：3,000

室3

3階平面図

室2

室1

2階平面図

堤防

+710

+690

+510

ミカン(既存)

AC

ホール

キッチン

階段1

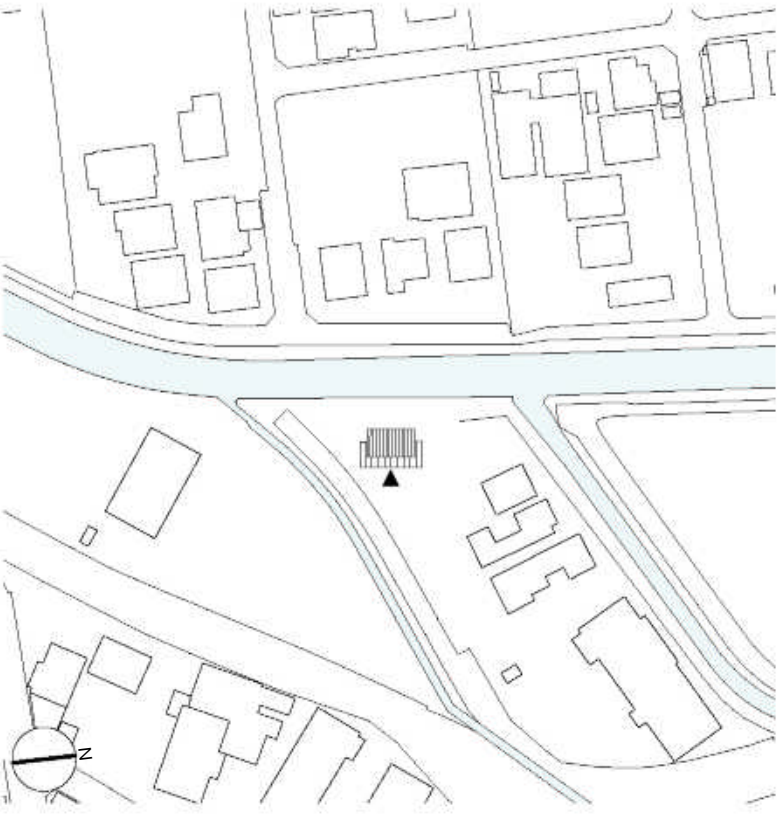
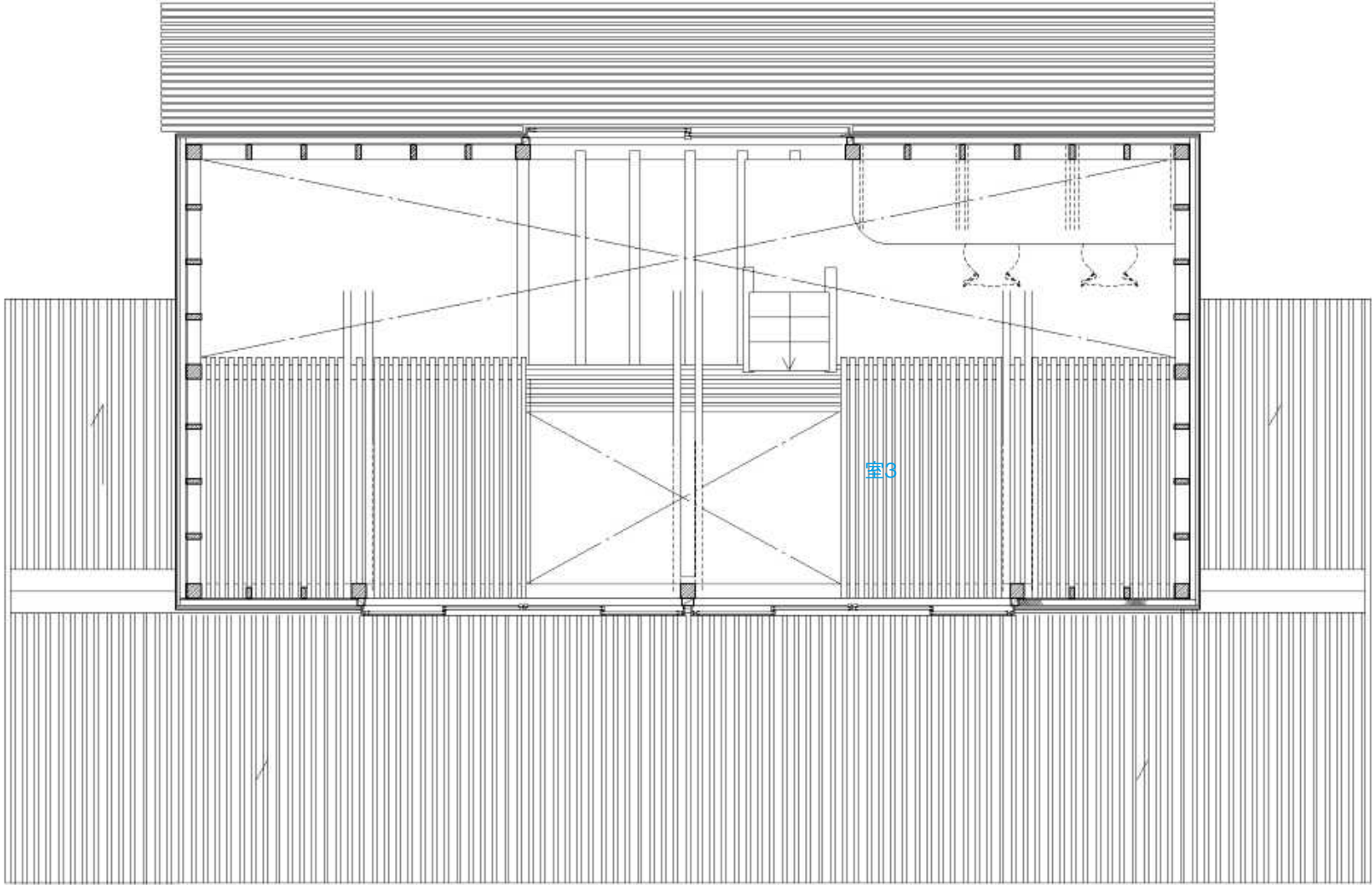
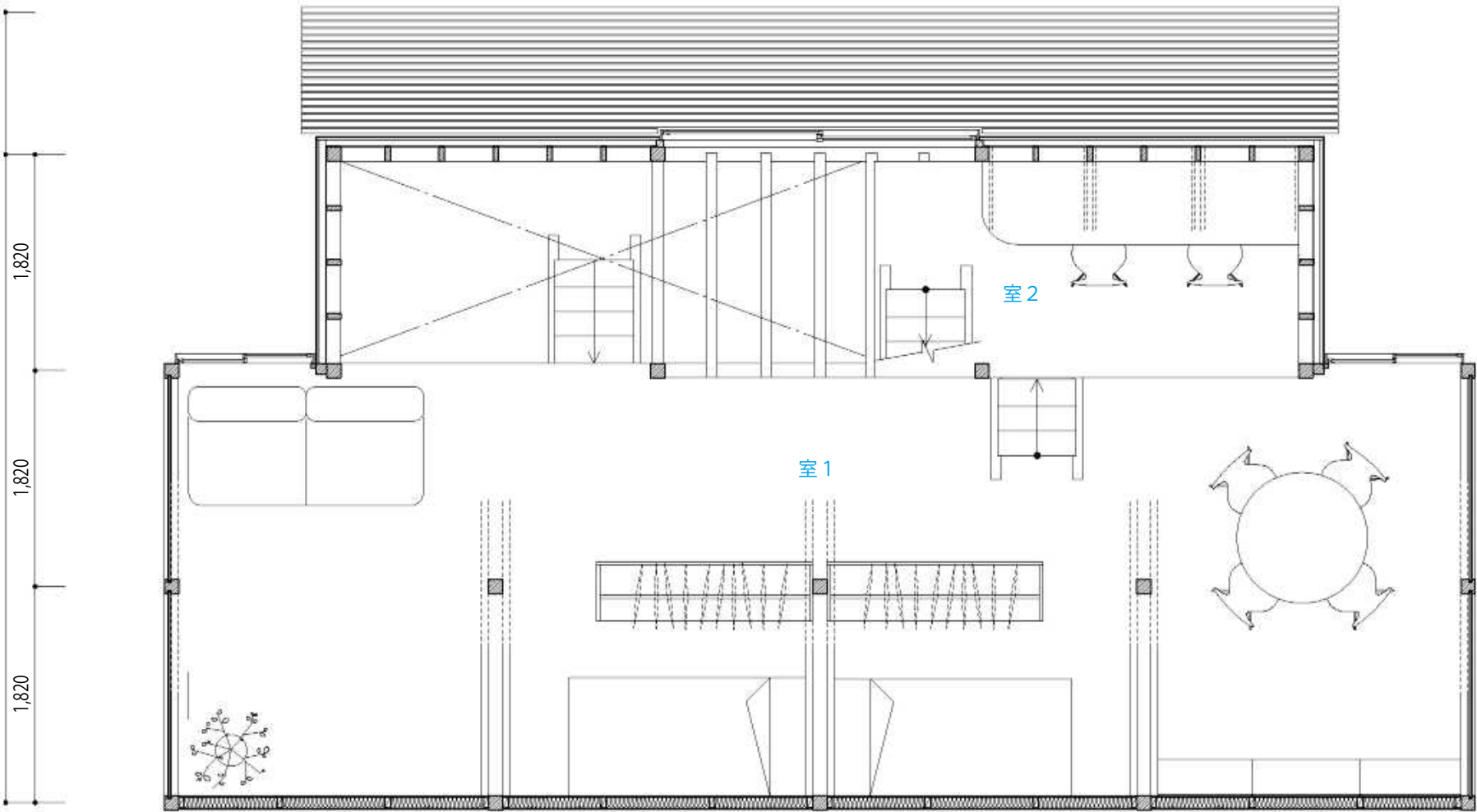
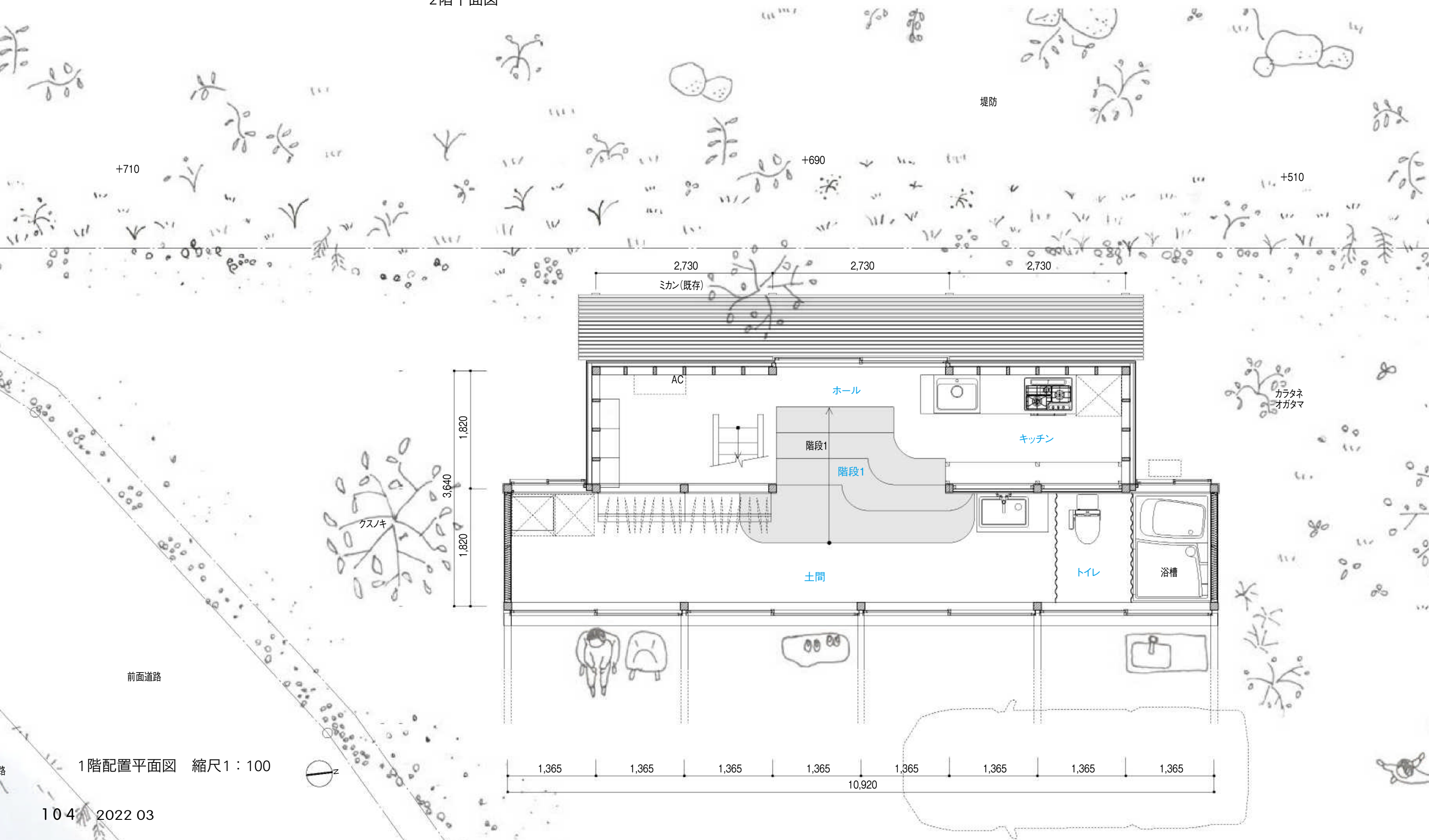
土間

トイレ

浴槽

クスノキ

カラタネオガタマ

前面道路

1階配置平面図　縮尺1：100

短手1,820mmに納めた、どこにでも手が届く
コンパクトなキッチン。

土間、ホール。土間は浸水してもよいように、
更新が容易にできる状態で水回りを納めている。

川越しに見る。川に向かって傾斜する屋根に覆われた高さ方向に伸びるヴォリュームに、
コンパクトな層が積み重なる東面のボックスが巻きつくように組み合わさる。

川と家

所在地／岐阜県各務原市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計

goboc設計事務所　担当／井端菜美

施工

井上工務店　担当／井端啓輔
大工　大視建築　担当／石本廣美
プレカット　東海プレカット　担当／大坪仁
基礎　樋口土建　担当／樋口誠
板金　多造板金　担当／多造敏男
設備　米田住宅設備　担当／林正紀
電気　ファース　担当／中嶋耕太
外構・造園　小椋造園　担当／小椋裕司
家具　久米製作所　担当／久米秀憲
塗装　井上工務店　担当／井端啓輔

構造・構法

主体構造・構法　木造在来工法
基礎　べた基礎

規模

階数　地上2階
軒高 5,960mm　最高高さ 6,366mm
敷地面積　351.80m²
建築面積　56.29m²
（建蔽率16% 許容70%）
延床面積　74.52m²
（容積率21% 許容160%）
1階　19.87m²　2階　54.65m²

工程

設計期間　2018年6月〜2021年6月
工事期間　2021年6月〜9月

敷地条件

地域地区　法第22条区域
道路幅員　南4.0m
駐車台数　3〜4台

工事費

地盤改良　700,000円
仮設工事費　350,000円
基礎工事　850,000円
建築　9,700,000円
電気工事　1,000,000円
空調工事　500,000円
外構工事　400,000円
造園工事　300,000円
給排水設備　1,100,000円
ガス工事　600,000円
総工費　15,500,000円
※上水引き込み工事・浄化槽別

外部仕上げ

屋根／ガルバリウム鋼板大波葺き　ガルバリウム鋼板折板葺き
外壁／スギ板張り t=18mm　フレキシブルボード
開口部／アルミサッシ（LIXIL）
外構／砕石敷き

内部仕上げ

土間

床／コンクリート金ごて仕上げ
壁／フレキシブルボード
天井／スギムクボード t=28mm（踏み天井）
ハーフバス／洗い場付き浴槽（TOTO）
便器／組み合わせ便器（TOTO）

ホール　室1〜3

床／スギムクボード t=18mm　ネダノット留め
壁／モイスTM　裏面現し
天井／スギムクボード t=28mm
家具／久米製作所　飛騨産業　柏木工

室1。天井高は梁上で約1.9m。

室1。西側より南に1,365mm張り出した部分はガラス張りとし、南西の景色を広く取り込む。

照明／信和産業 電照コード（連結式スーパーソケット）
厨房機器／
食洗器／リンナイ フロントオープンタイプ
ガスコンロ／ノーリツ＋do
換気扇／有圧換気扇（三菱電機 EFC-25FSB）

設備システム

空調　冷暖房方式／ルームエアコン
換気方式／第3種換気
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／浄化槽
給湯　給湯方式／エコジョーズ

撮影／新建築社写真部

屋根1:
ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 大波葺き
ゴムアスファルトルーフィング
耐水合板 t=24mm
HGW16 t=90mm

屋根2:
ガルバリウム鋼板 t=0.6mm（素地）
折板葺き h=88mm
ペフ裏張り ※天井裏のみ
HGW16 t=120mm

床:
スギ 45×105mm @75.75mm

床:
無垢ボード スギ t=28mm
サネあり
根太 □-90mm @455mm

室1

外壁2:
フレキシブルボード t=4.0mm
構造用合板 t=9.0mm
透湿防水シート
断熱:
HGW16 t=90mm

壁:
フレキシブルボード t=4.0mm
撥水材塗布
構造用合板 t=9.0mm

土間　階段1

床:
コンクリート金ごて仕上げ

1,365　1,365　1,365　1,365　1,365　1,365　1,365　1,365
10,920

長手断面図　縮尺1：100

ケミカル面戸

屋根1:
ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 大波葺き
ゴムアスファルトルーフィング
耐水合板 t=24mm
断熱材 t=90mm
垂木 45×90mm @455mm

外壁1:
スギ板 t=15mm
通気胴縁 t=18mm
透湿防水シート
壁外断熱:
スタイロフォーム t=50mm
モイスTM t=9.5mm

天井:
無垢ボード スギ t=28mm

屋根2:
ガルバリウム鋼板 t=0.6mm（素地）
折板葺き h=88mm
ペフ裏張り ※天井裏のみ
HGW16 t=120mm

通気面戸

軒天2:
垂木、野地板現し
垂木軒先のみ @225mm

室2　室3　室1　ホール

床:
無垢ボード スギ t=28mm
根太 □-ヒノキ 90mm

壁:
フレキシブルボード t=4.0mm
構造用合板 t=9.0mm

外壁2:
フレキシブルボードt=4.0mm
（表面ビス留め）
構造用合板 t=9.0mm
透湿防水シート
壁外断熱:
HGW16 t=90mm

床:
無垢ボード スギ t=28mm
根太 □-ヒノキ 90mm

軒天4:
スタイロ t=30+30mm EP
根太 □-90mm

掛け:
45×60mm

土間　階段1

蹴上・踏面:
ロールカーペット t=10mm
構造用合板 t=12mm 下地（踏面）
曲げラワン合板 t=9mm 下地（蹴上）

床:
コンクリート金ごて押さえ

スギ 60×90mm

軒天:
フレキシブルボード t=9mm
構造用合板 t=12mm

盛り土

▽最高の高さ
▽棟木天端
▽土台天端
▽1FL　▽基礎天端
▽設計GL

1,820　1,820　1,820
5,460

短手断面詳細パース　縮尺1：40

よもぎ台の家

Yomogidai House
愛知県名古屋市

宇野友明
Uno Tomoaki

北側全景。新興住宅地にある南北に細長い敷地に建つ。高低差のあった敷地を緩い傾斜にして、斜面を吸収するように建物を浮かすことで建つ位置を可能な限り低く見せている。

ダイニングからリビングを見る。切妻の屋根がそのまま部屋のかたちとなる。天井、壁、床はすべて無節のスギ板仕上げ。キッチンとダイニングの家具はナラ材でつくったオリジナル。正面のガラスはすべてフィックスとしている。

登梁断面詳細図
縮尺1：15

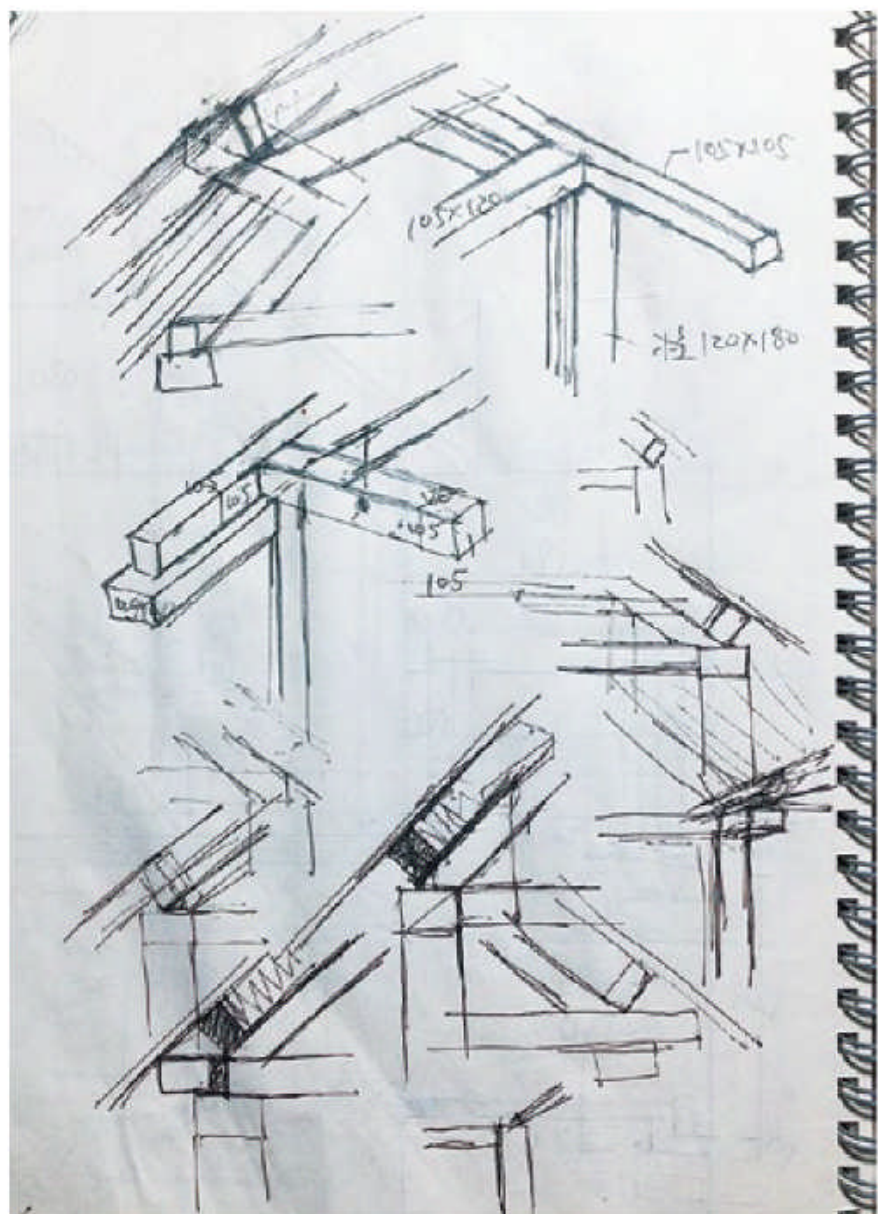
床梁・小屋梁・母屋レベル詳細伏図　縮尺1：15

コーナー部（短手方向）矩計図　縮尺1：15

コーナー部（桁方向）矩計図　縮尺1：15

柱と母屋と軒桁の近景。

門樋、スロープ周辺上部の庇と軒樋の納まり。

柱元と床桁周りの納まり。

母屋と桁回りの納まりを考えている初期段階のスケッチ。この段階で意匠と構造的な部材の寸法、断熱材や屋根材の種類と強度などを考えながら金物の納まりも同時に考えている。（宇野）

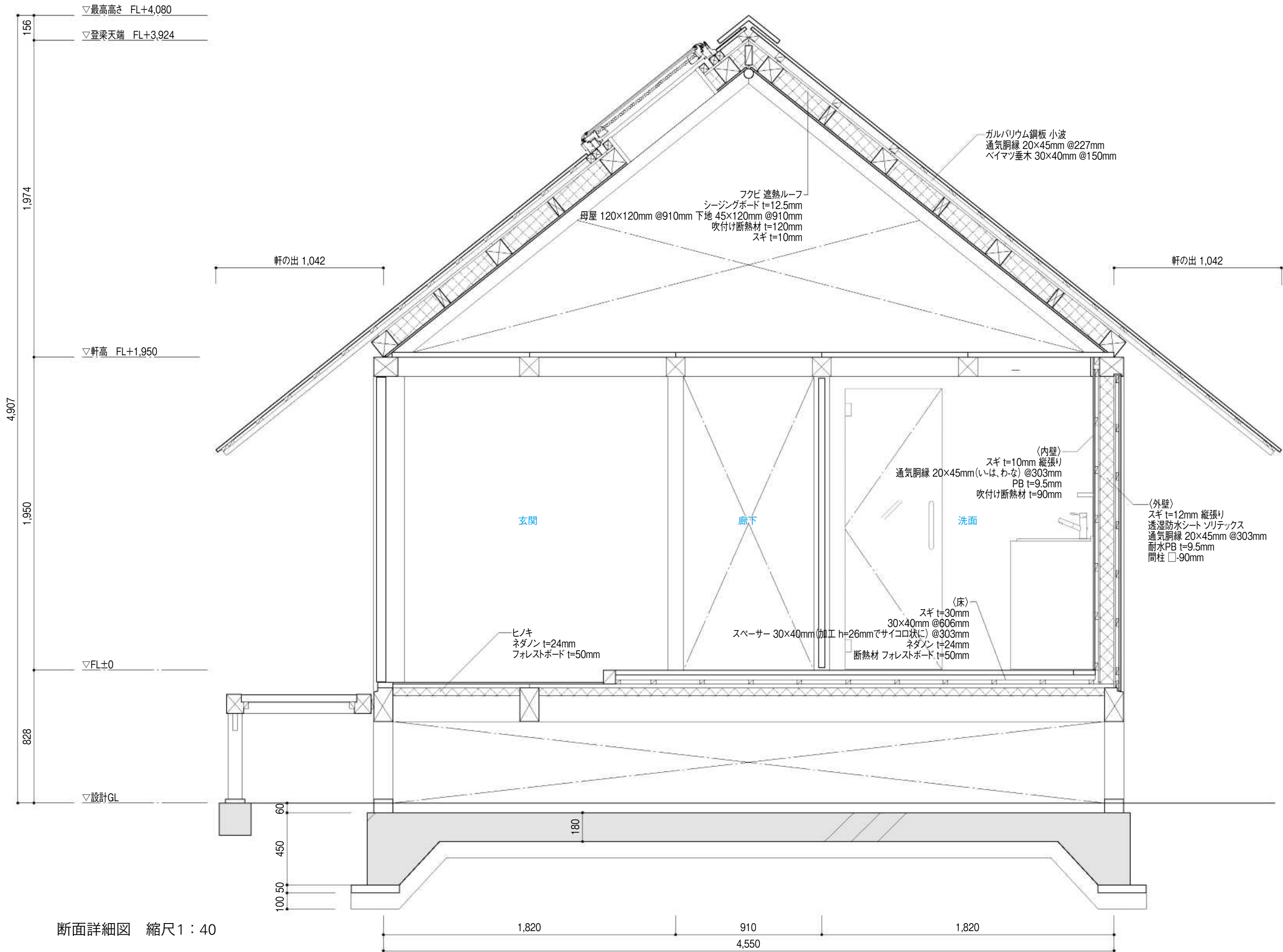
インサイト

建主との出会いは、いつものように突然のメールだった。しかし、いつもと違っていたのはその内容だった。それは私を知った経緯から家づくりのスケジュール、要望、予算など私の知りたいことが簡潔な文面の中にほぼ網羅されていた。そして、その時に私が抱いた最初の印象は、結局、最後まで変わらずにこの建築に生かされることとなった。それから1年、ふたりの間に交わされた約500通のメールによってこの建築は生まれた。

当初、土地探しに難航したが、ある日、複数の候補地に対して助言がほしいという内容のメールが届いた。その中のひとつが今回のこの敷地である。名古屋駅から東に車で30分ほどのところにあるこの地域は、およそ50年ほど前に住宅地として開発された市内では比較的古い住宅地である。大切にしたことは、出会いの時から終始変わらずに抱き続けた建主の印象をかたちにすることだった。それを言葉にすると「洗練」ということに尽きる。その手法として私が思い描いたものは、シンプルな構造、シンプルなディティール、シンプルなプラン、シンプルな素材。そして、伝統であった。

今回は竣工してすでに4年が経過しての取材であった。単身ということもあり、まだそれほど生活感が出ているわけではないが、建築というのは人の営みがあらゆる部分に染みつき馴染んでこその美しさである。まだそれまでには数年、いや数十年かかりそうである。（宇野友明）

リビング。天井と桁の間の隙間が奥行きをもたらす。

断面詳細図　縮尺1：40

左：玄関回り。玄関扉は内開き。正面の壁奥は浴室。軒はコストを抑えつつ薄く見える既製品の垂木（30×40mm）を使用。ハンドルは真鍮製のオリジナル。　右：東側外観とスロープ。防犯と外部からの視線を考慮して細長い窓とした。スロープの先が玄関。スロープは既製品のヒノキの胴縁を縦に重ね合わせて敷き詰めたもので、それらが収縮、変形することでできる凸凹が自然の滑り止めとなる。

よもぎ台の家

所在地／愛知県名古屋市
主要用途／専用住宅
家族構成／1人

設計

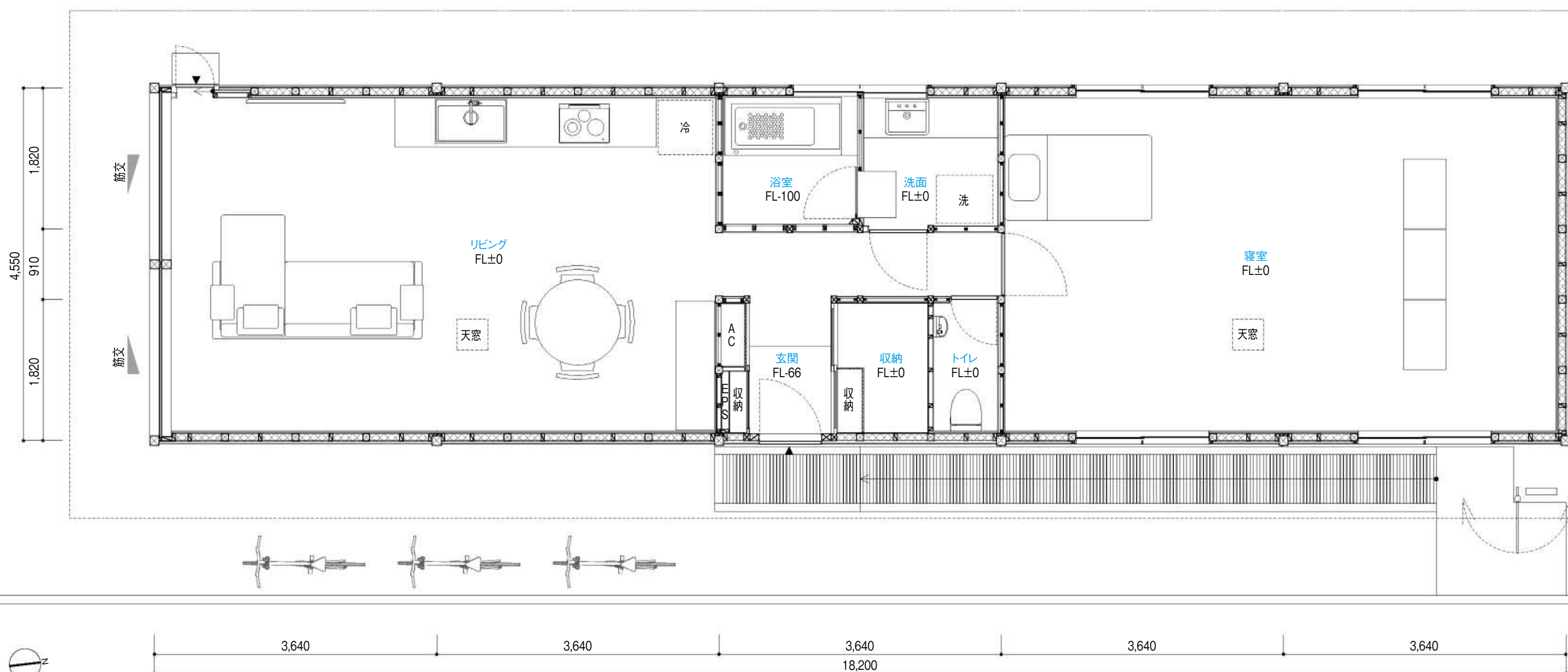
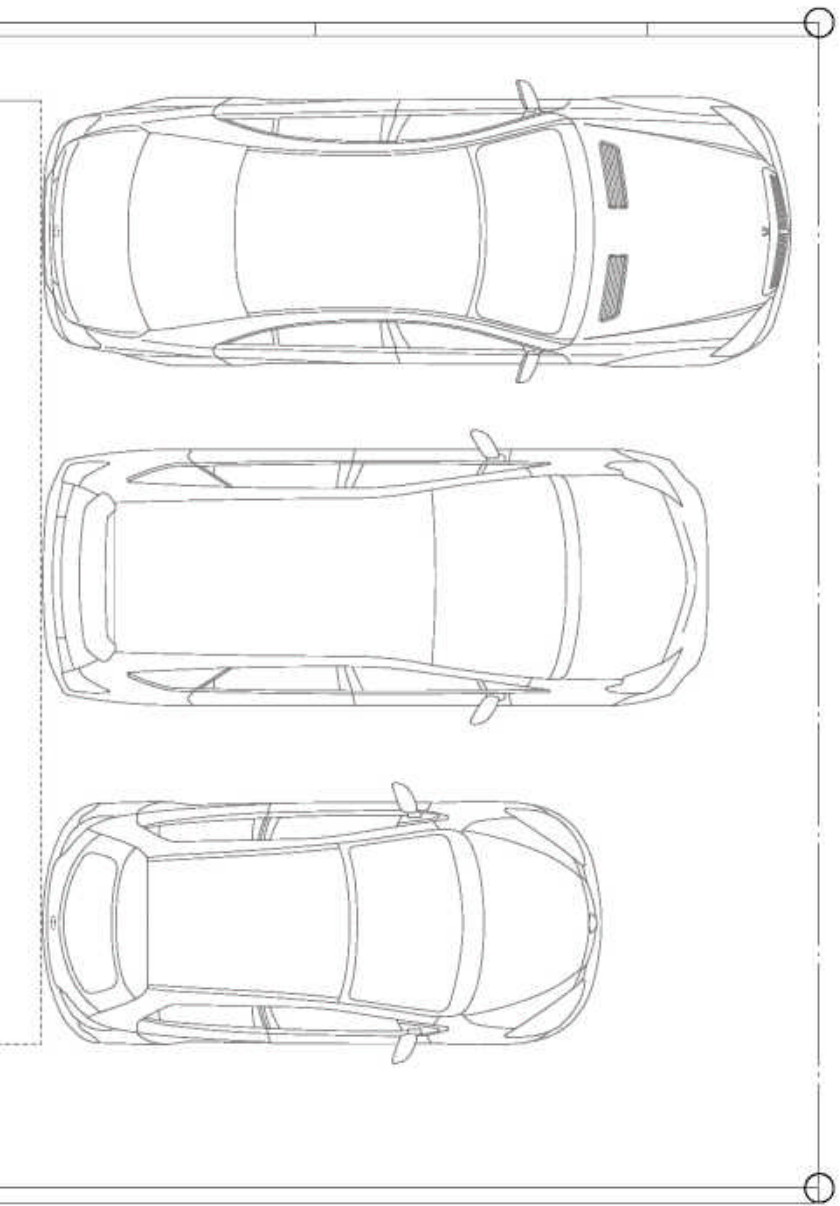
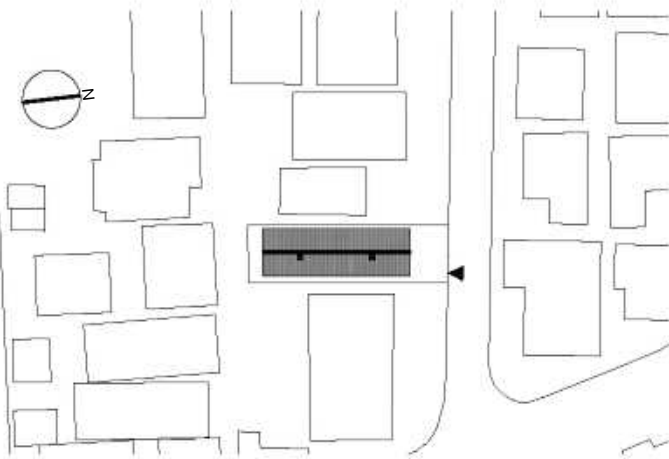
宇野友明建築事務所　担当／宇野友明
構造　LOG　担当／関山総一郎

施工

コンクリート工事　岡本建設
　担当／岩田尚喜
大工工事（内外造作）
　担当／竹口謙太郎　加藤聡
家具工事　竹村家具　担当／竹村秀行
木製建具工事　樋口建具店
　担当／樋口義幸
金物工事　monophonic metal works
　担当／杉本隆治
設備　水工房　担当／矢野正康
電気　タチ電機　担当／館正憲
外構・造園　櫻井造景舎　担当／櫻井靖敏
空調　ソウリン設備　担当／草島基倫

構造・工法

主体構造・構法　木造

配置平面図　縮尺1：100

基礎　べた基礎
規模
階数　地上1階
軒高 3,128mm　最高高さ 5,257mm
敷地面積　225.02m^2
建築面積　83.72m^2
（建蔽率 37.20%　許容 40%）
延床面積　82.80m^2
（容積率 36.79%　許容 80%）
1階　82.80m^2
工程
設計期間　2017年9月〜2018年1月
工事期間　2018年1月〜6月
敷地条件
地域地区　第一種低層住居専用地域　10m高度地区　法第22条区域　緑化地域　宅地造成工事規制区域　下水道処理区域　文教地区
道路幅員　7.97m（北側）　駐車台数　3台
外部仕上げ
屋根／ガルバリウム鋼板　小波板
外壁／スギ無垢板
開口部／天窓アルミサッシ
外構／コンクリート洗い出し
内部仕上げ
リビング　キッチン
床・壁・天井／スギ無垢板
厨房機器／
IHヒーター／三菱電機 CS-T34BFR
換気扇（シェード）／三菱電機 EX-20KJ6-BL＋オリジナルカバー
家具・照明／制作
建築金物／
シンク水栓金物／ MINTA JP369300
浴室
床・壁・天井／ FRP防水
照明／制作
建築金物／ドアノブ（ユニオン G5666-01-001-H300-W）ドア金物（綱島製作所 TTS-5004）
バスタブ／ cera CEY21580RV6
トイレ　洗面所
床・壁／スギ無垢板
天井／トライウッドパネル
家具・照明・建築金物／制作
便器／ TOTO ネオレスト CES9575
設備システム
空調　冷暖房方式／エアコン
換気方式／第3種換気方式
給排水　給水方式／給水本管接続
排水方式／公共下水道接続
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

配置図　縮尺1：2,000

オリジナルの金物。左：真鍮製のエイジング処理したリビングダイニングのブラケット。右：スチールの素地（黒皮）にオイル（アマニ油）で仕上げたスチール製のハンドル。上部のつまみは、内外から解錠できるスチール製の表示錠。

寝室からロフト越しにリビングダイニングの方を見る。

二心柱の家

House with Two Pillars
東京都杉並区

高塚章夫／Aaat
Akio Takatsuka／Aaat

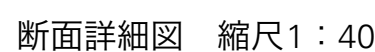
2階キッチンから見る。上下階を貫く2本の柱を軸にさまざまな高さにスラブを設け、段差による明確な分節と柱による曖昧な境界が、ワンルームの中に緩やかな領域をつくり出している。

ふたつの中心に展開する多層空間

2本の独立柱の周りに架かる計12枚の床をさまざまなレベルに配して空間を繋ぐことで、小さな内部空間に立体的な奥行きを生み出そうと試みた。矩形の平面の内側に独立柱を2本配置し、この二心柱と外壁で囲まれる6象限2層分の床面を、4つのレベルに設けた水平の梁（土台含む）に任意に架け渡すことで、多様なスケール感の小空間が数珠繋ぎに積層する。土間をもつ低い天井の玄関と高天井のアトリエが隣り合い、1階のホールと寝室は同じ広さで気積が大きく異なる。2階ホールはフラットな天井下にあり、一方隣のワークスペースは屋根まで吹き抜ける。低いキッチンは半層上げることで視界が階下に広がり、大屋根によっておおらかに包み込まれるリビング・ダイニングは上方に意識が向かう。加えて半屋外のようなインナーテラスや陽だまりの出窓・傾斜天井のロフトへと、空間が伸び縮みしながら緩やかに連続することで、さまざまな場所性を内包する全体がかたちづくられた。

構造体はすべて仕上げとして内部に現しとした。柱と間柱、梁と根太・垂木の強弱は空間の力学を視覚化し、架構の純粋さや力強さ・美しさがシンプルに顕在化した。またこの建築の小ささ故に、通常壁内に隠蔽される深さ10cm余りの僅かな空間が内部化することによる恩恵を最大化することができた。内部空間の拡張は、外との心理的な距離も縮めることとなり、さまざまな方角や高さに設けられた窓と相まって、家のどこにいても外の環境の微細な変化に意識が及ぶことになった。また敷地形状に合わせた平面グリットは、縦840mm、横940mmにチューニングし最適化しており、既知の均等モジュールにはない僅かな方向性が発現し、この建築にいっそうの広がりをもたらした。

立体的に柱梁が交錯し、内部がひだ状に広がる空間は、この家の住み手であるネコにとっても居場所をつくり出している。ヒトとネコの暮らしを等価に取り扱い、家具的な設えに頼らない建築空間の作法によって統合させることで、都市型の共生住宅のひとつのモデルが垣間見えた。また、汎用性の高い構造・工法でありながら、柱とそれを取り巻く床の配置のみによって、新たな体験を喚起する空間のポテンシャルを発掘するモデルを目指した。（高塚章夫）

断面詳細図　縮尺1：40

棟木下までの高さ1,400mmのロフト階。東西面の妻壁上部にはめ殺し窓を設け、隣家の隙間や屋根上空から光を取り込む。外断熱を施し、建物内部の構造体はすべて現しとしている。壁や天井のそれぞれ10cmほどの奥行きは空間を拡張すると同時に、間柱に板を渡せば収納スペースとしても活用できる。

ホール2からリビング・ダイニングを見る。ホール2とリビング・ダイニングの床高の差は645mm。スラブの隙間は収納となったり、窓を設けて上下階を視覚的に連続させたり、この住宅の住み手でもある猫だけの動線にもなる。

上：ホール1から階段を見上げる。ホール1は、梁下までの高さを1,830mmに抑え、落ち着いた居場所とした。　下：階段収納は一部に孔を穿って猫の通り道とした（ネコジャングル）。

アトリエ。玄関と連続する土間空間で、梁下までの高さ2,500mmの気積を確保し、中2階に飛び出している。

吹抜け
ロフト
吹抜け
吹抜け
吹抜け

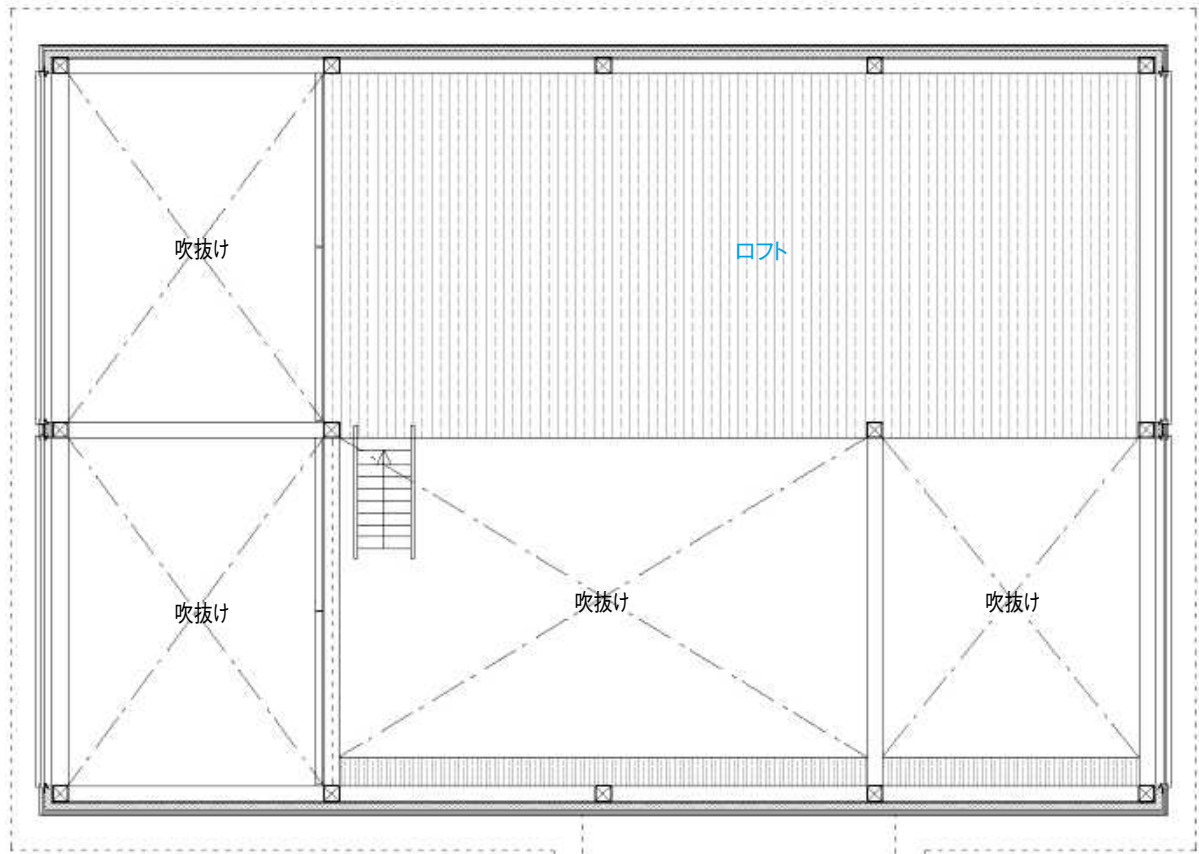
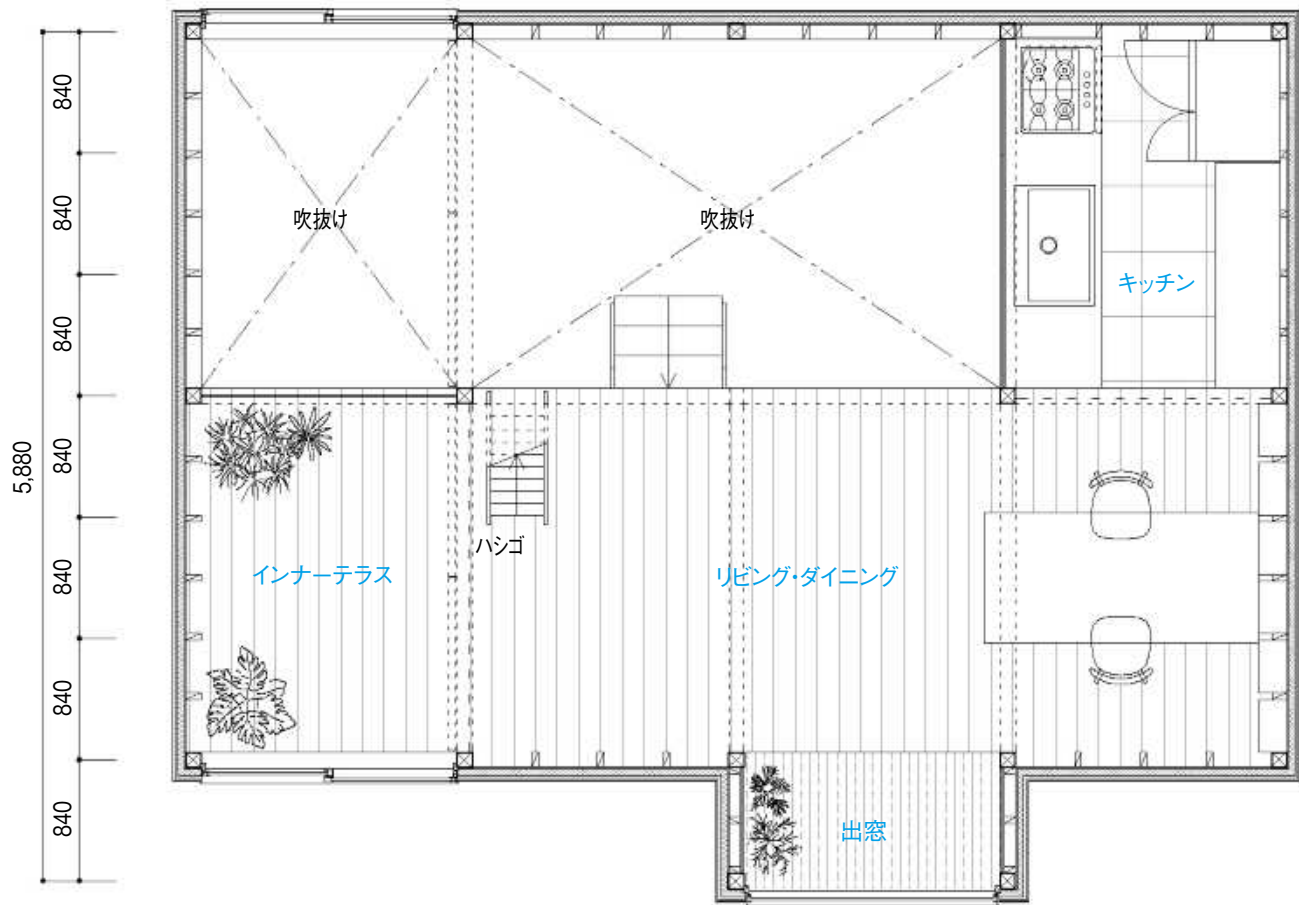
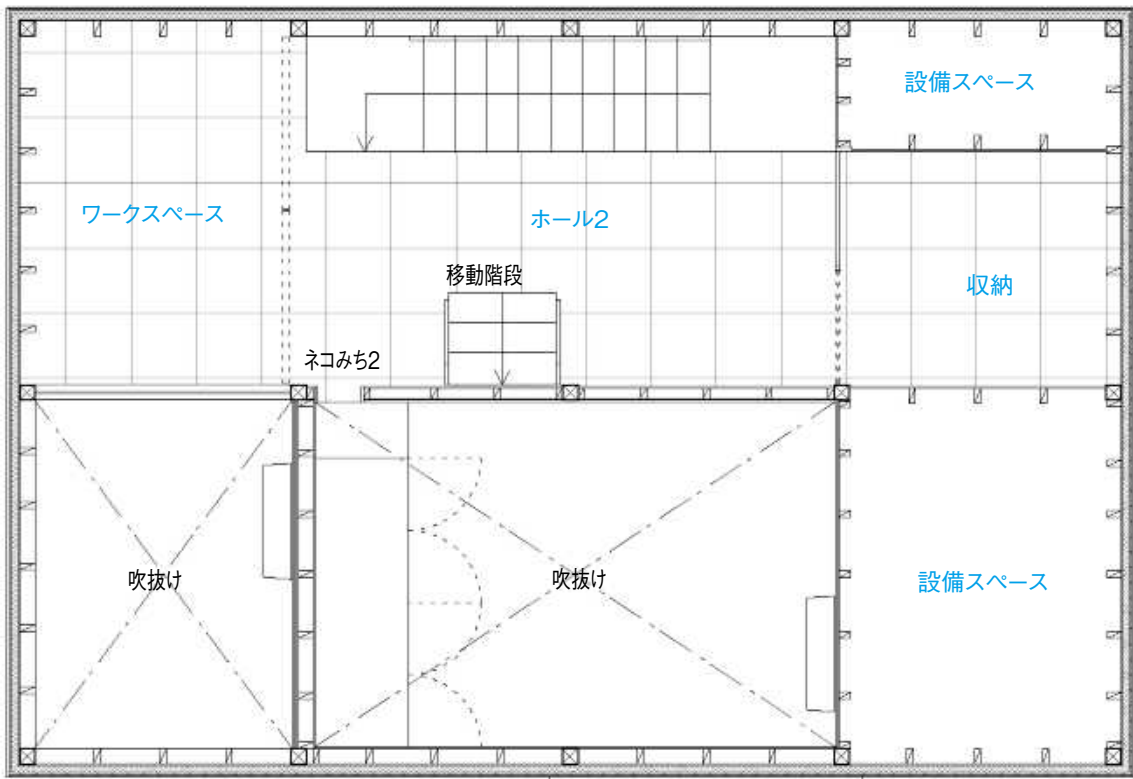
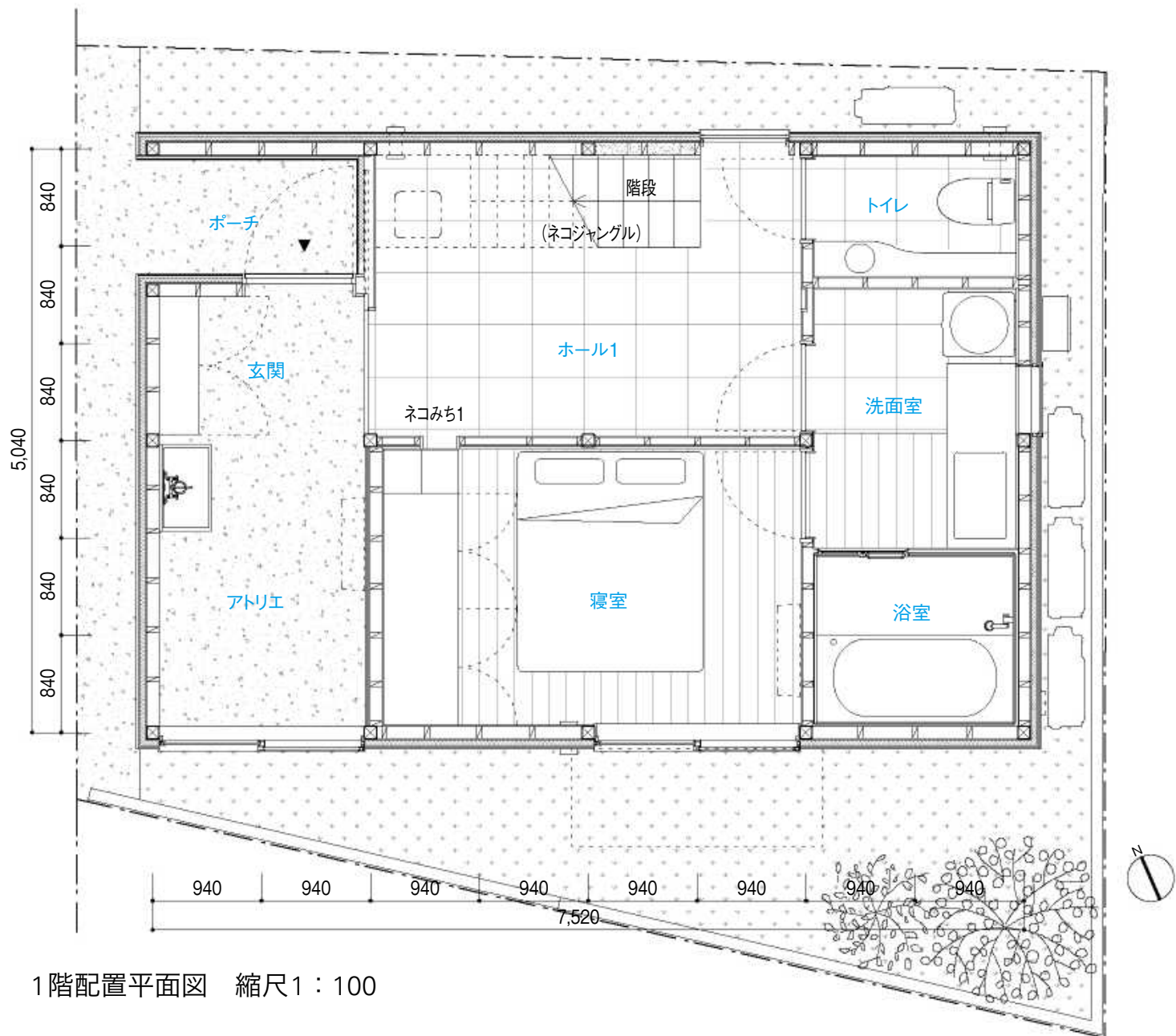
ロフト階平面図

吹抜け
吹抜け
キッチン
インナーテラス
ハシゴ
リビング・ダイニング
出窓

2階平面図

設備スペース
ワークスペース
ホール2
収納
移動階段
ネコみち2
吹抜け
吹抜け
設備スペース

中2階平面図

ポーチ
階段
(ネコジャングル)
トイレ
玄関
ホール1
ネコみち1
洗面室
寝室
アトリエ
浴室
940 940 940 940 940 940 940 940
7,520
5,040

1階配置平面図　縮尺1：100

2階南西側に位置したインナーテラスは、ガラス戸やブラインドで独立させ温室のようにもなる。窓の向こうの桜の大木を背景に、積極的に外部との関係をつくり出す半屋外の庭とした。

インナーテラスからホール2、リビング・ダイニングを見る。段差はシアタールームの特等席になる。

二心柱の家
所在地／東京都杉並区
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋猫2匹

設計
Aaat Inc. 担当／高塚章夫
構造　寺戸巽海構造計画工房　担当／寺戸巽海
設備　創環境設計　担当／波田野善政
照明　杉尾篤照明設計事務所　担当／杉尾篤

施工
青　担当／田中郁弥
木工事　工藤建築店　担当／工藤純平
家具　イノウエインダストリィズ
　担当／坂本有香

構造・構法
主体構造・構法　木造軸組構造
基礎　べた基礎

規模
階数　地上2階
軒高 5,157mm　最高高さ 7,022mm
敷地面積　65.93m²
建築面積　39.48m²
（建蔽率59.89％　許容60％）
延床面積　77.40m²
（容積率117.40％　許容150％）
1階　37.91m²　2階　39.49m²

工程
設計期間　2020年3月〜2020年2月
工事期間　2021年5月〜2021年11月

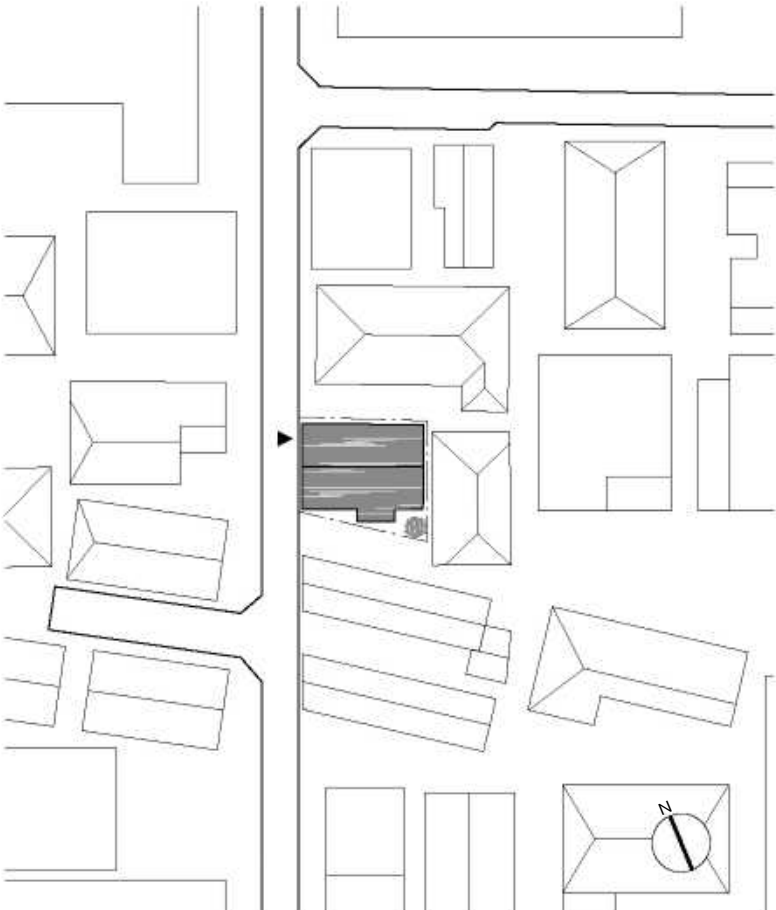
敷地条件
第1種低層住居専用地域　準防火地域　第1種高度地区　最高高さ制限10m　最低敷地面積60m²
道路幅員　西6.51m

外部仕上げ
屋根／ガルバリウム鋼板
外壁／ジョリパット
開口部／スチールサッシ　アルミサッシ
外構／コンクリート　砂利敷き　植栽

内部仕上げ
リビング・ダイニング
床／オークフローリング
壁・天井／構造躯体現し OS
キッチン
床／塩化ビニルタイル
壁／ステンレス張り
天井／構造躯体現し OS
厨房機器／
　食洗器／ Miele
　ガスオーブン／ BERTAZZONI
　ガスコンロ／リンナイ
　換気扇（シェード）／ toolbox
　家具／ラワン合板・ステンレス張り
　照明／ Hue　特注シェード
シンク水栓金物／ Kohler
寝室
床／オークフローリング
壁・天井／ PB AEP
家具／ラワン合板・メラミン張り
照明／ Hue
アトリエ
床／モルタル・防塵塗装
壁／構造躯体現し OS　有孔ボード張り
天井／構造躯体現し OS
家具／ステンレス流し
照明／ Hue　特注シェード
トイレ　洗面所
床／塩化ビニルタイル
壁／ PB AEP
天井／構造躯体現し OS
照明／ Hue　特注シェード
浴室
ユニットバス

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／第3種換気方式
　その他／ガス温水式床暖房
給排水　給水方式／上水道直結式
　排水方式／下水道直結式
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

敷地は奥に行くほど広がる。さらに南側には隣家の旗竿地のアプローチがあるため充分な空地が確保でき、建物を北側に寄せて配置することで南側を静かな庭とした。

配置図　縮尺1：1,000

西側全景。空に向かって高く開く。

中町の家

House in Nakamachi
東京都小金井市

石川素樹建築設計事務所
Motoki Ishikawa Architect & Associates

南西から見る。緑の残る、古くからある住宅地の角地に建つ。敷地の南側に駐車場を確保し、玄関前と西側の中庭に繋がる外壁部分にルーバー状の木製建具を設置。開閉により内外の距離を変化させ、羽の向きを変えることで光や風の加減を調整する。

土間から中庭方向を見る。左右の居室前も外土間とすることで、外部を緩やかに内部へと引き込む。本計画では板幅35mm、溝幅2.5mmの37.5mmを基準寸法とした溝付き薄壁パネルや900×1,800mmの壁天井の仕上げ合板、450×1,800mmの床合板といった寸法を製品化を前提として汎用的な900mmグリッドから導き規格化している。（石川）

街に奥行きをつくる佇まい

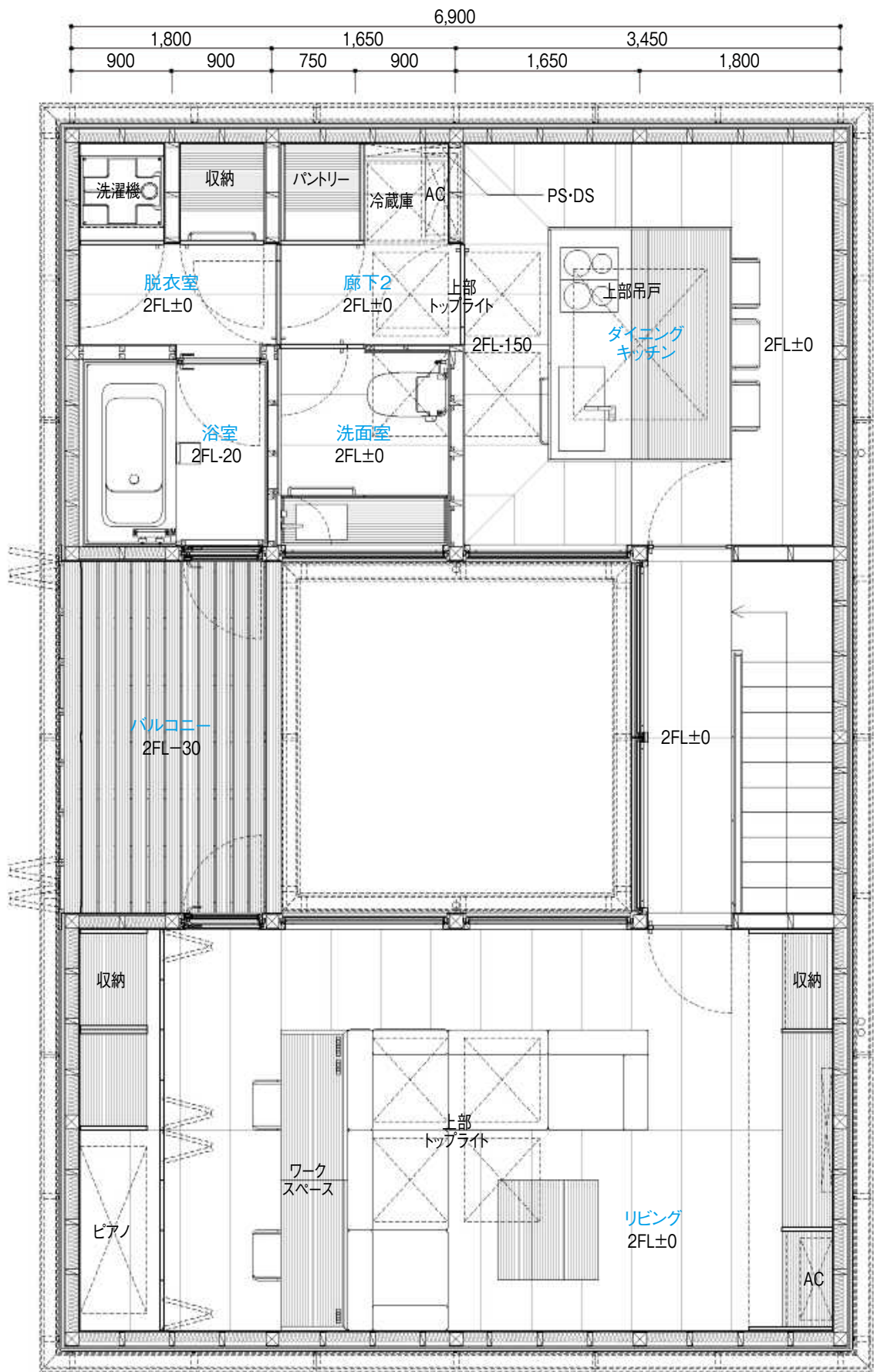
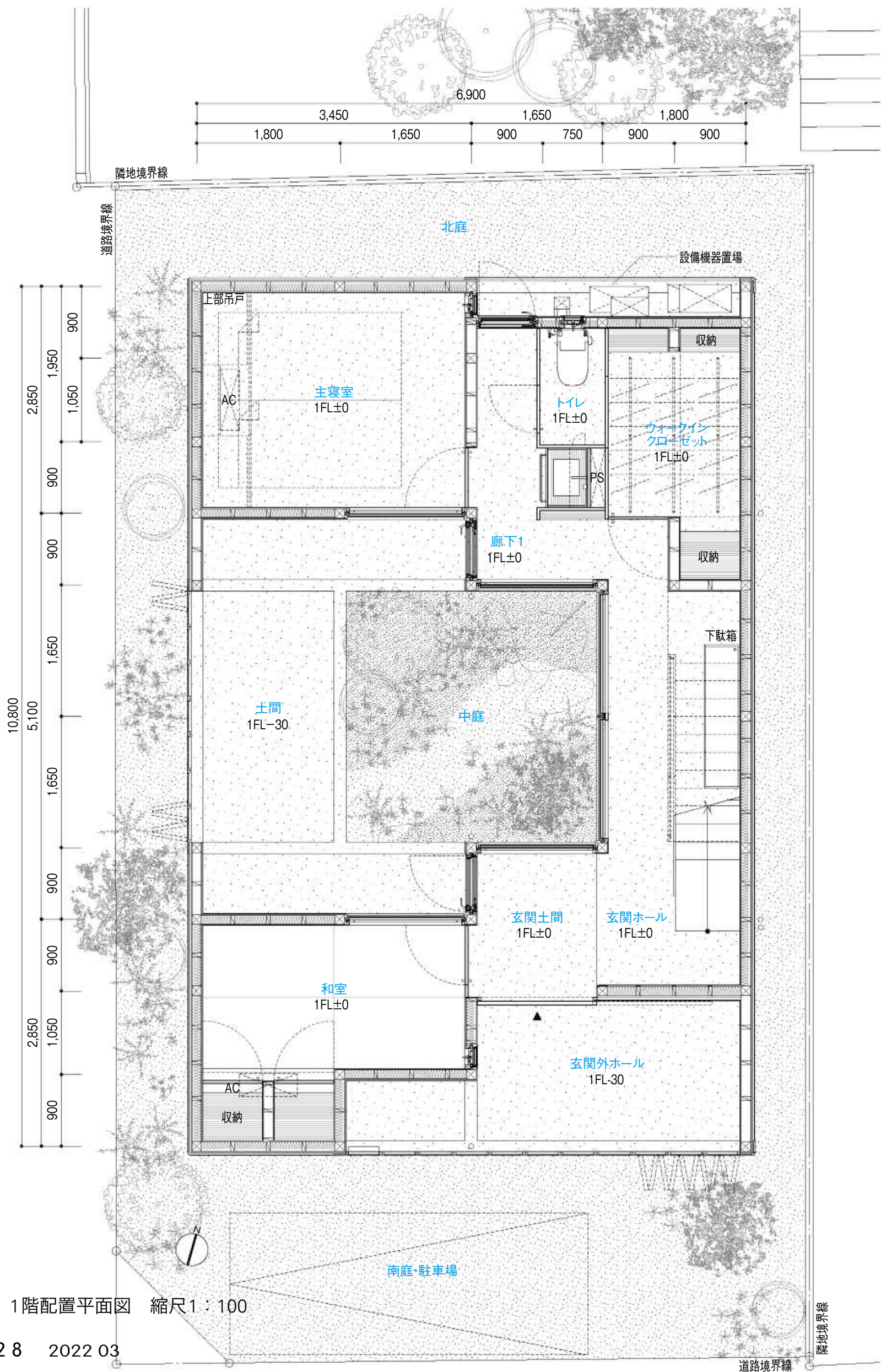
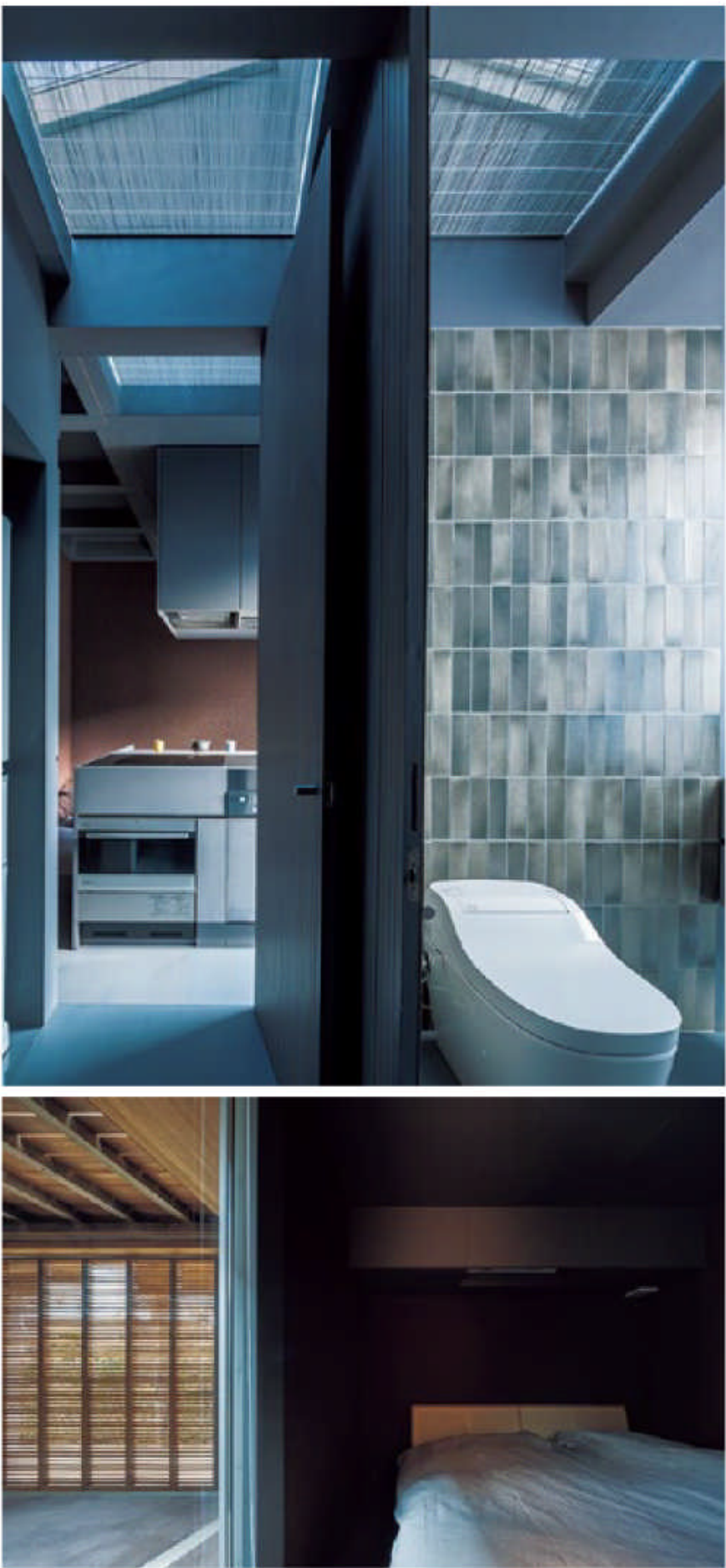
敷地は駅からほど近い高低差の大きい「はけ」と呼ばれる国分寺崖線を下った先にある。幅は狭いが緑多き道がそこかしこに通る、人と自然の距離が近い場所である。隣家に囲まれ、人や車の往来もそれなりにある中で、開くか閉じるかといった二項対立ではないあり方を模索した。

合理的なスパンのシンプルな在来木造とし、ヴォリュームを抑えた各室と、サイズや納まりを統一した開口部を碁盤の目のように平面方向と断面方向にも配置した。軒下のような中間領域の配置と開口部の位置、また内外全体を回遊できる動線を、グリッドを基調としたプランに内包させることで、落ち着いた光が入るプライベートな1階に対し、2階は高さ方向や方位の変化による光のグラデーションをより明快にとらえやすくした。また中庭に面して可動式ルーバー折戸を入れ、建具を開けると外部と中庭は繋がり、羽だけ開ければ視線は切りながら光と風を取り入れ、夜には外に明かりが漏れるようにしている。これらの光や影の変化とプランの整然性や連続性とが相まって、外部が内部に入り込んでいるような、あるいは内部の一部のような外部といった曖昧さが自然に感じられ、簡素な矩形でありながら奥行きのある佇まいとなった。

また、こうしたルーバーのほかに、壁床天井材や水回り、家具、建具、照明、小さなパーツまで、手仕事と工業製品の間のようなオリジナル製品をメーカーと開発し、この建築に組み込んでいる。このことにより、画一的にはならずに素材感の統一による連続性を表現しつつ、各製品は同一規格で難解な納まりを要しないためプランの整然性に見合い、さらには施工の簡素化やクオリティの向上を図ることができている。これらの製品群は「S2M」という名前でリリースされ、今後実際に販売される。　　　　（石川素樹）

上：洗面室とダイニングキッチン。洗面室の壁面タイル、テーブルに厨房機器、シンクを組み込んだダイニングキッチンも制作で製品化される。
下：主寝室。

1階配置平面図　縮尺1：100

2階平面図

リビング。トップライトを組み込んだ格子天井には光の陰影が生まれ、中庭に面する開口やデッキのルーバー越しにも多様な光を取り込む。

玄関ホール。和室の入口と隣り合うガラス建具を開けると中庭に面する外土間となり、ルーバー建具と羽の開閉で土間部分が内部から半外部、外部へと変化する。

左：玄関ホール。階段下の収納はステンレス製で湾曲した脚はソファや椅子の脚、キッチンのタオルバーと同じ規格で壁床天井規格にも合うようになっている。これらも製品化される。階段手摺りとササラ状の振れ止めも製品化パーツ類と合わせて同じφ＝16mmで、段板と方杖を厚さ6mmのスチールとし、素材感を統一するためステンレスコートを塗布している。
右：2階階段横の廊下から見る。中庭に面するガラス建具を繋ぐ壁面に照明を設置（照明も製品化）。反射光が外部に映り込むように計画している。

断面詳細図　縮尺1：75

中町の家

所在地／東京都小金井市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦

設計
石川素樹建築設計事務所　担当／石川素樹
構造　mono　担当／森永信行
造園　zoen　担当／蓑田真哉

施工
二宮建設　担当／齋藤文美雅
大工　二宮建設　担当／南雲修
プレカット　高英　担当／黒澤聡
基礎　小林土木　担当／小林勤
板金　東京サービス　担当／宮田了公
金属製建具　ウエハラトーヨー住器
担当／河本謙一
金属　戸崎鐵工所　担当／戸崎格
塗装　中野コーティング　担当／小町忠明
左官　大道左官　担当／大道勝次
設備　村瀬工業　担当／村瀬勝彦
電気　峯岸電設　担当／峯岸俊典
家具・建具・照明・仕上材　S2M
担当／山本研
造園　zoen　担当／蓑田真哉

構造・構法
主体構造・構法　木造在来構法
基礎　べた基礎

規模
階数　地上2階
軒高 5,700mm　　最高高さ 6,500mm
敷地面積　129.52m²
建築面積　63.63m²
（建蔽率49.13％　許容60％）
延床面積　102.64m²
（容積率79.25％　許容80％）
1階　44.95m²　2階　57.69m²

工程
設計期間　2020年4月〜10月
工事期間　2021年2月〜11月

敷地条件
地域地区　法第22条区域　第1種高度地区
道路幅員　西3.03m　南 4.00m
駐車台数　1台

外部仕上げ
屋根／カラーガルバリウム鋼板 t=0.35mm 竪はぜ葺き
外壁／モルタル t=20mm リシン吹付け　S2M スギ t=5mm、20mm
開口部／アルミサッシ　S2Mルーバー建具
外構／溶岩砂利敷き

内部仕上げ
玄関　玄関ホール　廊下1　ウォークインクローゼット　主寝室　和室
床／モルタル t=30mm 木ごて仕上げ
畳 t=15mm（和室）
壁／ PB t=9.5mm リシン吹付け　PB t=9.5mm S2Mラワン合板 t=2.5mm、5.5mm　S2M タイル t=15mm（洗面台部）
天井／ PB t=9.5mm　S2Mラワン合板 t=2.5mm
階段／制作　Stステンレスコート塗装
便器／パナソニック XCH1411WSS
照明・建築金物・壁パネル・下駄箱・洗面台／ S2M

リビング　廊下2　ダイニングキッチン　洗面室　脱衣室　浴室
床／ S2Mフローリング t=12mm
壁／ PB t=9.5mm リシン吹付け　PB t=9.5mm S2Mラワン合板 t=2.5mm、5.5mm S2Mタイル t=15mm（洗面室・浴室）
天井／ PB t=9.5mm　S2Mラワン合板 t=2.5mm　S2Mスギ t=5mm（浴室）
便器／パナソニック XCH1411WSS
ハーフバス／ TOTO PYP160CCJK
照明・建築金物・壁パネル・ソファ・キッチン・ダイニングテーブル・洗面台／ S2M

設備システム
空調　冷暖房方式／ルームエアコン
換気方式／第三種換気方式
給排水　給水方式／公共上水道直結
排水方式／公共下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

玄関外ホール。

各業種を跨いで連携し、ひとつのメーカーで統合・展開する新ブランド「S2M」は、SIMPLEな形状と仕組み、組合せ可能な統一したMODULE、素朴で多様なMATERIAL、というひとつのSとふたつのMをコンセプトとしている。各地域の熟練した技術者と協働し、普遍的な素材を用いて実用性と意匠性を兼ね備えた製品を、生産性の高い仕組みにより廉価に提供することを目指している。（石川）

南側全景。建具を開け放つと奥に中庭が見える。軒を兼ねた木製の軒樋カバーも製品化される。

配置図　縮尺1：2,000

特集：木造の魅力

杉の家

Cedar House

兵庫県神戸市

吉村理建築設計事務所

Tadashi Yoshimura Architects

南東側全景。山間の住宅地を抜ける坂道の内側に建つ。山に廃棄されたスギ大径木から切り出される45mm厚板で組まれた2種類の板壁構造体（板壁A、B）で架構を支える。建物外周は1間幅の板壁Aが囲い、その間に外部開口を設けている。

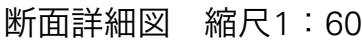
建物中央を貫き縦動線を兼ねた幅910mm、高さ約8,500mmの吹抜け廊下。吹抜け廊下を軸に、4つの床レベルのスキップフロアをつくる。夏は換気装置として機能し、冬は大きなガラス面が集熱装置として働くことで建物全体の快適性を保つ。

キッチンからダイニング、さらに奥に街並みを望む。下階は子供部屋やリビングといった比較的賑やかな居場所、上階はラウンジや夫婦の寝室がある落ち着いた居場所で、ダイニングや水回りが置かれた階層が吹抜けを介し、上下階と連続する。

リビングから3つの子供部屋を見る。45mm厚の筋交いで貫を挟みビス止めした透過性のある板壁Aが、空間を緩やかに分ける。機能に合わせて天井高も異なり、リビングは2,260mm、子供部屋は3,360mm。

ダイニングから吹抜け廊下越しに上にラウンジ、下にリビングを見る。手前に板壁B、その間の奥に板壁Aが見える。板壁A、Bにより階を跨ぐ大きな外部開口を実現しつつ周囲からの視線を調整する。

右手にリビングを見る。廊下の床は磁気質タイル貼り。

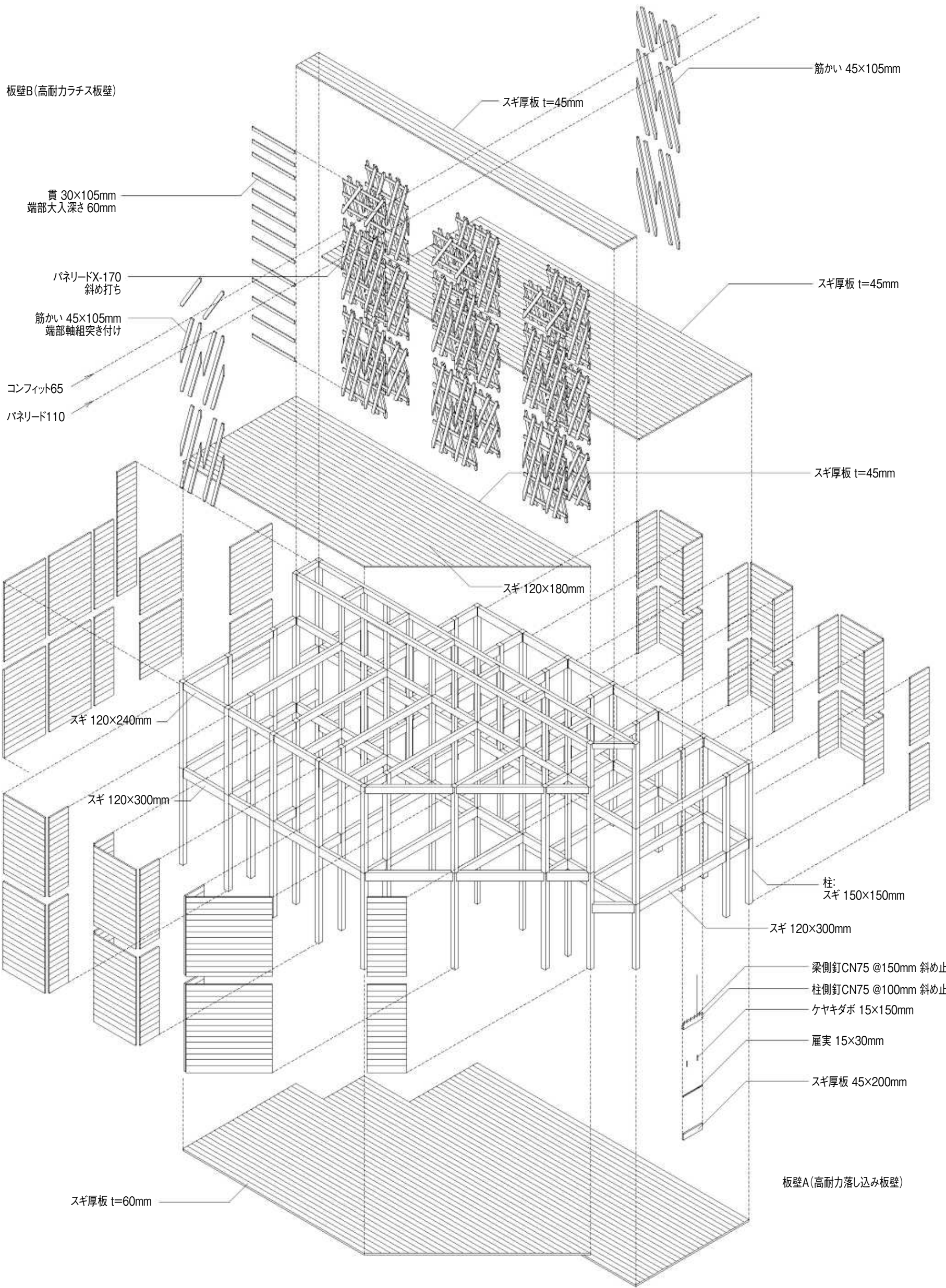
断面詳細図　縮尺1：60

山に捨てられたスギ大径木を活かす

奈良県は、戦前から植林された樹齢100年を超える大径木スギ人工林の蓄積量が極めて豊富である。しかしここ30年の間に、すべての材を余すことなく搬出できる、5人程度でチームを組み山の上に架線を張る「架線集材」から、高値で売れる1番玉や2番玉を厳選し1本単位で搬出するひとりでも作業可能な「ヘリ集材」に移行した。この変化によって売る価値がないと判断された残材ではあるが径の大きなスギ丸太が数多く山に放置されたままとなっている。この大量のスギ廃材に価値が生れ有効活用され山の風景を変えたい。

この建築は、集材、製材、加工場のある吉野から車で2時間程度の神戸市の住宅造成地に建てられた夫婦と子供3人のための住居である。上下階で静かな大人のための場所（ラウンジ）と賑やかな子供のための場所（リビング）とを分け、ダイニングキッチンを両者の間に挟んでいる。この3つのレベルに神戸港を一望できる屋上階を加え、計4つの床レベルをつくり、真ん中に設けた越屋根をもつ幅半間の細長い吹抜け廊下がそれらを串刺しにしている。廊下は動線集約ゾーンであると同時に、夏は卓越風から形状決定された越屋根が巨大な換気装置として、冬は大きなガラス面が巨大な集熱装置として働く。

刻みを少なくし大きく材を取ることで、大きな節や虫食いの跡という欠点を解消した、大径木廃材から切り出される45mm厚板で組まれた板壁A、Bで構成された汎用性の高い単純な架構である。壁以外の床、屋根もすべて45mmと60mm厚に切り出したスギ厚板でつくられた。外周はコの字型に組んだ1間幅の板壁Aを2間ピッチで配置し、内部は板壁Bを吹抜け廊下の両脇にAと同じく1間幅2間ピッチで並べ、その間を構造とは切り離された雑壁や開口部で充填している。板壁Aは200mm幅の大判厚板をダボで繋ぎ、軸組との間をビス止めすることで、構造用合板と同等の高い壁倍率をもつ落とし込み板壁である。告示1100号の壁倍率の向上を目的として、稲山正弘研究室で予備試験を実施した後、建材試験センターにて本試験を行った。板壁Bは同研究室で実験、開発している間柱程度の汎用製材のビス止めだけで簡単につくることができ、高耐力を発揮するラチスである。

需要がなければいつまでも大量の大径廃スギ材は山に放置されたままである。工場加工、パネル化、プレカットとの調整など数多くの課題を解決していきたい。　（吉村理）

板壁B（高耐力ラチス板壁）
貫 30×105mm 端部大入深さ 60mm
パネリードX-170 斜め打ち
筋かい 45×105mm 端部軸組突き付け
コンフィット65
パネリード110
スギ厚板 t=45mm
筋かい 45×105mm
スギ厚板 t=45mm
スギ厚板 t=45mm
スギ 120×180mm
スギ 120×240mm
スギ 120×300mm
柱: スギ 150×150mm
スギ 120×300mm
梁側釘CN75 @150mm 斜め止め
柱側釘CN75 @100mm 斜め止め
ケヤキダボ 15×150mm
雇実 15×30mm
スギ厚板 45×200mm
板壁A（高耐力落し込み板壁）
スギ厚板 t=60mm

アクソノメトリック

3点提供：吉村理建築設計事務所

上：奈良県にある集材地。多くの集材地で大径木が捨てられている。　中：板壁に用いるスギ材にダボ穴を開ける様子。下：施工風景。

ルーフテラス。塔屋の越屋根は、坂下から吹き上がる卓越風を元に換気を考慮し形状を決定。

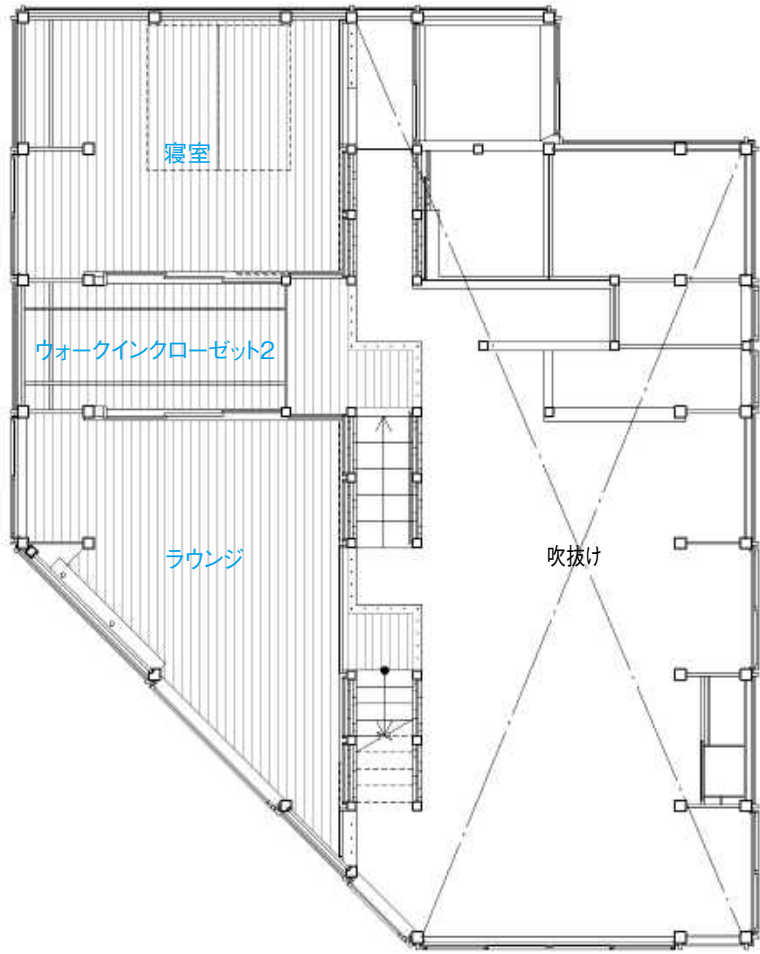
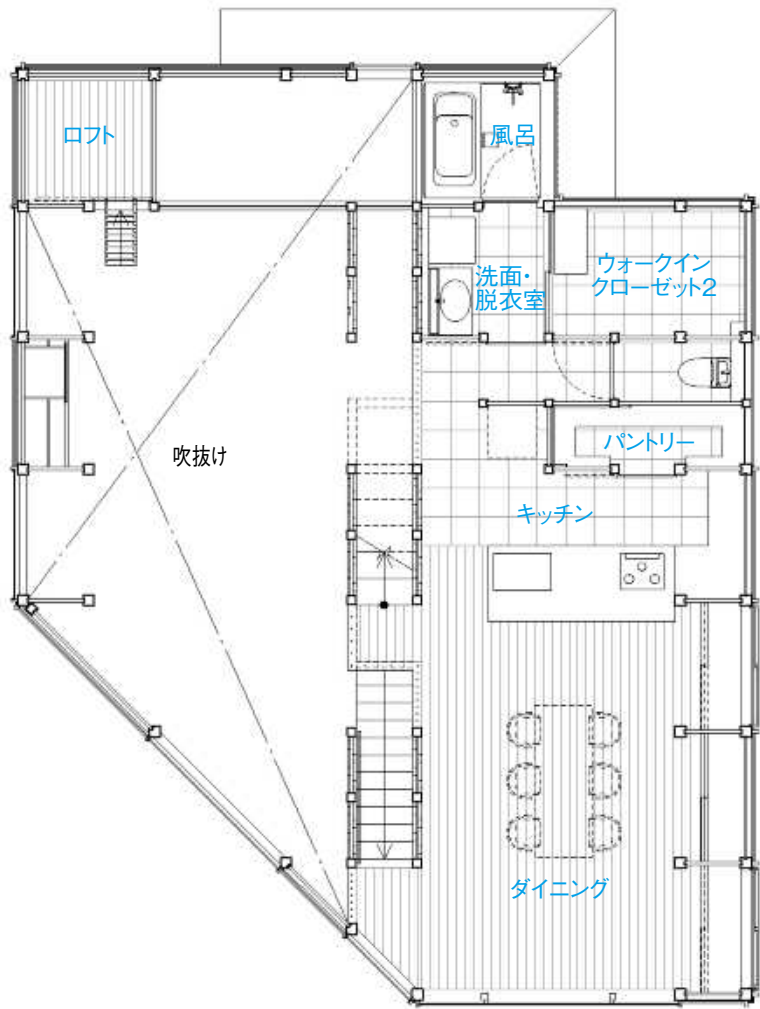
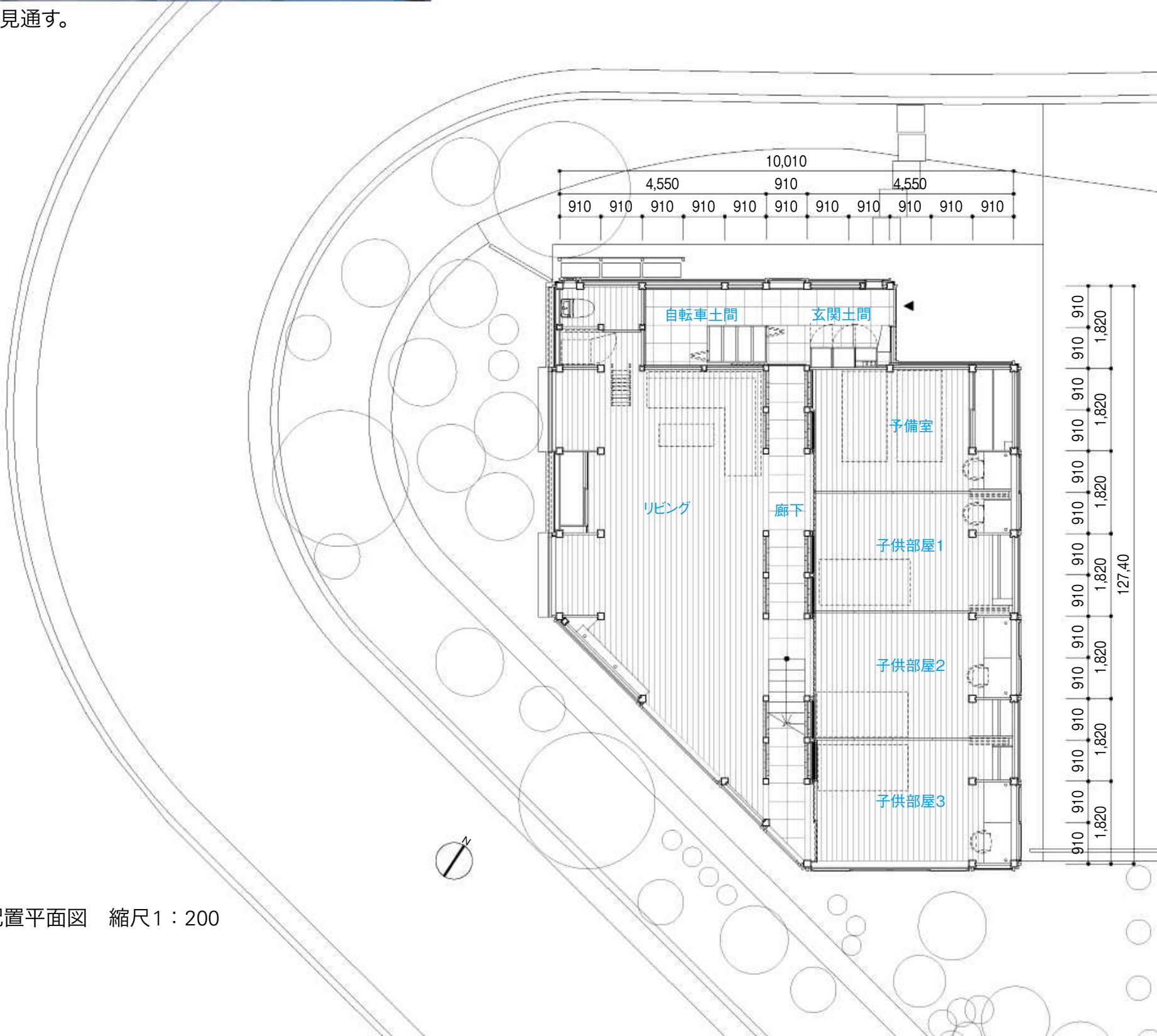
北西側近景。吹抜け廊下を見通す。

寝室
ウォークインクローゼット2
ラウンジ
吹抜け

2階FL＋1,100mm平面図

ロフト
風呂
洗面・脱衣室
ウォークインクローゼット2
吹抜け
パントリー
キッチン
ダイニング

2階平面図

自転車土間
玄関土間
予備室
リビング
廊下
子供部屋1
子供部屋2
子供部屋3

1階配置平面図　縮尺1：200

杉の家

所在地／兵庫県神戸市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供3人

設計
吉村理建築設計事務所　担当／吉村理
　小西健陽
構造監修　ホルツストラ　担当／稲山正弘
　東京大学稲山正弘研究室
設計補助　ナカオ建築設計舎　担当／中尾敏也

施工
松彦建設工業　担当／田中秀弥
大工棟梁　谷山政徳
製材所　阪口製材所　担当／阪口勝行
屋根　寺井板金　担当／寺井顕司
建具　浅山建具店　担当／浅山雅夫
家具　家具工房BROTO　担当／橋本龍児
電気　タナカ電機　担当／田中秀明
塗装　ハウジングペイント馬場　担当／馬場久和
外構　上西左官工業　担当／高田博和

構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　べた基礎
規模
階数　地上2階
軒高 6,950mm　最高高さ 8,685mm
敷地面積　368.83m²
建築面積　107.66m²
（建蔽率29.19%　許容30%）
延床面積　211.18m²
（容積率57.26%　許容80%）
1階　107.66m²　　2階　103.52m²
工程
設計期間　2019年4月〜2020年3月
工事期間　2020年4月〜2020年11月
敷地条件
風致地区　宅地造成工事規制区域　第1種高度地区
道路幅員　南北西6.00m　　駐車台数　2台
外部仕上げ
屋根／ガルバニウム鋼板竪はぜ葺き
外壁／スギ下見板（一部ガルバニウム鋼板小波板）
開口部／アルミ樹脂サッシ　木製框戸
外構／植栽　コンクリート
内部仕上げ
リビング　予備室　子供部屋1〜3　廊下
床／タモフローリング（廊下のみ磁器質タイル400mm角リクシル）
壁／スギ落し込み板壁 t=45mm　ラチス板壁 t=45mm　一部シナベニア t=6mm
天井／スギ厚板 t=60mm
照明／ DAIKO　磁器製ソケット
自転車土間　玄関土間
床／磁器質タイル400mm角
壁／スギ落し込み板壁 t=45mm
天井／スギ厚板 t=60mm
家具／制作
ダイニング　キッチン
床／タモフローリング（キッチン一部磁器質タイル400mm角）
壁／スギ落し込み板壁 t=45mm　ラチス板壁 t=45mm
天井／スギ厚板 t=45mm
厨房機器／トーヨーキッチン
食洗器／リンナイ RKW-601C-SV
ガスコンロ／リンナイ RB71W23L10RSTW
換気扇（シェード）／ TRUFO-B90C-92Z
照明・シンク水栓金物／トーヨーキッチン
浴室
床／ハーフユニットバス TOTO tipe0
壁／磁器質タイル400mm角
天井／ FRP防水 塗装
洗面脱衣所　トイレ
床／磁器質タイル400mm角
壁／スギ落し込み板壁 t=45mm　ラチス板壁 t=45mm
天井／スギ厚板 t=45mm
家具／制作
便器／ LIXIL アメージュ
洗面カウンター／デュポンコーリアン
洗面用水栓金物／ハンスグローエ
設備システム
空調　　暖房方式／エアコン　床暖房
冷房方式／エアコン
換気方式／第3種換気
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器
撮影／新建築社写真部

配置図　縮尺1：2,000

西側夕景。

NIKAIDO

神奈川県鎌倉市

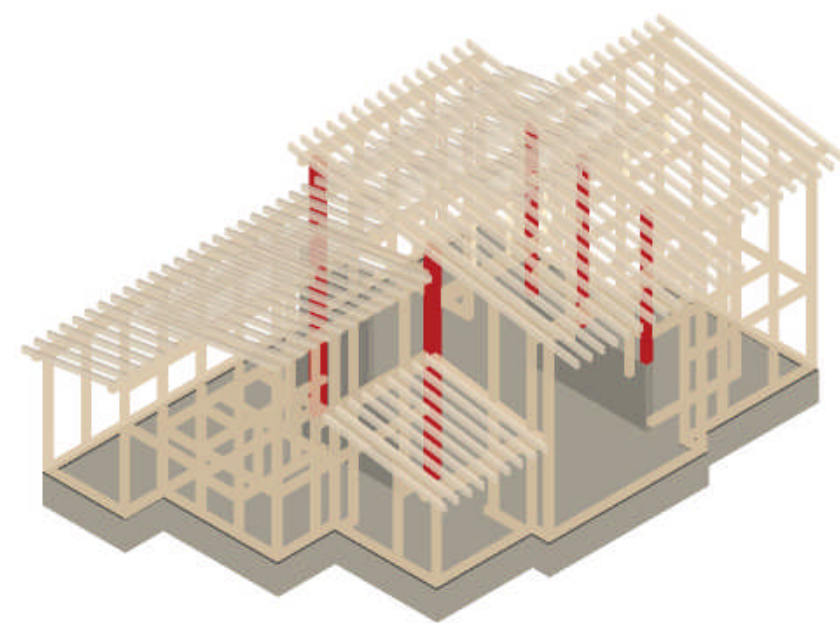
MORIYA AND PARTNERS

リビング・ダイニング。住宅が密集する旗竿敷地に建つ。生活の場だけでなく、ボディケアサロンの店舗や在宅ワークとしても活用するため、空間を小分けにすることが求められた。敷地中央に吹抜けをもつ大きなヴォリュームと、そこに取り付くようにに小さなヴォリュームを配置することで多用途にも対応できる場を生み出す。

リビング・ダイニングからベッドルーム側を見る。中央の吹抜けの構造体に対していくつもの構造体が下屋のように取り合い、架構にズレが生まれる。そのズレを増幅させるように、一般的な規格とは異なる寸法の開口部や建具を制作。右の930×2,700mmの扉からベッドルームにアクセスする。

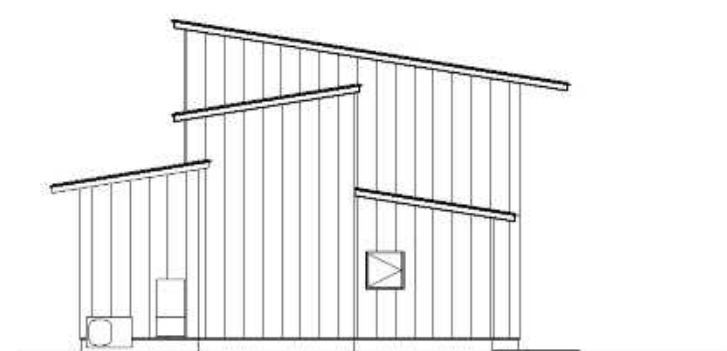
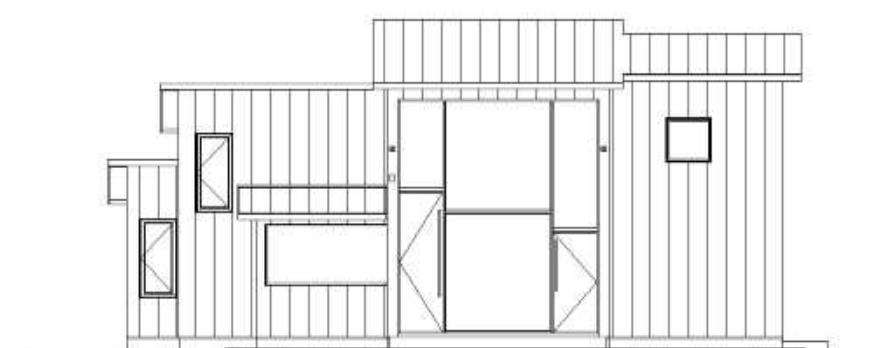
リビング・ダイニングからゲストルーム側を見る。マッサージの施術室にもなるゲストルームの床高は、リビング・ダイニングと緩やかに繋がるよう1,580mmの差を設けた。ゲストルーム下は収納スペースとし、ワークスペースからアクセスする。カラーステインで色ムラを出して着色した正面のRC壁は、主体構造から切り離されており、室温を安定させる蓄熱帯として機能している。

ベッドルーム。両開き戸を介してリビング・ダイニングの吹抜けと連続する。

リビング・ダイニングからキッチンを見る。基礎から立ち上げた高さ1,200mmのRC腰壁（右下）は、通し柱を支えると同時に日差しを蓄熱する。リビング・ダイニングの天井高は4,015～4,880mm。

構造アクソノメトリック

ズレる力を架橋する頑強な柱

この建物は、柱・梁・床・屋根に平面的・立面的なズレが存在する。屋根面で一体となったリビング・ベッドルームのメイン構造に、ニタリー・キッチン・ウォークインクローゼット、ゲストルーム、ワークスペースの3つのサブ構造が下屋のように取り合っている。3つのサブ構造は屋根面の取り合う位置が異なり、さらにゲストルームは2階部分も存在する。これらのサブ構造はメイン構造のリビングに取り合っているが、そのリビングは吹抜けとなっており、各構造間に力の伝達するために、リビングには頑強な通し柱を設けており、ひとつのメイン構造と3つのサブ構造が一体となるようにしている。

（野村圭介）

北西側立面図

南東側立面図　縮尺1：250

断面詳細図　縮尺1：50

ワークスペース。天井高1,955〜2,315mmの落ち着きのある居場所。

ゲストルーム。間仕切りの引き戸は、開いた時にRC壁の幅に収まるように制作。

空間に広がりを生むズレとムラ

鎌倉の市街地に建つ住宅である。住まい手の夫妻は東京都心に暮らしていたが、伝統的な街並みに惹かれ鎌倉に移り住むことにした。夫は新型コロナウイルスの流行により在宅勤務が多くなり、妻は移住をきっかけに自宅でボディケアのサロンを開業することになった。プライベートな居場所としての住宅でありながら職場や店などのパブリックな要素が入り込むため、空間を物理的に分けることができる境界線を複数設ける必要性が生じた。さらにコロナ禍の状況も加味して、限られた気積をさらに細かく分割しなければならないことが大きな課題となった。

敷地は分譲されたコンパクトな旗竿地で、密集した住宅地ではあるが南東側に緑地帯が残っており視線の抜けがある。リビング・ダイニングは公共性が高くなるので吹抜け空間とし、緑地帯の借景を取り込む大きな開口部を設けることで許容力のある空間とした。建物の平面構成は限られたスペースを有効に使うため、リビング・ダイニングをハブスペースとし、房状に居室を配置することで廊下を用いない計画としている。それぞれの居室の大きさと形状は、部屋の用途と部屋同士の関係性、周辺環境との繋がりを考慮して最適化しており、結果的に平面的、断面的なズレを生じさせている。さらにリビング・ダイニングからその輪郭線が見えるようにし、基礎、柱、梁、枠、建具などの仕上げ線を意図的にズラすことで強調した。また仕上げ材は、職人が釘で直接留めつけ、塗装も下地の特性が出るものを施すことでムラを隠さないようにしている。

一般的な建築の作法として統制の取れない線や要素は排除してしまうが、この住宅ではズレとムラによる完結しないものを意図的に表現することで仕切りの奥やズレ線の先、物体の深層に想像力が働く効果をもたらし、空間に広がりと奥行きを生み出すことを目指した。　(森屋隆洋)

屋根:
ガルバリウム 縦ハゼ葺き
遮熱ルーフィング
構造用合板 t=12mm
垂木 60×120mm @300mm
セルローズファイバー断熱材 t=180mm

天井:
ラワン合板 t=12mm+木製竿縁 t=12mm OS
木製天井下地
気密シート

壁:
モイスNT-T6
真鍮釘打ち

壁:
ラワン合板OS 真鍮釘打ち

壁:
モルタル金ゴテ
カラーステイン塗装

ゲストルーム

壁:
モイスNT-T6
真鍮釘打ち

外壁:
ガルバリウム 縦ハゼ葺き
木製胴縁 t=45mm
透湿防水シート
モイスTM耐力面材 t=9.5mm
柱 120×120mm
セルローズファイバー断熱材 t=120mm
気密シート

壁:
モイスNT-T6
真鍮釘打ち

壁:
モルタル金ごて
カラーステイン塗装

エントランス

リビング・ダイニング

床:
無垢アカシアフローリング t=15mm
構造用合板 t=24mm

床下収納

壁:
石膏ボード
t=12.5mm AEP

床:
モルタル金ごて
カラーステイン塗装

床:
無垢アカシアフローリング t=15mm
構造用合板 t=24mm
乾式二重床工法

基礎:
耐圧スラブ t=180mm
捨てコンクリート t=50mm
スタイロフォーム t=40mm
ポリエチレンフィルム t=0.15mm
砕石 t=60mm

ガルバリウム鋼板水切り+基礎断熱工法用シロアリ返し

厚手防草シートの上,
砂利敷き

基礎立上り
モルタル金ごて カラーステイン塗装
防蟻断熱材 t=30mm

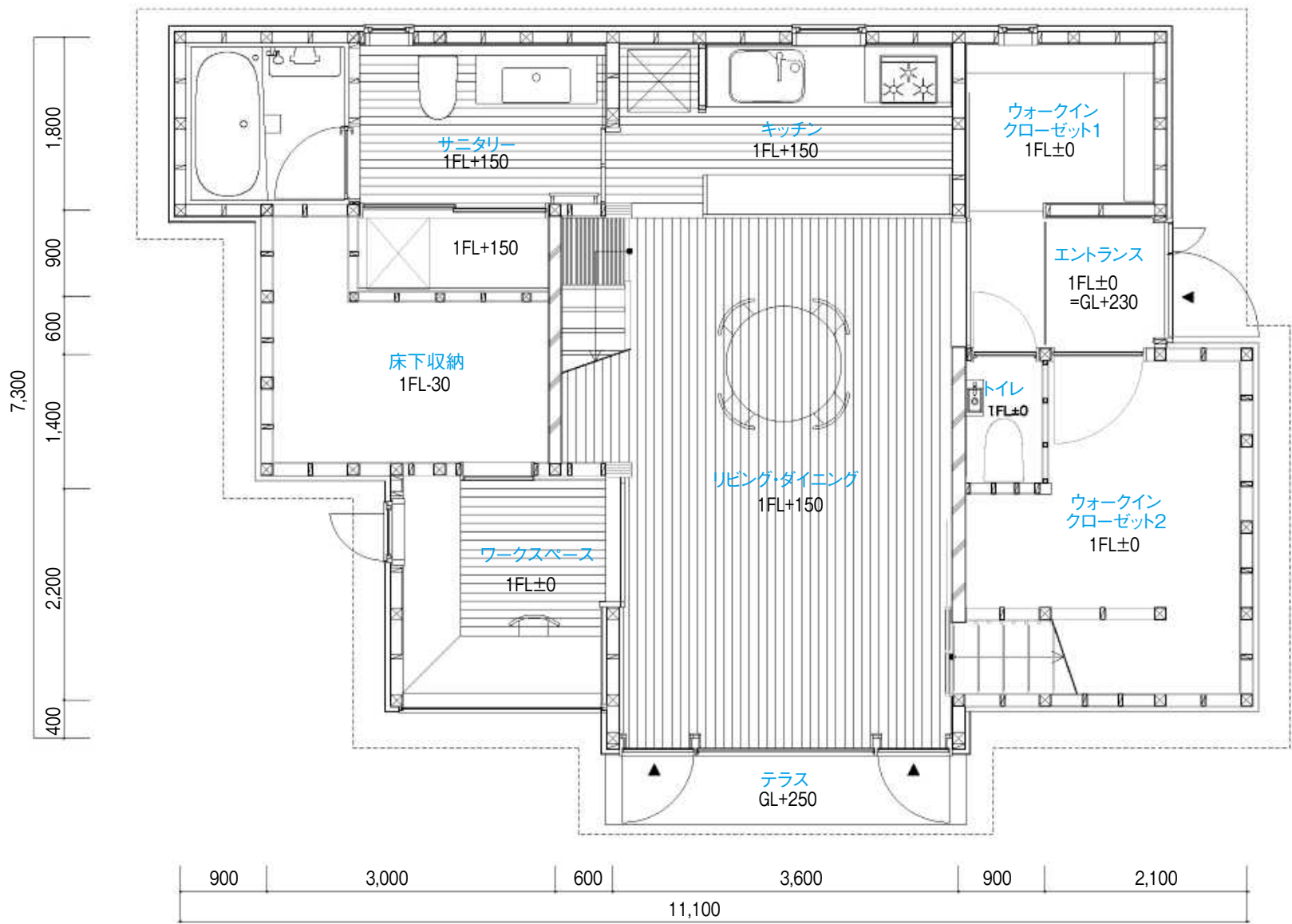
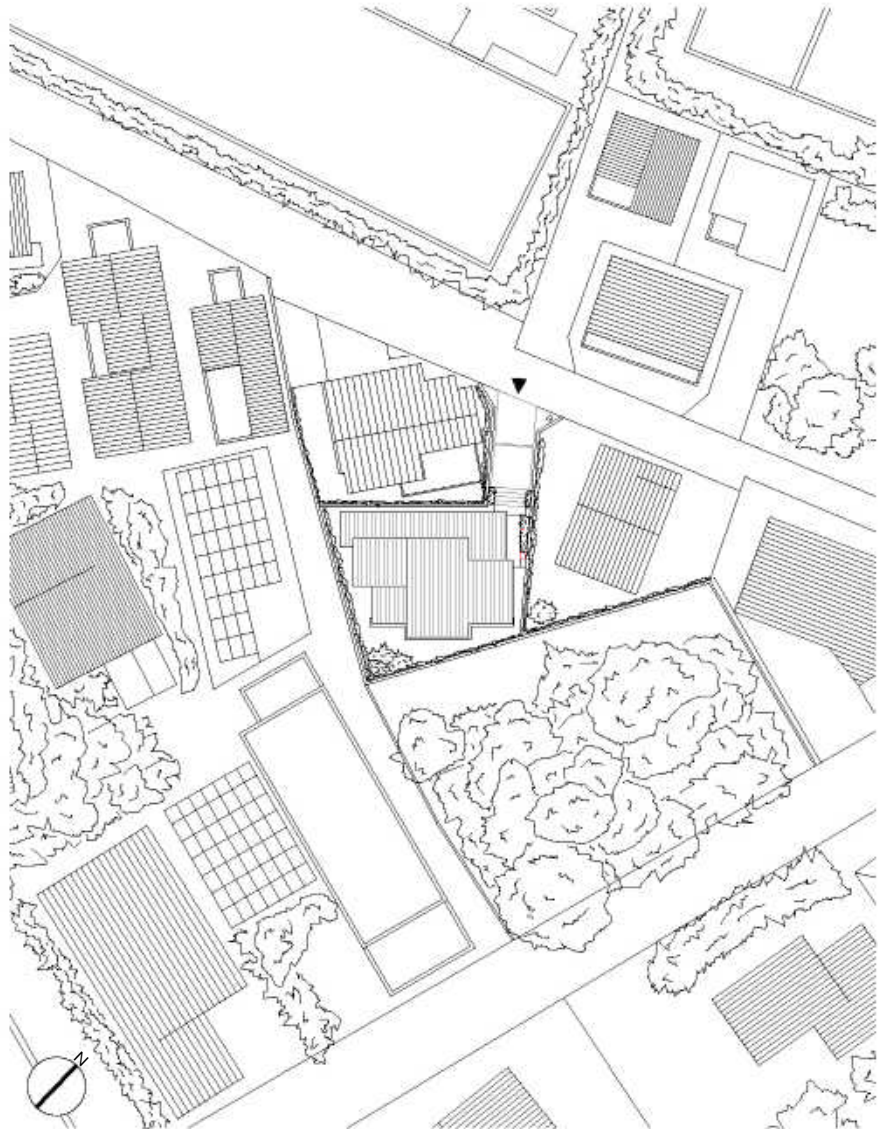
2,100　3,600　600　2,100　900

南側全景。変型敷地に対して雁行する平面形で、それぞれのヴォリュームの高さも内部機能によって異なる。

NIKAIDO
所在地／神奈川県鎌倉市
主要用途／店舗併用住宅
家族構成／夫婦

設計
MORIYA AND PARTNERS　担当／森屋隆洋
構造　東海大学　担当／野村圭介
施工
加殿木工　担当／佐々木宏幸
大工　石川建築　担当／石川貞彦
基礎　仁科組　担当／仁科昭光
板金　中込板金　担当／中込公一
左官　新庄左官　担当／新庄正徳
塗装　K2　担当／有馬正広
木製建具　古屋木工　担当／古屋知広
鋼製建具　文化シャッター・アサヒトーヨー住器
担当／渡邊政志
設備　大倉設備工業　担当／阿部正和
電気　大木電機　担当／大木敏照
家具　家具工房　担当／鈴木勇資
造園　逗子ガーデン　担当／久我愛
構造・構法
主体構造・構法　在来工法
基礎　べた基礎
規模
階数　地上2階
軒高 5,590mm　最高高さ 5,742mm
敷地面積　162.18m^2
建築面積　67.23m^2
（建蔽率41.04％　許容60％）
延床面積　80.13m^2
（容積率48.92％　許容160％）
1階　59.13m^2　2階　21.00m^2
工程
設計期間　2019年10月〜2020年12月
工事期間　2020年12月〜2021年6月
敷地条件
第1種中高層住居専用地域　準防火地域
道路幅員　北西4.0m　駐車台数　1台
外部仕上げ
屋根・外壁／ガルバリウム鋼板 縦はぜ葺き
開口部／樹脂窓（一部スチール製作サッシ）
外構／砂利敷き　モルタル金ごて仕上げカラーステイン塗装
内部仕上げ
リビング・ダイニング
床／無垢アカシアフローリング
壁／モイスNT-T6 真鍮釘打ち　ラワン合板OS　真鍮釘打ち　モルタル金ごて仕上げ カラーステイン
天井／ラワン合板+木製竿縁OS
空調機器／ダイキン 床置形エアコン　オーデリック シーリングファン
照明／コイズミ照明
ゲストルーム（施術室）
床／無垢アカシアフローリング
壁／モイスNT-T6 真鍮釘打ち　モルタル金ごて仕上げ カラーステイン塗装
天井／ラワン合板+木製竿縁OS
箱階段／ラワン合板OS、ラワン無垢材OS
空調機器／ダイキン 壁掛形エアコン
ベッドルーム
床／無垢アカシアフローリング
壁／モイスNT-T6 真鍮釘打ち
天井／ラワン合板+木製竿縁OS
階段／タモ集成材OS
空調機器／ダイキン 壁掛型エアコン
ワークスペース
床／無垢アカシアフローリング
壁／モイスNT-T6 真鍮釘打ち　ラワン合板OS　真鍮釘打ち
天井／ラワン合板+木製竿縁OS
サニタリー
床／無垢アカシアフローリング
壁／モイスNT-T6 真鍮釘打ち　ラワン合板OS　真鍮釘打ち　モルタル金ごて仕上げカラーステイン塗装
天井／ PB AEP
暖房／ピーエス タオルウォーマー
便器／ TOTO タンクレストイレ
洗面カウンター／ Tform
洗面用水栓金物／フォンテトレーディング
ユニットバス／ TOTO
キッチン
床／無垢アカシアフローリング
壁／ PB AEP　ラワン合板OS　不燃マテリアルボード
天井／ PB AEP
システムキッチン／クリナップ
床下収納
床／モルタル金ごて仕上げ カラーステイン塗装
壁・天井／ PB AEP
換気／マツナガ
設備システム
空調　冷暖房方式／エアコン
換気方式／第3種換気方式
デマンド換気システム
給排水　給水方式／直結給水方式
排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器
撮影／新建築社写真部

南東側の外観近景。

記事

新しい結

茅普請によるコモンズの再構築

千葉県鴨川市釜沼集落で行われた茅普請の現場。足場に上がり茅を葺く人、足場の下で茅を束ねる茅マルキを行う人（下方）、参加初日で藁縄の結び方を習う人（右端）が一緒に作業を行う。古民家ゆうぎつかは西の軒下に丘が迫るため作業がしやすい。

所在地　千葉県鴨川市釜沼北地区
　古民家ゆうぎつか
主催　小さな地球＋東京工業大学塚本研究室
現場指導　くさかんむり
　担当／相良育弥　高橋花歩
規模　施工表面積約50m^2
　／総屋根表面積　約250m^2
期間　2021年10月11日〜24日
特記なき写真・図版提供
　平尾しえな／東京工業大学塚本研究室
***提供**　小さな地球
****提供**　小崎洋

釜沼集落で展開する小さな地球プロジェクト。ゆうぎつかを含む4つの古民家を整備している。*

茅葺再生プロジェクト

釜沼は鴨川市の山間部にある小さな集落で、地形に沿って棚田が連なり、かつては薪炭林であった裏山に囲まれている。「古民家ゆうぎつか」はその集落のいちばん奥に位置するこの地域の典型的な農家である。

2019年9月に南房総を襲った台風ファクサイにより、ゆうぎつかの屋根を覆う板金が吹き飛ばされると中から茅葺が姿を現した。この家に23年前に移住し都市農村交流を通して都市住民や移住者たちとのネットワークを築いてきた半農半アーティストの林良樹氏は、被災したにも関わらず茅葺の美しさに打たれ本来の茅葺の姿に戻すことを決意、棚田オーナーになっていた塚本由晴に協力を求めた。塚本は茅葺再生を含む釜沼集落の再生を、ふるまい学からの展開で事物連関型のデザインを探求している研究室の活動の柱に据え、農業・林業・建築・土木を跨いだ活動を始めた。2021年の1月には資源的人会議[1]に神戸を拠点とする茅葺き職人の相良育弥氏を招き、ゆうぎつかの茅葺診断をしてもらうと共に、茅葺合宿の棟梁になることをお願いした。これは2021年10月に行われた第1次の合宿のレポートである。

茅葺のむかし

釜沼集落には現在25世帯があり、そのうち茅葺が完全に露わになっているのはゆうぎつかのみである。以前は20世帯ほどの共同体である「結」によって、毎年農閑期である冬の間に1軒ずつ葺き替える茅普請が行われていた。1度に葺き替えるのは寄棟屋根の2面（北面と東面、西面と南面のセット）であり、各戸に茅普請が回ってくるのは約20年おきであった。

長老たちは茅葺がまだ結で行われていた時代を鮮明に覚えていて、今回の合宿中に何度も足を運んで懐かしそうに当時を語る。集落内にはかつて谷地のさらに奥の南向き斜面地に2haもの共有の茅場があり、すべて刈り取るとその年の葺き替えに足るススキが採れた。総出で茅刈りを行い、刈り取って束ねたものを運び出すためにワイヤーロープを麓の畑まで渡し、そこから背負子で担いで普請が行われる茅葺の軒下や庭に運び込んだ。大量に必要な藁縄も手分けしてつくっておき、足場に使う長い松の板や丸太は各戸で少しずつ保管し、もち寄って足場を組み上げた。近所から現場を仕切る職人を呼ぶために金を出し合い、作業の合間の食事に女性たちが腕を振るった。

しかし高度経済成長からバブル経済へと進む中で、若者は次々に集落を離れ、茅普請ができなくなった。代わりに板金で茅葺屋根を覆う手法、「茅葺のカンヅメ」[2]が広まり、茅場だった山腹にはスギが植林された。

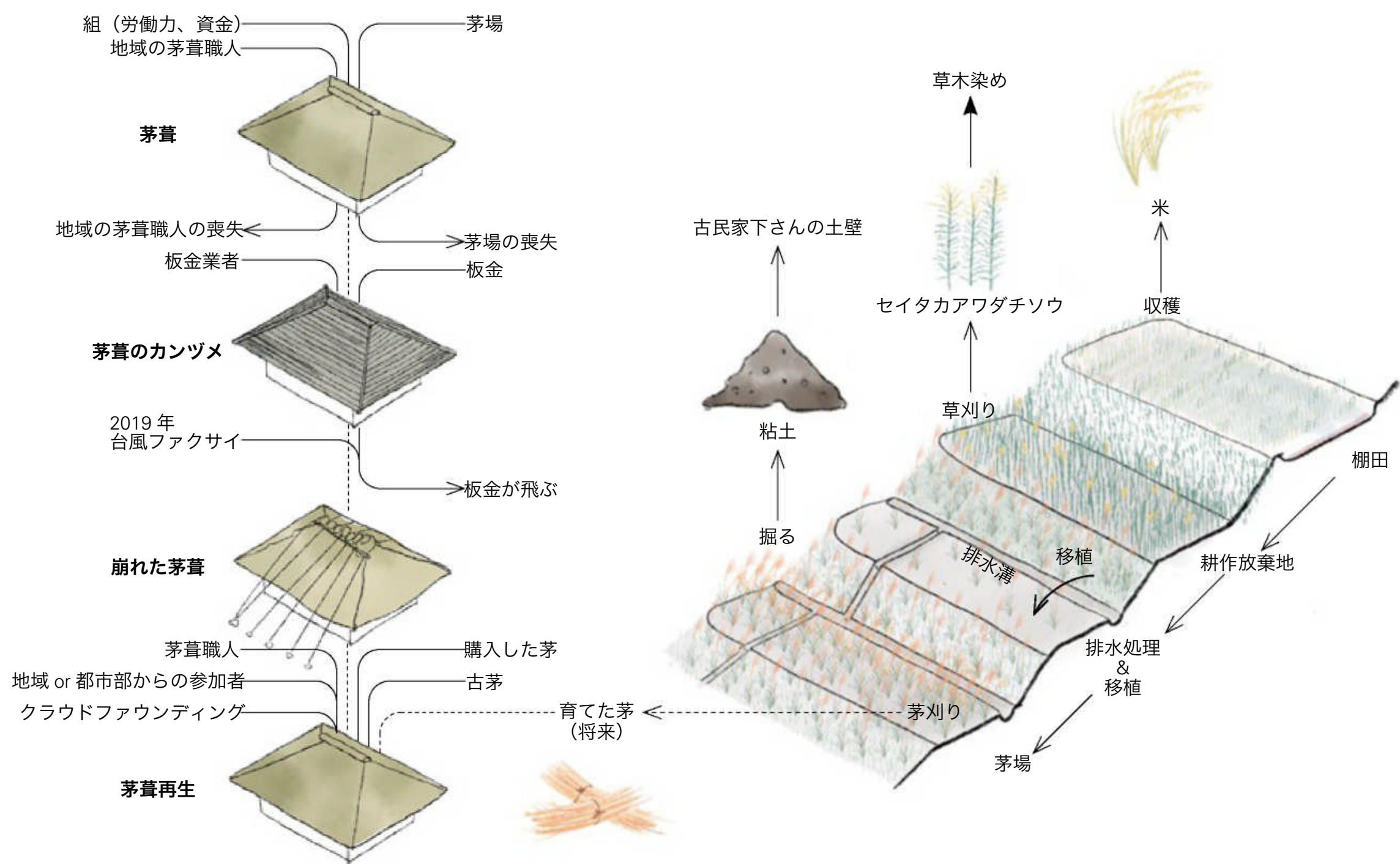
茅場の再生と茅の調達

茅葺を再生するならば茅場からと、台風被害から約1年後の2020年の10月に茅場再生に着手した。休耕田を茅となるススキ野原に変えるのだが、「田んぼ仕様」のままでは水はけが悪く、湿気に強いセイタカアワダチソウが優勢になる。そこで、田を畑にする方法に習って、畔の法尻に溝を掘った。これにより発生する粘土（軽トラック4杯分）は同時期に着手していた集落内の「古民家下さん」の土壁改修に用いられた。

2021年の春先にセイタカアワダチソウを刈って野焼きし、周囲に生えているススキから立派なものを選んで移植したものの、残念ながらこの新茅場には再びセイタカアワダチソウが群生している。排水は上手くいっているので、タイミング（種になる前）を精査して再度草刈りを行う予定である。

今回は、隣の南房総市で茅場を管理し茅の販売を行う八代氏から700把を購入した。また、同県富津市の茅葺屋根の解体現場から古茅を数十把をもらい受けた。ワークショップの後になったが、群馬県みなかみ市の茅場で行き場を失った200把ほどを特別価格で購入した。茅葺が高価になってしまった一因に原料の得にくさが挙げ

台風被災前、「茅葺のカンヅメ」だった古民家ゆうぎつかの姿。茅葺が瓦を模した板金に覆われている。*

2020年10月の土壁ワークショップで法尻の排水溝を掘り、泥を古民家下さんに運んでいる様子。

茅葺を巡るメンバーシップの変化と茅場の整備

られるが、縁に助けられ、自分たちで輸送するなどして100万円程度の出費に抑えることができた。

ゆうぎつかの屋根の構造

農家の小屋組には「オダチ組」と呼ばれる棟を直接支える束立の形式と、「サス組」と呼ばれる三角形の架構の頂上で棟を支える形式がある。一般にオダチ組からサス組へと進化していく流れがあるが、ゆうぎつかの小屋組はこの過渡期のハイブリッド型である。茅葺は上下2段に分かれた合掌の外に竹で小舞を組み、茅を何層か葺いては竹と藁縄で抑えるのを繰り返すのが基本で、まず軒先をつくってから上に登っていく手順となる。今回は西面の複数層から成る軒つけと屋根表面を構成する最初の2層を葺いたので、来年はそのまま西面を登るように葺いていく。
茅葺の命といえるのは軒と棟で、ここができていれば酷く崩れたり雨が漏ったりすることはないという。ところが、茅葺を板金で覆う際にはこのふたつが邪魔になるので切除されることが多い。「茅葺のカンヅメ」を開けたそのままでは棟がないため雨漏りしてすぐに全体が崩れていく。ゆうぎつかでは応急処置として箱棟を被せシートで覆い、ロープで下から抑えている。板金でくるんだ軒下には板金の庇が架けられていたが、これを外して、茅葺だけで軒先をつくる本来の納まりに戻した。

相良育弥とくさかんむり

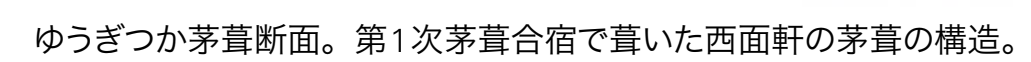
「くさかんむり」という茅葺職能集団を率いる棟梁の相良氏は、茅葺屋根の「完成が完成でない」ところに惹かれるという。時を経た茅葺屋根は、その表面が風化した部分に近くの植生が移り、草が生えてくる。葺き替えで出るボロボロになった茅は畑に撒かれ、新芽が顔を出す。「屋根も地面もまだらなのが本当は正しい風景」と表現するように、茅葺屋根は循環の象徴でもある。
氏は「伝統はその時代のその人のカラーを重ねて残るもの」と古老の言葉の翻訳をしつつ、目の前にあるもので何が可能か考え続けている。また、海外事例にも触れ、屋根に限らない試みを繰り返し、茅葺をアップデートしてきた。用いる道具の数々は先人から受け取ったものも多いが、中には樹脂製のオランダの道具も混ざる。
普段は請負仕事として職人集団でこなす茅葺を、今回普請でやることには大きな学びがあったという。素人が作業に混ざることでペースは乱れ、綺麗にいかないところも出てくるが、「請負」で作品をつくる感覚から徐々に解放され、茅葺本来の姿に迫った感覚を得たそうだ。

資源的人会議#5でのゆうぎつかの茅葺診断。二重梁の上に梁と束、サス（合掌）の三角形が載っている。棟を直接支える束はなく、独自の構造をもつ。

茅葺合宿初日に屋根裏から構造を観察した。水平に並ぶ竹材（ヤナカ）が落ちて下方に寄ってしまっている。*

茅葺きの手順

合宿に先立ち、近所の移住者で茅葺の経験がある坂本氏が単管足場を設置した。南房総から届いた茅を運び入れて母屋の南に積むと、ちょうどいい昼寝場所ができた。既存の茅をかき分けて下地に藁縄を括り付け、孟宗竹を吊り下げ仮設の足場を設える。今回確実に終えられる範囲として西面下方半分を見込み、該当範囲の上部から茅を引き抜いていく。古茅を括る作業は収穫した稲を括るやり方と同じだ。既存の茅を下ろす作業は、50年前に作業をした先人たちのやり方を理解し、新しい茅をどのように葺いていけばよいかを検討する最後のチャンスである。小屋組を直して、竹の下地を組んだのち、相良氏が先回りして下り棟＝「スギ」を仕上げ、そこに軒を合わせるように茅を葺いていった。茅を抑える藁縄を下地に通すために茅葺の中に手を差し込むと、中は暖かく、まるで大きな生き物のようだ。茅の上に並べた竹を藁縄で「男結び」する時の感覚も心地よい。軒から上に引き返すように「1枚目」「2枚目」を葺いていく。最後の週末には30名近く集まり、男結び（写真5）を習う人、茅マルキ（写真8）をつくる人、屋根の下も大賑わいである。

茅葺の作業は結ぶ、叩く、切るなど農業の作業と似ている。作業名称も「軒ツケ」「茅マルキ」など対象と動作が組み合わされており、「シロカキ」「クロキリ」「クロヌリ」など田んぼの部位と動作を組み合わせる稲作と同じだ。道具についても農業用の鎌が作業に合わせて多様に分化しているのと同じく、茅葺用のハサミは使う場所やタイミングごとに多くの種類を使い分ける。随所で茅普請が循環に組み込まれていた様子が垣間見られた。

ゆうぎつか茅葺断面。第1次茅葺合宿で葺いた西面軒の茅葺の構造。

直径60cm、長さ2mほどある茅束を井桁に積む。効率よく作業するため、茅束は長さや質のよさによって山を分ける。**

屋根に取り付けた仮設の竹足場に乗り、層ごとに古茅を引き抜く。膝などに一抱えまとめて縄で括り、下に投げる。

ホゾが緩んだ小屋組を藁縄で補強する。サス（合掌）が抜け落ちた箇所もあったので、据え直した。

サス（合掌）にヤナカと呼ばれる竹材を水平に渡して行く。箱結びで上下左右の固定をする。縄は隣の縄に沿うように右に5周、左に4周、踏みつけて締めながら巻く。

垂直材の垂木をヤナカとの交点すべてで「男結び」で固定する。半分より右は左上がり、左は右上がりのハの字で縄をかけるのは土壁の竹小舞と同じである。

竹小舞（下地）から縄を回して藁を抑えていく。写真ではいちばん下方の縄取り竹から取った縄でスギ（下り棟）の藁束を抑えている。

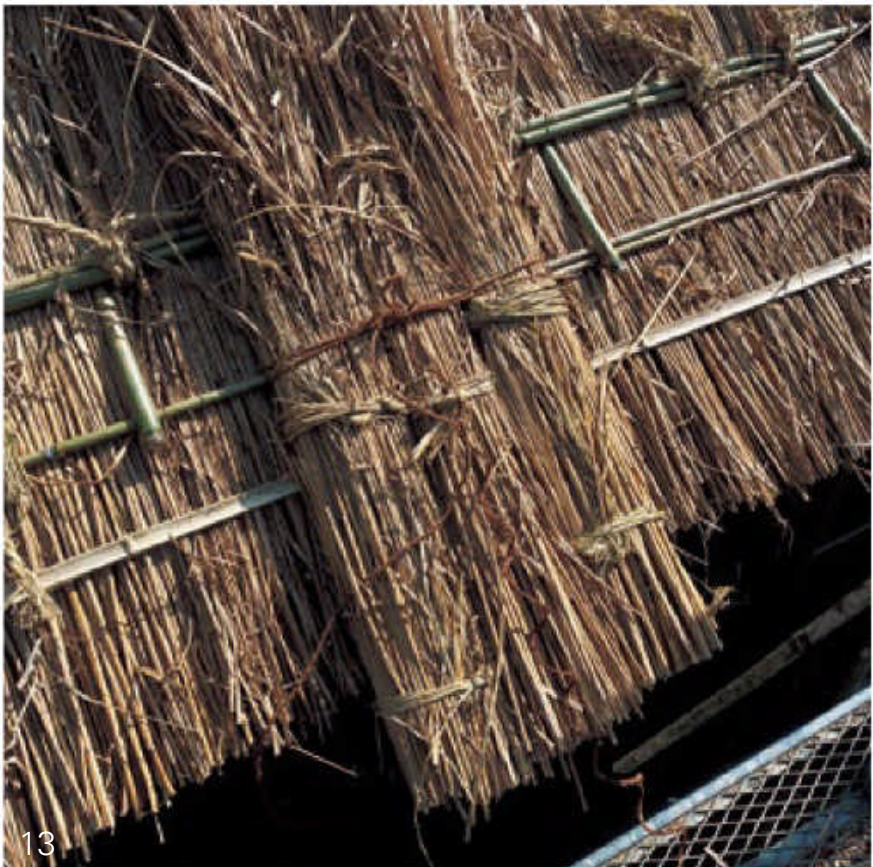
藁束が重なると下地まで縄を通すのに長さ90cmの縫い棒を用いる。一緒に手を刺して扱うこともあれば、屋根裏に人が入って受け取る方法もある。

茅をマルく（断面が楕円になるように束ね上げる）ので茅マルキと呼ばれる作業。主に関東の文化なので、茨城から参加の職人が指導した。

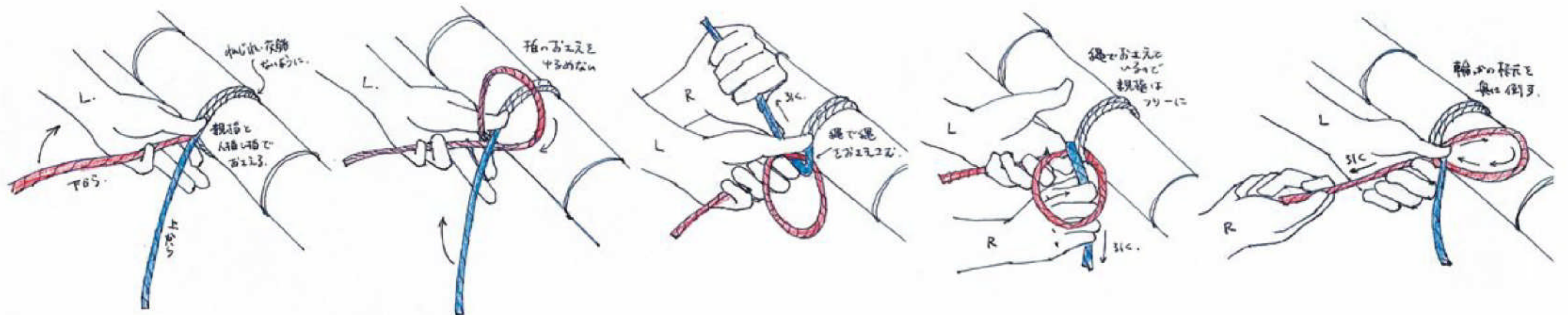
スギは下り棟をさし、現場でもっとも腕のよい者が作業をするのが通例。軒より先行するスピード、屋根全体の状況や茅の品質に応じる臨機応変さ、繊細さが求められる。

茅を並べて、藁縄をねじり込むことで仮止めをする。藁縄は補助的な役割で、茅同士の摩擦を利用することで滑り落ちるのを防ぐ。

茅のラインを揃えるために叩いて成形する。道具は「タタキ」「ガンギ」などと呼ばれ、硬い木材の表面を段状にしたものを用いる。オランダの樹脂製のものは軽く扱いやすかった。

竹を水平に渡し、仮止めしていた藁縄を解いて男結びすることで本締めする。3〜5人で並び、締め付けのために足で竹を踏む際の掛け声が集落に響く。

軒先の補強のために「ホコ」の下に短い「尺八」を刺し込み、その下方に「バイ竹」を引っ掛けさらに割竹を吊り下げる。茅マルキでつくった束を並べて割竹で挟み込み、シュロ縄でとめる。

表面を葺いていく作業では新しい茅束を運ぶことが増えるので、茅の運び方を教わる。抱きかかえて身体の表面を転がすようにもち上げることで負担を減らす。

表面を2枚目まで葺いたところで今年は終えた。1年雨漏りしないように隙間に古茅を詰めて念入りに養生を行う。

男結びの手順。名前とは裏腹に、摩擦を使うことで女性でも結ぶことができる。必須スキルのひとつなので、現場に練習会場を設け、習得した人が屋根上で作業ができるルールとした。

棟梁の相良育弥氏（左）と南房総で茅葺を行う職人（右）がスギ（下り棟）の葺き方について話す。現場が開かれることで職人同士の交流も活発に行われた。

くさかんむり所属の女性職人に加えて、茨城で茅葺職人に弟子入りしたばかりの女性職人が全期間参加した。ふたりとも20代で、建築や芸術を学んだ後の選択だという。1年ほど修行をしてきたため、部分的に指揮を執ることもあった。*

現代の結

2週間の合宿には総勢60名が訪れた。茅葺の技術を学びたい、コミュニティのあり方を体感したい、屋根には登れないけど食事の準備を手伝いたい、など滞在時間も目的も多様であった。老いを意識して茅に手を出せない参加者が、人数や会計を取りまとめる事務と子守（赤子連れで全日参加の若いお母さんがいた）の役割を見つけたのも、普請の柔軟さ、寛容さを物語っている。これを機会に鴨川への移住を決めた人がいるのも大きな成果だろう。

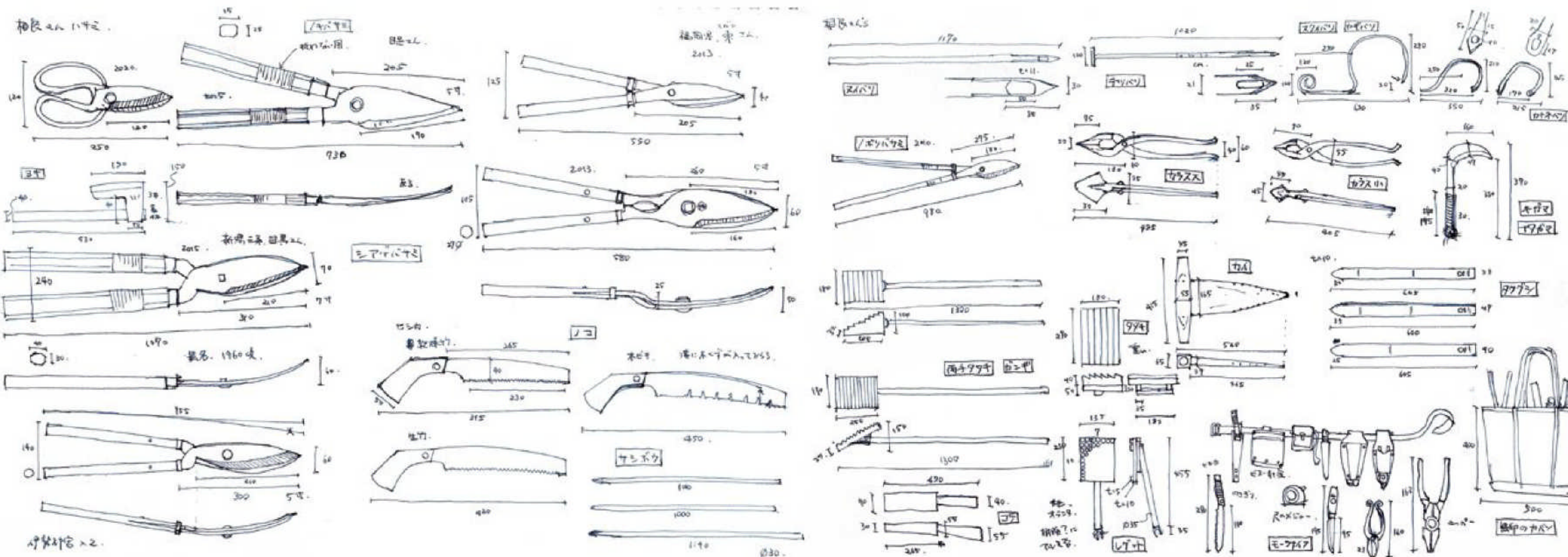
「くさかんむり」からは相良氏に加えて若い職人が参加した。また茨城県で茅葺を学ぶ職人1名と南房総の茅葺の現場を経験している職人2名も参加した。茅葺屋根は方言のように地域によってその造りが異なり、神戸、茨城、千葉の職人たちは作業をしながらズレや違いを埋める会話を繰り返す。組み立ても部位や道具の名前も場所ごとに微妙に違い、相良氏日く「通訳つきで海外旅行に行く」ような感覚だったそうだ。

茅葺のこれから

現在日本における茅葺は、建築基準法22条による可燃素材で葺かれる屋根の規制、茅普請を成り立たせていた「結」や茅場の消失などが障壁となり、新築はおろか、葺き替えも容易ではない。共有の資源であった茅も購入せざるを得ないのが実情で、かといって茅葺屋根がほとんどないのに茅場だけを増やしていくわけにもいかない。しかし、近隣には再生したい茅葺古民家を抱える人が数名いて、ゆうぎつかはその先陣を切ったかたちである。茅場の再生と新しい結ができれば、地域の数軒で回す新しい生態学的バランスをもった茅普請ができるのではないか。

今回は小さな地球が運営し、職人たちを集め、クラウドファウンディングで広く支援を募り、参加希望者を受け入れるかたちで茅普請を行った。これは今の状況に合わせてリデザインされた「現代の結」といえる。人間中心の社会を見直し、自然との関係が社会をデザインしていくための新しいルールメイキングが必要だ。里山を師匠に普請型の建設の実践を積み重ねて、コモンズ再構築の可能性を示していきたい。（平尾しえな）

*1：里山と都市の新たな連帯に向け、障壁を克服していくためにさまざまな専門家が分野の垣根を越えて協働するプラットフォームとして企画された。これまで「コモンズ」「酪農」「獣害」「もりのようちえん」「茅葺」「土中環境」「土壁」「どぶろく」というテーマで開催。次回のテーマは「サーキュラーエコノミー」（2022年2月27日開催）。

*2：1970年以降「安全屋根」という触れ込みの元、板金により茅葺屋根を丸ごと包む工法が普及した。こうした板金でくるまれた茅葺屋根は茅葺職人の間で「茅葺のカンヅメ」と呼ばれている。

相良氏が持参していた道具のスケッチ。今回は遠征なので最小限持参したというが、それでもその多様さに目を見張る。茅葺職人以上に道具職人の不足が問題になっているそうだ。去年弟子入りした職人は仕事を覚えつつ道具を増やしている最中で、鍛冶屋が拵えた刃先に自分で木製の柄をつけるため、頃合いの木を探していた。

論考

普請の勧め

塚本由晴（建築家）

千葉県鴨川市釜沼集落で移住者である林良樹氏、福岡達也氏らと「小さな地球」という一般社団法人を設立し、里山の再生に取り組んでいる。きっかけは、2019年秋の台風被害で、法人の理事長を務める林良樹氏の古民家が被災したことであるが、棚田での米づくりから、耕作放棄地の再開墾、山林の手入れ、草刈りなどの環境整備、さらに古民家の再生と、そのコミュニティスペースとしての運営まで、里山の暮らしに密着した実に多様な活動を行っている。

2020年の夏に共同購入した古民家下さんは、小さな地球のコミュニティと東京工業大学塚本研究室の学生たちによって設計改修され、2021年4月からコミュニティキッチン、同年7月からは、簡易宿所の運営が始まっている。この改修は、各工程でひとり、専門職の人に講師になってもらい、ワークショップ形式で学びながら行われた。また材料はサルベージした古材や里山の粘土や竹やスギ皮を使い、ほとんどゴミを出さない建設であった。現場は仮囲いもなく、知り合いが遊びに来たり小さな地球のコミュニティメンバーが容易に手伝えるようになっていた。手分けして準備した食事を皆で食べるのも建設の一部であった。

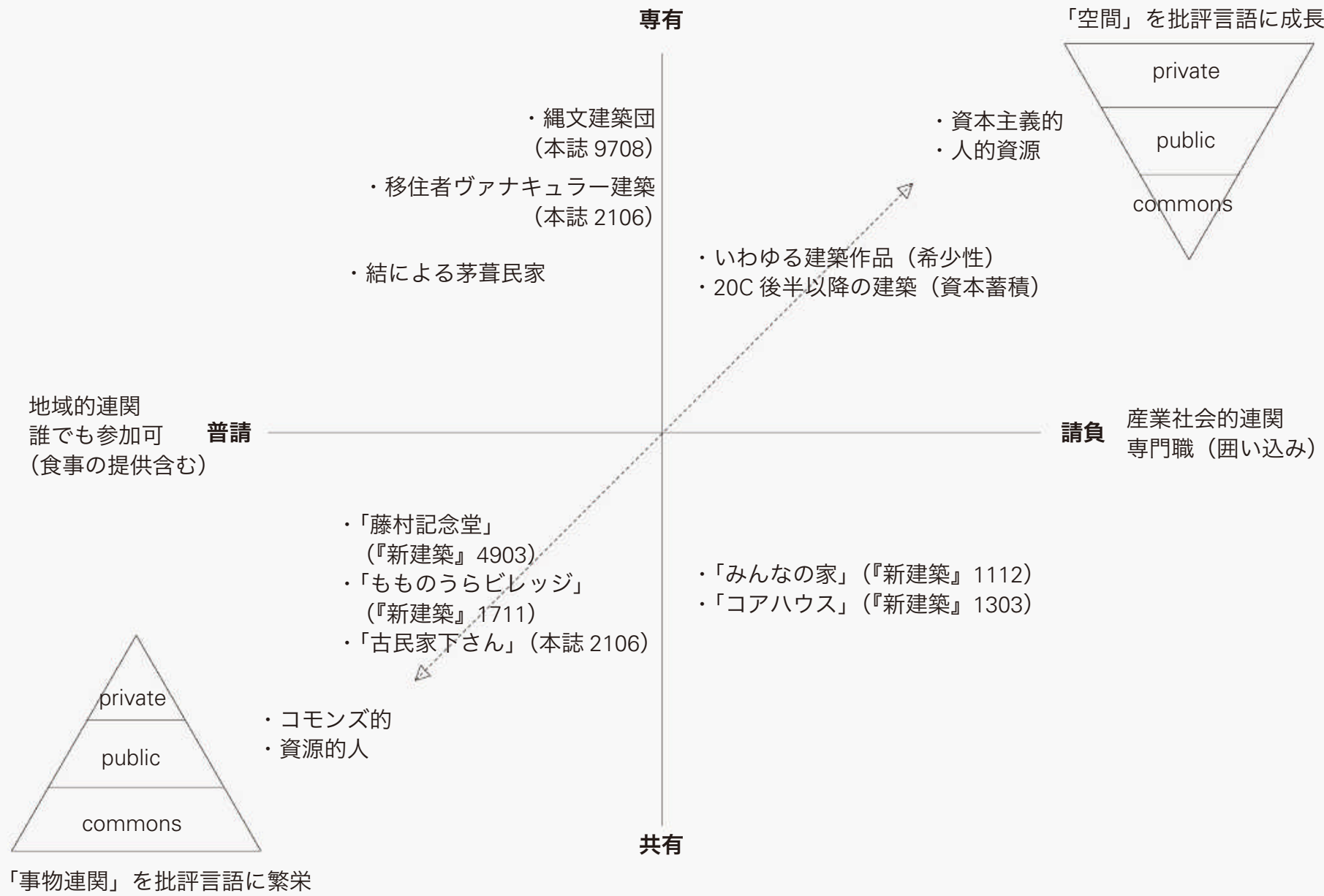
こうした建設のあり方は普請と呼ばれる。普請の由来はその昔、禅宗の僧が堂の建設のために資金、材料、作業の手、食糧を普く人びとに請うたことにあるが、現代の建設一般が建設業者により請負われ、仮囲いで外部から隔てられた現場は専門職の人によって占められ、一般の人を建設に参加する機会から遠ざけることになっていることと見事なまでの対比をなす。また、共同購入の経緯から積極的に共有財として位置づけられている古民家下さんは、世のほとんどの建築が私有公有を問わず、専有される財産であることと比べるとこれもまた明快な対比をなす。

ここから請負―普請の対比軸と専有―共有の対比軸が得られるわけだが、これらを横軸、縦軸とした座標を組むと4つの象限が得られ（下図）、下さんの改修は共有×普請の第3象限に位置づけられる。同じ象限にある「藤村記念堂」（設計：谷口吉郎、1947年）は中山道の旧宿場町馬籠出身の文豪、島崎藤村の生家である元陣屋の焼け跡に、戦中に亡くなった藤村を偲んで村人総出で普請したものであり、私たちはいつも普請の師匠と仰いでいる。だが20世紀の資本主義をベースにした社会は建設のほとんどを専有×請負の第1象限に集中させた。このことが建設にもともと備わっていたコモンズ的性格を弱体化させたことは否定しようのない事実であろう。

里山再生プロジェクトのそもそもの始まりであった林氏の古民家の屋根の茅葺再生も、昨年10月に第1回の茅葺合宿として行われ、全国から60人の老若男女が現地参加し、さらにクラウドファンディングを通して多くの方がたに温かい支援をいただくことができた。この場合は林氏の家なので一応専有×普請の第2象限に位置づけられる。昔は毎年1軒ずつ、集落の結により葺き替えが行われ、必要量のススキを生産する茅場が集落の外れにあったという。結の構成世帯は20から25で、これは茅が劣化し、葺き替えが必要になる周期にほぼ一致していた。まさに生態学的な新陳代謝の均衡が植物、建築、人間社会の間に成立していた。

この座標を眺めていると、地球の問題に向かい合わなければならないこれからの建築デザインは、第2から第4象限の建築を改めて開拓するものになるのではないかと思う。そのとき建築家に求められるのは、象限を移動しながら局面を切り開いていく柔軟性であり、またこの座標の軸をぼやけさせるような、これまでにないハイブリッドな建築の社会性を提案していくことである。

そしてそれはすでに始まっている。たとえばつくる局面では第1象限でも利用者が管理運営を協同で行う場合は垂直軸がつくる局面より右に移動して第2象限になる。このようにマネジメントや使用などに関する独自の座標を設けることも、上で述べたハイブリッドな社会性のひとつといえるだろう。

「藤村記念堂」の普請による施工過程。『木曽馬込』（菊池重三郎著、中央公論美術出版、1977年）より転載（撮影：菊池重三郎）。

請負—普請・専有—共有の対比軸で見る4象限

座談月評

新建築住宅特集2022年2月号

特集／大地と繋がる家
環境と連続する平屋の思考

批評

評者

貝島桃代
建築家
ETHZ Professor of Architectural Behaviorology

中山英之
建築家

藤村龍至
建築家

©Shintsubo Kenshu

『新建築住宅特集』では、毎月、さまざまな作品や論考、記事を掲載し、広い射程をもって住宅から明日を拓く建築の可能性を伝え記録しています。しかし重要なことは、議論の場をつくることにあります。限られた誌幅の中で示されたものから何を考えていくべきか、それぞれの読み解きや発見を共有し、建築を取り巻く多くの事象や環境と共に議論を重ねること。この座談月評は、その場を広げていくことを目的に掲載します。
2022年1〜12月号は、貝島桃代さん、中山英之さん、藤村龍至さんを評者として、1年を通して前号への批評を座談形式で議論いただきます。それぞれの個別の評と共に、それが相乗して新たな示唆に展開する連載記事として毎月掲載いたします。どうぞご期待ください。
（編集部）

貝島　平屋の建築に関して何を議論すべきか。まずこの号を見て平屋は日本らしいビルディングタイプだと思いました。雪が降る山がちなスイスでは地面に接する基礎部分を地下階として、その上に木造を建て屋根を載せる2、3層の構成が住宅の原型です。つまり長い冬の暮らしに備え、地下や屋根裏に食料などの倉庫がある。一方スイスで平屋になり得るビルディングタイプは神殿やマーケット、パヴィリオンなど一時的に人を集める活動の建物です。日本の平屋はこれに近い。温暖な気候や島国といった風土で築かれる、四季折々の生活のための、ミニマルな架構からなるパヴィリオンとしての建築、清家清の「私の家」（『新建築』5703）などが、住宅のかたちとして目指されてきました。

藤村　私はこの号では、西沢立衛さんの「**House in Los Vilos**」と葛島隆之さんの「**Pergola**」に興味をもちました。前者は雄大な自然の中に建っていて長さ55m、面積322m²とかなり大きいのですが、建築のエレメントや住宅のディテールをすっ飛ばしてRC屋根のうねり方だけで全体をつくっています。対照的に後者は細長い輪郭に機能が配置されていくという点では前者と似ていますが、本来は2次部材であるはずの垂木がなぜか主役となり、幅3m弱の範囲内でそれらの角度と高さを変化させ、周辺の樹木の配置やそこに置かれる道具など小さな条件を拾っています。他方でパーゴラ状の屋根の円弧状のジオメトリは意外なほどシンプルで、辛うじて全体を繋ぎ止める役割をしています。どちらも1990年代終わりから2000年代初頭にAAスクールやAny会議を震源地として盛り上がった連続体（Continuous Surface）的なつくり方です。

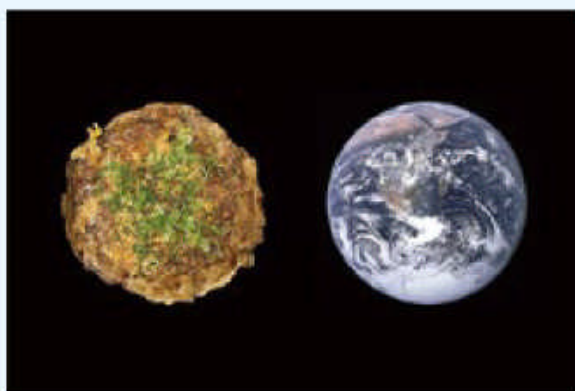
貝島　家成俊勝さんの**特別記事「お好み焼き住宅論」**を読むと、関西風お好み焼きが平屋なのかなと思ったんです（笑）。地球という鉄板に載っている平屋として見ると、地面に寄り添うようになるので周辺や地面、周りの風景との関係のつくり方が大事になる。お好み焼きがどこから来ているかという話を家成さんがしていますが、たとえばフランク・ロイド・ライトが「Freeman House」（1923年）で、住宅外壁のコンクリートパネルを敷地の土からつくろうとしたように、その場にある材料を再構築したり、鉄板という地面や地形そのものも構成要素になる。平屋という多様なお好み焼きレシピを妄想し始めてしまいました。

中山　平屋はやっぱり屋根ですよね。今月号は帽子屋さんを見るようで楽しいです。勾配屋根にすれば自然と高いところと低いところが出てくるけれど、フラットルーフだと最初に決めた高さですべて決まってしまうので、庇、つまりつばの付き方が大事ですよね。帽子もつばがあまり高いと被っている意味がなくなるし。あと、たとえば目深に被るとか、そういうキャラクター性みたいなものも含めて、平屋は屋根に目がいく。

藤村　家成さんの特別記事の挿絵の最初の写真が、エレメントを鉄板の上で集積するお好み焼きという連続体と、マテリアルとして一体的な地球という連続体の対比と解釈して読める気がしてきました（笑）。連続体にもエレメントの集積として解く場合と一体的なマテリアルで解く場合があって、「Pergola」は前者、「House in Los Vilos」は後者です。両者ともかたちの働きに対する情報量は非常に多く、凄まじい解像度の高さでの検討の蓄積を感じさせます。

中山　柳澤潤さんの「**A Townhouse**」は、屋根とは違うレベルで足した庇の効きが写真からも伺えます。掃き出し窓と家具は本来相性がよくありませんが、低い庇が加わるだけで佇まいが生まれる。萬代基介さんの「**岬の家**」は先月の「椎葉邸」同様、やはり腰高な印象が少し気になるけれど、足された庇が建築の居住まいをぐっと落ち着かせている。僕は庇は長押レベルに足して、欄間も透明でなくてよいように感じますが、既存天井の外への連続性など、その場に行くと効いているのかな。「House in Los Vilos」は屋根と庇の関係に構成そのもので答えている。チリは太陽高度が高いからか、庇そのものしかないというか、サンバイザーみたいな、つばだけの帽子が知らない土地の風土を想像させます。そんな中すごく特殊な帽子が中畑昌之さんの「**空蝉の家**」です。騒音や視線から守るために採光を屋根に求めたとありますね。西沢大良さんの「SUMIKA Project by Tokyo Gas 宇都宮のハウス」（『新建築』0901）のように、屋根全体を奥行きの深いブラインドにしている。屋根架構の背が室内に光の偏在を生み出す発想は、帽子とつばの関係とは異なる平屋に対する回答として面白い。

貝島　「House in Los Vilos」は、圧倒的な自然に必要な囲いとして屋根を設け、建築としている。そのかたちはさまざまな情報がある。平面形は地形線に寄り添うように決められ、立面や断面形も周囲の地形の稜線と呼応したつくり方です。つまり敷地の地形そのものとそこから見える周囲の海岸の山並みという、連続した地面という場を生かす生活を考えると、結果的に屋根が連続的に繋がるつくり方になったとも見える。豊かな地形線の地面から考えたら複雑な建築のかたちが生まれてしまったような、一般的な3次曲線の建築

提供：家成俊勝
特別記事「お好み焼き住宅論」

提供：西沢立衛建築設計事務所
「House in Los Vilos」

「Pergola」

とは反対のプロセスがとられているように感じました。

中山　場所からプランが滲み出てきたようですよね。アトリエ・ワンの「**ホームベース**」は、畑に面したファサードがとてもよいですね。目深に庇がかかった窓が。一方もうふたつの妻側の開口部は少し寄る辺なく映ります。

藤村　「ホームベース」は独特な建ち方ですが、ヴィラであることはアニ・ハウス（本誌9802）、自律的かつ他律的であることは「ミニ・ハウス」（本誌9901）で言及されていましたし、五角形の平面は「五木村庁舎コンペ案」（1999年）、断面が結果的に切り妻になるのは「草千里トイレ」（『新建築』9811）を彷彿とさせ、これまでの経験が統合されていると感じました。一方で開口のあり方はこれまでのアトリエ・ワンの都市型の住宅ではシンメトリに開ける例が多かったのに対し少し違う開け方に見え、これは「農村であり都市でもあるつくば暮らしの住宅」に呼応した部分だと読めました。

貝島　都市部だと敷地が限られているため、庇を出す余地がありません。ヨーロッパでも日本でも町家など都市住宅は通りに面した立面を構成し始める。「ホームベース」の立面は、裏側では旧集落の住宅のように庇が深く、正面のふたつの妻面では敷地反対側の郊外住宅地の立面と呼応し、庇が浅くなっています。

中山　帽子は機能もそうですが、それを被った姿全体で見ますよね。そこには単体の事情を超えた社会性や歴史性のような問いも含まれる。そういう意味で、貝島さんが幾何学という開かれた言葉で、固有の場所に建つ建築ともうひとつ、理念としての建築の定義を試みていることは今月号の白眉だと思います。一方、その場にある歴史や状況を超えた純粋な概念としての建築が存在する、といったアンドレア・パラディオ以降のアーキテクト像に対する批評も、ストック型社会へのシフトがいわれる時代の議論としてあると思います。ホームベースって、もっと大きな扇型のいち頂点ですよね。そのフィールドの定義や、そこから場外に続く世界への視点があるとしたら、そこのところをもうひと言読みたいと思いました。岸和郎さんも歴史的感覚に鋭い建築家ですが、今回の「**指扇の家**」のテキストでケーススタディハウスがスタイルの問題に留まっている感じがどうしても気になりました。ケーススタディハウスを生んだ『arts & architecture』誌は、新しい工業化住宅がつくり出す未来像と同時に、そこへ世界各地から逃げ延びて来た人びとがアメリカにもち込んだフォークロアアートやクラフトが宿ることに、スタイルに回収されない思想性を見出そうとした雑誌だったように思います。クラフトとは、突き詰めて言い換えれば民主主義だと思うのです。

貝島　ケーススタディハウスは、戦中の軍事技術を平和利用で応用した実験住宅です。戦後の住宅難を解決するための大量生産という目的があり、FRPや合板などの新素材の導入、工業化、モジュール化の中で、図面が描かれ、ブループリント（青焼）になり、生産の現場に供給されることが目論まれました。図面の力というのは独特で、手に取るとなんとなく自分にもできそうだという気になる。パラディオの図面が多くの人を熱狂させたのは、建築が竣工する以前に、実現している図面が概念を示す指南書になったからです。ルネサンスのイタリアでは、人は建築よりも短い時間を生きていたから、図面を通してひとりの建築家としての理想を描いてきた。要塞設計も図面が出てきて初めて軍事行動の想定や計画が具体的に検討できた。幾何学には、実態の空間とは異なるレベルで議論ができる客観性があり、こうしたかたちの力を理解して使うことはわれわれ建築家はもっと鍛錬したいところです。

中山　さきほどフォークロアと工業化の話を対比的にいいましたが、図面を手にすると自分もできそうな気がするというのは、そのふたつを掛け渡す働きをもちますよね。青写真の重要性は納得いく気がします。

貝島　3DCAD化などが進む中で、平面や断面の抽象性は情報を見極める上で、もっと活かすべきです。

中山　新しい技術が出てくると、同時にそれまでの技術の本質が先鋭化することはよくありますね。レコードの売上げ枚数がCDのそれを再度上回ったように、それぞれの違いが新たに分かるという意味で、幾何学は無限に問いかけてき続けるものだというのは共感します。

藤村　平屋特集で問われることのひとつに開口や内外の連続性の問題もあります。日本の平屋は伝統的な建具のあり方からモダニズムに接続した経緯もあり、連続窓やガラス張りを引き寄せがちです。「指扇の家」、窪田勝文さんの「**K-VILLA**」はそのような日本型モダニズムの最新型かもしれませんが、大判のガラスに支えられた美しい構えは熱損失に厳しい昨今の情勢を考えると今に限られたあり方かもしれません。そうすると、ガラス張りではないやり方で内外を連続させようとした藤野高志さんの「**バウンダリ**」に目が止まります。「居間がふたつ、水回りが3つ、寝室が5つ、庭が3つ」を「48の扉と30の扉で結ぶ」というような構成論的なアプローチを採る挑戦には共感するのですが、「指扇の家」や「K-VILLA」に比べると写真からは理解できないものをつくっている感じがします。それは開口のせいなのか伝え方のせいなのか分からないのですが、語り口に比べて必要以上に迷路のような建築ができている。

貝島　「バウンダリ」は8人＋100生き物といった生物多様性を意図していますね。いろんな環境が入り込める場として環境条件の異なる小さな中庭群をつくる提案は面白いです。

中山　今月は平面図1枚だからこそ、建築家がその場にある問題に答えるだけではない何かに向けて仕事をすることの意味を考えさせられました。雑誌はそのために存在するといってもよいかもしれません。ケーススタディハウスも含めて、そうした言論が多様に交わされるようになった時代に最も花開いたのがモダニズムですが、それをスタイルの問題に終わらせずに、新しい問題系の中に先鋭化させていこうという姿勢を、西沢さんの仕事に感じました。古い映画をとことん見ている新しい映画監督という感じ、というと嫌な感じに聞こえるかもしれませんが、でも映画というものの心配を誰より真剣にしているという意味で勇気づけられます。

藤村　「House in Los Vilos」が屋根だけで全体を定義したように、「バウンダリ」は壁だけで全体を定義しようとしたのではないでしょうか。そういう意味では展開可能性を感じると同時に450m²という大きな敷地に建てられているにも関わらず広がりを感じられないのはなぜかもう少し考えてみたいです。他方、大らかな構えで住宅地に馴染んでいると感じられたのは「A Townhouse」です。「みち」という空間の名付け方や庭を挟んだ櫛形平面など全体の構えも公共建築のプロポーザルのような明快さがあり、それは住宅のあり方として諸刃の剣かもしれませんが、住宅を開いたり、施設で半分私的な占有を促したりと住宅と施設の間で新しいことが起こっていることを思うと、平屋の社会性を問う試みに共感しました。学校建築は小さな住宅が集まったような姿にしていくイギリスのような方向性と、全部体育館のようなワンルームにするアメリカのような方向性があり、日本は1990年代以降は小さなスケールをたくさんもったワンルームを目指すようになりました。近年では図書館や公民館でも同様の試みが生まれ始めています。そのような平屋の社会性や公共建築の住宅性の観点では「A Townhouse」と「バウンダリ」に特に可能性を感じました。続きが見たくなります。

貝島　今の話で思ったのは、設計における住宅らしさについてです。住宅を公共建築のようにつくることは、大袈裟に見えてしまうことがある。今回のように『新建築住宅特集』で平屋の可能性を考えていくと、自由な分、的が絞りにくいともいえますが、いちばん素直な建築だからこそもっと深められ得ることがあると思います。それはパビリオンとしての住宅、つまり平屋だからこそ、周辺環境との連続性や、接地から生まれる開かれた建ち方が生み出す、多様性を包含する住居の社会的意味をもう1度考えることができると思うのです。

「A Townhouse」

「ホームベース」

提供：生物建築舎

「バウンダリ」

塚本由晴氏と貝島桃代氏が2022年ウルフ賞に

アトリエ・ワンを主宰する塚本由晴氏と貝島桃代氏と、ディラー・スコフィディオ+レンフロを主宰するエリザベス・ディラー（米国）が、2022年ウルフ賞建築部門を受賞した。本賞はその年の科学、芸術分野（建築は芸術分野に含まれる）で際立った業績を上げた個人に対して授与され、イスラエルのウルフ財団が国籍や人種に関わらず世界中の科学と芸術の振興を図る取り組みの一環として行っている。
3氏は社会的、文化的価値が問われ世界が大きく変わろうとしている今、リサーチと教育、実践のすべてに力を入れ、建築とその広範囲に及ぼす影響を前に進めようとしている点が評価された。また建築が及ぼす影響を意識しながら、地理や文化、方法論などの差異を受け入れコラボレーションという考えをさまざまに体現していること、そしてその彼らの先鋭的な建築の思想が若い世代の建築家に影響を与え続けていることも評価された。

第53回中部建築賞受賞作品発表

去る1月25日、中部建築賞協議会は第53回中部建築賞の受賞作品を発表した。本賞は中部圏域の地域と環境に根差した優れた建築作品を表彰するもので、建築主・設計者・施工者の3者に送られる。審査委員は大野秀敏（審査委員長）、佐藤義信、塩見寛、筒井裕子、藤吉洋司、松本正博、横山天心、吉田純一の8氏。受賞作品は以下の通り。（設計者のみ表記、特別賞は割愛）
【一般部門入賞（延べ面積が2,000㎡以上）】▷「大同大学 X（クロス）棟」＝日建設計一級建築士事務所　▷「Involve」＝bandesign　▷「志太広域事務組合斎場会館 星山の苑」＝山下設計　▷「長野県立美術館」（『新建築』2109）＝プランツアソシエイツ、オープンヴィジョン
【一般部門A入選】▷「アネシス茶屋ヶ坂」（『新建築』2008）＝清水建設名古屋支店一級建築士事務所　▷「トヨタ紡織 グローバル本社」＝竹中工務店　▷「四日市市総合体育館」（『新建築』2006）＝久米設計　▷「国立工芸館」＝山岸建築設計事務所
【一般部門B入賞（延べ面積が2,000㎡未満）】▷「城下町の客室」＝きりん　▷「下石の通い所」（『新建築』2109）＝ほとり建築事務所、Uo.A　▷「本町BASE」＝大建met　▷「Cuisine régionale L'évo 消滅集落のオーベルジュ」（『新建築』2106）＝一級建築士事務所本瀬齋田建築設計事務所
【一般部門B入選】▷「新富士のホスピス」＝一級建築士事務所山崎健太郎デザインワークショップ　▷「花水木ノ庭—広場路の長屋—」（本誌2103）＝dot studio一級建築士事務所
【住宅部門入賞】▷「志摩の小庭　いかだ丸太の家」＝m5_architecte一級建築士事務所
【住宅部門入選】▷「今伊勢の家」＝川本達也建築設計事務所　▷「大泉寺の家」＝みのわ建築設計工房　▷「支えの家」（本誌2007）＝金沢工業大学

*撮影：aiho.c 志摩大輔　特記なき撮影：新建築社写真部

上：「長野県立美術館」
下：「花水木ノ庭—広場路の長屋—」*

第25回くまもとアートポリス推進賞発表

去る2月1日、熊本県は第25回くまもとアートポリス推進賞を発表した。本賞は建築文化に対する関心を高めるために1995年から県内各地の優れた建築物を表彰する。受賞作品は以下の通り。
【推進賞】▷「下江津の家」＝矢橋徹建築設計事務所　▷「そらいろ保育園」＝志垣デザイン店　▷「PLAY FARM・ツリーハウス」＝志垣デザイン店　▷「HIKE」＝村田建築設計所　▷「八代市民俗伝統芸能伝承館（お祭りでんでん館）」（『新建築』2109）＝平田晃久建築設計事務所
【推進賞選賞】▷「益城町の事務所」＝一級建築士事務所Zoological garden　▷「切妻と土間の家」＝林田直樹建築デザイン事務所　▷「松橋の家」＝中野晋治建築研究室　▷「南阿蘇村買取型災害公営住宅　長陽西部団地・下西原第2団地」＝ライフジャム一級建築士事務所＋トポスペース建築研究所　▷「地獄温泉 清風荘」＝村田建築設計所

撮影：新建築社写真部

「八代市民俗伝統芸能伝承館（お祭りでんでん館）」

第34回福岡県美しいまちづくり建築賞発表

去る2月2日、福岡県美しいまちづくり建築賞選考委員会（委員長：田上健一）は第34回福岡県美しいまちづくり建築賞を発表した。本賞は福岡県内の個性豊かで美しく良好な景観を形成する建築を表彰し、美しいまちづくりに対する県民意識の醸成を図ることを目的としている。受賞作品は以下の通り。
【住宅の部大賞】▷「TETUSIN DESIGN RE-USE OFFICE」（『新建築』2109）＝yHa architects＋佐賀大学
【住宅の部優秀賞】▷「竹林の庵」＝ニシムラユウゴ建築アトリエ
【一般建築の部大賞】「柳川市民文化会館 水都やながわ」＝日本設計
【一般建築の部優秀賞】▷「大濠テラス～八女茶と日本庭園と。～」＝リズムデザイン一級建築士事務所
【福岡県建築住宅センター理事長賞】▷「古民家ヴィラ　あんたげ」（本誌2010）＝納谷建築設計事務所＋OYA／岡田祐介建築設計事務所

2点撮影：東田成之助

上：「TETUSIN DESIGN RE-USE OFFICE」
下：「古民家ヴィラ　あんたげ」

令和3年新設住宅着工戸数を公表

去る1月31日、国土交通省は令和3年の新設住宅着工戸数を公表した。新設住宅着工戸数は856,484戸で、前年比では5.0%増で、5年ぶりの増加となる。持家、貸家及び分譲住宅が増加したため全体の増加に繋がった。
また新設住宅着工床面積は、70,666,000m^2と前年比6.3%増で、こちらも5年ぶりの増加となった。

開館40周年記念展

扉は開いているか——美術館とコレクション 1982-2022

開催中　2022年2月5日〜5月15日
埼玉県立近代美術館（埼玉県さいたま市）

本展は、黒川紀章が初めて設計した美術館である埼玉県立近代美術館（『新建築』8301）の開館40周年を記念し、収蔵作品やその作家、美術館の建築自体に焦点を当て、これまでの研究やコレクション形成を振り返る。本展は4つの章で構成。第1章「近代美術館の原点——コレクションの始まり」では、美術館の開館当時を振り返る。埼玉県出身の作家の作品とそれらに影響を与えた作品が収集され、近現代の地域の作家の活動を芸術界に位置づける地方美術館としての基盤が伺える。第2章「建築と空間」では、北浦和公園の中にある美術館として、公園と連続させる黒川のヴィジョンをスケッチや図面で展示。エントランスの構造物が象徴する中間領域や、曲面ガラスによって公園と融解するように繋がる展示室など、領域を曖昧にする試みが随所に現れている。第3章「美術館の織糸」では、調査研究や展示が新たな研究や作品の収蔵に結びつき広がる美術館の活動を振り返る。第4章「同時代の作家とともに」では、美術館の空間に合わせて制作された作品から、作家たちによる空間の解釈に着目。美術館の空間と活動、収蔵作品の関係を多角的にとらえた本展は、美術館が芸術における地域性を示し、開かれたものにする意義を投げかけている。

撮影：本誌編集部

上：第2章で展示される黒川紀章によるドローイング。　下：第4章で展示される川俣正《「Project Work in Saitama'83」プラン・モデル》1983年、群馬県立近代美術館寄託。

オルタナティブ！ 小池一子展 アートとデザインのやわらかな運動

開催中　2022年1月22日〜3月21日
アーツ千代田 3331（東京都千代田区）

1960年代以降における日本のクリエイティブ領域の黎明期を、コピーライター、編集者、クリエイティブ・ディレクターとして牽引し、80年代よりアートの現場でも多彩な活動を展開してきた小池一子。本展では、その活動を「中間子」「佐賀町」と名付け、大きく2部構成で紹介する。

「中間子」エリアでは、小池が手掛けてきた編集、コピーライト、キュレーションなどの仕事にフォーカス。『Japanese Coloring』や『Japan Design』といった書籍、京都国立近代美術館で開催された「現代衣服の源流展」、無印良品（MUJI）の広告ポスターなどの資料200点以上を展示。「佐賀町」エリアでは、1983年に日本初のオルタナティブ・スペースとして小池が開設した「佐賀町エキジビット・スペース」で展覧会を行った作家による当時の作品を展示。横尾忠則、森村泰昌、杉本博司、大竹伸朗、内藤礼など、20名の作家による約40作品が集められた。また同会場では、映像ディレクター・小松真弓によるインタビュー映像を上映。立花文穂、杉本博司、小柳敦子らが「人間・小池一子」について語る。

職種やジャンルを超え、日本の現代アーティストの作家性と表現を裏方の立場で支え、土壌を開拓してきた小池の活動を総括すると共に、同時代の芸術家やクリエイターたちの軌跡にも迫る。

3点撮影：Keizo KIOKU

上：「中間子」エリアの展示風景。　左下：「佐賀町」エリアの展示風景。　右下：「佐賀町エキジビット・スペース」で1983〜2000年に行われた展覧会の写真を年表のように展示。

LOOS AND PILSEN アドルフ・ロース展 プルゼニュ市のインテリア

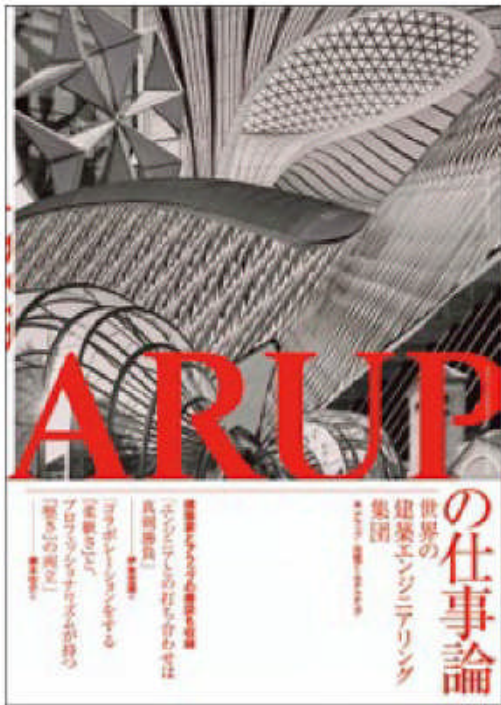
2021年12月15日〜2022年1月31日
チェコセンター東京（東京都渋谷区）

近代建築の地平を切り拓いた建築家のひとりである、チェコ出身のアドルフ・ロース（1870〜1933年）。欧米での滞在経験を経て、20世紀初頭の保守的で時代遅れな中央ヨーロッパに、新しい生活文化を取り入れることを建築や文筆活動により促した。そしてその弊害となっていた、形骸化した装飾を厳しく批判。伝統を重んじながらも無駄を排し、質の高い素材と高度な職人技を組み合わせて独特な世界観をつくり上げていった。本展では、ロースの活動の中ではあまり知られていないチェコのプルゼニュ市でのインテリアを中心とした作品に焦点を当てる。1907年以降の初期の作品や、ロースのプルゼニュ市での活動のきっかけとなった、オットー・ベックと従兄弟のヴィレーム・ヒルシュとの関係、第1次世界大戦後のプルゼニュ市繁栄期にさらに開花するロースの一連の作品と建主たちとの関係などを、パネルによって紹介。そのほか、ロースの空間の特徴となるラウムプランに位置づけられる代表作の模型や、現代における邸宅の修復の様子などの動画も展示。プルゼニュ市に始まる、ロースの一連の活動を体系的に理解することができる展示であった。

*撮影：Kensuke Kawagoe　**撮影：yoshio sakurai

上：会場風景。*　左下：「ブルメル邸」（1930年）の内観。**
右下：「シュトロス邸」（1922年）の模型。**

ARUPの仕事論
世界の建築エンジニアリング集団

アラップ＋日経アーキテクチュア 著

（B5判／ 224頁／ 3,520円／日経BP）

建築エンジニアリング集団のアラップは、1946年の創設以来ロンドンに本社を構え、現在世界33カ国に事務所を展開している。この分野において世界でもっとも有名であることはいうまでもないが、世界中の建築家たちからこれだけ信頼されるのは、同じ未来を見つめて闘い、共につくり上げるその意識にあるだろう。本書は、2012年から現在まで続くウェブサイト連載「アラップトータルデザインの舞台裏」から30を抜粋。5つのキーワードでそれらを構成し、豊富な写真や貴重な資料から彼らが手がけた世界のランドマークのプロセスを読み解く。伊東豊雄、藤本壮介を交えた2本の鼎談も含めここから読み取れるのは、アラップの強みが個々の高い知識と経験、全世界に広がる柔軟なネットワークづくりにあることが分かる。建築家と時に対等に議論を交わしながらつくり上げるものづくりが、複雑かつ斬新なビッグプロジェクトの数々を完成に導いてきたのだ。 (atk)

アイゼンマンの建築論 ＋QUANTUMETRIC

山口隆 著

（B5判／ 330頁／ 2,420円／総合資格）

長年に渡りピーター・アイゼンマンを研究してきた著者が、アイゼンマンの言説を元に建築理論を読み解く本書。著者は、近代以降の日本では実践に重きが置かれ、建築を生成する理論を構築することが欠落していたことを問題視し、そこからの脱却を目指して、歴史を精査しながら独自の理論を構築、実践してきたアイゼンマンの姿勢に活路を見出す。本書では、アイゼンマンの理論構築の源泉にル・コルビュジエの理論があることを示し、その継承において対照的な方向性を見たアイゼンマンとレム・コールハースの比較を紹介。独自の解釈でミース・ファン・デル・ローエとアイゼンマンの理論の違いを位置付けるなど、その思考の真相を探っていく。また、分析の主軸として建築の主要概念（subjeectとobject、volume、diagramなど）の変容を辿ることで、その先に著者自身の建築概念へと繋げ、検証している。 (yt)

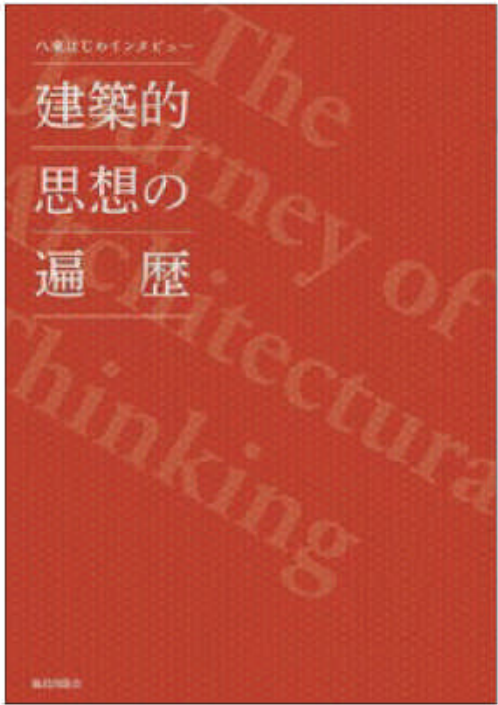
BAUHAUS HUNDRED 1919–2019 バウハウス百年百図譜

伊藤俊治 著

（A5判変型／ 264頁／ 3,960円／ Book&Design）

本書は、美術史家の伊藤俊治が所蔵するバウハウスの関連書100冊を読み解きながら、表紙やその内容と共にその100年の歴史を振り返る。20世紀のアートとデザインに多大な影響を与えたドイツの芸術学校バウハウスは、戦争や大量生産型社会、男女平等化といったさまざまな社会の変動と共に拠点やそのあり方を変化させてきた。その中で初代校長であるヴァルター・グロピウスや3代目校長であるミース・ファン・デル・ローエといったキーパーソンたちがどのような人や物事から影響を受け、どのような方針で教育を行ったかなど、関連書からは人脈の広がりや思想背景を多角的に知ることができる。バウハウスの歴史や教育理念を振り返る中で、変化し続ける社会に応答する創造活動には想像力と社会への観察眼が必要不可欠であること、そして現代でそれをいかに育むべきかを示す。 (ab)

八束はじめインタビュー 建築的思想の遍歴

八束はじめ／編著

（A5判／ 168頁／ 2,970円／鹿島出版会）

学生時代から大学を退館するまでの八束氏のキャリアを振り返ったインタビュー集。インタビュアーは八束氏のかつての教え子である金子祐介氏（城西国際大学助教）が務め、半世紀に及ぶキャリアを通じて、日本の戦後建築史を概観することを目的にまとめられている。本書は、「修業と師事」「設計と批評」「研究と教育」の3部構成で時系列に話が進むが、そこに通底するのは「思想」の問題で、何を考えてそれが成立しているか、が常に関心の中心であったと自らを振り返る。一方で、現代の建築の作品評はそうした「思想」から離れ、作者や作品を美辞麗句で装う装飾ばかりだと指摘。よい作品評とは、作者や読者に、論じられている作品や言説、現象がそういうことだったのかと気づきを与えるべきであると主張する。建築家であり建築評論家である氏が何をつくり、どのように思想を展開してきたのかをこれまでの歩みと共に俯瞰的に紐解く。(noc)

Houses

掲載：10-23頁

山菱工務店

代表　前川澄男
今回の現場監督　深草洋三
規模　12名
所在地　**東京都三鷹市新川6-26-6**
Le Grand Bleu SANRYO 2F
電話番号　0422-46-5588
https://sanryo.com
最近施工した作品
「ODYSSEY」椎名英三＋椎名祐子（本誌2011）
「OPEN CAVE」猪熊純＋成瀬友梨（本誌2001）
COMMENT
施工　監督さんや職人さんの技術力の高さに加え、適切なコミュニケーションを図りながら現場を進めて下さるのでとても信頼できます。常に図面の奥の意図を汲み取ろうとし、よりよくするための技術提案もしていただけるのですが、その内容や時に一緒に悩んでくれる姿勢からは学ぶものも多かったです。コストやスケジュールについても同じ方向を向いて考えてくださいます。
（山口陽平／畝森泰行建築設計事務所）

house / studio H

掲載：24-33頁

今村工務店

代表・今回の現場監督　今村大介
規模　5名
所在地　**京都市右京区西院月双町111 マンハイム五条1010号**
電話番号　075-314-4420
最近施工した作品
「House Y」木村吉成＋松本尚子（本誌2112）
「houseHS」木村吉成＋松本尚子（本誌1805）
「Sの町家」木村吉成＋松本尚子（本誌1602）
COMMENT
施工　これまでも一緒に仕事をしてきている工務店さんで、今回も職人さんたちの優れた技術により妥協のない丁寧な仕事をしていただき、とても信頼できる素晴らしいチームです。各工程では現場監督を中心に職人さんと設計意図を理解するために入念な打合せの場を設けていただき、積極的に施工方法を提案、細かな要望へは柔軟に対応してくださいました。
コスト　適正価格です。見積調整では真摯に対応してくださり、予算内に収まるまで粘り強くお付き合いいただきました。
（木村吉成＋松本尚子）

小屋裏と色

掲載：34-43頁

三矢建築

代表　三矢昌行
今回の現場監督　廣部翔一
規模　5名
所在地　**愛知県西尾市一色町治明村前59-3**
電話番号　0563-73-6190
https://mituyakenchiku.com
COMMENT
施工　力のある大工集団で、難易度の高い架構を手刻みでつくり上げてくれました。
その他　職人さんと設計の連携も密に取れるように、調整していただきつつ、さまざまな意見を交わしながら協力的に取り組んでいただきました。　（長岡勉＋加藤直樹）

函館の家

掲載：44-53頁

山建中川組

代表・今回の現場監督　中川健
規模　10名
所在地　**北海道函館市根崎町75**
電話番号　0138-59-4763
COMMENT
ローコストながら施工能力が問われる仕上がりの多い現場でした。寒冷地における工法の提案、ディテールの検討など積極的にアイデアを出していただき、協力業者さんを含め、前向きに楽しく進めることができました。（武田尚久）

屋の家

掲載：54-63頁

テヅカ工務店

代表　手塚清史
今回の現場監督　松田英一郎　角田佳彦
規模　10名
所在地　**長野県長野市信州新町里穂刈11-2**
電話番号　026-262-5318
https://www.tezukarh.com
（武井誠＋鍋島千恵）

DLTHUT

掲載：64-71頁

長谷萬

代表　長谷川泰治
今回の現場監督　小林辰美
規模　50名
所在地　**東京都江東区富岡2-11-6**
電話番号　**03-5245-1151（代表）**
https://www.haseman.co.jp
最近施工した作品
「日刊木材新聞社新社屋」池田靖史＋國分昭子（本誌2011）
COMMENT
施工　前例の少ない工法への挑戦心、提案力。大工の技術力にも助けられた。
工期　別荘地ルールや寒冷地の特性上で狭まる工期の中、上手くマネジメントしてくれた。
人材　今回使用したDLT材は、長谷萬さんから紹介いただいた。価値観を共有できることは大きな信頼になる。　（山中祐一郎）

光のテント

掲載：72-77頁

スワテック建設

代表　柿澤充
規模　81名
所在地　**長野県諏訪市城南2-2353**
電話番号　0266-52-4343
https://www.swatec.co.jp
COMMENT
施工　今まで経験したことのない工事を一生懸命取り組んでいただきました。
（彦根アンドレア）

SANU 2nd Home 八ヶ岳1st

掲載：78-89頁

ADX

代表　安齋好太郎
今回の現場監督　古関秀章
規模　10名
所在地　**福島県二本松市油井字松葉山6**
電話番号　0243-22-1298
https://adx.jp
最近施工した作品
「KITOKI」安齋好太郎（本誌2201）
「K5」安齋好太郎（本誌2012）

木立の1枚屋根

掲載：90-97頁

北越建設

代表・今回の現場監督　北出政憲
規模　6名
所在地　**福井県あわら市舟津1丁目12-1**
電話番号　0776-77-2260
https://www.hokuetsu-kensetsu.com
COMMENT
施工　北出監督を中心にした職方のチームワークが素晴らしく、最後まで丁寧に仕上げていただきました。
その他　製材加工、刻みを工場で一貫した体制で行えます。板倉構法の根幹ともいえる本実スギ板もすべてここで加工していただきました。長尺の梁は、当初スギ材で設計していたのですが、ストックされていた地マツ材を使えることに。越前の木造文化の厚みを感じました。
（居島真紀）

川と家

掲載：98-107頁

井上工務店

代表　井上正博
今回の現場監督　井端啓輔
規模　35名
所在地　**岐阜県高山市江名子町2715-11**
電話番号　0577-33-0715
https://inouekoumuten.co.jp
最近施工した作品
「KAKAMIGAHARA PARK BRIDGE」河合啓吾＋井端菜美（新建築2111）
「稲沢長塚の家」杉下均（本誌2009）
「肥田の家」吉田夏雄（本誌2003）
COMMENT
木材調達から製材、施工まで行っている工務店です。立木の目利き、伐採から木のクセを生かす製材と大工、そして経験豊富な現場監督によって木を活かす建築をつくっています。
関わっていただいたすべての工種において技術力が高く、信頼できる職人さんばかりでした。
（井端菜美）

二心柱の家

掲載：116-123頁

青

代表　片岡大
今回の現場監督　田中郁弥
規模　12名
所在地　**東京都渋谷区初台2-10-18 青ビル2F**
電話番号　03-3375-7552
http://www.ao-archi.com
最近施工した作品
「X」青木淳（本誌2001）
COMMENT
施工　設計の意図を汲み取り、施工方法や手順を積極的に提案いただきました。構造体がそのまま仕上げになる本プロジェクトでは建て方時、すべての部材が個包装されている様が特に印象的でした。
工期　現場定例を設けていただき、毎週進捗について報告を受けました。工程と品質の管理が徹底していたおかげで、結果的に工期の短縮に繋がりました。
コスト　ちょうどウッドショック騒動の最中に着工し、木材が時価という不安定な状況にもかかわらず、増額が生じないようさまざまな工夫をしていただきました。　（高塚章夫）

中町の家

掲載：124-131頁

二宮建設

代表　二宮康秀
今回の現場監督　齋藤文美雅
規模　11名
所在地　**東京都中野区弥生町2-39-7**
電話番号　03-3380-2441
http://www.ninomiya-k.co.jp
最近施工した作品
「而邸」泉幸甫（本誌0812）
COMMENT
施工　新しい取り組みに対しても柔軟にご対応いただきました。図面の読込・技術・コミュニケーション・チームワークと、どの面においても素晴らしいです。
工期・コスト　さまざまな要因が重なり難しい時期ではありましたが、工期・コスト共に適正なものになるよう努めていただけたと思います。
（石川素樹）

杉の家

掲載：132-139頁

松彦建設工業
代表　松本良平
今回の現場監督　田中秀弥
規模　7名
所在地　**京都府京都市西京区大原野上里南ノ町354-5**
電話番号　075-335-5077
http://www.matsuhiko.co.jp
最近施工した作品
「西新林の微地形」吉村理（本誌1811）
「大和棟の新しい境界面」吉村理（本誌1806）

COMMENT
施工　これまで何度も仕事をお願いしていますが、毎回しっかりとしたチームワークで、気もちよく仕事を進めていくことができる素晴らしい工務店です。常に新しい構造や構法を試みていますが、新しいことに前向きにチャレンジしてもらえます。
工期　工期をしっかり守りながらも、細かい所も手を抜かず非常に丁寧な仕事をしていただき、満足いく仕上がりとなりました。
コスト　性能を落とさずに予算に合うようにいろいろアイデアを積極的に出してくれます。
（吉村理）

NIKAIDO

掲載：140-147頁

加殿木工
代表　増島光一
今回の現場監督　佐々木宏幸
規模　6名
所在地　**静岡県伊豆市加殿115-1**
電話番号　0558-72-2261
最近施工した作品
「展開ハウス002」十亀昭人＋真田一穂（本誌1707）
「流星庵」杉本洋文＋計画・環境建築（本誌1002）
COMMENT
施工　熟練の大工さんを軸に難易度が高い施工も対話を重ねながら辛抱強く対応してくれます。
コスト　特に木造建築の得意な施工店で、材木の加工場も自社で保有しています。特殊な木造の施工にもVE・CDのアイデアを出してくれるので心強いです。
その他　拠点は静岡にありますが、首都圏の施工にも対応してくれ、フットワークがよいのが強みだと思います。
（森屋隆洋）

ARCHITECTS
建築家プロフィール

建築家情報
1. 今後予定しているプロジェクトや展覧会、講演会などの情報／ 2. Facebook、TwitterなどのURL
※1の作品名、竣工時期、展覧会、講演会情報は本誌発売時点での予定となります。

畝森泰行（うねもり・ひろゆき）
1979年岡山県生まれ／ 2005年横浜国立大学大学院修士課程修了／ 2002〜09年西沢大良建築設計事務所／ 2009年畝森泰行建築設計事務所設立／ 2012〜14年横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手／現在横浜国立大学、日本女子大学、東京理科大学非常勤講師

▼建築家情報
1.「House A ／ O」（埼玉県／ 2022年）

畝森泰行建築設計事務所　〒111-0053 東京都台東区浅草橋3-12-6 BASE　tel. 03-6261-3708　fax. 03-6261-3709
office@unemori-archi.com　https://unemori-archi.com

2点撮影：YOSUKE OHTAKE

木村吉成（きむら・よしなり）　**松本尚子**（まつもと・なおこ）
（木村吉成・上）1973年和歌山県生まれ／ 1996年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業（根岸一之に師事）／狩野忠正建築研究所を経て、2003年木村松本建築設計事務所を設立／現在、大阪芸術大学芸術学部建築学科准教授
（松本尚子・下）1975年京都府生まれ／ 1997年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業（根岸一之に師事）／ 2003年木村松本建築設計事務所を設立／現在、大阪市立大学、大阪市立大学大学院、京都芸術大学非常勤講師

2008年「三人の作家のためのアトリエと住宅」でSDレビュー入賞／ 2015年「Nの住宅地の住宅」（本誌1505）でJIA東海住宅建築賞大賞受賞／ 2016年「ハイツYの修理」（本誌1702）でCSデザイン賞グランプリ受賞／ 2018年「houseT / salonT」（本誌1609）で第33回吉岡賞受賞／「houseA / shopB」（本誌1701）で2018年第12回関西建築家新人賞、2019年第7回京都建築賞藤井厚二賞受賞

▼建築家情報
1.「house / shop G」（福岡県／ 2022年）「house O」（滋賀県／ 2022年）

木村松本建築設計事務所　〒603-8346 京都府京都市北区等持院北町58-1　tel. & fax. 075-748-1934
kimura@kmrmtmt.com　http://www.kmrmtmt.com

長岡勉（ながおか・べん）
1970年東京生まれ／ 1997年慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科修了／山下設計で活動後、1999年にPOINTを設立／建築・インテリアの設計業務のほかに、シェアオフィス〈co-lab〉の設立に参加するなどの活動を行う／ 2020年4月からVUILDのメンバーとしても活動／現在、慶應義塾大学・武蔵野美術大学非常勤講師／ 2011年「ジュッカイエ」（本誌0908）で東京建築士会住宅建築賞2011入賞（共同設計：OUVI）／ 2012年「夢尋蔵」（『新建築』1201）でJCDデザインアワード2012金賞受賞／ 2016年「夜咄Sahan」でJCDデザインアワード2016金賞・長谷川演賞受賞／ 2018年「知識の蜂の巣」でJCDデザインアワード2018銀賞受賞／ 2018年「絵と言葉のライブラリー ミッカ」でグッドデザイン賞グッドデザイン賞受賞

▼ 建築家情報
1.「南足柄のリノベーション」（神奈川県南足柄市／ 2022年）
RENEW2021展（福井県鯖江市、丸廣意匠、2022年3月11日〜13日）　https://renew-fukui.com/exhibitor
2. Instagram：https://www.instagram.com/bennagaoka/?hl=ja　Facebook：https://www.facebook.com/profile.php?id=100004461877390

POINT　〒180-0003 東京都武蔵野市吉祥寺南町3-25-11　tel. 0422-26-5105
point@point-tokyo.jp　http://point-tokyo.jp

加藤直樹（かとう・なおき）
1984年神奈川県生まれ／ 2007年神奈川大学建築学科曽我部研究室卒業／ 2009年同大学大学院建築学専攻曽我部研究室卒業／ 2010年POINT入社／ 2012年建築設計加藤住吉を共同設立

建築設計 加藤住吉　〒231-0013 神奈川県横浜市中区住吉町3-28 新井ビル410　tel. 045-253-7267
info@katosumiyoshi.com　http://katosumiyoshi.com

飯田善彦（いいだ・よしひこ）　**武田尚久**（たけだ・なおひさ）

（飯田善彦・上）1950年埼玉県生まれ／ 1973年横浜国立大学工学部建築学科卒業／ 1974年計画設計工房（谷口吉生、髙宮眞介）／ 1980年建築計画設立（共同：元倉眞琴）／ 1986年飯田善彦建築工房設立／ 2007 ～ 12年横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA教授／現在、同社代表取締役、ARCHISHIP LIBRARY＆CAFE主宰

（武田尚久・下）1978年静岡県生まれ／ 2001年日本大学理工学部海洋建築工学科卒業／ 2001年Istituto Europeo di Design ／ 2002年ミラノ工科大学建築学部／ 2003 ～ 06年Mario Bellini Architects ／ 2006年～飯田善彦建築工房、現在同取締役

▼建築家情報

1.「等々力みはらしテラス」（東京都／ 2022年）「大熊町新教育施設」（福島県／ 2023年）「横浜市汐見台小学校」（神奈川県／ 2023年）

飯田善彦建築工房　〒231-0041 神奈川県横浜市中区吉田町4-9　tel. 045-326-6611　fax. 045-326-6617
info@iida-arc.com　http://www.iida-arc.com/

武井誠（たけい・まこと）　**鍋島千恵**（なべしま・ちえ）

（武井誠・左）1974年東京都生まれ／ 1997年東海大学工学部建築学科卒業／ 1997年東京工業大学大学院塚本由晴研究室研究生＋アトリエ・ワン／ 1999年手塚建築研究所入社／ 2004年TNA設立／東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了、博士（工学）／現在、京都工芸繊維大学特任教授

（鍋島千恵・右）1975年神奈川県生まれ／ 1998年日本大学生産工学部建築工学科卒業／ 1998年手塚建築研究所入社／ 2004年TNA設立／現在、法政大学非常勤講師

「カモ井加工紙第三攪拌工場史料館」（『新建築』1205）で2012年AR AWARD2012受賞、2014年第6回JIA中国建築大賞特別賞受賞／「上州富岡駅」（『新建築』1301）で2014年ブルネル賞AWARD受賞、2015年日本建築学会賞受賞／ 2015年「構の郭」（『新建築』1312）で平成27年東京建築士会住宅建築賞受賞／主な著書に『JA105 MAKOTO TAKEI＋CHIE NABESHIMA』（2017年、新建築社）

TNA　〒162-0065 東京都新宿区住吉町9-7-3F　tel. 03-3225-1901　fax. 03-3225-1902
mail@tna-arch.com　http://www.tna-arch.com

山中祐一郎（やまなか・ゆういちろう）

1972年栃木県生まれ／ 1994年東京造形大学卒業後に渡英、Architectural AssociationでShin Egashiraに師事／ 1995年アフリカ、ユーラシアの4つの大河を陸路で巡るグランドツアーを敢行／ 1996年内藤廣建築設計事務所勤務／ 1999年S.O.Y.建築環境研究所を設立／建築設計をベースとして、ランドスケープからプロダクトデザイン、アプリ開発、農業支援まで、領域を跨ぐ活動を展開／ 2003年アールシーコアの顧問に着任／ 2013年空間と時間の研究を目的とするコンピュータソフト開発会社を起業／ 2016年PROPELa設立／日本大学生産工学部非常勤講師／「WONDER DEVICE ／ BESS」で2004年グッドデザイン賞受賞／ 2008年「代々木上原の家」で『モダンリビング』STYLE MATRIX AWARD受賞／ 2011年「太子堂の家」で環境デザインアワードLiVES賞受賞／ 2012年「伊予三島の家」でhope&homeアワード グランプリ受賞／ 2018年「CLTHUT」でWOOD DESIGN AWARD受賞／ 2020年「K.S. Kindergarten」でArchitizer A＋Awards 木造建築部門世界6選（Popular Vote第1位）受賞

S.O.Y.建築環境研究所　〒160-0022 東京都新宿区新宿5-14-3 有恒ビル5F　tel. 03-5925-8735　fax. 03-5925-8736
yam@soylabo.net　http://soylabo.net

彦根アンドレア（ひこね・あんどれあ）

1962年ドイツ生まれ／ 1987年シュトゥットガルト工科大学修了（建築・都市計画）／ 1988年團・青島建築設計事務所入所／ 1989年磯崎新アトリエ入所／ 1990年彦根建築設計事務所設立（彦根明と共に）／ 2011年日本エネルギーパス協会副会長／ 2012年JIA特別委員会環境行動ラボ会員／ 2014年EneArt設立／ 2014～21年武蔵野美術大学非常勤講師／ 2020年サステナブル建築協会理事長／「IDIC PS岩手インフォメーションセンター」で2008年JIA環境建築賞一般建築部門最優秀賞、2019年第18回JIA25年賞受賞／ 2019年「八ヶ岳山荘 SYA 戸建住宅」で東京建築賞奨励賞受賞／ 2019年「日野わかくさ幼稚園 HWY 幼稚園」でウッドシティ TOKYOモデル建築賞優秀賞受賞／ 2009年「曲・kyoku 戸建住宅」で木材活用コンクール優秀賞受賞／ 2010年「風・Fuu 戸建住宅」でJIA環境建築賞住宅部門優秀賞受賞／主な著書に『ナチュラル・サスティナブル　生きる建築のすがた』（2009年、鹿島出版会）『プランニングからディテールまで　最高の建築をつくるデザインのルール300』（2011年、エクスナレッジ）『彦根アンドレアの最高の住まいを作る方法』（2014年、エクスナレッジ）

▼建築家情報

1. THREE CLOS HELP　https://three-cross-help.com（アアルトの建築を救うプロジェクトをアアルト財団と共に進行中）
2. Instagram：https://www.instagram.com/a.h.a_andrea/

彦根建築設計事務所　〒157-0066 東京都世田谷区成城7-5-3　tel. 03-5429-0333　fax. 03-5429-0335
http://www.a-h-architects.com/andrea

安齋好太郎（あんざい・こうたろう）

1977年福島県生まれ／ 1997年中央工学校卒業／ 1998 ～ 99年巧建社勤務／ 2000～06年安齋建設工業／ 2006年～Life style工房設立／ 2019年ADXに社名変更／ 2018年「うつろいの家」でふくしま住宅建築賞入賞／ 2018年「春華堂 POP UP STORE KANDA」でJCD Design Award 2018 Best100受賞／ 2018年「堂前の家」（本誌1806）でT-1グランプリ2017グランプリ受賞／ 2019年「one year project」（本誌1704）でASIA PACIFIC PROPERTY AWARDS 2019-2020 Award winner of Architecture Single Residence for Japan受賞

▼建築家情報

1.「SANU 2nd Home 山中湖1st」（山梨県／ 2022年）「KITOKI」（東京都中央区／ 2022年）「SANU 2nd Home 北軽井沢1st」（群馬県／ 2022年）
「SANU 2nd Home 八ヶ岳 2nd」（山梨県／ 2022年）「SANU 2nd Home 河口湖1st」（山梨県／ 2022年）「SANU 2nd Home 白樺湖 2nd」（長野県／ 2022年）
「auberge 余市」（北海道／ 2022年）「小淵沢キャンプ場」（山梨県／ 2022年）

2. Facebook：https://www.facebook.com/adx.jp

ADX　Head office：〒969-1404　福島県二本松市油井字松葉山6　tel. 0243-22-1298　fax. 0243-22-6116
Tokyo office：〒103-0024　東京都中央区日本橋小舟町14-7 Soil nihonbashi 4F
info@adx.jp　https://adx.jp

安藤邦廣（あんどう・くにひろ）　**居島真紀**（いじま・まき）

（安藤邦廣・上）1948年宮城県生まれ／1973年九州芸術工科大学芸術工学部環境設計学科卒業／1973年〜82年東京大学工学部助手／1982年筑波大学芸術学系講師／1998年筑波大学芸術学系教授／現在、筑波大学名誉教授、里山建築研究所主宰、日本茅葺き文化協会代表理事、日本板倉建築協会代表理事／2011年「小屋と倉―干す・仕舞う・守る　木組みのかたち―」（論文）で日本建築学会賞受賞／2014年「筑波山梅林再生プロジェクト」で日本造園学会賞技術賞受賞／主な著書に『住まいの伝統技術』（共著、1995年、建築資料研究社）『小屋と倉　干す・仕舞う・守る 木組みのかたち』（2010年、建築資料研究社）『茅葺きの民俗学　生活技術としての民家』（2017年、はる書房）『日本茅葺き紀行　Exploring Japanese Thatch』（共著、2019年、農山漁村文化協会）

（居島真紀・下）1970年富山県生まれ／1993年東京学芸大学教育学部B類美術専攻卒業／1998年筑波大学芸術学群建築デザインコース卒業／1998〜2004年設計工房禺／2004年里山建築研究所設計室設立／2008年〜里山建築研究所設立

2013年「都市と農村を繋ぐ産民官学共同プロジェクト[かやぶきの里プロジェクト]」でグッドデザイン賞受賞／2018年「板倉建築の普及啓発活動［板倉構法をハブとした震災復興のための一連の活動］」でグッドデザイン賞受賞／2021年「AGRI CARE GARDENかすみがうら」（『新建築』2111）でハートフルデザイン部門奨励賞受賞

里山建築研究所　〒300-4231 茨城県つくば市北条184　tel. 029-867-1086　fax. 029-867-1083
sal@satoyama-archi.co.jp　http://satoyama-archi.co.jp

井端菜美（いばた・なみ）

1987年滋賀県生まれ／2008年岐阜工業高等専門学校建築学科卒業／2010年同高等専門学校建設工学専攻卒業／2010〜13年塚原建築研究所／2013〜18年井上工務店／2018年〜飛騨五木 goboc設計事務所設立／2021年「KAKAMIGAHARA PARK BRIDGE」（『新建築』2111）でウッドデザイン賞優秀賞（林野庁長官賞）、タニタ屋根のある建築コンテスト非住宅部門グランプリ、木材利用優良施設コンクール審査員特別賞

▼建築家情報

1.「縁側の家」（滋賀県大津市／2022）竣工予定
2.　Instagram：https://www.instagram.com/5boc_sekkei

goboc設計事務所　〒504-0008 岐阜県各務原市那加桐野町2-9-1　tel. 058-372-2186
n.ibata@goboc.jp　https://www.goboc-sekkei.com

宇野友明（うの・ともあき）

1960年愛知県生まれ／1983年神奈川大学工学部建築学科卒業／1983〜90年長谷部建築設計事務所／1990年宇野友明建築事務所設立／「翠松園の家」で2000年あいちまちなみ建築賞受賞、2001年中部建築賞入賞／2002年「岡崎の家」で第3回「大地に還る住宅」優秀賞受賞／主な著書に『Visible Invisible』（2010年、風出版）『見たことのない普通のたてものを求めて』（2019年、幻冬舎）

▼建築家情報

2.　Facebook：http://www.facebook.com/uno.arch　Twitter：https://twitter.com/tomoakiunoarch

宇野友明建築事務所　〒461-0014 愛知県名古屋市東区橦木町3-68　tel. 052-933-7510　fax. 052-933-7511
unotomoakiarchtects@gmail.com　http://unotomoaki.com

撮影：Eriko Kaji

高塚章夫（たかつか・あきお）

1972年兵庫県生まれ／1998年京都大学工学部建築学科卒業／1999〜2000年Ecole d' Architecture de Paris La Villette／2000〜09年伊東豊雄建築設計事務所／2010〜19年aaat高塚章夫建築設計事務所／2020年〜Aaat／現在、京都芸術大学、工学院大学、東京都市大学、前橋工科大学、ICS College of Arts非常勤講師

▼建築家情報

1.「我孫子の大屋根」（千葉県／2022年）「大崎の小屋根群」（東京都／2022年）
2.　Facebook：https://www.facebook.com/akio.takatsuka.1　Instagram：https://www.instagram.com/akio_takatsuka

Aaat　〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷2-6-2-201　tel. & fax. 03-6407-9680
info@aaat.jp　http://www.aaat.jp

石川素樹（いしかわ・もとき）

1980年東京生まれ／手嶋保建築事務所を経て2009年に石川素樹建築設計事務所を設立／建築、インテリアから家具、プロダクトまで幅広い領域でデザインを手がける／iF DESIGN AWARD iF Gold Award、日本建築学会作品選集新人賞、グッドデザイン賞など受賞多数／主な著書に『ELEMENTS 5つの建築 5つの断章』（2019年、オーム社）

▼建築家情報

1.「S2Mショールーム」（東京都／2022年）「森下の家」（東京都／2022年）

石川素樹建築設計事務所　〒151-0053 東京都渋谷区代々木4-28-7 西参道テラス W1　tel. 03-6300-5530　fax. 03-6300-5571
info@motokiishikawa.com　http://www.motokiishikawa.com

吉村理（よしむら・ただし）

1975年大阪府生まれ／2000年京都大学大学院修士課程終了／〜2005年團紀彦建築設計事務所／2008年〜一級建築士事務所吉村理建築設計事務所代表／2010年〜大阪工業大学非常勤講師／2020年〜奈良女子大学非常勤講師／2008年Wood Block Houseグッドデザイン賞受賞／「花内屋リノベーション」（本誌1710）で2012年に新しい伝統構法の家2011コンペティション実作部門第1位、第15回木材活用コンクール優秀賞、日本インテリアプランニング賞、社団法人愛知建築士会第3回建築コンクール審査委員賞受賞、2013年に住まいの環境デザイン・アワード2013入賞／2021年「大和棟の新しい境界面」（本誌1806）でthe Architectural Review AR new into old awards 2021 Highly commended受賞

▼建築家情報

1.「大和蒸溜所ハナレ蔵リノベーション」（奈良県／2022年5月）「旧自転車屋リノベーション」（奈良県／2022年5月）「旧タバコ屋リノベーション」（奈良県／2022年5月）「旧山崎屋リノベーション」（奈良県／2022年11月）「清水の森木造長屋」（大阪府／2022年12月）
2.　Instagram：https://www.instagram.com/tadashiyoshimuraarchitects/

吉村理建築設計事務所　〒639-2225 奈良県御所市中本町1203　tel. 0745-63-1001
info@ yoshimura-arch.com

森屋隆洋（もりや・たかひろ）
1983年神奈川県生まれ／2006年東海大学工学部建築学科卒業／2008年東海大学大学院工学研究科建築学専攻卒業／2008〜10年計画・環境建築／2011年MORIYA WORKS設立／2018年MORIYA AND PARTNERS設立／現在、東海大学非常勤講師／「SETOYAMA」（本誌2010）で2020年日本空間デザイン賞住空間部門銅賞、Dezeen awards Highly commended: Rural house of the year 2021受賞／「山安ターンパイク店」で2020年ウッドデザイン賞、2021年グッドデザイン賞受賞

▼建築家情報
2. Instagram：https://www.instagram.com/map_moriya

MORIYA AND PARTNERS　〒249-0005 神奈川県逗子市桜山8-3-13-202　tel. 050-3697-1050
info@moriyaandpartners.jp　http://moriyaandpartners.jp

執筆者

平岩良之（ひらいわ・よしゆき）
1982年生まれ／2004年東京大学卒業／2007年東京大学大学院修了後、佐々木睦朗構造計画研究所／2017年平岩構造計画設立

満田衛資（みつだ・えいすけ）
撮影：Tomomi Takano
1972年京都府生まれ／1997年京都大学工学部卒業／1999年京都大学大学院工学研究科修士課程修了／1999年佐々木睦朗構造計画研究所／2006年満田衛資構造計画研究所設立／2014年京都大学大学院博士後期課程修了博士（工学）／2018年京都工芸繊維大学教授／2011年「中川政七商店新社屋」（吉村靖孝建築設計事務所、『新建築』1005）でJSCA賞新人賞受賞／2013年「大阪府立春日丘高等学校創立100周年記念会館」（井下仁史）で日本構造デザイン賞受賞／2016年「House of Kyoto」（本誌1401）で京都建築賞藤井厚二賞受賞／2019年「関西大学第4学舎1号館改修および増築」（佐藤総合計画）で日本免震構造協会業績賞受賞

大野博史（おおの・ひろふみ）
大分県生まれ／1997年日本大学理工学部卒業／2000年同大学大学院理工学研究科修士課程修了／2000年池田昌弘建築研究所／2005年オーノJAPAN設立／主な著書に『ヴィヴィッド・テクノロジー』（共著、2007年、学芸出版社）『構造設計を仕事にする』（共著、学芸出版社、2019年）『構造設計プロセス図集』（2020年、オーム社）／主な受賞に「RIng Aroung a Tree」（『新建築』1106）で2011年第6回日本構造デザイン賞、2013年日本建築学会作品選奨、2016年「チャイルド・ケモ・ハウス」（『新建築』1310）で日本建築学会作品選奨、2017年「春日大社国宝館」（『新建築1701）で国土交通大臣賞耐震改修優秀建築賞

本間貴裕（ほんま・たかひろ）
1986年福島県生まれ／2010年Backpackers'Japan創業。同年、古民家を改装したゲストハウス「toco.」（東京都）をオープン。その後「Nui. HOSTEL & BAR LOUNGE」（東京都）、「Len」（京都府）、「CITAN」（東京都）、「K5」（東京都）をプロデュース、運営する。

田村尚土（たむら・なおと）
1982年愛知県生まれ／2005年名古屋大学工学部卒業／2007年名古屋大学大学院環境学研究科修了／2007年金箱構造設計事務所／2012年名古屋大学大学院 博士（工学）取得／2014年ディックス取締役就任、構造設計部設立、名古屋大学非常勤講師／2015年〜名古屋芸術大学非常勤講師

野村圭介（のむら・けいすけ）
1986年長野県生まれ／2009年東海大学工学部卒業／2011年東海大学大学院工学研究科修士課程修了／2013年東海大学大学院総合理工学研究科博士課程修了博士（工学）／2013〜16年中田捷夫研究室／2016〜20年東海大学工学部建築学科助教／2021年〜同大学講師

塚本由晴（つかもと・よしはる）
1965年神奈川県生まれ／1987年東京工業大学工学部建築学科卒業／1987〜88年パリ・ベルビル建築大学／1992年貝島桃代とアトリエ・ワン共同設立／1994年東京工業大学大学院博士課程修了／2003、2007、2015年ハーバード大学大学院客員教授／2007、2008年UCLA客員准教授／2011年The Royal Danish Academy of Fine Arts客員教授、Barcelona Institute of Architecture 客員教授／2013年コーネル大学visiting critic／2015年デルフト工科大学客員教授／2017年コロンビア大学客員教授／現在、東京工業大学大学院教授

平尾しえな（ひらお・しえな）
1992年埼玉県生まれ／2017年東京工業大学工学部建築学科卒業／2018〜19年スウェーデン王立工科大学KTHに交換留学／2021年東京工業大学環境社会理工学院建築学系修了／現在、同大学院博士後期課程在籍

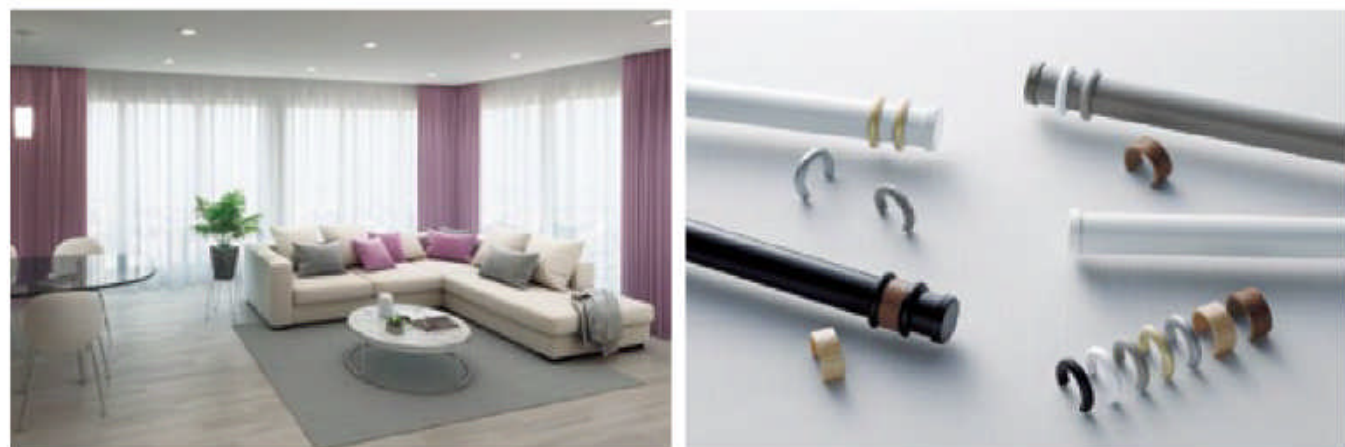
貝島桃代（かいじま・ももよ）
1969年東京都生まれ／1991年日本女子大学家政学部住居学科卒業／1992年塚本由晴とアトリエ・ワン共同設立／1994年東京工業大学大学院修士課程修了／1996〜97年スイス連邦工科大学チューリッヒ校奨学生／2000年東京工業大学大学院博士課程満期退学／2003、2015年ハーバード大学大学院客員教授／2005〜07年スイス連邦工科大学チューリッヒ校（ETHZ）客員教授／2015年デルフト工科大学客員教授／2017年コロンビア大学客員教授／現在、筑波大学准教授、ETHZ Professor of Architectural Behaviorology

中山英之（なかやま・ひでゆき）
1972年福岡県生まれ／1998年東京藝術大学美術学部建築科卒業／2000年同大学大学院美術研究科建築専攻修士課程卒業／2000〜07年伊東豊雄建築設計事務所勤務／2007年中山英之建築設計事務所設立／現在、東京藝術大学美術学部建築科准教授

藤村龍至（ふじむら・りゅうじ）
©Shintsubo Kenshu
1976年東京都生まれ／2000年東京工業大学工学部社会工学科卒業／2002年同大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了／2002〜03年ベルラーヘ・インスティテュート（オランダ）在籍／2005年〜藤村龍至建築設計事務所（現・RFA）主宰／2008年東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程単位取得退学／2010〜16年東洋大学専任講師／2016年RFAに改称／2016年〜東京藝術大学准教授

編集後記

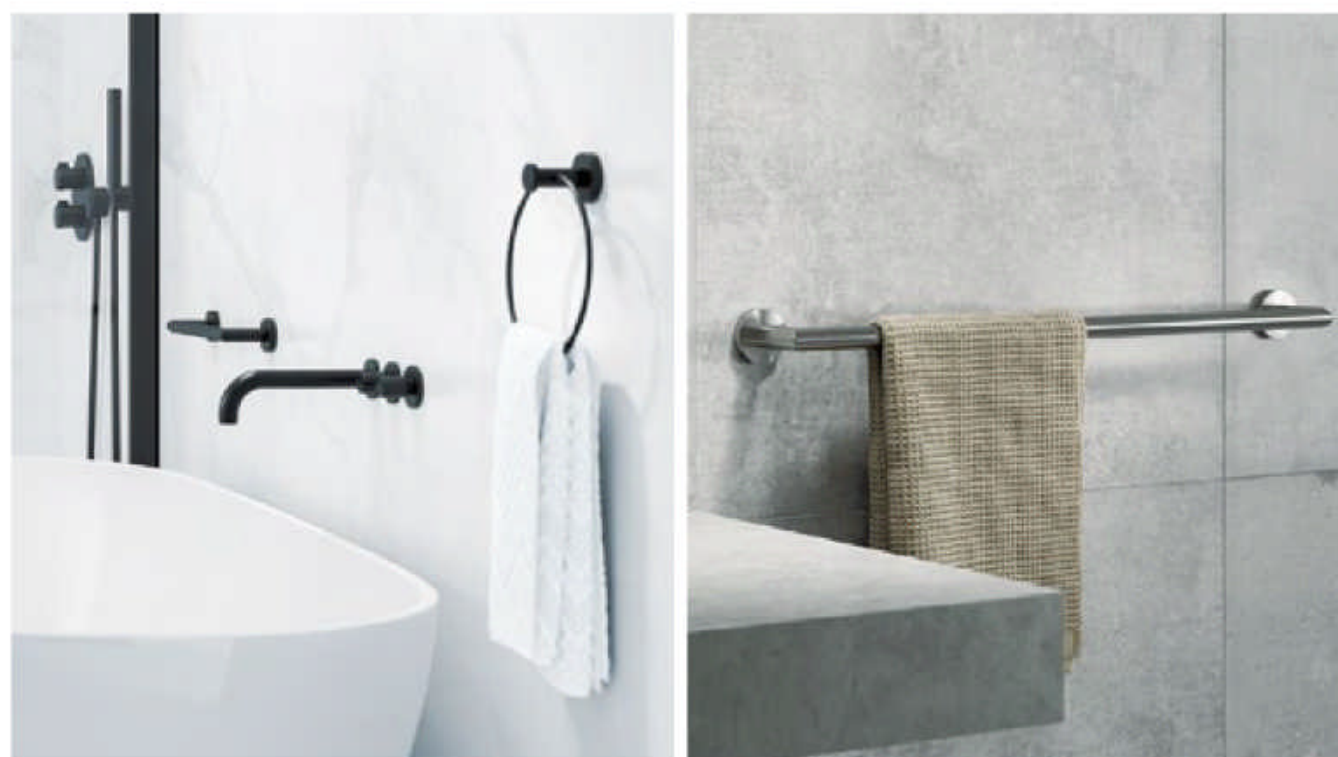
先月号から新しい評者として貝島桃代さん、中山英之さん、藤村龍至さんを迎えての座談月評がスタートし、今月号に2回目が掲載されています。今年に限らず座談月評は、毎回編集部全員が聴講し、1時間半〜2時間半ほど議論が続きます。収録日までにそれぞれが誌面のみからできるだけのことを読み取り、そこで感じた疑問や共感、さまざまな考えをもって3人が集まり批評を展開する。現場は毎回白熱したもので、6年続けている毎月1度のこの日は、編集者として緊張しつつもとてな楽しみな日でもあります。多くの方々の協力のもとつくり上げたメディアから何が炙り出されるか、さまざまな発見や反省、歓びがあるからです。しかし、限られた誌幅であることから、みなさんに読んでいただくものはその一部。スピンオフとなる入りきらなかった興味深い話題がいくつも思い出されます。前回の月評でも、建築の中のアート性とは何かという議論の後、さまざまな批評が展開されました。最後に貝島さんから、「生産を含めた社会の仕組みがついてくる建築の中で、そこにいかに距離をとるかつめるかという緊張感の中にわれわれはいる。そこから何をアウトプットできるかをこの座談月評で議論していこう」という言葉がありましたが、今月号はその言葉を意識して編集していきました。日本における木造住宅は、現代ではさまざまな社会の事象を引き上げるものです。加工や構造、施工技術の飛躍的な進化で可能性が広がる一方で、森林資源やその維持、環境問題、ウッドショックなど社会背景が色濃く映し出される素材であり、資源のレベルから木を考えなければいけない時代ともいえます。その中でどのような建築を前に進めるための創作ができたか、そしてそれにどんな批評が展開されるか、次号における座談月評も合わせてご覧いただきたいと思います。　（A）

「ホームタコス ティエルモ」、「マルティ」発売
立川ブラインド工業

「ホームタコス ティエルモ」（シングルセット（赤外線リモコン操作））。参考本体価格：104,060円（税込）。

「マルティ」（シングル正面付けセット2.1m）。参考本体価格：16,940円（税込）。

立川ブラインド工業（株）は、電動カーテンレール「ホームタコス ティエルモ」と装飾カーテンレール「マルティ」を発売。スマートな暮らしを支える「ホームタコス ティエルモ」は製品幅10m、カーテン適正重量25kgまで対応し、優れた静音性を実現。「マルティ」はシンプルな丸型ポールにマットな質感・カラーで高いデザイン性を有し、走行性・静音性にも配慮。

立川ブラインド工業（株）
tel:0120-937-958（フリーコール）
https://www.blind.co.jp

「NEMOX」シリーズのアクセサリー新発売
セラトレーディング

タオルリング（マットブラック）。浴室・洗面・トイレ空間すべてトータルコーディネートできる。価格：20,350円（税込）。

タオルバー（ステンレススチールブラッシュド）。価格：47,300円（税込）。

セラトレーディング（株）は、オランダ・GEESA社の「NEMOX（ネモックス）」シリーズのアクセサリーを新発売。クールな印象がありながらも丸みを帯びた美しいフォルムが特徴で、サイズ違いのタオルバーからペーパーホルダーやタオルリングまでアイテムが充実。シックで洗練された空間を演出するマットブラック、サテンのような質感のステンレススチールブラッシュド、ベーシックなクロムの計3色展開。

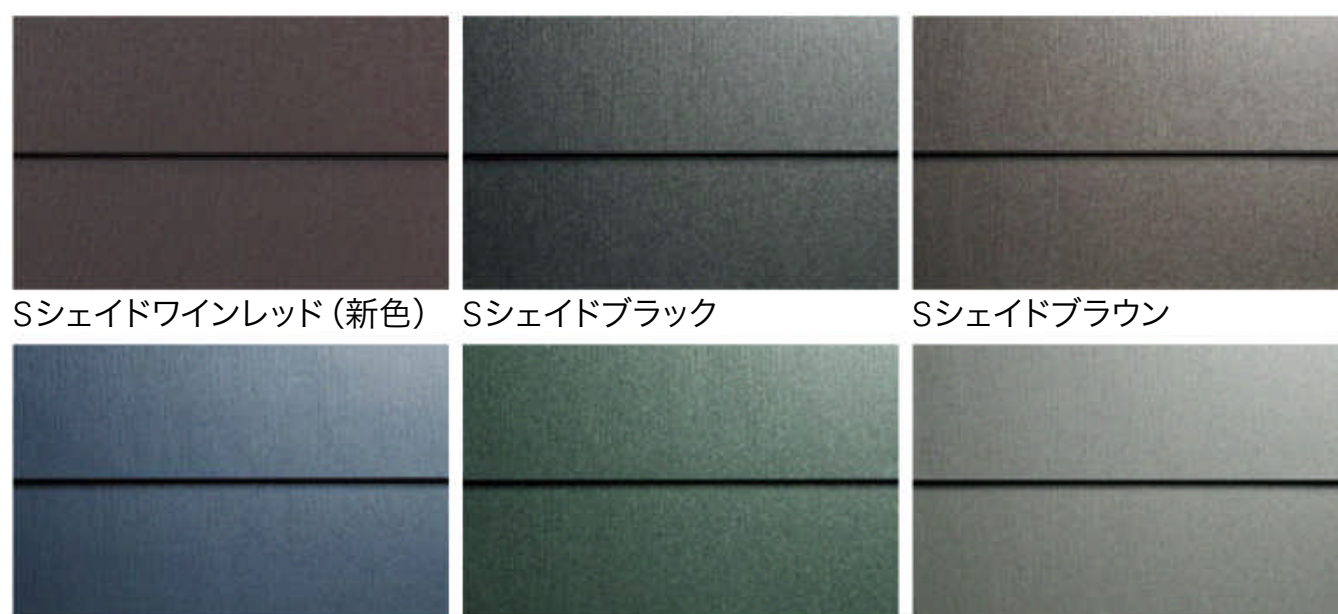
セラトレーディング（株）
tel:03-3796-6151
https://www.cera.co.jp

今ある窓をトリプルガラスの高性能ハイブリッド窓へ
LIXIL

製品イメージ。
専用枠 引違い窓／テラスタイプ（サイズ：W1,680×H1,800mm、Low-E複層ガラスの場合／網戸除く）価格：189,000円（税込）。

（株）LIXILは、今ある窓をたった1日でトリプルガラスの高性能ハイブリッド窓にリフォーム可能な取替窓「リプラス 高断熱汎用枠」を発売。2050年カーボンニュートラルの達成に向け、住宅を含む家庭部門のCO_2削減目標は66%（2013年度比、環境省による）に設定され、住宅の高性能化による省エネ化が重要視されている。同製品では、1枚ガラスの窓に比べて熱流出を約80%も抑えることができ、省エネで快適な暮らしが実現できる。

（株）LIXIL
0120-126-001
https://www.lixil.co.jp/

金属製屋根材アイジールーフ「スーパーガルテクト」に新色追加
アイジー工業

Sシェイドワインレッド（新色）　Sシェイドブラック　Sシェイドブラウン
Sシェイドブルー　Sシェイドモスグリーン　Sシェイドチャコール

「スーパーガルテクト」カラーラインナップ。

金属建材メーカーであるアイジー工業（株）は、主に住宅向けの金属製屋根材アイジールーフ「スーパーガルテクト」に新色「Sシェイドワインレッド」を追加販売。遮熱性鋼板と断熱材により優れた断熱性能を発揮し、特殊な「ちぢみ塗装」を施した意匠性もあわせ持つ屋根材。これまでのカラーラインナップになかった赤系の色追加で、計6色展開となる。

アイジー工業（株）
tel:0237-43-1810
https://www.igkogyo.co.jp/

オープンクローゼット「ウォールシェルフ」発売
ナスタ

（株）ナスタは、収納がない部屋でもインテリアになるオープンクローゼット「ウォールシェルフ」を発売。マットな質感のフレームとバー、棚板で構成されたシンプルなデザインでどんな部屋にも馴染みやすい。サイズは幅600mmタイプと幅910mmタイプの2種類、カラーバリエーションはフレーム・バーと棚板の組み合わせで4種類展開。

製品イメージ。
幅600mmタイプ価格：46,200円（税込）、
幅910mmタイプ価格：49,500円（税込）。

（株）ナスタ
tel:03-3660-1815
https://www.nasta.co.jp

オーダーメイドクローゼットアクセサリー「エクセサリー」
スガツネ工業

スガツネ工業（株）は、イタリア・SALICE社のオーダーメイドクローゼットアクセサリー「エクセサリー」の受注を開始。ハンガー、バッグホルダー、スカーフとタイホルダー、引き出しやシェルフ、トレー等の豊富なラインナップを、クローゼットに合わせて仕上げ・色・サイズをオーダーメイドできる。クローゼットひとつ分から対応可能。

コーディネート例。参考価格：6,600,000円（税込）。

スガツネ工業（株）
tel:03-3864-1122
https://www.sugatsune.co.jp/

メカタイプの窓まわり商品「RB COLLECTION vol.1」発刊
サンゲツ

（株）サンゲツは、ロールスクリーンやバーチカルブラインド、ウッドブラインド等6種類のメカタイプの窓まわり商品を収録した見本帳「RB COLLECTION（アールビーコレクション）vol.1」を発刊。商品ごとに納まりの美しさや使いやすさが考慮された「標準仕様」が設定され、最適なアイテムが選びやすくなった。防汚機能や抗ウイルス加工等機能性商品も拡充。

施工例。バーチカルブラインド（VB183）、ロールスクリーン（RS233）。

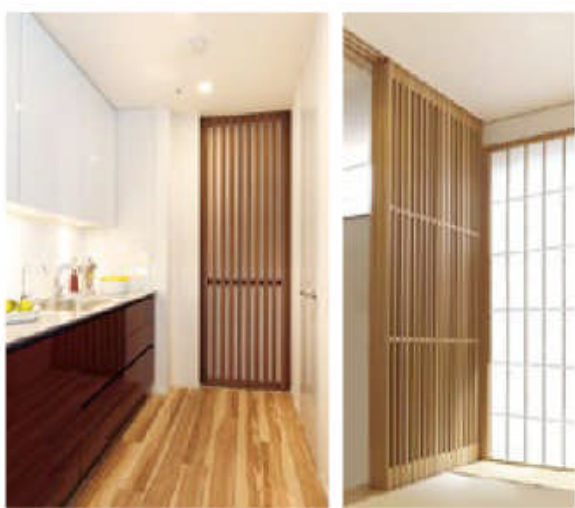
（株）サンゲツ
tel:052-564-3314
https://www.sangetsu.co.jp

高さ3mまで対応可能な室内ドア「カエサルスイングドア H3000」
神谷コーポレーション湘南

室内ドア専門メーカーである神谷コーポレーション湘南（株）は、国内初の高さ3mまで対応可能な室内ドア「カエサルスイングドア H3000」を発売。近年増加する、天井の高い開放感のある住宅空間に対応できる。ドア自体の高さも天井高と同じとし、扉を開くと壁がそのまま開くように見える。ホワイト系のビアンコ色とクレマ色の2色展開。

施工例。クレマ色。前後共に開くスイングドア。

神谷コーポレーション湘南（株）
tel:0463-94-6203
https://www.fullheight-door.com/

国産のスギ・ヒノキを使った建具「AK鬢太格子」発売
阿部興業

木製ドア、建具、造作家具の製作・販売を行う阿部興業（株）は、国産のスギ・ヒノキを使った建具「AK鬢太（びんた）格子」を発売。鬢太格子とは、四方の框回りに縦桟を伸ばした建具で、高さ3,000mmまで製作可能、同社独自の補強技術により、ガラス戸や開戸の対応もできる。価格は、国産のスギ材、サイズH3,000×W900×T50mmで825,000円（税込）。

製品イメージ。

阿部興業（株）
tel:04-2953-5870
https://www.abekogyo.co.jp

抗ウイルスが標準装備「IBIBOARD ～ 2022」発刊
イビケン

イビケン（株）は、高圧メラミン化粧板の総合サンプル帳「IBIBOARD ～ 2022」を発刊。傷が付きにくく水や熱にも強く頑丈な高圧メラミン化粧板「イビボード」について、抗ウイルス機能を持たせた261柄に及ぶ製品や、昨年6月発売の意匠性の高いプレミアム化粧板ブランド「イビボードH（アッシュ）」等の新製品もラインナップ。

「IBIBOARD ～ 2022」。

イビケン（株）
tel:0584-74-3355
https://ibiboard.jp

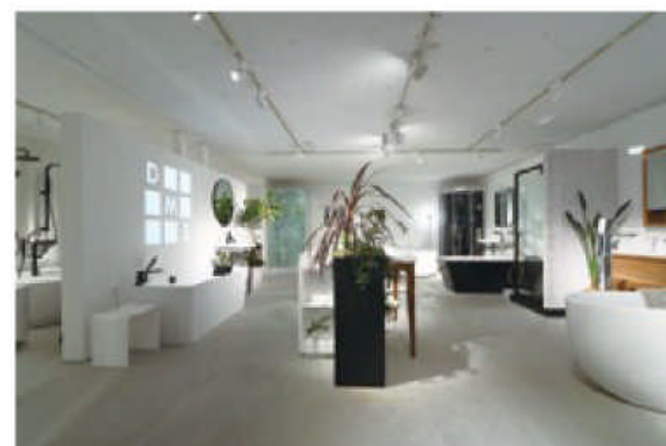
八王子市に輸入建材の専門店「ストックヤード」をオープン
松原工業

ヨーロッパ建材の輸入・加工・販売を手掛けるエクステリアの専門会社である（有）松原工業は、東京都八王子市に輸入建材の専門店「ストックヤード」をオープン。イギリスのコッツウォルズ地方で採石される最上級の「コッツウォルズストーン」をはじめ、レンガやフランス瓦等を、実際に手に取ることができ、スタッフのアドバイスを受けながら購入が可能。

「ストックヤード」。
週末にはワークショップも開催予定。

（有）松原工業
tel:042-333-0074
https://matsubara-ltd.com

DMS Tokyo Design Lab 原宿ショールーム グランドオープン
デザインマネジメントシステム

世界で展開する住宅建材BRAVATやinnociの製品をはじめ、「手の届く高級品」をコンセプトにデザイン性の高い水回り商品を扱うデザインマネジメントシステム（株）は、東京・原宿にショールームをグランドオープン。手の届く価格にてバスルームを総合的に空間提案する。営業時間は13～17時（完全予約制）、定休日は日曜～水曜・祝日。

原宿ショールーム内観。
住所：東京都渋谷区千駄ヶ谷3-54-2 地下2階。

デザインマネジメントシステム（株）
0120-518-805
https://www.bravat.jp

新建築住宅特集3月号
広告目次

広告掲載企業

エーアンドエー ………… 表4
パナソニック ………… 1
ユニオンシステム ………… 2
長谷川萬治商店 ………… 4

トピックス掲載企業
(50音順)
P.166-167

アイジー工業
阿部興業
イビケン
神谷コーポレーション湘南
サンゲツ
スガツネ工業
セラトレーディング
立川ブラインド工業
デザインマネジメントシステム
ナスタ
松原工業
LIXIL

新建築社ホームページ　https://japan-architect.co.jp

株式会社 新建築社
〒100-6017 東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビルディング17F　tel.03-6205-4380(代表) fax.03-6205-4386